能樂の友

発行　能楽の友社
名古屋市千種区千種２丁目18－18
（郵便番号　464-0858）
電　話（052）731－7984
ＦＡＸ（052）733－2837
振替口座　00800－6－36393

購読料　１年　1100円
郵送の場合　１年　1800円
一　部　100円

ＮＨＫ放送予定（平成25年２月）

◈ＮＨＫ－ＦＭラジオ能楽鑑賞（日曜日６時～６時55分）

２月３日　素謡「葵　上」（観世流）
　シテ　岡　久広
　ツレ　藤波重彦、ワキ　浅見重好
「籠」（部分）

２月10日　素謡「東　北」（宝生流）
　シテ　高橋　章、ワキ　佐野由於

２月17日　素謡「芦　刈」（観世流）
　シテ　上野朝義、ワキ　上田貴弘

２月24日　素謡「羽　衣」（観世流）
　シテ　観世喜正、ワキ　鈴木啓吾
「木　曽」（部分）

◈Ｅテレ　古典芸能への招待
１月27日　（午後３時～５時）
能「黒　塚」（喜多流）
シテ　塩津哲生、ワキ　福王茂十郎
仕舞「忠　度」　友枝昭世
狂言「東西迷」　山本東次郎

演能カレンダー

◆名古屋能楽堂◆

（TEL 052－231－0088）

［１月］
26日(土)　第15回万作を観る会　（有料）
27日(日)　第57期第１回名古屋宝生会定式能　（有料）
［２月］
10日(日)　観阿弥生誕680年
　世阿弥生誕650年
　名古屋観世会定例公演能（番組①面）（有料）
16日(土)　名古屋清韻会（番組②面）（無料）
17日(日)　青陽会定式能（番組②面）（有料）

名古屋観世会定例公演
平成25年度４回定式能

平成二十五年度の名古屋観世会の定例公演は、流祖観阿弥生誕六百八十年　世阿弥生誕六百五十年の記念の年にちなんで、初回は二月十日（日）能「巴」（久田勘鷗）能「西行桜」（観世清和）を上演。

［第二回］六月九日（日）能「杜若」恋之舞（片山九郎右衛門）能「善知鳥」（古橋正邦）

［第三回］九月十六日（祝）能「半蔀」（祖父江修一）能「殺生石」白頭（観世銕之丞）

［第四回］十一月十日（日）能「実盛」（梅若玄祥）能「蝉丸」（梅田邦久）

ＳＳ席年間特別指定席券四五、〇〇〇円、Ｓ席年間指定席券三〇、〇〇〇円、Ａ席年間指定席券二五、〇〇〇円、年間自由席券（四枚綴り）二〇、〇〇〇円。

名古屋能楽堂
新春謡初め

名古屋能楽堂の平成二十五年新春謡初めは、名古屋市文化振興事業団（名古屋能楽堂）、能楽協会名古屋支部の主催により、一月二日（水）午後一時から名古屋能楽堂で催され、満席になるほどの来会で熱心な観能が続けられた。

演能は、連吟「四海波」（観世流）にはじまり、舞囃子「高砂」（観世流）狂言小舞「福之神」（和泉流）連吟「養老」（金春流）舞囃子「田村」（宝生流）居狂言「竹生島参」（和泉流）舞囃子「草子洗」（金剛流）舞囃子「金札」（喜多流）の出演で新春を寿ぐ謡初めが行われた。

（杉浦賢次氏撮影）

演能案内

観阿弥誕生六八〇年
世阿弥誕生六五〇年

名古屋観世会定例公演能

二月十日(日)十二時三十分始
名古屋能楽堂

能　巴
久田　勘鷗
高安　勝久　河村眞之介
後藤嘉津幸　鹿取　希世
間　佐藤　友彦
後見　吉沢　梅田　嘉旭　宏地謡　松山　幸親　高橋　暸一　武田　大志　八神　孝充　清沢　一政　古橋　正邦　武田　邦弘　祖父江修一

狂言　鏡　男
男　佐藤　融
聟　今枝　郁雄　鏡屋　大野　弘之　後見　佐藤　友彦

仕舞　西王母　弱法師　野守
松山　幸親　梅田　邦久　観世　芳伸
地謡　八神　孝充　祖父江修一　武田　邦弘　武田　大志

能　西行櫻
観世　清和
福王茂十郎　福王　和幸　森本　幸治　広谷　和夫
河村総一郎　大蔵源次郎　加藤　洋輝　藤田六郎兵衛
間　井上松次郎
後見　上田　公威　梅田　邦久
地謡　本田　勲　梅田　嘉宏　須部　甫　久田　勘鷗　加賀　敏彦　観世　芳伸　清沢　一政　古橋　正邦

（午後四時半頃終了予定）

［有料］
当日指定券　八、五〇〇円
当日自由席券　六、〇〇〇円

主催　名古屋観世会
事務所　名古屋市名東区一社３－162
電話（052）734－6192

第11回全国能面新作公募展
福井県池田町で開催

福井県・池田町は、能楽の里として、国指定重要無形民俗文化財の神事が行われ、平成10年から全国新作能面の公募を実施、これまでに、三七一七名、五一六六点の応募、十一回を迎える今回は全国35都道府県から三二八名、四四一点の応募があり、能楽師・久田勘鷗師、狂言・佐藤友彦師、能面師・桑田能忍師らにより審査、入賞、佳作、入選作品一四一点が選考された。これら作品展示が二月一日から二月二十五日まで池田町能面美術館で表彰式とともに行われる。

なお県外特別展として、きたる三月一日から二十一日まで名古屋能楽堂で展観される。入場無料。

問合せ　福井県今立郡池田町・伝統文化保存活用実行委員会（池田町教育委員会内、電話0778・44・8006）

謹賀新年

名古屋観世会
山本勝一
山本博通

名古屋観鴎会
梅若玄祥

浦田保浩
〒606－0814　京都市左京区下鴨芝本町58
電話（〇七五）七二三－六八五〇

梅猶会
猶諷会
梅若猶義

邦謡会
梅田邦久
清沢一政
須部甫
本田勲
今沢美和
梅田嘉宏
〒466－0033　名古屋市昭和区台町二丁目十六－五
電話（〇五二）八四一－四六三三番

壺泉会
泉嘉夫
名古屋市昭和区山手通３・８・２・306
電話（〇五二）八三一－三一八五
西宮市甲陽園目神山町二三－二五
電話（〇七九八）73二四五八

観世清和

十世片山九郎右衛門
片山幽雪
京都市東山区新門前通大和大路東入西之町224
〒605－0088　電話（〇七五）五六一－二九一一

大槻清韻会
大槻文蔵
〒540－0005　大阪市中央区上町Ａ番七号
電話（〇六）六七六四－〇八九八番

鳳鳴会
武田志房
武田友志

名古屋観世九皐会
観世喜之
観世喜正
高橋暸一

金剛流能「藤戸」上演
朋の会　第14回五色の会

岡崎

朋の会（金剛流シテ方・羽多野良子師主宰）主催の「五色の会・能を見る」集いは、昨年末12月23日（日）午後二時から第14回公演として、花朋会敷舞台（岡崎市大西町奥長）で能「黒塚」を上演（写真）。会場いっぱいの三百人を越える観客で熱心な観能がつづけられた。

演能は、仕舞「碇潜」（シテ宇高通成）狂言「魚説法」（シテ野村又三郎、アド松田高義）能「藤戸」（シテ羽多野良子、ワキ高安勝久、ワキツレ椙元正樹、太刀持・野村又三郎、笛・鹿取希世、小鼓・後藤嘉津幸、大鼓・河村眞之介、太鼓・加藤洋樹、後見・広田幸稔、小鴨利辺華、伊藤雅子、地頭・宇高通成。

能「藤戸」羽多野良子（撮影　杉浦賢次）

演能案内

名古屋清韻会

二月十六日（土）午前十一時始
名古屋能楽堂

素謡
三井寺　安藤美奈子　佐藤加代子　浅井　庸子
地謡　梶原恵美子　富田　貞子　岩田　正子　古井　佐季　伊藤るり子　御牧　紀代

井筒　佐藤　尚雄　齋藤　信隆
仕舞
春日龍神　中村　貫太
嵐山　中村　大喜
融　谷口　寛子
能
百萬　武富晶太郎　篠田　幸子　宝生　欣哉　河村眞之介　後藤孝一郎　加藤　洋輝　藤田六郎兵衛
佐楽之舞　間　野村又三郎
連吟
春日龍神　中村　貫太　中村　大喜
舞囃子
三山　多久島法子　御牧　紀代　河村眞之介　後藤嘉津幸　大野　誠
笠取　古井　佐季
独吟
芭蕉　渡辺　節子　藤田六郎兵衛
一管独吟

関寺小町

素謡
善知鳥　武富晶太郎　鬼頭貴代子　宝生　欣哉　御厨　誠吾
カケリ入り
野宮　加藤　千一　河村眞之介　後藤嘉津幸
舞囃子
鉄輪　杉浦　壽康　河村眞之介　後藤孝一郎　藤田六郎兵衛
天鼓　福間　克彦　河村眞之介　後藤嘉津幸　加藤　洋輝　大野　誠
バンシキ
仕舞
松浦佐用姫　佐久間美親　河村眞之介　後藤嘉津幸　加藤　洋輝　大野　誠
大槻文蔵

附祝言

青陽会定式能（第157期 第15回）

二月十七日（日）十二時半開演
名古屋能楽堂

仕舞
笹之段　今沢　美和　角田　尚香
梅　キリ　近藤　幸江　地謡　久田三津子　前野　郁子　星野　路子
羽衣　村井　邦子
能
椙元　正樹　河村裕一郎　船戸　昭弘　山村　友子　鬼頭　義命
後見　今沢　美和　星野　路子　加賀　敏彦
武田　邦弘　地謡　須部　甫　梅田　嘉宏　久田三津子　祖父江　修一　高橋　暸一　武田　大志
仕舞
箙　武田　大志
采女　キリ　久田　勘鷗　地謡　八神　孝充　古橋　正邦　梅田　邦久　祖父江　修一
竹生島　吉沢　旭
狂言
素袍落　今枝　郁雄　大橋　則夫　佐藤　友彦
後見　大野　弘之
藤戸　松山　幸親
能
杉江　元　河村総一郎　杉江　淳　後藤孝一郎
間　佐藤　融　鹿取　希世
後見　前野　郁子　吉沢　孝充　梅田　嘉宏　梅田　邦久　地謡　八神　旭　古橋　正邦　武田　大志　久田　勘鷗　近藤　幸江　清沢　一政
附祝言

主催　青陽会

［有料］前売券二、五〇〇円、当日券三、〇〇〇円、学生一、〇〇〇円
取扱い＝チケットぴあ（TEL0570・02・9999（Pコード786・422）名古屋能楽堂、出演者宅

大西智久

梅若万三郎

観芳会　観世芳伸

幽花会　片山伸吾

怡楽会　山階彌右衛門　山階弥次

久田観正会　久田勘鷗　郁風会　前野郁子　松福会　松山幸親　星野路子
〒465-0093　名古屋市名東区一社3-162　電話（〇五二）七〇五-一五八五

武田謳楽会　武田欣司　武田邦弘　武田大志

初陽会　武田宗和　宗典

上田観正会能楽堂　上田観正会　TEL〇七八-六九一-五四四九
上田貴弘　拓司　公威　大介

橋岡会舞謡会　橋岡久太郎
＊＊＊＊＊
坪内芚路之　荒木亮功　宮下彦　小出年章　塚田重雄　吉田章　松原宮内美樹　小倉美富　橋岡佐喜男　橋岡信明　野池尚美　島田博人

春鶯会　梅若善高　梅若善久
〒560-0084　豊中市新千里南町三丁目18-12　電話（〇六）六八三-七八五四
〒166-0003　東京都杉並区高円寺南4・27・7・908

名古屋修諷会　梅若修一

梅春会　井戸和男　良祐
〒545-0004　大阪市阿倍野区文の里3-16-17　電話（〇六）六六二-二二一九

名古屋淡交会　橋岡慈観
三交会　久田三津子
〒465-0093　名古屋市名東区一社3-162　電話（〇五二）七〇五-一五八五

公益財団法人鎌倉能舞台　中森貫太　鎌倉市長谷3-5-13

洗心会　奥村富久子

松盛会　小松勝憲
〒511-0861　松舞台　三重県桑名市西別所一〇六一の五　TEL・FAX（〇五九四）二三-四五八二

桑名賀水会　名鉄百貨店友の会　加賀敏彦
〒463-0035　名古屋市守山区森孝二丁目七〇九　電話（〇五二）七七一-八九四五番

下田益三・雄三氏旧蔵
下田文庫目録出版記念会
光悦謡本が充実

下田益三・下田雄三氏が収集、下田ゆき子氏の恵贈により能楽囃子方・筧鉱一氏が保管の能楽関係資料「下田文庫」の目録が整備され、昨年十一月十八日、大阪・豊中市から下田ゆき子さんら四人が来名され、関係者がつどい、その完成を祝し、懇談した。

目録は、下田雄三氏作成のものをもとに、米田真理氏（文庫運営員・朝日大学）が作成したデータを基に、阪口泰子氏（文庫運営員・名古屋市徳重図書館）が追加調査・加除・再編成を担当している。

なお、筧鉱一氏によると、このたび「関寺小町」の光悦本と元和卯月本が揃ったとされている。

蔵書目録のうち　特別収書は次のとおり。

光悦謡本（特製色替り本）安達原、版写年・慶長年間▽光悦謡本（特製色替り本）関寺小町、版写年・慶長年間▽光悦謡本・鵜、柏崎、殺生石、版写年・慶長年間▽光悦謡本（袋綴本）当麻、藤戸、二人静、千手、版写年・慶長年間▽光悦謡本（模　本）高砂、白楽天、難波、版写年・大正10年▽松竹梅光悦本（複製本）高砂、老松、東北、版写年・大正13年▽元和卯月本、関寺小町　編著者・観世黒雪（暮閑）、版写年・元和6年

下田文庫目録出版記念会　24.11.18

会と催し

能「道成寺」赤頭　公演
第一回味方團　能の会

3月17日　午後1時始　京都観世会館

仕舞　箙　船弁慶　味方　玄　キリ　林　宗一郎　地頭　河村　和貴　角当　直隆　吉波　壽晃　分林　道治　田茂井　廣道　味方　健　味方　味方　玄　味方　慧　地頭

仕舞　猩　々　味方　慧　地頭　味方　味方　玄　味方　健　團

舞囃子　熊　野　村雨留　林喜右衛門　原岡　古岡　一之　和英　杉　市和　地謡　樹下　千慧　河村　和晃　橋本　河村　和重　河村　晴久　光史

小舞　海　人　茂山　良暢　地謡　島田　洋海　茂山　逸平　網谷　正美　増田　浩紀

一調　弱法師　味方　健　荒木　賀光

狂言　蜂　野村又三郎　後見　野村　信朗

能　道成寺　味方　團　赤頭　喜多　雅人　福王　和幸　中村　宜成　亀井　広忠　曽和　尚靖　前川　光範　竹市　学　間　茂山千五郎　茂山七五三

後見　林　喜右衛門　味方　玄　河村　晴久　地謡　河村　浩太郎　河村　和晃　松野　浩行　田茂井　廣道　角当　直隆　吉波　壽晃　河村　春道　分林　道治

鐘後見　河村　和重　橋本　光史　武富　和貴　林　宗一郎　河村　康之

狂言後見　茂山　逸平　網谷　正美　島田　洋海　増田　浩紀

（終了予定　午後四時半頃）

附祝言

［チケット］正面指定席一二、〇〇〇円　正面指定席（補助席）一一、〇〇〇円　脇正面指定席八、〇〇〇円　中正面指定席六、〇〇〇円　2階自由席四、〇〇〇円

申込みは味方團事務局　京都市左京区浄土寺小山町一―五一　TEL・FAX　075・771・9348

能の魅力を探る　シリーズ
大槻能楽堂自主公演能

大阪

大槻能楽堂の自主公演能「能の魅力を探る」シリーズは一月二十六日、二月九日、二月二十三日、三月二十三日に開催される。

◇一月二十六日(土)午後二時開演

山の祈り、山岳信仰、開山役の行者という人　大森　亮尚氏

能「谷行」（前シテ観世喜正、後シテ観世喜之、ワキ福王和幸、間・善竹隆司、地頭・上野朝義）

◇二月九日(土)午後二時開演

砧考　世阿弥の砧を読み解く　天野文雄氏

能「砧」（シテ野村四郎、ツレ上野雄三　ワキ福王茂十郎　地頭大槻文蔵）

◇二月二十三日(土)午後二時開演

魔道とは何か　人間の驕りと弱み　実在の六条御息所にみる　村上　湛氏

能「楚天狗」白頭（大槻文蔵、多久島利之、ワキ福王知登、間・丸石やすし、地頭・赤松禎英）

◇三月二十三日(土)午後二時始

万薬集の世界とは　中西　進氏

能「求塚」（シテ友枝昭世、ツレ内田成信、大島輝久、ワキ福王茂十郎、間・小笠原匡　地頭粟谷能夫）

チケット　当日券S席九、四〇〇円　A席七、八〇〇円　B席六、七〇〇円　自由席一般四、七〇〇円

謹賀新年

観修会　祖父江　修一　〒507―0848　多治見市日ノ出町2の2　電話（〇五七二）二二―三六五六

幸謡会　近藤　幸江　〒444―2122　岡崎市鴨田本町十一番地ノ三　電話（〇五六四）㉑二五二九

千早会　八神　孝充　〒464―0818　名古屋市千種区池園町2―9　電話・FAX（〇五二）七五三―四一二九

桜月会　加藤　春枝　〒509―0236　可児市皐ケ丘3―113　電話（〇五七四）六四―一三〇六

名古屋宝生会

宝生和英

近藤乾之助　〒170―0002　東京都豊島区巣鴨五―一三―八　電話〇三（三九一五）一三七六番

名古屋巽会　豊橋巽会　辰巳満次郎

惠美寿会　衣斐正宜　衣斐正宜後援会　〒466―0061　名古屋市昭和区御器所3―23―19　御器所パークマンション802号　電話（〇五二）八八二―五六〇〇番

佐野由於

倉本雅　〒658―0081　神戸市東灘区田中町1―13―22―809　電話（〇七八）四四一―五四六五番

司宝会　佐藤耕司　〒468―0056　名古屋市天白区島田二丁目三〇一　島田橋住宅二―一三一〇　電話（〇五二）八〇三―七三七二

金剛永謹　龍謹

廣田鑑賞会　廣田幸稔

菊之会　扇会　廣田泰三　廣田泰能

松野恭憲能の会　松野恭憲

金剛流　今井清隆　今井克紀

豊嶋能の会　豊嶋三千春

金剛流　宇髙通成　竜成　徳成

シテ方金春流宗家　金春安明　〒167―0052　東京都杉並区南荻窪三丁目17―16　電話〇三（三三三一）二五七一番

本田光洋　〒164―0002　東京都中野区上高田二ノ二五ノ二　電話〇三（三三八六）二六四一番

金春穂高　〒631―0821　奈良市西大寺東町一―三―十五　電話（〇七四二）三三―九七二〇

当地の各流儀・流派・結社
社中の消息を辿る ㊿

竹尾　邦太郎

十　「中部金剛会」 ⑤

――承前――

第一四回定式能・昭和四〇年十月三日（日）午後二時始。能『通小町』金剛巌・金剛永謹・西村欽也・金森準三・田鍋惣太郎・西尾孫太郎・豊嶋弥左衛門（地頭）今井幾三郎（後見）、独吟「玉之段」伊藤鉄之進、仕舞二番「阿古木」大塚一二「経正」片野東四郎、一調「龍田」野崎太郎・山田仁三郎、仕舞三番「天鼓」豊嶋三千春「花形見」今井幾三郎「砧」豊嶋弥左衛門、狂言「隠狸」佐藤秀雄・井上松次郎、能「紅葉狩」片岡道子・鈴木タミ・吉川周子・伊藤嘉奈子・高安滋郎・井上祐一・佐藤友彦・藤田六郎兵衛・田鍋惣一郎・吉田定男・鬼頭喜太郎・今井幾三郎（地頭）豊嶋弥左衛門（後見）。

第一五回定式能・昭和四一年九月一一日（日）午後三時始。能「小督」金剛巌・広田泰三・宇高朝雄・西村弘敬・佐藤友彦・藤田六郎兵衛・田鍋惣太郎・吉田定男・豊嶋弥左衛門（地頭）今井幾三郎（後見）、狂言「鳴子遣子」佐藤卯三郎・井上松次郎・井上礼之助、仕舞三番「笠之段」伊藤鉄之進「実盛」大塚一二「六浦」片野東四郎、独吟「紘上」今井幾三郎、仕舞「花形見クルヒ」豊嶋弥左衛門、能「船弁慶・白波之伝」豊嶋三千春・坪井進悟・高安滋郎・西村欽也・佐藤秀雄・筧三男・田鍋惣一郎・河村総一郎・今井幾三郎（地頭）金剛巌（後見）。

第一六回定式能・昭和四二年十月十日（祭）午後二時半始。仕舞二番「女郎花」片野東四郎「鞍馬天狗」伊藤鉄之進、能「松風・見留」金剛巌・金剛永謹・高安滋郎・井上祐一・藤田六郎兵衛・田鍋惣太郎・筧鉱一・豊嶋弥左衛門（地頭）豊嶋豊（後見）、狂言「萩大名」佐藤卯三郎・井上松次郎・佐藤秀雄、仕舞五番「高砂」豊嶋敬三郎「腹」松野恭憲「通小町」豊嶋三千春「班女・舞アト」今井幾三郎「融」豊嶋弥左衛門、能「黒塚・白頭」豊嶋豊・西村欽也・高安勝久・佐藤友彦・筧三男・田鍋惣一郎・河村総一郎・鬼頭八郎・今井幾三郎（地頭）豊嶋弥左衛門（後見）。

第一七回定式能・昭和四三年十月十日（祭）午後二時半始。能「俊寛」豊嶋弥左衛門・広田泰三・松野恭憲・西村欽也・佐藤秀雄・鬼頭季信・田鍋惣太郎・筧鉱一・今井幾三郎（地頭）金剛永謹（後見）、狂言「二人大名」佐藤友彦・井上義次・井上松次郎、独吟「玉之段」伊藤鉄之進、仕舞三番「松虫クセ」片野東四郎「熊坂」豊嶋三千春「鐘之段」今井幾三郎、能「葵上」金剛巌・金剛永謹・高安滋郎・高安勝久・大野弘之・藤田六郎兵衛・田鍋惣一郎・河村総一郎・鬼頭八郎・豊嶋弥左衛門（地頭）今井幾三郎（後見）。

第一八回定式能・昭和四四年十月十日（祭）午後二時半始。舞囃子「安宅」広田泰三・鬼頭季信・後藤孝一郎・河村総一郎・山田仁三郎（地頭）、能「阿古木」金剛巌・西村欽也・井上松次郎・藤田六郎兵衛・田鍋惣一郎・吉田定男・野崎太郎・豊嶋弥左衛門（地頭）今井幾三郎（後見）、狂言「狐塚」佐藤卯三郎・井上礼之助・大野弘之、独吟「花形見」伊藤鉄之進、仕舞三番「八島」松野恭憲「雪」片野東四郎「船橋」豊嶋弥左衛門、一調「松虫」田鍋惣太郎・今井幾三郎、能「紅葉狩」豊嶋三千春・小林忠三・橋本幸雄・中尾六三郎・高安滋郎・西村欽也・高安勝久・佐藤秀雄・佐藤友彦・藤田昭彦・田鍋洋一・筧鉱一・鬼頭八郎・今井幾三郎（地頭）片野東四郎（後見）。

第一九回定式能・昭和四五年十月十日（祭）午後二時半始。舞囃子「紘上」松野恭憲・鬼頭季信・田鍋洋一・吉田定男・鬼頭喜太郎・山田仁三郎（地頭）、能「千手」今井幾三郎・広田泰三・高安滋郎・藤田六郎兵衛・田鍋惣太郎・河村総一郎・広田陛一（地頭）金剛永謹（後見）、狂言「水汲」佐藤卯三郎・佐藤友彦、独吟「鉢木」伊藤鉄之進、仕舞三番「六浦」片野東四郎「熊坂」金剛永謹「笠之段」広田陛一、能「是我意・白頭」金剛巌・豊嶋三千春・西村欽也・高安勝久・飯富雅介・大野弘之・藤田昭彦・田鍋惣一郎・筧鉱一・鬼頭八郎・今井幾三郎（地頭）広田陛一（後見）

第二〇回定式能・昭和四六年九月十九日（日）午後二時半始。舞囃子「邯鄲」金剛永謹・藤田昭彦・後藤孝一郎・西北浩次・鬼頭八郎・今井幾三郎（地頭）、能「小袖曽我」豊嶋訓三（十郎）豊嶋三千春（五郎）・坪井光男（段三郎）小林忠三（鬼王）吉川周子（母）佐藤友彦・筧三男・田鍋惣一郎・筧鉱一・豊嶋弥左衛門（地頭）金剛永謹（後見）、狂言「花筐」伊藤鉄之進、仕舞四番「経政」片野東四郎「笠之段」松野恭憲「井筒」広田泰三「野守」今井幾三郎、狂言「雁礫」佐藤卯三郎・井上礼之助・佐藤秀雄、能「三井寺」金剛巌・広田泰能・西村弘敬・西村欽也・高安勝久・大野弘之・井上松次郎・藤田六郎兵衛・田鍋惣太郎・西北浩次・今井幾三郎（地頭）豊嶋弥左衛門（後見）。

昭和四七年度、中部金剛会定式能は開催されておらず、三月一九日、京都室町の宗家舞台で金剛謹之輔五十年祭記念能があり金剛永謹が「道成寺」を披ク、小鼓曽和正博も披キ。四月九日、伊藤鉄之進（70）急逝。

第二一回定式能・昭和四八年九月一六日（日）午後二時半始。能「蟻通」豊嶋弥左衛門・西村欽也・高安勝久・飯富雅介・藤田六郎兵衛・後藤孝一郎・筧鉱一・鬼頭八郎・今井幾三郎（地頭）金剛永謹（後見）、狂言「栗焼」井上礼之助・佐藤卯三郎、仕舞五番「葛城」片野東四郎「駒之段」松野恭憲「草子洗」広田泰三「隅田川」今井幾三郎「山姥キリ」豊嶋三千春、能「花筐」金剛巌・金剛永謹・松野洋樹・高安滋郎・立石澄雄・高安勝久・杉江元・藤田昭彦・福井啓次郎・河村総一郎・今井幾三郎（地頭）豊嶋弥左衛門（後見）。

此の年三月十四日、ワキ方高安流の耆宿西村弘敬（86）死去。

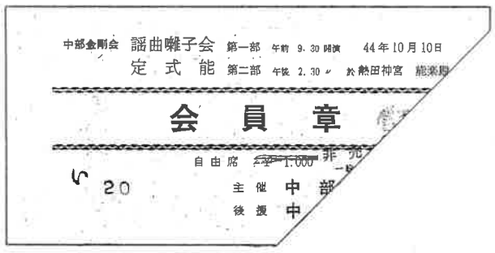
第二二回定式能・昭和四九年九月二三日（祭）午後二時半始。能「小督」松野恭憲・今井清隆・百々康治・佐藤友彦・藤田明彦・柳原富司忠・筧鉱一・広田泰三（地頭）今井幾三郎（後見）、独吟「松虫」大塚一二、仕舞五番「八嶋」片野東四郎「邯鄲」豊嶋三千春「半蔀」今井幾三郎「鳥追船」豊嶋弥左衛門「殺生石」広田泰三、狂言「伯陽」井上松次郎・佐藤友彦・佐藤卯三郎、能「天鼓」金剛巌・西村欽也・井上礼之助・藤田六郎兵衛・後藤孝一郎・筧鉱一・鬼頭八郎・今井幾三郎（地頭）豊嶋弥左衛門（後見）。

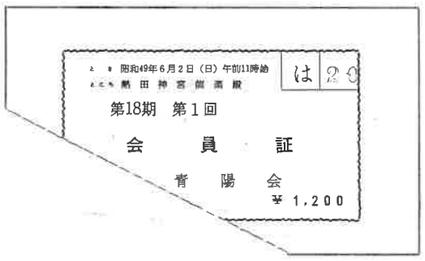
此の年四月十八日、金剛流春鶯会主宰・流儀の古老山田仁三郎が死去、享年88。

第二三回定式能・昭和五〇年六月二一日（土）午後一時始。能「杜若」吉川周子・高安滋郎・筧三男・後藤孝一郎・吉田定男・鬼頭八郎・重本昌三（地頭）広田泰三（後見）、仕舞二番「鵜之段」水谷泰典「歌占」百々康治、狂言「竹ノ子」井上礼之助・井上松次郎・佐藤卯三郎、仕舞三番「網之段」安藤良子「野宮」鈴木タミ「葵上」石浜明子、独吟「木曽願書」片野東四郎、能「夜討曽我」

（⑤面へつづく）

昭和40年代、入場券は青陽会も同様で半券はミシン目の付いた角を切り取る形だった。
挿図のように会員章（会員証）となっている。





新年謹賀

伊勢金春会
宇仁田吉邦
〒516-0076 伊勢市八日市場町5-16
電話〇五九六㉕五二九八

長田驍後援会
〒514-2221 津市高野尾町三三五一-四六
電話〇五九二㉚〇六九七番

福王茂十郎
和幸
知登

髙安勝久

西村同門会
飯富雅介
杉江元
椙元正樹
橋本宰

谷田同門会
原大努
小林一
有松遼
岡充

宝生欣哉閑

清水利宣
〒569-0817 高槻市桜ヶ丘北町11-25
電話〇七二(六九四)五〇一七

藤田舞台
藤田六郎兵衛
〒451-0041 名古屋市西区幅下2-10-9
TEL&FAX 〇五二-五七一-五七六三

大倉源次郎

幸友会
福井四郎兵衛

桂会
後藤孝一郎
嘉津幸

弘耀会
船戸昭弘
〒509-0103 各務原市各務東町4-67

能楽の友社

（④面よりつづき）

豊嶋三千春・坪井光男・東田康文・百々康治・清水信明・松矢賢一・竹市幸司・菊川憲三・佐藤友彦・藤田明彦・福井啓次郎・河村総一郎・豊嶋訓三（地頭）豊嶋弥左衛門（後見）。

第二四回定式能は山田仁三郎師追善能・昭和五〇年十月二六日（日）午後一時半始。能「経正」百々康治・高安勝久・鬼頭季信・柳原富司忠・吉田定男・広田泰三（地頭）金剛巌（後見）、連吟「井筒」宮口光芳・林茂・徳永寛一・松原利重、仕舞四番「鐘之段」豊嶋三千春「山姥」金剛永謹「雨月」片野東四郎「船橋」広田泰三、能「雪」豊嶋弥左衛門・西村欽也・寛三男・福井啓次郎・寛鉱一・豊嶋三千春（地頭）今井幾三郎（後見）、狂言「無布施経」井上松次郎・佐藤秀雄、一調「鳥追舟」福井啓次郎・今井幾三郎、能「融」金剛巌・高安滋郎・大野弘之・藤田六郎兵衛・後藤孝一郎・吉田定男・鬼頭八郎・今井幾三郎（地頭）豊嶋弥左衛門（後見）。

山田仁三郎・明治19年（一八八六）9月27日生。寺田左門治（一八四四－一九二二）の遺弟、名古屋に於ける金剛流の元老・職分、金剛会中部支部長。当地金剛流の流勢拡大に与って大いに力を尽した功績は計り知れない。昭和49年4月18日、死去。

中部金剛会
謡曲囃子会（第一部）午前十時
定式能（第二部）午後二時三十分
■四十九年九月二十三日
■於・熱田神宮　能楽殿
主催　中部金剛会
後援　中日新聞社
指定席
券
非売品

昭和51年4月18日（日）正午始
中部金剛会定式能入場券
三輪　俊寛　鞍馬天狗
主催：中部金剛会
後援：中日新聞社
於：熱田神宮能楽殿
名古屋市熱田区新宮坂町一
TEL 671－2912

第一部の社中会が無いとき

第二五回定式能・昭和五一年四月一八日（日）正午始。能「三輪」鈴木タミ・西村欽也・佐藤秀雄・寛三男・福井啓次郎・河村総一郎・鬼頭喜太郎・重本昌三（地頭）広田泰三（後見）、仕舞四番「嵐山」重本昌三「花月」豊嶋訓三「隅田川」広田泰三「国栖」豊嶋弥左衛門、能「俊寛」豊嶋三千春・百々康治・菊川憲三・高安滋郎・井上松次郎・鬼頭季信・柳原富司忠・寛鉱一・豊嶋訓三（地頭）豊嶋弥左衛門（後見）、仕舞五番「船弁慶クセ」牧野元子「熊野キリ」加藤ぬい「花筐クルヒ」浅野圭子「玉之段」吉川周子「山姥キリ」百々貴美子、狂言「歌争」井上礼之助・佐藤友彦、独吟「藤」片野東四郎、仕舞二番「安宅」清水信明「鵜之段」水谷泰典、能「鞍馬天狗」東田康文（前）日比野圭昭（後）豊嶋幸洋（子方）石田真紀・石浜祥一・管麻己子・西井紀恵・三島千奈・伊藤則子・加納佳代子・高安勝久・井上松次郎・大野弘之・藤田昭彦・後藤孝一郎・吉田定男・鬼頭好信・広田泰三（地頭）豊嶋弥左衛門。

第二六回定式能は大塚一二師追善能・昭和五一年一一月二三日（祭）正午始。能「清経」菊川憲三・熊沢昭代・高安滋郎・藤田昭彦・柳原富司忠・吉田定男・金剛永謹（地頭）豊嶋三千春（後見）、能「井筒・古比之舞」金剛巌・高安滋郎・佐藤秀雄・藤田六郎兵衛・後藤孝一郎・寛鉱一・今井幾三郎（地頭）金剛永謹（後見）、仕舞四番「烏追船」百々康治「松風」吉川周子「女郎花」日比野圭昭「藤戸」水谷泰典、狂言「名取川」井上松次郎・井上礼之助、独吟「俊寛」片野東四郎、仕舞三番「松虫キリ」広田泰三「通小町」今井幾三郎「山姥キリ」豊嶋訓三、能「邯鄲」豊嶋三千春・豊嶋幸洋・高安勝久・飯富雅介・佐藤友彦・寛三男・福井啓次郎・寛鉱一・鬼頭八郎・広田泰三（地頭）今井幾三郎（後見）

大塚一二・明治38年（一九〇五）2月1日生。昭和22年、豊嶋弥左衛門取立により先代巌宗家より職分を拝受、昭和24年5月22日「大塚一二・竹市秀雄職分披露能」大池町商工会議所特設舞台で能「望月」を披ク。大塚清風社を主宰し、流儀の発展に尽力、山田仁三郎の跡を受けて中部金剛会々長であった。

戦後、本舞台は言を俟たず、戦禍で稽古舞台も払底の折には能楽協会名古屋支部や他流の仕舞や素謡会、囃子会などに自邸内の清風社舞台を利用に供し、当地能楽界を支えたことも特筆されよう。自身は昭和30年1月30日清風社七周年記念能を御園座で催し「道成寺」を披ク、これが名古屋での戦後初めての「道成寺」である。因に配役はシテ大塚一二・ワキ高安滋郎・西村欽也・和泉太郎・アヒ茂山忠一良・茂山喜三・囃子は藤田六郎兵衛・田鍋惣一郎・谷口勝三・前川善雄・種田次郎（地頭）豊嶋弥左衛門（後見）。

昭和50年7月2日、心不全にて死去、享年72歳。

――以下次号――

◆中秋の舞台から◆（その二）

「片山慶次郎三回忌追善能」「第15回ござる乃座」と「豊田市能楽堂特別公演」「第2回久田観正能」

竹尾邦太郎

「安宅　勧進帳・瀧流」

亡き師父・慶次郎三回忌追善に後嗣・伸吾の披キ。智勇兼ね備えた気力充実の立派なシテ弁慶だった。同山は九人、精鋭揃い、きび〳〵した団体行動は道行の意気盛んな連吟力強く壮快。全員格子懸斗目着付・白大口・縷水衣、同山頭のみ黒縷水衣で左列は浅葱、右列を茶の縷水衣に統一。勧進帳の中、へ驚かすべき人も無し、で富樫（ワキ欣哉）がシテに目を遣ればシテもワキに。両者互いに胸のうちを探る腹芸の一瞬、緊張をさりげなく外し、怖めず臆せず冷静沈着、凛然と読み上げ痛快だった。判官（子方・片山峻佑）がワキの従者（アドアと逸平）に怪しまれ、すわ、とばかりに立ち戻る一行、殺気だってワキに詰め寄る場は、一波、二波、と波状攻撃、右列、左列とワキへ肉迫、あと一斉に迫るのが面白かった。窮地を脱し、判官の非運を託ち慨嘆するを述べるクセを省くと、ワキが届ける一樽、シテはへ盃に浮かめては、と盃に擬した扇をスミに落し、へ鳴るは瀧の水、となると直ぐ達拝掛男舞を数珠で大きく伸びやかに舞う。舞の中、橋懸へ流れて瀧を見上げる心に舞台へ受ケ、勾欄下を流れとみて盃を追う心に舞台へ入ると、扇を右手に拾って舞上げ、へ鳴るは瀧の水、となり、キリはへさらばよとて、と強力（オモアヒ茂）に続き同山が、最後にシテに三ノ松で留メ拍子を踏んだ。囃子は六郎兵衛・源次郎・大、地頭九郎右衛門、主後見清和。清新、爽やかな披キだった。（1時間37分）

「泣尼」

施主（アドあきら）に説法を頼まれて住持（シテ七五三）、お布施の分け前を餌に予め説法の効果を狙い、感涙を流させる老尼（アド千五郎）を帯同するも説法を始めれば、老尼は肝腎なところで居眠りを始め、果てはごろんと寝そべる横着。苛立つシテに何処吹く風の老尼、説法を済ませ帰途に就くシテに分け前を請求するに及んでは厚顔も極まるが、面を付けている強み、直面ならと考えると空恐ろしい。気心知れた演者の兄弟、達者すぎて少々アクの強さも。（14分）

「海士　懐中之舞」

前場、房前大臣（子方・片山清愛）西下の趣を述べたあと、従者達（ワキ茂十郎ワキツレ雅人・宜成）の下歌・上歌（道行）を省き直ぐ着詞。海人（前シテ九郎右衛門）も、己れの身を詠嘆する一セイあと、侘しい境遇を述べるサシ・下歌を省き直ぐワキと問答に。宝珠の経緯に及び、珠之段になって橋懸での型の鮮やかは一挙一動力強い切れのよさ。クドキの哀調も明晰な謡あればこその感慨、懐中の扇を取り出し子方へ進むと膝をつき、筆の跡の証と差し出せば、両手で戴く様に受ける子方、一幅の絵である。へ（今は帰らん）徒波の、とシヨリつゝ、常座へ行き、左へ廻り子方を見込み、へ朝潮の波の底に、たら〳〵と退ると、へ立つ波

（⑥面へつづく）

謹賀新年

大倉流小鼓　松月会
久田舜一郎
久田陽春子
高橋奈王子
〒662－0097 西宮市柏堂町六－三〇－二〇一
電話（〇七九八）七三－六五八六

叶石会　河村総一郎
河村眞之介
〒466－0821 名古屋市昭和区前山町一丁目二三
電話（〇五二）七六一－四八八二

河村大
〒603－8313 京都市北区紫野下柏野町五九－一
電話（〇七五）四六二－四一一五

石井仁兵衛
石井保彦
〒606－0913 京都市左京区松ヶ崎芝本町一－一－403
電話〇七五（七二三）五〇〇一

飯嶋六之佐
〒920－0961 金沢市香林坊2－8－17
電話（〇七六）二六一－四三四〇

亀井俊一
忠雄
保雄
実

下田文庫
こども能楽教室
筧鑛一
〒453－0802 名古屋市中村区下米野町3－29
電話（〇五二）四五一－九七九七

㈱大阪能楽会館
〒530－0015 大阪市北区中崎西2－3－17

谷口正喜
〒602－0915 京都市上京区中立売通室町西入三丁目室町スカイハイツ610号

谷口正壽
〒520－0221 大津市緑町二四－二〇

金春流太鼓
青耀会
上田悟
〒594－0041 和泉市いぶき野4－2－101
電話（〇七二五）三〇－一三七〇
名古屋稽古場　名古屋市中区栄5－6－4　栄能楽堂
電話（〇五二）二六二－一一八三

長生会
鬼頭義命
〒490－1323 愛知県稲沢市平和町城西137
電話（〇五六七）㊊一九六〇番

茂山千作
千五郎
七五三
千三郎

茂山良暢
〒606－8265 京都市左京区北白川東小倉町28
電話〇七五（七〇一）二〇一一番
FAX〇七五（七〇一）二二二一

大蔵会
大蔵狂言会
大蔵彌太郎
千太郎
基誠
〒177－0053 東京都練馬区関町南4－22－7－304
電話（〇九〇）三二一三－六九二三

（⑤面よりつづき）

の下に、と膝をつく入水の心は、送り笛に静かに立つと中入するところもよかった。浦人（アと正邦）の居語あって後場。

龍女（後シテ九郎右衛門）は面橋姫・黒頭・輪冠龍戴・鱗箔着付・亀甲ツナギ文淡緋大口・白地舞衣壷折の姿、正中で膝をつき経巻を開いて詠み、巻き戻し懐中して立つと早舞に。三段目に位進み、舞上げに子方へ経巻を渡すと、子方は床几を下りてそれを開く。前後を通じ力の籠った好演だった。

（1時間34分・9月22日・京都観世会館・片山慶次郎三回忌追善能）

「苞山伏」

他人（樵人アド融）の弁当を盗み食いした通り掛かりの男（小アド友彦）、罪を第三者（山伏シテ靖浩）に被せて逃れようとすれば報いのあるは必条、の教訓。当今でも悪戯（苛め、か）とは云え弁当の盗み食いが学校内に有るのでは（給食で無いか）。盗みの当事者にされ、こゝぞとばかり行力を誇示する山伏に懲らしめられてシテ柱に獅噛み付く男、尊大で見掛け倒しに思われがちな山伏も本曲では面目躍如、靖浩、役に適う。（25分）

「花子　真之型」

能「班女」の後日譚。妾宅を構えたはよいが妻（小アド幸雄）の目を盗んで通うなど飛んでもない事、一時の暇さえ侭ならず居ても立っても居られない風情の夫（シテ萬斎）。策を練り意を決し妻に直訴、何とか暇を、と信仰にかこつけ勿体ぶって切り出すも、要求する長期の日数など折り合い付こう訳もなく、峻拒され、ば膝を屈し哀訴するのも時の状況判断、辛うじて自邸持仏堂での一夜座禅の行を許される。こんな事で喜色を見せれば、妻ならずとも疑念を持とうというものだが、キリで全てが暴露され、狼狽はしても飽くまであっけらかんと言い逃れようとする無頓着、図太さが天晴れ（?）と思わされる伏線となって利く。

一夜と決まれば太郎冠者（アド和憲）を篤と納得させて身代りに、花子の許へと逸る気持を爆発させ走り込む呼吸も上々。風折烏帽子・襟赤・厚板着付・白大口・紫地枝垂桜文長絹・太刀の、艶にして凛々しい姿が橋懸を風の様に飛んで行く胸の中は如何ばかりか。

一夜の歓を尽して後朝、風折烏帽子の下の黒垂は乱れ髪か、長絹は着ずに白大口は淡浅葱色指貫に替え裳着胴姿、左手に太刀、右手には花子への狂おしい恋慕の証とも、笹を持つ。微醺を帯びるか、惚気呆けて夢見心地に吟ずる小歌、沁々した男の哀感が捨て難い。前後を通じ萬斎・幸雄の息の合った駆引きが秀逸。

小書「真之型」、書の真・行・草の倣いか。真が楷書の方正なら装束付の正格（せいかく・規格に正しく適っていること）を指そうか。（1時間11分）

「福の神」

年越し詣での参詣人・甲（アド博治）乙（小アド修一）、「福は内」と豆を撒き祈念するところに来臨する金色洞烏帽子・面福ノ神・赤地縫箔着付・下袴・唐織壷折姿の福の神（シテ万作）、福を授けるには所謂ギブ・アンド・テーク、神酒を要求するのが神々の世界でも、と思わせ如何にも当世風が可笑しい。三者の高らかな笑い留メ。（17分・9月23日・第15回ござる乃座）

「頼政」

シテ梅若玄祥。

あれ御覧ぜよ、と旅僧（ワキ勝久）を促し、胸杖にワキ柱へ視線を移すと、初同（正道・康陽・廣道ら）はへおぼろおぼろとして、で杖を内側に寄せてしみ〴〵下に宇治川を眺める老翁（前シテ）の風情には、尋ねられるまゝ教えていた名所の外にワキを自ら平等院へ誘おう、の心が動くかである。「いかに尉殿に不審申したき候」とのワキの問いに、扇の芝の由縁を語るシテは常座で佇立して。「今に扇の芝と申し候」と語り終えてワキにアシラフと、ワキはへ傷はしや、と下居、合掌、立つとシテは脇と掛合に今日が頼政の祥月命日と告げる。「何と」と驚くワキにへ（われ頼政が）幽霊と、右へくるりと一転、杖を捨てへ名のりもあえず、の返シ句で退いてゆく中入が如何にも蒼惶といった感じ。里人（アヒ又三郎）の居語りあって後場。

後場は源三位入道頼政（後シテ）の宇治川合戦譚。クセ中、対岸の敵勢を渡すまいと橋桁の板をへ引き離し、と左袖キリリと巻き、扇サッと高く上げるところ（写真）は如何にも橋板引っ剥がす勢いの鮮烈。されば、と馬上のまゝ渡河試みる敵勢、踏む数拍子に馬蹄を轟かせるか、馬をへざつざつと、乗り入れる辺り、力強く素早い扇扱いの手練に勇壮な趣。へ此方（の岸に）、と床几を立つと、へ半町（ばかり）、と太刀を抜き頼政最後の奮戦。へ此処を最期と、足拍子二ツ、太刀二閃するところ（写真）太刀捌きが素晴らしい。キリはへこれまでと、太刀の切つ先眺め、地の返シ句に太刀を捨てて扇に替えるとスミへ進み、そこに扇を落し、右膝つき（写真）安座、へ跡弔ひ給へ、と静かに立つと左へ廻り地前からスミは扇の前へと一巡、袖返シて常座へ退り、型通りに留メ。非運の老将の重厚な佇まいを見た。囃子は学・嘉津幸・眞之介、後見は直隆。（1時間18分・10月8日・豊田市能楽堂特別公演）

豊田市能楽堂特別公演
「頼政」梅若玄祥
（撮影　杉浦賢次）

豊田市能楽堂特別公演
「頼政」梅若玄祥
（撮影　杉浦賢次）

豊田市能楽堂特別公演
「頼政」梅若玄祥
（撮影　杉浦賢次）

「屋島　大事・那須与市語」

シテ久田観鷗、「久田観正会」第二回公演。シテ前名の時代、昭和60年「久田微二・能リサイタル」として第一回が「安達原・白頭・急進ノ出・長糸ノ伝」で発足、第二回「半蔀・立花供養」、何れも芸創センター仮設舞台で行なわれたが、第三回からは舞台が熱田神宮能楽殿に移り平成9年までを。平成10年「久田勘鷗能の会」と改まり、舞台も新設の名古屋能楽堂を本拠に平成22年まで通算21回の公演を行なったが、平成23年からは「久田観正会」となる。これまで客演もあるが、個人の会として発足以来、毎回意欲的な演目を勤め、通算23回目になる今回も「屋島・大事」は初演である。

眼目の小書「大事」は「弓流」と「素働」を同時に勤めるもの。源義経（後シテ）はへ（鎧を浸して）攻め戦ふ、と床几を立ちスミへ。左へ廻りワキの手前、弓に擬した扇を小鼓の音に巧く紛らせポトリと落すと敵を追う心に一ノ松へ。「その時何とかしたりけん」と弓を落したことに気付き、遙かに扇を見込み、へ（敵に弓を）取られじと、馬の手綱引き取って返す様に舞台へ戻ると、へ（既に危く）見え、と拍子一ツ強く踏み大小は流シの焦燥感。扇に迫り右足上げるは拾いかねる心か、漂い遠ざかるを流レ足に追うところ鮮やか。太刀を抜き、熊手を切り払う型から扇に近付き、膝ついて左手に拾い上げるとへ元の渚に、と床几に戻る。連続する一聯の型どころをきび〳〵と力強く極め、勘鷗、充実ぶりをみせ生彩。「那須与市語」は友彦、与市宗嵩の歳は望むべくもないが久しぶりの狂言方の秘事に芸劫発揮、「フッ、プッ」と扇の的を射落すところなど若々しい。ツレ信一朗ワキ敬三ワキツレ英基、囃子は希世・吉兵衛・総一郎・藤井徳三（地頭）下川宜長（後見）。（1時間54分・10月14日・第2回久田観正能）

謹賀新年

和泉流
狂言共同社
代表　井上菊次
佐野藤弘
大藤友彦
佐上次郎
今井郁雄
鹿島俊融
今枝郁之
鷲見靖彦
政行裕郎
〔事務所〕
〒466-0826
名古屋市昭和区滝川町54
サンハウス滝川3D
電話
FAX052・834・8607

狂言やるまい会
野村又三郎
松田髙義
野口隆行
奥津健太郎
〒460-0021
名古屋市中区平和一―二〇―四
野村事務所　気付
電話　052(350)7971
FAX052(350)7972

四五〇年余の伝統を護る
一色能
一色町能楽保存会
会長　吉川貞夫
〒516-0011
伊勢市一色町1306番地の2
電話(〇五九六)二五―六五二六

ウシマド写真工房
牛窓正勝
雅之
〒602-8381
京都市上京区北野上七軒
TEL(〇七五)四六二―一三四一
FAX(〇七五)四六一―五七七二

朝日カルチャーセンター
囃子教室
小鼓　後藤孝一郎
丸栄スカイル10階

栄能楽舞台
名古屋市中区栄五―六―四
電話(二六二)一一八三番

楽諷庵舞台
ご連絡は
名古屋市昭和区川名山町一〇五
電話(八三二)三四九一番

葵心庵舞台
尾張旭市東大道町原田二四九三ノ二
若杉ビル（旭市役所南）
電話　〇五六一五③二三四六番
能舞台　電話〇五六一五④〇六九八

（おことわり）年賀広告の掲載にあたりましては、紙面の都合により順不同とさせて頂きましたので何卒ご理解賜わりますようお願い申し上げます。

喪中につき
年賀欠礼いたします

笙月会
中川雅章
〒526-0036
長浜市地福寺町八ノ二九
電話(〇七四九)六二〇六三〇番

能楽の友

発行　能楽の友社
名古屋市千種区千種２丁目18－18
（郵便番号　464-0858）
電　話（052）731－７９８４
ＦＡＸ（052）733－２８３７
振替口座　00800－6－36393

購読料　１年　１１００円
郵送の場合　１年　１８００円
一　部　１００円

ＮＨＫ放送予定（平成25年２～３月）

◈ＮＨＫ－ＦＭラジオ能楽鑑賞（日曜日６時～６時55分）

２月24日　素謡「羽　衣」（観世流）
　シテ　観世喜正、ワキ　鈴木啓吾
　「木　曽」（部分）
３月３日　素謡「忠　度」（観世流）
　アイ狂言入り
　シテ　観世銕之丞
３月10日　素謡「佐保山」（金春流）
　シテ　高橋　忍
３月17日　素謡「雲林院」（金剛流）
　シテと地謡　広田幸稔
３月24日　素謡「熊　野」（宝生流）
　シテ　今井泰男
３月31日　狂言「鈍太郎」（和泉流）
　シテ　三宅右近
　狂言「昆布売」（和泉流）
　シテ　石田幸雄

演能カレンダー

◆名古屋能楽堂◆

（TEL 052－231－0088）（能楽関係のみ）

［25年３月］

２日(土)	名古屋能楽堂三月定例公演	（有料）
９日(土)	第七回名古屋片山能	（有料）
16日(土)	茂山狂言会　春	
	茂山顔見世公演	（有料）
17日(日)	名古屋宝生会定式能	（有料）
23日(土)	さわってみよう能の世界	（要整理券）
24日(日)	郁諷会大会	（無料）

第７回　萬歳楽座公演

金剛流「鷺」　観世流「隅田川」

４月12日　国立能楽堂

能楽をより多くの方に身近に楽しんでもらうため、能楽笛方・藤田流十一世宗家・藤田六郎兵衛氏が主催する観能の会「萬歳楽座」は、平成二十二年第一回公演から毎年春秋の開催を関して、きたる四月十二日（金）国立能楽堂で第七回萬歳楽座公演を開催する。

（開演午後六時半）

演能は、金剛流・舞囃子「鷺」観世流能「隅田川・彩色」。各流宗家はじめ至高の能楽師の豪華出演が注目される。

なお「萬歳楽座」は、第66回文化庁芸術祭大賞（平成23年度文化庁芸術祭）を受賞している。

能組は次のとおり

舞囃子「鷺」シテ・金剛永謹、笛・藤田六郎兵衛、小鼓・観世新九郎、大鼓・亀井広忠、太鼓・前川光長、地謡・豊嶋三千春、金剛龍謹、豊島晃嗣、坂本立津朗、元吉正巳

能「隅田川」彩色　狂女・観世清和、梅若丸の霊・藤波重光、渡守・宝生閑、旅人・宝生欣哉、笛・藤田六郎兵衛、小鼓・大倉源次郎、大鼓・亀井忠雄、後見・片山幽雪、木月孚行、藤波重彦、地謡・梅若玄祥、大槻文藏、片山九郎右衛門、観世喜正、上田公威、角幸二郎、清水義也、坂井音雅

開場午後五時三十分・午後六時三十分開演（午後九時終演予定）

入場料金（全席指定）Ｓ席一万二千円／Ａ席一万円／Ｂ席八千円／学生席三千円

チケットの申込み先

▽電子チケットぴあ／ＴＥＬ0570・02・9999、Ｐコード425・452▽ローソンチケット／ＴＥＬ0570・084・003Ｌコード32626、▽藤田六郎兵衛事務所／ＴＥＬ052・571・5763（ＦＡＸとも）▽アポロ音楽事務所／ＴＥＬ03・5379・8717（受付平日のみ午前10時～午後６時まで）▽国立能楽堂＝窓口販売のみ（午前10時～午後６時まで）

豊田市能楽堂三月能

宝生流「千手」　狂言「花盗人」

３月３日　豊田市能楽堂

豊田市能楽堂の「三月能」は、きたる三月三日（日）、宝生流能「千手」、和泉流狂言「花盗人」を上演する。午後二時開演。

番組は次のとおり。

狂言（和泉流）「花盗人」

シテ野村万作、アド石田幸雄、後見・内藤連

能（宝生流）「千手」

シテ大坪喜美雄、ツレ和久荘太郎、ワキ高安勝久

笛・藤田六郎兵衛、小鼓・後藤嘉津幸、大鼓・河村総一郎

後見・宝生和英、衣斐正宜

地謡・小倉敏克、水上輝和、辰己満次郎、内藤飛龍、辰己大二郎、金森隆晋、川瀬隆士、田崎甫

入場料（全席指定）正面席六千円、脇・中正面席四千円、学生半額。

チケットの販売／豊田市コンサートホール・能楽堂事務室（豊田参合館８階）電話0565・35・8200、チケットぴあ・電話0570・02・9999、Ｐコード423－621）

国立能楽堂　開場30周年記念公演

国立能楽堂は本年９月で開場三十周年を迎え、これを記念して次の特別企画を開催する。

四月十九・二十日（金・土）新作能「スーパー能世阿弥」（梅原猛作、梅若玄祥演出・出演）

五月二十九日（水）「関寺小町」（片山幽雪）十一月一日（金）「道成寺・古式」（金剛永謹）十二月七日（土）狂言「釣狐」（山本東次郎）「太鼓負」（野村万作）

九月の記念公演は、十五、十六、十七、二十日の四日間「翁」（観世清昭）をはじめ各流それぞれの演能が催される。

演能案内

名古屋能楽堂三月定例公演

三月二日(土)午後二時開演
名古屋能楽堂

狂言　茸　山伏　今枝郁雄
茸　男　佐藤友彦
茸　鹿島俊裕
茸　伊藤泰
茸　佐藤融
茸　野村又三郎
茸　信朗
茸　井上蒼大
茸　藤波徹
鬼茸　井上松次郎
後見　伴野俊彦

能（宝生流）　熊野　衣斐正宜　飯冨雅介　橋本辛　河村総一郎　後藤嘉津幸　大野誠

後見　和久荘太郎　内藤飛龍　地謡　竹内孝成　石森智幸　竹内淳一　平田正文　稲川馨一　水上輝和　辰巳満次郎　佐藤耕司

（午後四時十分頃終了予定）

主催　名古屋市文化振興事業団（名古屋能楽堂）
公益法人　能楽協会名古屋支部

［入場料］前売（指定）四〇〇〇円
前売（自由席）三〇〇〇円
（自由席のみ当日五〇〇円増）

［取扱い］名古屋能楽堂（TEL052・231・0088）
名古屋市文化振興事業団チケットガイド（TEL052・249・9387）
中京テレビ事業（TEL052・957・3333）
栄プレチケ92（TEL052・953・0777）
チケットぴあ（TEL0570・02・9999　Pコード425・697）

第七回　名古屋片山能

三月九日(土)午後二時開演
名古屋能楽堂

能　楊貴妃　片山伸吾　宝生欣哉　河村眞之介　吉阪一郎　藤田六郎兵衛
問　井上松次郎

後見　梅田嘉宏　小林慶三　地謡　大江広祐　清沢一政　橋本忠樹　味方玄　河村博重　武田邦弘　梅田邦久　古橋正邦

仕舞　白楽天　片山幽雪　地謡　清沢一政　古橋正邦　小林慶三　河村博重

能　龍神　分林道治　龍神　武田大志　夫人　青木道喜　片山九郎右衛門　一角仙人　宝生欣哉　河村眞之介　吉阪一郎　加藤洋輝　藤田六郎兵衛

後見　殷田謙吉　平木豊男　片山幽雪　河村博重　武田邦弘　地謡　大江広祐　梅田嘉宏　橋本忠樹　清沢一政　片山伸吾　古橋正邦　観世喜正　味方玄

（終了予定午後四時二十分頃）

主催　名古屋片山能制作委員会

指定席五〇〇〇円
自由席四〇〇〇円
学生席二〇〇〇円

チケット取扱
片山家能楽京舞保存財団（電話075・551・6535）
▽名古屋能楽堂（電話052・231・0088）
▽栄プレチケ
▽チケットぴあ

茂山狂言会　春

茂山顔見世狂言
鳳仁初御目見栄　名古屋初公演

三月十六日(土)午後二時開演
名古屋能楽堂

以呂波　茂山　鳳仁　茂山千五郎
二人袴　茂山千三郎　丸石やすし　井口竜也　茂山七五三
箕被　茂山　童司　茂山　正邦
小舞　柳の下　茂山　竜正
小舞　宇治の晒　茂山　虎眞
縄綯　茂山千五郎　網谷正美　茂山あきら
千切木　茂山　茂　茂山七五三　島田洋海　松本薫　茂山千三郎　鈴木実　山下守之　増田浩紀　茂山逸平

主催　茂山狂言会
問い合わせ・事務局
TEL　075・221・8371

［チケット］
S席（指定）六〇〇〇円
A席（指定）四〇〇〇円
学生席（指定）二〇〇〇円
小学生席（指定）一〇〇〇円
チケットぴあ（TEL0570・02・9999、Pコード424・957）
ローソンチケット（TEL0570・084・004、Lコード45479）

五〇〇年の伝統を護る一色能

催花賞受賞記念

一色神社例祭奉納能

3月17日　一色町公民館舞台

五百年の伝統を護る一色能は、今春一月十四日、東京で、観世寿夫記念法政大学「催花賞」を受賞、とくに本年は伊勢神宮ご遷宮の年でもあり、受賞を記念して、昭和二十五年度の一色神社例祭奉納能を三月十七日(日)一色町公民館仮設能舞台で盛大に開催する。

主催・一色町能楽保存会、一色町自治会、一色神社。

能組の大要は次のとおり。

「翁」　吉川貞夫、面箱・藤波徹、神楽・濱口富三、三番叟・喜多芳夫　笛・佐藤眞一、小鼓・吉川広美、石原隆明

催花賞受賞記念、番外舞囃子「高砂」高林白牛口二、笛・佐藤眞一、小鼓・後藤嘉津幸、大鼓・河村祐一郎、太鼓・鬼頭義命

連吟「岩船」一色保育園児

「高砂」一色町自治会役員

仕舞「大江山」「邯鄲」「月宮殿」「芦刈」「金札」「田村」「春栄」「安宅」「小鍛冶」「国栖」「西王母」「鱗形」「誓願時」

半能「田村」シテ石原隆明、ワキ松原正明　笛・菊川満子、小鼓・後藤嘉津幸、大鼓・河村裕一郎

連吟「雲林院」

仕舞「羽衣」「唐船」「草紙洗小町」

狂言「清水」喜多芳夫、藤波徹、後見・松田高義

連吟「三笑」

狂言語「海人」

仕舞「雲雀山」「田村」「田村」「葛城」「二人静」

独吟「蝉丸」

能「猩々」シテ稲葉秀美、ワキ久谷憲之、笛・菊川満子、小鼓・吉川広美、大鼓・石原隆明、太鼓・大形いく子

後援　三重県、三重県教育委員会、伊勢市、伊勢市教育委員会、三重県文化振興事業団ほか。

問い合わせ先

一色町能楽保存会事務局（伊勢市一色町一三〇六―二）

電話(〇五九六)二五―六五二六

当地の各流儀・流派・結社

社中の消息を辿る　51

竹尾　邦太郎

十「中部金剛会」　6

――承前――

第二七回定式能・昭和五二年四月一七日・午前一一時始。能「鶴亀」豊嶋三千春・坪井つる子・木村美智子・高安滋郎・高安勝久・飯冨雅介・佐藤友彦・筧三男・福井啓次郎・筧鉱一・鬼頭好信・重本昌三（地頭）豊嶋弥左衛門（後見）、狂言「しびり」佐藤融・佐藤友彦、仕舞四番「笠之段」伊藤鈴子「井筒」浅野圭子「玉之段」加藤ぬい「鉄輪」河井隆子、能「田村」百々康治・西村欽也・井上松次郎・鬼頭季信・柳原冨司忠・吉田定男・豊嶋訓三（地頭）豊嶋三千春（後見）、能「羽衣」牧野元子・高安滋郎・藤田明彦・福井良久・吉田定男・助川龍夫・吉川周子（地頭）豊嶋弥左衛門（後見）、狂言「文山賊」井上礼之助・井上松次郎、独吟「弱法師」片野東四郎、仕舞三番「巴」宇高通成「笹之段」豊嶋訓三「藤戸」重本昌三、能「土蜘蛛」日比野圭昭・東田康文・井川康子・坪井光男・高安勝久・西村欽也・飯冨雅介・大野弘之・森本重一・柳原冨司忠・鬼頭英二・鬼頭喜太郎・豊嶋訓三（地頭）豊嶋三千春。

第二八回定式能・昭和五二年一〇月三〇日・午前一一時始。仕舞四番「高砂」安藤良子「通小町」伊藤鈴子「弱法師」浅野圭子「小鍛冶」井川康子、能「猩々」加藤ぬい・高安勝久・筧三男・福井啓次郎・筧鉱一・鬼頭喜太郎・吉川周子（地頭）豊嶋三千春（後見）、狂言「竹生嶋参」井上松次郎・井上礼之助、能「経正」河井隆子・西村欽也・鬼頭季信・後藤孝一郎・鬼頭英二・広田泰三（地頭）松野恭憲（後見）、仕舞四番「難波」牧野元子「箙」木村美智子「鉈之段」鈴木多美「善知鳥」坪井つる子、能「半蔀」豊嶋三千春・西村欽也・佐藤友彦・藤田昭彦・後藤孝一郎・吉田定男・松野恭憲（地頭）広田泰三（後見）、狂言「盆山」佐藤秀雄・佐藤友彦、独吟「松風」片野東四郎、仕舞三番「小袖曽我」宇高通成・今井清隆「葵上」松野恭憲「松虫キリ」広田泰三、能「紅葉狩」日比野圭昭・西脇和子・石田紀子・佐藤りく・熊沢昭代・石浜明子・高安勝久・飯冨雅介・大野弘之・松井直子・森本重一・山口亮・吉田定男・鬼頭好信・広田泰三（地頭）豊嶋三千春（後見）。

此の年、昭和五二年、中部金剛会定式能は五一・五二年と同じく春秋二度の公演を持つが、この二年の春の番組は長年続いてきた年一回公演での二部制の中、一部の流友・会員謡曲囃子会を拡大し、京都からの職分の能一番を加えて編成された趣であったが、この度昭和五二年は春秋共に流友・会員謡曲囃子会の拡大判の趣。その一因は当地名古屋で指導の立場にあった職分が死去し、門下生・門弟の発表の場が著しく窮屈になった為もあろう。職分の籍にあった師匠達の没年を順に記せば、昭和34年・竹市秀雄（58）竹謡会、昭和49年・山田仁三郎（88）春鶯会、昭和50年・大塚一二（72）清風社（括弧内は享年）。

因に第二七・二八回定式能でシ

（③面へつづく）

なごや子どものための巡回劇場

―子ども狂言教室―

三月二十三日(土)　熱田文化小劇場

三月二十四日(日)　北文化小劇場

午前の部　午前11時～12時30分　狂言教室「柿山伏」「井杭」

午後の部　午後2時～午後3時30分　狂言教室「附子」「梟山伏」

入場料　子ども五〇〇円　大人八〇〇円

チケット取扱い　狂言共同社（佐藤事務所）〒462-0837　名古屋市北区大杉3-10-5（TEL052・911・8784）▽チケットぴあ▽市内13文化小劇場▽市民会館▽芸術創造センター▽名古屋能楽堂など

お問い合わせ　狂言共同社（TEL052・911・8784）名古屋市文化振興事業団（TEL052・249・9387）

第57期第2回　名古屋宝生会定式能

三月十七日（日）午後一時始　名古屋能楽堂

番組

能　巴　内藤飛龍　飯冨雅介　井上松次郎　河村眞之介　後藤孝一郎　鹿取希世

間　後見　和久荘太郎　辰巳大二郎　地謡　清水達郎　杉浦敏二　鈴木久仁七　竹内孝成　稲川壽一　衣斐正宜　辰巳満次郎　小倉健太郎

狂言　咲嘩　太郎冠者　佐藤友彦　主人　今枝郁雄　咲嘩　大野弘之　後見　大橋則夫

仕舞　実盛　追キリ　辰巳満次郎　玉井博祐　地謡　稲川壽一　水上輝和　衣斐正宜　佐藤耕司

鳥子方　阪口愛侑　衣斐

能　邯鄲　間　佐藤融　後見　辰巳満次郎　竹内澄子　内藤飛龍　辰巳大二郎　地謡　平田正文　竹内淳一　大森尚人　玉井道夫　佐藤耕司　水上輝和　衣斐正宜　和久荘太郎　杉江元　高安勝久　橋本宰　相元正樹　河村総一郎　船戸昭弘　加藤洋輝　大野誠

附祝言

主催　名古屋宝生会

問い合せ　名古屋市昭和区御器所3-23-19-802　衣斐正宜方　電話／FAX 052・882・5600

（終了予定　五時前）

［入場料］正会員一八〇〇円（年間通用四枚綴り）　鑑賞券五〇〇円　学生券二〇〇円

取り扱い　出演能楽師、宝生会事務局　プレイガイド芸文（地下2階）中日サービス

さわってみよう！能の世界

三月二十三日（土）午後一時半始　名古屋能楽堂

楽器（笛・小鼓・大鼓・太鼓）の体験

謡・所作の体験

能「安達原」の鑑賞

対象　小・中学生とその保護者一〇〇組

問い合せ先　電話080・3634・0383（加藤）　Eメール　noh_nagoya@gmail.com

往復ハガキで申込み　締切3月4日（月）

主催　文化庁

共催　公益社団法人能楽協会名古屋支部

郁諷会大会

文化庁平成24年度次代の文化を創造する新進芸術家育成事業

三月二十四日（日）開場十時三十分　名古屋能楽堂

午前十一時始

こども能楽教室おけいこ発表

指導　筧鑛一　前野郁子

一口謡

しかいなみ　飯塚比呂人　荻野筧

ただたのめ　飯塚友恵　伊藤晩蓮　筧陽華

はるばるきぬる　伊藤真希子　木立匠

つきかいしょうに　加古寛昭　金田暖生　大下眞侑　大下日央　大下都帆　大下乎心　鈴木　太田翔琉　太田みずき　荻野斗樹　高橋蓮侑　長田奏世　花輪侑真　水谷淳　悠愛　三矢哲世　六鹿芽桜　渚由瑛音　吉田瀬七　吉田希音　由原怜音　米田篤史　米田敬史　櫂田未瑠　鳳斗心那　梓美心　爽也快哉

たちいでてみねのくも　六鹿芽桜

仕舞　ししにはもんじゅや　木下日央　木下古都帆　木下乎心　鈴木心那　菰田鳳斗　木下梓美

はつだいりうおおは　六鹿渚由

はるがすみ　櫂田未瑠

囃子　あずまあそびの　荻野斗樹

鼓けいこ　たかさごや

舞囃子　吉野天人　伊藤真希子　河村眞之介　後藤孝一郎　加藤洋輝　大野誠

開演十二時

郁諷会番組

番外仕舞　邯鄲　樂アト　前野郁子

素謡　中野裕子　熊谷晃子　小島澄江　杉野かよ子　片山明美

舞囃子　杜若　嵐山

能　養老　志津明子　後藤嘉津幸　河村眞之介　加藤洋輝　半蔀　佐治光幸　後藤孝一郎　河村眞之介　大野誠

羽衣　河崎喜代子　杉江元　後藤孝一郎　河村眞之介　加藤洋輝　大野誠

（番組③面へつづく）

（②面よりつづき）

テを演じた当地の師範は「田村」百々康治（春鶯会・昭45）「羽衣」牧野元子（春鶯会・昭47）「土蜘蛛」日比野圭昭（清風社・昭47）「猩々」加藤ぬい（春鶯会・昭34）「経正」河井隆子（豊星会・昭51）、（括弧内は所属会・師範に推された年）。

昭和五二年一一月九日、流儀の耆宿豊嶋弥左衛門が京都市の学術・芸術・文化の発展向上に寄与した人を称える昭和五二年度の京都市文化功労者六人のうちの一人に選ばれる。その中に俳優片岡千恵蔵も。

年が改まり昭和五三年一月三日、豊嶋弥左衛門その人が病篤く長逝。流誌『金剛』33巻2号掲載の追悼記事を左に一部抜粋する。

金剛流職分の長老としての要職にあり、また能楽界にもその盛名を馳せていた豊嶋弥左衛門師が、約半歳の病臥のすえ、はからずも年改った一月三日、ついに不帰の客となられたことは、まことに残念の一語に尽きる。（中略）昨五十二年三月二十五日、金剛流では初の重要無形文化財個人指定（人間国宝）を受けられ、四月二十七日の東京国立教育会館に於ける認証式には元気に参列された。そしてつづく首相官邸に於ける招宴にも臨まれた。それよりさき、五一二年初頭からは、一月三十日の東京金剛会四十周年別会の仕舞「草子洗」、三月二十七日の中日五流能に於ける仕舞「放下僧」、四月二十四日の豊春会での能「巴」から、五月二十二日の定期能の能「桜川」、五月二十六日の大阪能楽観賞会の能「景清」と、なんら異常なく舞台を勤められた。ついで六月一日、京都薪能での能「半蔀」立花供養の前シテが最後の舞台となった（中略）享年七十八歳。病名は肝臓障害であった（後略）。

昭和五三年度も三月二六日・中日五流能第二部「弱法師・盲目之舞」、四月二二日・金剛定期能「蟻通」、五月二二日・豊春会能「巻絹」、九月二四日・金剛定期能「三井寺」、一〇月一五日・豊春会能「松山天狗」などシテ役が就いていたが。中日五流能は未だ仮番組であったので当日は金剛巌が「弱法師・双調盲目之舞」として勤める。

四月二五日、去る一月一八日の豊嶋弥左衛門告別式に際し、日本能楽会々長代理として弔辞を読んだ高安滋郎が長逝、『金剛』33巻3号は次の弔辞を寄せ、早い死を悼む。

ワキ方高安流十三世宗家・高安滋郎師は、四月二十五日、髄膜炎のため名古屋第二日赤病院で逝去された。六十一歳であった。

高安流は昔、金剛座付のワキ方で、滋郎師は尾州藩お抱え能役者西村家の八代目、西村弘敬師の長男として生れ、少年期より舞台に上り、昭和四年、当時の金剛右京宗家などの推挙により、それまで絶えていた高安流宗家を継承した。地元名古屋をはじめ関西、東京など各地舞台に活躍、五十余年の豊富な芸歴を経て、最近は頓に円熟味を増し、今後が大いに期待されたが、惜しむらくは還暦の若さで、ついに幽明境を異にされるに至った。

能楽界に尽された功績も顕著で、ことに戦災を受けた名古屋能楽界の復興に努力され、熱田神宮能楽殿建設の事業に参画されて大いに功績があった。重要無形文化財日本能楽会の会員であり、能楽協会名古屋支部長であった。謹んで御冥福をお祈り申し上げる。

なお、氏の功績に対し四月二十五日付で、勲五等双光旭日章が授与された。

これらの事の影響もあってか昭和五三年、中部金剛会定式能は行なわれなかったが、一一月二三日、中部金剛会流友会があり、当地の師範・流友の素謡七・連吟三・連調一・舞囃子七・仕舞一四番が演じられ、うち仕舞三番を来名の重本昌三・豊嶋三千春・豊嶋訓三ら職分が務める。この年以後、中部金剛会が主催の定式能は姿を消す。

昭和五四年一月六日、当地の古老職分・片野東四郎が享年八三歳で死去、名古屋金剛流の探題であった尾崎浪音の門弟で、その後、金剛謹之輔・先代巌・金剛右京に師事、金剛流職分として四十余年、中部金剛流の発展に寄与する。最晩年、中部金剛会定式能では専ら独吟を勤める。

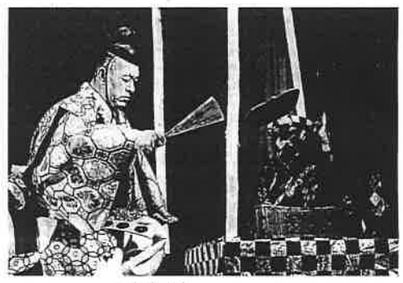
同年九月一六日、人間国宝・豊嶋弥左衛門一年祭追善能楽会が追善会主催、中部金剛会・豊嶋三千春・菊川憲三の共催で行なわれる。番組は能「俊寛」菊川憲三・日比野圭昭・竹市幸司・清水利宣・井上礼之助・藤田明彦・柳原冨司忠・筧鉱一・豊嶋訓三（地頭）広田泰三（後見）、狂言「宗論」野村又三郎・井上松次郎・佐藤秀雄、能「夕顔・山端之出」金剛巌・西村欽也・佐藤友彦・藤田六郎兵衛・福井啓次郎・吉田定男・今井幾三郎（地頭）金剛永謹（後見）、連吟「三井寺」吉川周子・河井隆子・鈴木多美・加藤ぬい・村田たつ子・田中雛子ら総勢一九名の女流師範・流友、仕舞五番「敦盛」重本昌三「弱法師」広田泰三「江口」今井幾三郎「通小町」豊嶋訓三「船弁慶」金剛永謹、能「融・十三段之舞」豊嶋三千春・西村欽也・野村又三郎・筧鉱一・鬼頭喜太郎・豊嶋訓三（地頭）今井幾三郎（後見）。

後見は概ね二乃至三名だが主後見だけを記し、特に記載の無い場合の舞台は全て熱田神宮能楽殿。

蛇足　既述の通り此の頃を境に当地金剛流の流勢は衰えをみせ、金剛流の能は、京都から宗家始め職分の、中日五流能への来演や当地他流の祝賀や追善の催会への客演などとなり、そのほかは当地の師範たちの、熱田祭奉納能・名古屋薪能・大衆（普及）能・歳末義捐能の出演（概ねに仕舞・舞囃子・能も軽い曲）が専らとなっていたのは寂しい。

ありし日の豊嶋弥左衛門、
左は田鍋惣太郎（小鼓）
昭和44年３月30日　第14回中日五流能
一調「笠之段」
撮影：高辻　幸一

ありし日の豊嶋弥左衛門、
右は奥野達也（師長）
昭和45年３月29日　第15回中日五流能
「絃上・楽入・窕・三調之会釈」
撮影：高辻　幸一



ありし日の高安滋郎、
右はシテ大坪十喜雄〔宝〕
昭和47年３月26日　第17回中日五流能
「邯鄲・笠之次第・盤渉」
撮影：高辻　幸一

ありし日の高安滋郎、
左は森田光春（笛）（シテ金剛巌）
昭和49年３月31日　第19回中日五流能
「清経・披講之出端」
撮影：高辻　幸一

◆晩秋から冬の舞台◆

「名古屋能楽堂十月定例公演」と「第33回名古屋金春会」「観世会定例公演能」及び「忠三郎狂言会・四世茂山忠三郎一周忌追善公演」

竹尾邦太郎

「石神」

大酒が祟って妻から離婚を迫られ、仲人（アド靖浩）に泣きつく夫（シテ又三郎）に家裁の調停員よろしく仲人、尤もらしく訓戒を垂れるのが可笑しい。「この先は酒は止まりませう」と夫が辞去すると、入れ替り妻（小アド融）が律儀に報告に訪れ、夫が世帯を顧みない酒浸りは「これが五度や十度の事では御座りませぬ」と訴え理解を求めるが、あっさり別れさせず元の鞘に収めさせるのが調停員たる仲人の手腕。仲人は石神（石を神体に祀る土俗信仰の神）に離婚の可否を占うよう説き「昼は人目もある」ので暗くなってから、と示唆するところが味噌。一方、妻の行動を知るため再度、夫が仲人を訪うと案の定、妻は報告に来た由。

男同士で仲人は夫の味方、惻隠の情に企む一計は暗闇に夫を石神に成り済ませること。「媚びた物を御用意なされました」と夫は物着に身繕いを改め嘘吹の面つけ変装、現場の石神を大儀そうに除ける具合も上々に俄石神に納まれば、やって来る妻。離婚成就の卦となる訳は無いが、石神様にお世話に、と習い覚えた神楽を奉納と舞えば、俄石神も立場を忘れ浮かれて舞い出し絡繰りが露見、「腹立や〳〵」と妻に追われる。三者が役を得て持味が充分に発揮され好舞台。（33分）

「枕慈童」

魏の文帝の勅命で薬水の源を尋ねる臣下（ワキ雅介）と従者（ワキツレ正樹）、山中に至り庵を見つけると、初同（彬・浩之・呻二ら）の〈松が根の、で引廻シが下ろされ、中に慈童（シテ驍）。〈不老不死の薬と成って）七百歳を送りぬる、とワキにアシラフところ不思議な可憐さが。シテ・ワキ問答・掛合から〈しかるに、と庵を出るシテ、地〈面白の遊舞やな、と楽（誠・孝一郎・眞之介・洋輝）を明朗闊達に活き〳〵と舞上げ、更にキリを舞い続ける。〈泉はもとより）酒なれば、と左膝つき泉を酌み、〈（酔ひに引かれて）よろ〳〵〳〵、と台に上り〈枕を取り上げ、と枕戴き拝をすると、〈岩根の菊を、と右、左と菊を右手左手に手にして〈花を筵に臥したりけり、と安座、花を戴き、〈もとより薬の酒なれば、と地の返シ句に立つと、〈（いかにも）久しき千秋の帝、と膝をつきワキに拝、立つと更に花で舞い〈飲めども飲めども、と地のうちに三ノ松へ流れ、小廻りして幕左上をみて留メ。小柄なシテの、如何にも慈童の天真爛漫おゝどかな舞が秀逸だった。（51分・10月26日・名古屋能楽堂十月定例公演）

「自然居士」

父母の追善に布施を供えるため身を売った少女（子方・金春梓沙）と知り自然居士（シテ穂高）、説法を中断して人商人（ワキ雅介ワキツレ宰）を追い、連れ戻さんと様々な嘲弄に耐えて目的を遂げる。

次第（学・昭弘・総一郎）でワキ・ワキツレが出、ワキが常座で名宣り、少女に片時暇を与えるも未だ戻らずを雲居寺で説法のある由を聞き及び、もしやそちらへ、と座着くと何事もなく雲居寺門前ノ者（アヒ靖浩）が現われ名宣、今日は説法結願の日、「志の面々は何れも御出で候へ、その分心得候へ」と触レ、橋懸口から轟ヘシテに呼び掛け平伏すると、何事もなくシテは三ノ松へ出、「雲居寺造営の居士が説法、今日結願と触れてあるか」に応えるアヒ、シテはゆったりと運ビ舞台へ、大小前、床几にかける。面喝食・オスベラカシ・白綾着付・白大口・淡紫水衣・掛絡・右手に扇・左手に水晶数珠の姿、大柄なシテに相応しい風格が。高座に上った態に説法を始めるその間に、二ノ松へ出る少女、アヒが目敏く気付き近寄ると、「あらいたいけや、此方へ参り候へ」とスミへ連れ出すと少女から預る小袖をシテの前に延べ、諷誦文（追善の際、施主が佛事の趣旨や供物の内容を述べて僧に誦経を請う文）をシテに渡すと、シテは文を全開してから「敬ひ白す請くる諷誦の事」と読み出し、〈三宝に供奉し奉る云々、を初同（安明・広明・忍ら）が受け〈読み上げ給ふ、でシテは両手に拡げたまゝの文から右手離し、左手シヲルと文を畳み〈袖を滑らさぬ人はなし、と左片手に持つ文を手放すと後見がそれをひく。ワキ・ワキツレは立ち、ワキが「されて舞い出し絡繰りが露見、「腹立や〳〵」と妻に追われる。三者が役を得て持味が充分に発揮され好舞台。（33分）

（④面へつづく）

◆　◆　◆　◆　◆　◆　◆　◆

終了五時頃
入場無料
お誘い合せご来場下さい

附祝言

屋島　久田　勘鷗
天鼓　上田　貴弘

主催　郁諷会
前野郁子

仕舞

通小町　伊藤　明美
素謡　吉田富喜子　志津　明子

舞囃子

田村　中野　裕子
桜川　熊谷　晃子
素謡　河村眞之介　後藤孝一郎　河村眞之介　後藤孝一郎　大野　誠　大野　誠

梅

昭君　伊藤　裕貴　佐治　光幸　濱田　国松　代田　清嗣

番外仕舞

（②面郁諷会番組つづき）

（③面よりつづき）

ばこそ彼の高座近き者が尋ぬる者にて候、急ぎ引立て来り候へ」と命じると「心得申し候」とワキツレ。拉致を阻まんとするアヒに「汝が行くならば直ぐに喧嘩となるべし」とシテ、説法を中断、自ら少女を奪回に、の侠気。

狂言口開で始まる観世流とは導入部が可成り趣を異にしてをり面白い。以下は同工、執拗に人商人に迫る自然居士の意気込みに辟易、到頭根負けして自棄気味の人商人、せめて愚弄して居士の誇りを傷つけて一矢を報いん、と人商人の抵抗も強か。丁丁発止のシテ・ワキ問答、歯切れのよさが出色なら中之舞・クセ舞・能之段・羯鼓と連なる舞づくしが偉丈夫の力溢れる大きさ。キリはへとどろとどろと、二ノ松へ走り、へはら〳〵〳〵と、片膝ついて羯鼓を打ち、へ（狂言乍らも）法の道、と撥を捨て、舞台へ戻ると少女へ進み、立たせると、扇翳シ廻るのが少女に行く手を指スか、健気、可憐な少女は橋懸へ、シテは常座で留メ拍子、力の籠った一種痛快な舞台だった。（１時間10分）

「太子手鉾」　無断欠仕を咎めに来た主（アド郁雄）に、京見物から戻ったが大雨続きの雨漏りで出仕まゝならなかったと弁解する太郎冠者（シテ友彦）、何とか許しは得るが所有する太子の手鉾とやらを見せいと要求される。古、佛教排斥の物部守屋が聖徳太子に阻まれたを洒落、漏る屋根を、竿に槍を括った代物で雨を阻んだのを巫山戯て太子手鉾と名付けたを勿体ぶって持ち出し、「太子手鉾の謂れは如何に」と問われる侭に尤もらしく由緒を語り、主が聊か疑念を示せば、へ太子手鉾の謂れは如何に、と主に合の手を囃させ、拍子に掛って太子が守屋を討ったを、図に乗りシミュレーション（模倣）して見せる横着。流石に主も太郎冠者の悪巫山戯と知って叱りつける。洒落の因って来たる所が分らないと面白く無いが、友彦丁寧に演じて説得力。

史実は五八七年、蘇我（馬子）氏が物部（守屋）氏を滅すが、五九三年、摂政に就いた聖徳太子の方が馬子より遙かに高い知名度に因る脚色。（21分）

「藤戸」　馬上可能な藤戸の渡しを教えてくれた漁夫を己れの戦略の機密漏洩を恐れ刺殺、大功を得て任地に入る佐々木盛綱（ワキ勝久）の得意は侍の論理、「何にても訴訟の事あらば罷り出でよ」は領民への人気取り、名宣から道行は晴れ〳〵と欣快の趣。ワキの理不尽を恨む漁夫の老いた母（シテ光洋）、クセ（汎・忍・貴覚ら）のキリへ亡き子と（同じ道になして）、と立つと双手を拡げ襲い掛からんばかりに迫るも、ワキの威にへなへなと足が萎えたか左、右と膝をつき、力尽きた心は右ウケて安座双シヲリの激情に無念さまじ〳〵。中入は盛綱ノ下人（アヒ融）が二ノ松まで送り込み、一ノ松に戻りシテとワキそれ〴〵の胸中忖度するを立シャベリに、戻ってワキの意は死者を管絃講で弔う旨を触して退くと後場。

ワキ・ワキツレ従者・元、立って待謡に弔い、ワキは、一切有情殺害三界不堕悪趣、で下居合掌すると、出端（希世・嘉津幸・眞之介・洋輝）で漁夫ノ霊（後シテ光洋）が出る（観世流は太鼓無シで一声）。面痩男・黒頭・紺無地熨斗目着付・白練水衣・腰蓑・杖の姿、御弔いは有難いが「恨みは尽きぬ妄執を」とワキに詰メル気迫に凄味をみせ、刺殺されるまでの現場情況を描く互いに力の籠ったシテ・ワキ掛合が見事。氷の如く、と胸の辺り刺し通すのが水衣の外側の様に見え、へ浮きぬ沈みぬ、は杖を首枷に反り返って退る様。へ恨みをなさん、とワキにアシラフ殺気が利き、へ水馴棹、と杖を斜めに身に付けて棹を使う心は、へ生死の海を渡り、と膝をつき、へやす〳〵と、と常座へ。へ彼の岸に、と小廻リ二度はへ到り到りて、の心か、へ成佛の身とぞ、と足拍子一ツ、杖捨て、合掌、シテ柱みて留メ拍子。（１時間24分・11月４日・第33回名古屋金春会）

「井筒」　正先、井筒は丈の低い物、後場でシテは膝ついて中を覗くと思ったが。前シテ里女・喜之の苦しそうな謡を案じたが、へ松の声のみ、辺りの声のくぐもりが苦しく切ない胸のうち、とも。へ何の音にか覚めてまし、と下居、木ノ葉を置き合掌、返シ句に立つとワキ一所不住ノ僧・雅介と問答・掛合、へ主こそ遠く業平の、が如何にも詠嘆に聞かれる。初同（喜正・勘鷗・正邦ら）へ一叢ずすき、と芒に目を遣り、へ草茫々として、と左から右へ見回す風情に一入の懐顧。業平のことどもを語るクリ（サシ・クセ）となってシテは床几にかける（写真・膝に障り？）が珍しい（金剛流の小書「物着」ではクセで床几にかける由だが未見）。中入はへ契りし（年は）、と床几を立つとへ井筒の陰に、と、すっと出て隠れる心に退り、返シ句に踵を返し橋懸へ行く問答いが如何にも巧い。

後シテは有常ノ娘・喜之、へ形見の直衣身に触れて、と左袖をつまみ胸に抱く様にそれを見る業平追慕の想い。序之舞三段、優美に舞上げる。ワカから地と掛合にへ（冠直衣は女とも見えず）男なりけり、と井筒へ寄ると、膝はつかずに左袖で芒を外へ除けへ業平の面影、を沁々見込み（写真）、退ると、へ凋める花の、と左袖返シ扇で面を蔽い、しお〳〵と下居の姿も亦、儚げな美しさ。匂ひ（残り て）、とすっと立ち、面伏せ鐘を聞き、へほのぼのと、と踏む三ツ拍子の余情、趣深かった。シテの、膝腰、名調の謡の回復を望むや切。（１時間42分）

「佐渡狐」　佐渡に狐は居るか居らぬか、誰しも郷里を愛する者は何事によらず他郷の者から軽侮されたくはない強い郷党意識があり、本曲のように賄賂を使ってでも頑なに面子を守ろうとするであろう。佐渡ノ百姓（シテ高義）は「佐渡には何も無い物は無い」と啖呵を切った手前、退くに退かれず、頼る奏者（小アド又三郎）には賄賂を取られるだけで、役所の門を出てしまえば執拗に疑う越後ノ百姓（アド健太郎）に意地悪く狐の生態を蒸し返され絡まれる始末。挙げ句は目には見えない啼き声で狐が居ない事が露見。因に流派により啼き声は「東天紅」「月星日」「チチクワイ」などと。今回、又三郎家は「グーゥ、グーゥと啼くわいやい」だった。（29分）

蛇足　明治三八年以来、日本狼は絶滅した由だが、狐が絶滅危惧種にならないように。

「天鼓・弄鼓之舞」　帝の専横は、天から降った奇瑞の鼓を手放さない少年・天鼓を溺死させてまでして奪わせたが、それが鳴らないとあって勅使（ワキ勝久）を遣わし、天鼓の父・王伯（前シテ邦弘）を召還する。勅諚を聞く王伯（写真）、鼓を打つ為だけとはいえ内心の不安と怖れ（鳥獣とても知る親子であることの哀れを述べるクセを抜く）、参内の王伯は勅使に急かされ覚束無く羯鼓台へ寄り、へ心も危きこの鼓、とバチを両手に、へ打てば、へ不思議や、と退り、右に小首傾げ聞き耳立てる風情、鳴ったと分るとへげにも親子の證、と鼓を見詰め、へ（君も）哀れと（思し召して）、にへな〳〵と緊張が解けてバチ取り落とす此の一場、惹きつける。中入は勅使ノ従者（アヒ又三郎）の送り込み。

後場、ワキが待謡に名調を聞かせると、後シテは天鼓ノ霊、小走りに一ノ松へ出るのが如何にも管絃講の供養を喜ぶ態。晴れ〳〵とバチで舞う楽、小書の弄鼓で羯鼓台のうしろ、狭い框を喜々として廻って舞上げると、キリは、へ水に戯れ波を穿ち、と膝をつき、袖かろやかに返シ、バチで水を撥ねる様な姿（写真）は文字通り水に戯れ水遊びする楽しさ、爽快な舞台だった。（１時間13分・11月11日・名古屋観世会定例公演能）

「祢宜山伏」　街道の茶屋（次アドあきら）で祢宜（アド茂）が一服して居ると、後から来た山伏（シテ良暢）、茶が熱いの温かいのと言い掛りを付けるを、「茶屋殿、好い加減にしてやらせられい」と祢宜が差し出口したばかりに起る一悶着。己れの威力を振りかざす山伏。ポーターでもあるまいに祢宜に経文や佛具を容れる肩箱を持てと不当な要求をすれば、祢宜には祢宜の仕来りで肩箱など持つ作法は無いと反発。険悪な場に次第に興奮の祢宜、文句を言った後、小刻みに震えがくる辺り妙。結局、祢宜に肩をもつ茶屋の慮りは、所有の大黒をそれ〴〵祈りで影向させた方を勝にして此の場を収める事に。先づ祢宜が祝詞を上げ幣を振れば大黒は離き、山伏が呪文を唱え数珠を揉めば大黒は背き、相祈りでも同じ。横柄尊大に振舞ってはいるが不貞不貞しくは無くやんちゃな印象の山伏、良暢の此の味、中々得難い。（30分）

「文荷」　若衆狂いの主（アド千三郎）、艶書を太郎・次郎冠者（シテ正邦・次アド童司）二人して届けよの事々しさ。二人ならずとも阿呆くさ、となろうというもの。道々、代る〴〵持つのも、と棹を担げて文を直中に吊れば、前後にずらしては重いの軽いのと他愛ないことにぢゃれ合い、謡の鼻歌気分に。調子にのって封を切れば、内容を茶化し、ふざけまくり、果ては破って散乱すれば、風の便りと言う事もあろうと扇であおぎ出し、へ加茂の河原を通るとて文を落いたよのへ風の便りに伝へ届けたし、と謡気分も絶好調だが少々くどいか。（17分）

「泣尼」　説法を頼まれはしたが「未だ説法などしたことが御座らぬ」と明言する僧（シテ千五郎）、説法を聞く人々に感涙を催させるには重宝な泣尼（アド良暢）を、と布施の分け前を餌に連れ出すと施主（次アド道郎）方へ。説法の前、僧が施主の屋敷をお世辞に「塵一本も御座らぬ」と褒めれば、尼は左手の指でさり気なく床を擦るのが習いの嫌らしさ、品の悪さを端的にみせて妙味。さて、僧の説法が始まると、当初は神妙だった尼、僧が咳払いして注意を喚起するも何処吹く風、肘枕でこっくり仕出す始末。施主の手前、僧は怒鳴る訳にも、睨みつける訳にもゆかず溜るストレス、説法の中「なみだ、なみだ、なみだ」と高座を扇で打つと、尼はころんと寝転んでしまう横着、こゝの呼吸が絶妙。やっと説法が終り、鉦の音に目覚めると尼は橋懸へ、僧がワキ座で施主から布施を受け取るを一ノ松勾欄に寄り、首を縦に振り、しめしめといった風情で眺める嫌らしさ。キリは「今更泣くという事があるものか」と苦々しく僧、「おーふーせ」と分前を強請（ねだ）る尼は僧の掛絡を引ったくって転倒、逃げる僧を「先づ待て先づ待て」「遣るまいぞ遣るまいぞ」と追う。良暢、老体の泣尼を好演。師父の追善を立派に果した。（28分・11月16日・京都観世会館・忠三郎狂言会・四世茂山忠三郎一周忌追善）

◆大槻能楽堂自主公演能

道成寺フェスティバル

4月～6月　全5回上演

大槻能楽堂自主公演能は、改築三十周年記念公演として、多彩なシリーズ企画を催しているが、ことし平成二十五年に注目されるのは「道成寺フェスティバル」と老女物五番を扱った能〝五曲〟の「老の美と悴」を上演する。

「道成寺フェスティバル」は、次世代の実力派のシテを中心に、各流派の三役（ワキ・ハヤシ・狂言）をそろえ公演する。演能日程は次のとおり。

▽四月二十七日(土)午後二時始
　狂言「止動方角」茂山あきら
　能「道成寺」片山九郎右衛門
▽五月十一日(土)午後二時始
　狂言「抜殻」野村又三郎
　能「道成寺」無闘之崩　上野雄三
▽五月二十五日(土)午後二時始
　狂言「素袍落」茂山千五郎
　能「道成寺」中之段数闘　上田拓司
▽六月十五日（土）午後二時始
　狂言「鐘の音」善竹忠一郎
　能「道成寺」中之段数闘・無闘崩・五段之舞・赤頭之伝　赤松禎英
▽六月二十九日(土)午後二時始
　狂言「寝音曲」野村万作
　能「道成寺」赤頭之伝　観世銕之丞

［入場券］前売S席九五〇〇円、A席七七〇〇円、B席六五〇〇円、学生席四八〇〇円（全五回割引券＝各席料金×5回の一割引

当日＝S席一〇五〇〇円、A席八七〇〇円、B席七五〇〇円、学生席五八〇〇円。

（「老の美と悴」シリーズは次号掲載）

問い合わせ／大槻能楽堂＝電話06・6761・8055、FAX06・6761・3399

名古屋観世会「井筒」
観世喜之
（杉浦賢次氏撮影）

名古屋観世会「井筒」
観世喜之
（杉浦賢次氏撮影）

名古屋観世会「佐渡狐」
左より奥津健太郎、松田高義、野村又三郎
（杉浦賢次氏撮影）

名古屋観世会「天鼓・弄鼓之舞」
武田邦弘
（杉浦賢次氏撮影）

名古屋観世会「天鼓・弄鼓之舞」
武田邦弘
（杉浦賢次氏撮影）

能樂の友

発行　能楽の友社
名古屋市千種区千種２丁目18－18
（郵便番号　464-0858）
電　話（052）731－７９８４
ＦＡＸ（052）733－２８３７
振替口座　００８００－６－３６３９３

購読料　１年　１１００円
郵送の場合　１年　１８００円
一　部　１００円

ＮＨＫ放送予定（平成25年３～４月）

◆ＮＨＫ－ＦＭラジオ能楽鑑賞（日曜日６時～６時55分）

３月31日　狂言「鈍太郎」（和泉流）
　シテ　三宅右近
　狂言「昆布売」（和泉流）
　シテ　石田幸雄
４月７日　素謡「隅田川」（観世流）
　シテ　梅若万三郎、ワキ　工藤和哉
４月14日　素謡「唐　船」（宝生流）
　シテ　金井雄資
４月21日　素謡「巴」（喜多流）
　シテ　内田安信、ワキ　内田成信
４月28日　素謡「邯　鄲」（金春流）　シテ　本田光洋
　部分「百　萬」

演能カレンダー

◆名古屋能楽堂◆

（TEL 052－231－0088）

［３月］
23日(土)　さわってみよう能の世界　（要整理券）
24日(日)　郁諷会大会　（番組①面）（無料）
［４月］
６日(土)　なごや堀川狂言会　（内容④面）（完売）
　－堀川を清流に！－
　第１回11時　第２回14時30分
７日(日)　第35回邦謡会　（番組②面）（有料）
20日(土)　梅若吉之丞三回忌
　名古屋能楽公演　（番組②面）（有料）

「世阿弥生誕650年」
－今、世阿弥を観る－
平成25年度　名古屋能楽堂定例公演

名古屋市文化振興事業団（名古屋能楽堂）、能楽協会名古屋支部主催の平成25年度「名古屋能楽堂定例公演」は、恒例のように今年六月一日公演から明年三月一日まで七回開催される。

今年は能の大成者・世阿弥の生誕から六五〇年、世阿弥が作り出した能作品の数々は、六百年以上の時を経てもなお、観る者の心を動かし続けている。これに因んで平成25年度の定例公演は「世阿弥生誕六五〇年」－今、世阿弥を観る－をテーマに、世阿弥ゆかりの作品を上演、作品を通して、役者であり、能作者であり、理論家でもあった偉大な世阿弥の世界に触れる。公演日程は次のとおり。

◇６月公演　６月１日(土)午後２時始
　能「砧」（喜多流）長田驍、狂言「伊文字」（和泉流）松田高義
▽７月公演　７月６日(土)市民能楽セミナー　午後２時始
　能「野守」（観世流）梅田嘉宏、狂言「宝の笠」（和泉流）今枝郁雄
▽９月公演　９月１日(日)能楽普及公演　第１部午前10時始
　能「弓八幡」（観世流）古橋正邦、能「通小町」（宝生流）玉井博祐、狂言「三人長者」（和泉流）野村又三郎
　第２部　午後２時始
　能「敦盛」（観世流）武田大志
　能「鵺」（喜多流）長田郷、狂言「入間川」（和泉流）佐藤友彦、舞囃子「松風」（金剛流）熊谷眞知子
▽10月公演　10月18日(金)午後６時30分始
　能「恋重荷」（観世流）久田勘鷗、狂言「若和布」（和泉流）佐藤融
▽12月特別公演　12月１日(日)
　能「百萬」（宝生流）衣斐愛、能「融」（観世流）八神孝充、狂言「懐中聟」（和泉流）鹿島俊裕、舞囃子「清経」（金剛流）加藤かおる
▽正月特別公演　１月３日(金)
　能「翁」（観世流）久田勘鷗、三番叟・井上松次郎、能「高砂」（観世流）清沢一政、狂言「三本柱」（和泉流）大野弘之
▽３月公演　３月１日(土)
　能「花筐」（宝生流）衣斐正宜、狂言「秀句傘」（和泉流）野村又三郎

問い合わせは名古屋能楽堂（TEL052・231・0088）

名古屋市芸術特賞
狂言方　佐藤友彦氏受賞

名古屋市では、平成二十四年度名古屋市芸術賞の受賞者をこのほど発表、能楽関係では、伝統芸能（狂言）として和泉流狂言方・佐藤友彦氏が芸術特賞を受賞した。

「芸術特賞」は、長年にわたり優れた芸術創造活動を行い、かつ、近年における活動が顕著で、名古屋の芸術文化振興に大きな功績のあった方に贈られる賞で、狂言方では、平成十八年度に井上菊次郎氏が受賞されている。

・受賞者　佐藤友彦氏

昭和17（一九四二）年生まれ。幼少時より故佐藤秀雄、三世井上菊次郎に師事する。昭和25（一九五〇）年、７歳にて「土蜘蛛」の間狂言・小アド役で初舞台を務め、昭和39（一九六四年）、大学在学中に能楽協会に入会。

昭和42（一九六七）年、「三番叟」を披き、昭和46（一九七一）年より名演会館を会場とした「名古屋狂言小劇場」を主宰し、ホール狂言の先駆けとなった。

昭和52（一九七七）年、これまでの舞台活動の功績が認められ、名古屋芸術奨励賞を受賞したほか、昭和61（一九八六）年には重要無形文化財総合指定保持者の認定を受け日本能楽会に入会した。

平成２（一九九〇）年、「花子」を披き、同年、狂言画の第一回個展を開催、また平成４（一九九二）年より井上祐一（四世井上菊次郎）とともに「狂言・鳳の会」を結成し、平成21（二〇〇九）年までの18年間で53回の定期公演を開催している。また新作狂言なども手がけ、「お用の尼」は平成10（一九九八）年に国立能楽堂の企画公演、芸術祭主催公演としても上演された。

現在も、能狂言の舞台活動にとどまらず、オペラや朗読劇の演出、狂言史や狂言台本の研究など幅広い活動を続けているほか大学等の講師をつとめ、狂言の普及、後継者の育成活動を活発に展開している。

能「巴」、狂言「金岡」
5月11日　豊田市能楽堂〃ふじ能〃

豊田市能楽堂主催の「ふじ能」は五月十一日(土)、喜多流能「巴」（シテ狩野了一）、和泉流狂言「金岡」（野村万蔵）を上演する。午後二時開演。

能組は次のとおり。

狂言「金岡」シテ金岡・野村万蔵、アド妻・野村万禄、地謡・野村太一郎、山下浩一郎、吉住講、炭光太郎、笛・大野誠、小鼓・後藤嘉津幸、大鼓・河村眞之介、後見・野村扇丞

能「巴」前シテ里の女・後シテ巴御前の霊・狩野了一、ワキ飯富雅介、ワキツレ椙元正樹、橋本宰、アヒ・野村太一郎、笛・大野誠、小鼓・後藤嘉津幸、大鼓・河村眞之介、後見・長田驍、高林呻二、地謡・中村邦生、友枝雄人、金子敬一郎、内田成信、大島輝久、栗谷浩之、佐々木多門、友枝眞也

入場料／全席指定、正面席五〇〇〇円、脇・中正面席三五〇〇円、問い合わせ、チケット申込み豊田市コンサートホール・能楽堂事務室（豊田参合館８階）電話0565・35・8200、インターネット予約 http://www.tcm.gr.jp/、チケットぴあ（TEL0570・02・9999　Pコード426・804）

ふじ能「巴」シテ狩野了一氏による事前講座が四月二十日(土)午後一時半から豊田市能楽堂で開催。

郁諷会大会

三月二十四日（日）開場午前十一時
名古屋能楽堂

午前十一半時始
こども能楽教室おけいこ発表
指導　筧　鐃一　前野　郁子

しかいなみ　飯塚比呂人
ただたのめ　飯塚友恵　荻野　淳
はるばるきぬる　伊藤　暁　筧　悠
つきかいしょうに　伊藤蓮　陽華　佩大
はなさかば　伊藤真希子　匠　三矢水谷
加古寛明　木立　哲世
金田　瞹生　木下　芽桜　渚由
大下　権田　菰田心那　六鹿
日下　眞侑　鈴木未瑠　鳳斗
古都帆　鈴木梓美　吉田瑛音
日央　鈴木也　希音
乎心　快也　吉田　顔七
翔琉　爽　由原　怜音
高橋　鈴木　米田　篤史
長田　蓮侑　米田　敬史
花輪　奏世
太田みずき　俑真

一口謡
たちいでてみねのくも　六鹿　芽桜

仕舞
ししにはもんじゅや　大下日央
はつだいりうおおは　大下都帆　六鹿　渚由
はるがすみ　大下乎心　鈴木梓美　権田　未瑠
あずまあそびの　菰田鳳斗　荻野　斗樹
たかさごや　木下心那

囃子　大鼓　筧　倪大
小鼓　長田　奏世

鼓けいこ

舞囃子
吉野天人　伊藤真希子　河村眞之介　加藤　洋輝　後藤孝一郎　大野　誠

開演十二時半
郁諷会番組

番外仕舞
邯鄲　樂アト　前野　郁子

素謡
嵐山　中野　裕子
杜若　熊谷　晃子　杉野かよ子
小島　澄江　片山　明美

舞囃子
養老　志津　明子　河村眞之介　加藤　洋輝
半蔀　佐治　光幸　後藤孝一郎　大野　誠
河村眞之介
後藤孝一郎
大野　誠

能
羽衣　河崎喜代子
仕舞
杉江　元　河村眞之介　加藤　洋輝
後藤孝一郎　大野　誠

通小町　伊藤　明美
素謡
梅　吉田富喜子　志津　明子

舞囃子
田村　中野　裕子　河村眞之介
桜川　熊谷　晃子　後藤孝一郎
河村眞之介
後藤孝一郎

素謡
昭君　伊藤　裕貴　大野　誠
佐治　光幸　河村眞之介
濱田　国松　後藤孝一郎　大野　誠

番外仕舞
屋島　久田　勘鷗
天鼓　上田　貴弘

附祝言

主催　郁諷会　前野郁子

終了五時頃
入場無料
お誘い合せご来場下さい

先代野村又三郎七回忌
狂言やるまい会追善
5月25日　名古屋能楽堂

第56回狂言やるまい会名古屋公演は、先代野村又三郎七回忌追善として、きたる五月二十五日（土）名古屋能楽堂で開催される。午後一時三十分開演。

手向けの曲として、子息・信朗君が「魚説法」又三郎師は師父が好んだ「法師ヶ母」を勤め、人間国宝の野村萬、万作両師の来演を得て「鷺」「圖罪人」の狂言四番立ての追善公演。十四世野村又三郎は「今回で第56回を数える狂言やるまい会ですが、本年は先代野村又三郎の七回忌に当たり、野村萬、野村万作両師のご来演を賜り追善公演を開催させて頂く運びになりました　何かとお忙しい時期とは存じますが、是非ともご高覧を賜りたい」と案内している。

入場料・A券前売六〇〇〇円（当日七〇〇〇円）正面指定席B券前売四五〇〇円（当日五五〇〇円）正面上手、脇正面・中正面指定席）学生前売三〇〇〇円。

野村事務所＝電090・8323・3210

電子チケットぴあ（Pコード427・061）TEL0570・02・9999

狂言やるまい会名古屋公演

■追善番組■

狂言　魚説法　新発意　野村　信朗　檀家　奥津健一郎

狂言　法師ヶ母　男　野村又三郎　妻　松田　高義

狂言　鷺　何某　野村　万作　飼い主　高野　和憲

素囃子　酌之舞　大鼓　河村眞之介　小鼓　後藤嘉津幸　太鼓　加藤　洋輝　笛　竹市　学

狂言　圖罪人　太郎冠者　野村　萬蔵　主　野村　万蔵　近所の者　野村　扇丞　井上松次郎　佐藤　融　奥津健太郎　野口　隆行

（終演予定　午後三時半頃）

重要無形文化財　一色の能
地域あげて伝統の保存・継承

南北朝の時期以来の伊勢能楽の歴史を受けついで、「一色町能楽保存会」は、ことし法政大学による「観世寿夫記念法政大学能楽賞」の一環として「催花賞」を受賞、その活動が注目されているが、このほど無形文化民俗文化財に指定を受け、その活動が顕彰された。ここに「一色の能」を解説する。（「一色神社奉納能」番組の解説より）

「一色の能」

遠い昔から神宮の神領であった神三郡の地に、三つの猿楽の座があった。毎年、年頭には、それぞれの各大夫が神宮に参拝し祈祷祝賀の神楽・翁を演じたという。そのひとつ和屋座（のちに和谷と改める）は、室町時代末期に保護を受けていた国司北畠氏が滅ぶに及んで、神宮近くの一色の里に移り住むことになった。

頃を同じくして、主家滅亡のため守護不入の安全を求め縁故を頼って、この地に入った三十六人の北畠家臣集団があった。

当時、村は戦乱の後をうけて疲弊し治安は乱れがちであったので、村人達は快よくこれを受け入れ、良識を信頼して村政の一切を任せたのである。このため、これらの人は結衆を組織して事に当たり、よく村を治めたという。和谷座の能楽は、この知識人たちの趣味に合うものであった。結衆達は特に神社経営に力を注ぎ、従来、楠を神樹として小さな祠を建て、産土神としていたのを新しく社殿を造営し、北畠家ゆかりの四座を合祀したのである。

而して、その祭礼に神事と能を組み合わせて村民の関心を呼び起し、娯楽の少ない当時の生活にうるおいを添えたのである。即ち神祭を正月十一日、奉納能を正月二十一日と定め、その後、日付の変更はあったものの、毎年欠かすことなく約五〇〇年続いて現在に至っているのである。

ちなみに明治中期まで、十八才から二十七才までの男子は若衆という集団に入ることになっており、新入りの十八才は入会のしるしとして、日頃練習を重ねた謡曲高砂の四海波を謡い、各自二番宛仕舞を披露する習慣になっていたということである。

その後、時の流れに伴う変遷で、昔を今になすよしもがなの嘆きはあるものの、一色能は昭和三十三年に伊勢市無形民俗文化財に、神楽が三重県無形民俗文化財に、能面、能装束、小道具類、鏡板類が平成六年に三重県有形文化財に、翁が平成七年に国の選択無形民俗文化財に指定された。そして保存会は平成九年十一月に文部大臣より地域文化功労者表彰を受賞、同二十五年一月法政大学催花賞受賞、益々以て地域の文化の高揚と活性化のため精進している。

幸流小鼓方　人間国宝
曾和博朗お誕生日会
4月27日　金剛能楽堂

幸流小鼓　人間国宝の曾和博朗氏の「お誕生日会」演能が四月二十七日（土）京都金剛能楽堂で催される。

主催／まご曾和尚靖氏による曾和尚靖自主企画、《囃す》シリーズで、演能は、舞囃子「乱・広蓋ノ式」（金剛永謹）狂言「東方朔」（茂山千五郎）能「枕慈童」（金剛龍謹）独調など。

曾和博朗氏は大正十四年四月二十七日生まれ、ことし満八十八歳を迎える。平成十年重要無形文化財個人指定（人間国宝）、勲四等旭日小綬章（平成十二年）催花賞（平成七年）京都府文化賞特別功労賞（平成十九年）受賞。

演能は午後二時始曲、座席券五〇〇〇円。※みなさまのご長命を願うおみやげ付き

お問い合わせ＝曾和一門会事務局、電話090・2013・1222　FAX075・451・8170

なごや堀川　狂言会
―堀川を清流に―

四月六日（土）午前十一時・午後二時半
名古屋能楽堂

名古屋開府四百年記念狂言　轍

古典狂言　入間川

堀川新作狂言　冥加さらえ

※番組・内容④面紹介

主催　名古屋堀川ライオインズクラブ

第35回　邦謡会

四月七日（日）午後一時始
名古屋能楽堂

番組

解説　本日の能について　村瀬和子

舞囃子　西行桜　梅田　邦久　河村総一郎　幸清次郎　上田　悟　藤田六郎兵衛

狂言　花争　シテ　井上松次郎　アド　佐藤　融　後見　鹿島　俊裕

仕舞　梅屋島　片山　伸吾　片山　幽雪　地謡　清沢　一政　分林　道治　梅田　邦久　大江　信行

弱法師　クセ　片山九郎右衛門

能　道成寺　梅田　嘉宏　飯富　雅介　原　大橋本　宰　河村眞之介　船戸　昭弘　上田　慎也　大野　誠

間　野村又三郎　松田　高義

後見　片山　伸吾　片山　幽雪　河村　博重　地謡　吉沢　旭　本田　勲　須部　甫　高橋　暸一　祖父江修一　梅田　邦久　片山九郎右衛門　分林　道治

附祝言

（終演午後五時頃）

主催　邦謡会　名古屋市昭和区台町2―16―5　TEL052・841・4632

［入場料］（全館指定席）五〇〇〇円

［前売券取扱所］名古屋能楽堂　TEL052・231・0088　FAX052・231・8756▽邦謡会TEL・FAX052・841・4632▽市内プレイガイド

梅若吉之丞三回忌追善
名古屋能楽公演

四月二十日（土）午後一時始
名古屋能楽堂

（十二時三十分より）

解説　椙山女学園　飯塚恵理人

（午後一時）能組

仕舞　経正　梅若　秀成　地謡　梅若雄一郎　池内光之助　梅若猶義　梅若基徳

舞囃子　遊行柳　梅若　修一　大鼓　河村総一郎　小鼓　後藤孝一郎　太鼓　加藤　洋輝　笛　鹿取　希世　地謡　小川　晴子　梅若　雅一　梅若基徳　池内光之助　井戸　和男

仕舞　敦盛　クセ　小松　勝憲　邯鄲　井戸　良祐　地謡　梅若雄一郎　池内光之助　井戸　和男　砧　キリ　岡田　晃一　梅若　善久

舞囃子　海士　梅若　善高　大鼓　河村総一郎　小鼓　後藤孝一郎　太鼓　加藤　洋輝　笛　鹿取　希世　地謡　立花香寿子　井戸　良祐　梅若　雅一　岡田　晃一　梅若　善久

狂言　悪太郎　悪太郎　野村又三郎　伯父　松田　高義　僧　井上松次郎　後見　伴野　俊彦

能　隅田川　梅若丸　梅若　利成　狂女　梅若　猶義　渡守　高安　勝久　旅人　椙元　正樹　河村眞之介　後藤嘉津幸　鹿取　希世

後見　梅若　基徳　梅若　修一　地謡　小松　勝憲　立花香寿子　井戸　良祐　梅若　雅一　梅若　善久　井戸　和男　梅若　善高　岡田　晃一

［チケット料金］全自由席五〇〇〇円

申込み　出演楽師、名古屋能楽堂事務局

連絡所　桑名市西別所1061―5　小松勝憲方　電話0594・23・4582

主催　名古屋梅猶会

当地の各流儀・流派・結社 社中の消息を辿る ㊷

拾壱　「野村四郎　名古屋公演」①

竹尾　邦太郎

前置き

昭和五八年（一九八三）一月五日、観世流・野村四郎主宰の名古屋観生会が初回を栄能舞台で迎える。

素謡・仕舞各七番のさゝやかな会で社中の同人は一人が各々二番を務め、世話人の一人・小嶋克子も素謡「東北」シテと仕舞「雲林院」を。小嶋はこれ以前、当地観世流の古老で掬水会を主宰する柴田初太郎（明22－昭62）に就いてをり、昭和五三年一〇月七日、師の卒寿記念の会では仕舞「蝉丸」を務め、翌五四年一一月二四日、掬水会秋季大会での仕舞「杜若」が記録に残るが以後、高齢の師の許を離れてゐる。

さて、観生会初回の翌五九年四月二一日、「野村四郎　名古屋公演」が中日新聞社・中部日本放送の主催で発足する。初回の番組案内リーフレットで主催は新聞が先で放送が後だが活字は放送の方が太字、二回以後は放送・新聞の順に改まり、活字の大きさは第九回から終回まで同じになる。昭和五九年は中日新聞社が単独で主催してゐた「中日五流能」が前年第二八回で終回になり、改組され「中日名匠鑑賞能」が初回を迎えた年、放送と新聞、催能に関して両者の立場が窺えよう。

大企業、就中、新聞・放送いわゆるマスコミが文化に果す役割・影響の大は論を待たないが、昭和五〇年一二月、中部日本放送（CBC）代表取締役会長に就いた小嶋源作（明38－平1）は『CBCとともに　小嶋源作遺稿集』の中「交響楽団結成を夢みる」で洋の文化に夢を馳せれば、和の文化に夢を寄せる小嶋源作夫人克子の肝煎りであったろう「野村四郎　名古屋公演」は正夢となり実現する。夫人の熱心に夫君も応え、日和町の自邸屋敷内の別棟には立派な稽古舞台が出来た。

なお、能と直接関係はないが、「交響楽団結成を夢みる」は当時の夢の中味、内情を活写して面白く有益であると思うので全文を次に転載する。

交響楽団結成を夢みる

ラジオ放送開始当時は、殆どの番組を自社で制作しなければならなかったので、その制作に必要な伴奏楽団を急遽編成しなければならなかった。私は芥川也寸志さんを東京の私宅に訪ねて、楽団の編成を依頼し団員の公募を行ったのであるが、適格者が得られず、折柄名宝バンドの解散があったので、その一部を吸収して十三名をもって一応形を整えた。

しかし当時のレコード会社の専属歌手は十七名編成の編曲楽譜を使っていたので、必要の都度進駐軍キャンプのバンドに応援を求めねばならなかった。そしてこの状態は昭和三十二年まで続き、同年八月になってようやく二十九名の団員を得て、何とかCBC管弦楽団らしくなったが、斯うした悩みを解消すると同時に、大都市名古屋に本格的な交響楽団を作りたいという夢が、私の頭の中に芽生えてきた。

もともと名古屋には交響楽団があったのである。当初松坂屋音楽隊といって松坂屋が専属としていたのだが、これが松坂屋オーケストラとなって早川弥左衛門が指揮をとり、全国的にも知られ、その後に東京に進出して、中央交響楽団、東京交響楽団を経て現在の東京フィルハーモニー交響楽団となった歴史があり、私はその歴史をたどって、もう一度名古屋に本格的な交響楽団結成を考えるに至ったわけである。私は昭和二十七、八年ころから東京の近衛秀麿主宰の近衛交響楽団の理事をしていて、楽団運営について若干の知識を得た関係もあるので、熱を入れるようになったのかも知れない。

当時名古屋には名古屋フィルハーモニー（現名フィル）、CK管弦楽団、それにCBC管弦楽団の三楽団があってそれらしき体をなしていたのだが、名フィルといっても三十名ぐらいの正式団員しかおらず、CKが三十五名見当だったから誠にお粗末なものであった。

そこで名フィルを中心に三楽団を統合して、新しい交響楽団を編成し、CBCとCKは必要に応じて団員を借り、これにそれぞれの楽団名をつけて放送すれば、合理的に運用出来るのではないかと考えたわけである。名フィルは市から補助を得て運営されていたから、私は市役所に当時社会教育課長であった加藤善三さんを訪ねた。名フィルについては、市も経営的に持て余し気味であったから加藤さんも大いに乗り気になり、自ら進んでCKとの交渉を買って出られた。

私の構想では三者一体となれば最低八十五名以上の編成が出来、徐々に増員して行けば相当強力なものになるだろうと胸踊らせたのであるが、加藤善三さんの熱心にもかかわらずCKとの交渉が難航を極めた。CKの主張は、NHKは如何なる場合もNHK独自のものを持たなければならぬ、他からの借りものはNHKの方針に反する、ということであった。これに対して私は、地域文化の向上発展には、少々の犠牲を払ってもこれに協力するのが文化的事業に携わるものの義務ではないか、との意見を加藤さんに述べて交渉を続けてもらった。しかしこれは徒労に終わった。NHKは地域的文化ということよりも〝NHK〟ということしか頭にないことが明白になったのである。

そこで私は今度は方向を変えて、東京でCBC独自の交響楽団を持つことを考えた。というのは、そのころCBCは現在と違って、中央から見れば文字通り田舎の一ステーションに過ぎなかった。中央でのCBCの社会的声価を高めその健在を示すには、CBCの呼称をつけた楽団活動が最も手っ取り早い方法ではないかと思ったわけである。そこで東京における既成の楽団について調査し、

CBCオーケストラシリーズ第一弾
スイス・ロマンド交響楽団の指揮者アンセルメと懇談（昭和43年７月）
小嶋源作・克子夫妻とエルネスト・アンセルメ
『遺稿集』より転載

CBCとしては、到底その負担に耐えるところではなかった。交響楽団は人数が多いから、人数の少ない四重奏団でもと、今度は当時のプロムジカ弦楽四重奏団に的を向けた。

そのころNHKから音楽課長として入社して来た初見登満寿君（定年退職）に依頼し、CBC弦楽四重奏団と名称を改めて、CBCに経営を任せてくれないかと交渉したが、受け入れられなかった。それではと、プロムジカの上にCBCをつけ、CBCプロムジカ弦楽四重奏団ではどうかと持ちかけたが、最終的にはこれも交渉成立せず不調に終わった。

CBCの社会的声価を高めるための中央における楽団活動計画は、以上のように一場の夢と消えてしまったが、私の頭の中には今なおその残像をとどめ、時にはそれが色鮮やかに甦ることがある。

（昭和五十六年一月）

閑話休題

「野村四郎　名古屋公演」

昭和五九年四月二一日・初回は能「隅田川」を観る会。番組に先立ち名古屋大学山下宏明文学部教授の「隅田川」について、の講演あと、仕舞「笠之段」野村四郎、狂言「縄なひ」野村又三郎・佐藤友彦・井上礼之助、能「隅田川」野村四郎・鵜沢真治（子方）森茂好・森常好・藤田六郎兵衛・福井啓次郎・河村総一郎・藤井徳三（地頭）木月孚行（後見）。

昭和六〇年四月一三日・第二回能「船弁慶・重前後之替・船唄」を観る会。名古屋大学山下宏明文学部教授の「船弁慶」について、の解説あと、仕舞「通小町」野村四郎、狂言「千鳥」野村又四郎・能村英丘・井上礼之助、能「船弁慶・重前後之替・船唄」野村四郎・鵜沢真治（子方）宝生閑・殿田謙吉・森常好・野村万之丞・藤田六郎兵衛・福井啓次郎・柿原崇志・観世元信・藤井徳三（地頭）観世恭秀（後見）。

昭和六一年四月二六日・第三回能「俊寛」を観る会。岐阜市立女子短期大学辻宏一教授の「俊寛」について、の解説あと、仕舞三番「放下僧・小歌」木月孚行「玉之段」野村四郎「山姥キリ」藤井徳三、狂言「鈍太郎」野村又三郎・井上礼之助・佐藤友彦、能「俊寛」野村四郎・武田邦弘（康頼）久田徹二（成経）福王茂十郎・野村又三郎・藤田六郎兵衛・福井啓次郎・河村総一郎・藤井徳三（地頭）山中義滋（後見）。

昭和六二年五月九日・第四回野村四郎春の曲独演二番能。能「羽衣・彩色之伝」野村四郎・西村欽也・飯冨雅介・藤田六郎兵衛・福井啓次郎・筧鉱一・三島元太郎・観世清和（地頭）大槻文藏（後見）、狂言「萩大名」野村又三郎・井上礼之助・野村信行、仕舞三番「邯鄲」観世暁夫「井筒」大槻文藏「鞍馬天狗」観世清和、能「藤戸・蹉蛇之伝」野村四郎・福王茂十郎・山本清・塩田重喜・野村又三郎・藤田六郎兵衛・後藤孝一郎・河村総一郎・大槻文藏（地頭）大江将董（後見）。

昭和六三年七月九日・第五回能「望月・古式」を観る会。名古屋商科大学那谷俊郎講師による「望月」とその周辺、と題する講演あと、仕舞四番「放下僧・小歌」武田邦弘「江口キリ」大槻文藏「鵜之段」藤井徳三「山姥キリ」山中義滋、狂言「宗論」野村万之丞（浄土僧）野村万作（法華僧）野村又三郎、能「望月・古式」野村四郎・梅田邦久・山中雅志（子方）西村欽也・野村万之介・藤田六郎兵衛・福井啓次郎・河村総一郎・三島元太郎・藤井徳三（地頭）大槻文藏（後見）。

――以下次号――

◆冬の舞台から◆

「豊田市能楽堂　狂言づくし」と「梅猶会大阪能楽公演」「第一一回狂言三の会」

竹尾邦太郎

「鬮罪人」

祇園祭の当屋（世話役）の主（アド正邦）、太郎冠者（シテ千五郎）に町内の衆（立衆頭・蕭、以下立衆・茂・龍也・実・守之）を集めさせて祭に曳く山車の趣向に就いて鳩首凝議。出させる案は何れも陳腐、新味に欠け、太郎冠者が出しゃばるとその都度、主は叱責するが、常でもとかく物事に差し出たがる太郎冠者、主が予め釘を刺して置いても事が祭となれば暴走。それを抑止出来ない主は己れの不甲斐なさの悔しさ、遣る方ない憤懣は皆の手前もあり鬱積するばかり。一方、太郎冠者は主に睨まれてこそ〳〵座を退散はしても、町内の衆を味方に恃もうなる人を喰った小狡さで徐々にマイ・ペースへもってゆく。千五郎の巧味。

結局、罪人が鬼に責めたてられるを囃子物で、の太郎冠者案が採用されて不満の主、鬮で配役が決められる不安は無気味にも。一つ残った鬮を立衆頭が太郎冠者に勧めれば、主は断固反対、当屋の特典一人増にも「人が要らぬ人を雇います」と気色ばむが、外から雇うなどとは、と窘められる。遂にはジョーカーを引いたと察して主、三度目の正直、を持ち出して取り直しを要求するが、又しても太郎冠者、「祇園会の鬮を取り直した例は御座らぬ」と唱える異。立稽古となって直面ではびく〳〵もの、太郎冠者も本稽古で面をつければ、こゝぞとばかりの賣メ（写真）、父子共演、阿吽の呼吸もピタリと互いの心理描写も克明に見応え充分だった。（47分）

豊田市能楽堂・狂言づくし「鬮罪人」
左より茂山千五郎、茂山正邦
（杉浦賢次氏撮影）

「居杭」

居杭（シテ七五三）が日頃目をかけてくれる何某（アド正美）を訪ねると、いつも頭を張られるのでこは定の目」とも。勝負・占いなどで初めの一、二回はあてにならぬ、三回目が確実である、の謂。（広辞苑）

豊田市能楽堂・狂言づくし「居杭」
左より茂山逸平、茂山七五三、網谷正美
（杉浦賢次氏撮影）

これが煩さく、清水観音に籠れば授かる頭巾、張られる時かぶれの謎と察し、「頭巾の奇特をみやうと存ずる」とかぶれば、どうやら何某には姿が見えないと分り（写真）試すうち、面白くなり姿を消せば、通りがかりの算置（易者、

（④面へつづく）

③面よりつづき）

次アド逸平）を招き入れ居杭の所在を判じさせる何某（写真）。

何某が、居杭を張るのは「憎うて張るでない。可愛さの余りぢや」と言わしめてゐるので、如何に巧者の七五三とて素直に童の無邪気な悪戯心を演じるのは無理では、と思わせる。何某と算置、大柄な両者が居杭の悪戯で向きになり、口角泡を飛ばさんばかりの口論、事情分らぬまゝ互いに罵り合うところの緊迫、流石だった。（26分）

「豆腐小僧」　茂山千五郎

家の狂言はお豆腐狂言を標榜するが、「よい豆腐になることに努力せよ」の家訓は偏に親しみ易さ。高名な作家・京極夏彦の新作狂言「豆腐小僧」は苦汁（にがり）の関係か曲として良くこなれていない印象、私の理解を越えてをり残念。能では現行曲でも詞章がプリントされたものが渡るが、狂言でも新作のときは是非それが欲しい。著作権に抵触して駄目なのだろうか、舞台写真だけを載せる。

「豆腐はもう見飽きた」と大名・太郎冠者・次郎冠者の三者で笑ヒ留メにしたのが記憶に残る唯一。（32分・11月24日・豊田市能楽堂狂言づくし）

「蝉丸・替之型」　小書で萩藁屋は笛前スミ掛ケて。蝉丸（善高）は面蝉丸・喝食鬘・白綾着付・紫指貫（込大口）単狩衣（込水衣）

豊田市能楽堂・狂言づくし「居杭」
左より茂山七五三、網谷正美
（杉浦賢次氏撮影）

姿、面は終始クモリがち、清貫（ワキ知登）と興（ワキツレ正彦・雅人）の道行あと蝉丸は床几にかゝり清貫と問答・掛合。盲目の皇子・蝉丸を捨てる帝の真意計り兼ねる清貫に気丈にも蝉丸、大局に立つ父帝の深慮ゆえの慈悲と。床几を下り物着、蝉丸は狩衣を脱ぎ水衣姿に角帽子をつけられ僧形に、清貫は杖と笠を持ち出し丁重に両手に捧げスミへ、下居平伏し蝉丸と掛合に。清貫から笠を受け取り、〽笠と云ふ物よなう、と沁々見詰める蝉丸、次いで杖も。こゝへきて冷静気丈だった蝉丸、父帝には〽捨てられて、の現実を認識、微かに�面に抑えた哀感の深さが。盲目の蝉丸ひとり残す痛ましさにシヲル清貫〽尽きぬ涙を、と立って行く気配に蝉丸、杖を取って立つと清貫を追うかに前へ、笠を手放し安坐双シヲリは一気に噴き出る寂しさ、心細さである。折から博雅三位（アヒ隆司）、風折烏帽子・厚板着付・白大口・紺地長絹の姿、シヲリのまゝ未だ頽れてゐる蝉丸を介添して立たせ、萩藁屋へ誘い、杖と笠を丁寧に中へ収め、「先づ御暇申し候」と立ち、戸を閉め退くと、一声（傳之輔・晧祐・哲也）で逆髪（善久）の出。

面増・長鬘・襟白二・白地縫箔着付・緋長袴の裳着胴姿、狂と笹を持つ。〽童共は何を笑ふぞ、と幕へ呼び掛ける姿に純な、無邪気な心根が感じられ、カケリも童心のスキップを踏む心ではなかろうか。〽（花の都）を立ち出でて、と踏む据拍子、道行は〽今は誰をか、と橋懸へ、〽関の此方と思ひしに、と二ノ松へ、〽後になるや音羽山の、と一ノ松に戻ると、〽名残り惜しの都や、と遠く脇柱の方へ見遣る風情には一入の孤愁が。

〽狂女なれど心は清瀧川と、踏む六ツ拍子には己れの本性を里人に知らしめ得ないもどかしさ。〽水も走井の、と勾欄に寄って水鏡を見込み、〽げに逆髪の、と笹持つ右手に左手も上げて翳し、見入るとうつつなの己が姿にシヲルうち、琵琶の音を聞きつける心は音を頼りに舞台へ入る逆髪、常座で佇立、聞き入る心。〽藁屋の雨の足音もせで、と静かに〽立ち寄り聞き居たり、とスミへ来ると笹に左手添えるのが如何にも女性の慎ましやか。

姉弟出合いの場は、互いに左手を触れ合うだけなのが却って万感胸に迫る想いを。姉弟シヲルとクリ地（光之助・和男。雅一ら）のうちに逆髪はスミへ戻り下居、蝉丸はそのまゝ正中下居する。クセは居グセ、〽人臣にだに、辺りで地が怪しく少々残念だが、〽音に類へて琵琶の音を、と懐中から扇を取り出し琵琶を弾ずる型を、〽月にも疎く、で月ノ扇する盲目の蝉丸、その姿を見遣り、〽藁屋の襲いかゝらんばかりの勢いに迫れば、「はああ」と這い蹲う太郎冠者。稚気のある主従関係が微笑ましくも思われる味のある舞台だった。（30分）

「玄象・窕」　渡唐して琵琶の奥儀を究めんと従者（ワキ和幸ワキツレ雅一・和夫）を伴いその道の名手に藤原師長（重ツレ基徳）、西下の途次、須磨で曰く有りげな汐汲老夫婦（シテ修一ツレ良祐）と出遇い止宿。そこでワキの勧めに師長、一曲を奏でれば、折から板庇を打つ村雨に、師長とシテそれ〴〵が採る処置に名手は名手を知るの謂、師長に請われて琵琶を奏でるシテに己れを恥じ、忍び出る師長。それを押し止めてシテとツレ、素姓を明かし渡唐を思い止まらせて消える。前場は、雨音消すのに苦をへさっと、葺くところ、扇を靡かせる様にする型を少し低く見たが、ワキとの問答から〽今こそ一調子になりて候へ、の自信たっぷりな口吻に説得力充分、常人には非ずを思わせ、品格を感じさせる。

師長ノ供人（アヒ隆平、士烏帽子・段戻斗目着付・括袴・掛素袍・小刀）、琵琶の名器に纏わるあれこれから村上天皇が龍神に持って来させた名器獅子丸が師長に授けられたこと立シャベリに退くと後場。

出端（訓義・舜一郎・芳昭・弘美）で出る村上天皇（シテ修一）、面中将・初冠（垂纓）淡灰色指貫・白地単狩衣の姿は颯爽と品よく、唐から渡った三面の琵琶のうち、龍宮へ取られた獅子丸を師長に奏でさせんとへ獅子丸持参仕れ、と幕へ呼び掛けると、早笛で龍神（子方・秀成）が琵琶を捧げて走り出て師長に渡すと、龍神は一ノ松後ろ勾欄に戻り、シテは達拝掛早舞。如何にも天皇の闊達は伸びやか爽快に舞上げると、〽獅子には文殊や、の地（猶義・晃一・善久ら）で立つ龍神が舞い出して右袖返シたまゝを、先立てシテも切地のうちに幕へ、師長が常座へ出て留メた。（1時間30分・12月2日・大槻能楽堂・梅猶会大阪能楽公演）

〝堀川を清流に！〟なごや堀川狂言会

4月6日（土）名古屋能楽堂

名古屋ライオンズクラブ主催、企画・製作／言葉の泉・狂言共同社により、《母なる川「堀川」を清流に》を合い言葉に「名古屋堀川狂言会」がきたる四月六日（土）名古屋能楽堂で午前、午後の二回にわたって開催される。

この催しは、作家、狂言師、撮影デザイナーを中心に、堀川を愛する市民が力を合わせ〝堀川再生〟をめざすプロジェクトで、中日新聞、名古屋市、名古屋市教育委員会、名古屋市文化振興事業団などが後援、瀬戸信用金庫が協賛、次の機関、団体が協力している。

愛知県立愛知工業高校、名古屋市立八熊小学校、清水小学校、大杉小学校、堀川文化を伝える会・堀川１０００人調査隊、清須越し４００年事業ネットワーク、東山ガーデン、喜多八、瑞祥山菊泉院、遊倶楽部ほか。

番組は次のとおり

◇名古屋開府４００年記念狂言

「轍」（わだち）

清州の太郎冠者　佐藤　友彦
肥後の石工頭　佐藤　融
安芸の土方頭　今枝　郁雄

◇古典狂言

「入間川」（いるまがわ）

大名　野村　萬斎
太郎冠者　高野　和憲
入間の何某　深田　博治

◇堀川新作狂言

「冥加さらえ」（みょうがさらえ）

河童　太郎　佐藤　融
おからねこ　井上松次郎
甘酒女　野村又三郎
龍神　野村　萬斎
小河童　一般募集の小学生

第一回上演　午前十一時開演
第二回上演　午後二時半開演
入場料（全席指定）＝完売
正面Ｓ　五〇〇〇円
脇正面Ａ　四五〇〇円
中正面Ｂ　四〇〇〇円

名古屋堀川ライオンズクラブ
電話０５２・２２２・２６８６
（午後１時～午後３時）
狂言共同社　電話０５２・８３４・８６０７又は０５２・９１１・８７８４

豊田市能楽堂・狂言づくし新作狂言「豆腐小僧」
左より茂山茂（太郎冠者）、茂山千三郎（豆腐小僧）、茂山正邦（大名）、島田洋海（次郎冠者）　（杉浦賢次氏撮影）

豊田市能楽堂・狂言づくし
新作狂言「豆腐小僧」茂山千三郎
（杉浦賢次氏撮影）

「抜殻」　「さても～～結構な頼うだ人ぢゃ」と使いの前に主（アド忠一郎）から振舞われた酒三献に上機嫌の太郎冠者（シテ隆司）、〽ざざんざあ、などと「謡いもって行かう」と出掛けたはよいが路上に酔臥。案の定、主が懲らしめに鬼の面をかぶせて置けば、酔い醒めの水が欲しいと泉へ来た太郎冠者、水鏡に映る己れの姿に仰天、パントマイムに確めるが鬼は余人に非ず己れ。戻って主に救いを求めるが峻拒され前途に絶望、泉に身を投げて、と飛び込む拍子に外れた面。主を呼び、「これに鬼の抜殻が」と見せると、太郎冠者の愚昧さに呆れ果てた主、その面をつけると「何の抜殻、いで食らはう」と襲いかゝる。

「蜂」　伊勢の地狂言に残る曲目。伊勢の馬瀬狂言は「江戸時代後期に名古屋の狂言師であった野村小三郎玉泉を、師匠として迎えたことから盛んになり整えられていった」と伊勢市教育委員会編・平成20年3月31日発行の『国の記録作成等の措置を講ずべき無形の民俗文化財　一色の翁舞　調査報告書』にある。遠祖の縁で当代野村又三郎が復曲、初演する。

喜楽斎（シテ又三郎）、襟紺・縞貝斗目着付・半袴・白紺赤段水衣垂折の姿、花見に勘四郎左衛門を誘うが不在で独り出掛け、一ノ松に清水寺へ着く態。右方に聞こえる謡の声、左方ではさんざめく踊りの気配に、それが見たいと木に登る心は勾欄に足を掛け、左手はシテ柱にしがみつく。右手をかざし踊りを見物するうち、踊りの振りを真似て足を踏み外し舞台へ転落し、正中辺へ蹲って安座、強く舌打ち二ツする。一ツ飲んでも独酌は面白くないか、瓢から傍の人に勧める態、「然る方から寝酒の遠来」と酒自慢は一つ謡おう、と〽……いざ～花を眺めん、の上機嫌。「や、花も酒が飲みたいと云うか」とワキ柱を桜木とみて酌に行き、飲ませると〽面白の花の都や、と能「放下僧」の小歌を謡い出し、〽東には祇園清水、と舞い出す。〽水車の輪の、と右に左にとくる～回り、〽茶臼は、と膝ついて挽く型から立つと、拍子踏みつゝ酔歩に舞い続け、〽うち治まりたる御代かな、と呵々大笑して舞上げると流石に疲れたか、「酔ふたり酔ふたり」と頭を正先に向けてごろりと横臥する。熟柿臭い顔の辺りでする蜂の唸り声（後見・健太郎に因るが、初めの一唸りはシテ自身だったか？）、頻りに手で追い払い起つと〽許せ～～、と走り込んだ。余り新味は感じられなかったが眼目は「放下僧」の小歌を謡い舞うところ、後見に蜂の唸り声をさせるのが味噌か。又三郎熱演だった。（11分）

「茄子」　住持（アド俊彦）の留守に新発意（甲シテ高義、乙アド隆行）が畑の茄子を盗むので、住持は両人に誓文を立てさせ出掛けるが、案の定してやられる。

主の留守中、太郎冠者と次郎冠者が示し合わせて悪さをする「附子」「樋の酒」と同工だが、この二曲が家にある砂糖や酒に手を出すだけに比べ、「茄子」は住持のこと、て新発意には誓文を立てさせ、結界（この場合は畑）に入れさせないので展開が少々複雑。

住持が留守となれば、「茄子を一寸してやって酒を飲まう」と横着にも甲、「酒を用意した」と甲の後をついて回る乙、畑に着くと甲の命で乙が甲を背負い畑へ入ると茄子を挽ぐ甲、「こうして採れば誓文を恐るゝことはない」と。成程甲は己れの足では入って居ない道理、それからは薪を集め、火を焚き、焼茄子を肴に、お定まりの酒宴に。興に任せ謡い舞う肴は就中、〽いたいけしたる物あり、と小舞謡「風車」を舞う甲、キリの〽はちこ弓、で乙の言「弓矢を番えたところは那須の与市を見る様ぢゃ」に「何ぢゃ、茄子、茄子、ハ、ハ、ハ」と呵々大笑が可笑しかった。高義、隆行、舞歌上々達者。（24分）

「浦島」　籠中の物としている野村又三郎家の「浦島」、今回も大亀に見立てた塗笠の進退の妙、見事。浦島と孫は健太郎・健一郎父子、息の合った微笑ましいところをみせ、亀ノ精は又三郎。（26分・12月9日・第11回狂言三の会）

能樂の友

発行　能楽の友社
名古屋市千種区千種２丁目18－18
（郵便番号　464-0858）
電　話（052）731－７９８４
ＦＡＸ（052）733－２８３７
振替口座　00800－6－36393

購読料　１年　１１００円
郵送の場合　１年　１８００円
一　部　１００円

ＮＨＫ放送予定（平成25年４～５月）

◆ＮＨＫ－ＦＭラジオ能楽鑑賞（日曜日６時～６時55分）

４月28日　素謡「邯鄲」（金春流）　シテ　本田　光洋
　　部分「百　萬」
５月５日　素謡「小袖曽我」（観世流）　シテ　角当　行雄
５月12日　素謡「求　塚」（宝世流）　シテ　近藤乾之助
５月19日　素謡「盛　久」（金剛流）　シテ　宇高　通成
５月26日（再放送）素謡「海　人」（喜多流）
　　シテ　出雲　康稚
　　（24年４月15日放送）

◆Ｅテレ
古典芸能への招待
４月28日(日)　21：00～23：00
　　能「求塚」（観世流）
　　観世　清和

演能カレンダー

◆名古屋能楽堂◆

（TEL 052－231－0088）

［４月］
20日(土)　梅若吉之丞三回忌追善
　　名古屋能楽公演　（有料）

［５月］
３日(金・祝)　豊水会春季大会　（番組①面）（無料）
５日(日)　第８回つぼみ会　（番組①面）（無料）
12日(日)　狂言　ござる乃座　（番組②面）（有料）
19日(日)　名古屋幽花会春季大会　（番組②面）（無料）
25日(土)　第56回狂言やるまい会名古屋公演
　　（先代野村又三郎七回忌追善）（番組②面）（有料）
26日(日)　名古屋観衛会　（番組②面）（無料）

能鑑賞の事前講座
主催者のワークショップ活発

観客のためのガイドとして、公演の事前講座〝ワークショップ〟が催され、能鑑賞の解説、手引として好評を博しているが、六月公演の能組について、名古屋宝生会名古屋能楽堂では次の日程でワークショップを開講する。

▽名古屋能楽堂６月定例公演の事前学習講座
日程／５月11日(土)午後２時～３時半
会場／名古屋能楽堂会議室
講師／椙山女学園大学教授・飯塚恵理人氏
受講料一般一〇〇〇円（６月公演チケット持参者五〇〇円）
締切／４月27日　申込み／名古屋市中区三の丸一－一－一　名古屋能楽堂　FAX052・231・8759

▽名古屋宝生会のワークショップ
日程／６月２日(日)午後２時～３時
会場／名古屋能楽堂・地下稽古室
参加費一〇〇〇円
演目／「俊寛」「大江山」第３回名古屋宝生会定式能の鑑賞に役立つ事前講座
本公演は６月16日（日）
能「俊寛」（シテ辰己満次郎）
能「大江山」（シテ和久荘太郎）
問い合わせ、申し込み　名古屋宝生会・衣斐正宜方
TEL／FAX　052・882・5600
参加費一〇〇〇円（会員券持参の方は無料）

平成24年度芸術選奨　文部科学大臣賞
観世清和氏が受賞

文化庁は、三月十二日、芸術の各分野で優れた実績をあげた個人に贈る２０１２年度芸術選奨の文部科学大臣賞の演劇部門において、能楽界からシテ方観世流・観世清和氏（観世流二十六世宗家）が受賞した。

授賞理由は（氏は三つの瞠目すべき能を主演。「定家」では流儀の記録に名称のみ残る特殊演出「袖神楽・露之紐解」を他の習事と共に復興、「江口」では至難な特殊演出「平調返」を最も整った形式で演じ、聖俗一体の光を放つ法悦境を格調高く表出。復曲「阿古屋松」では、世阿弥自筆本を自ら節付・型付を施し、「若さ」を渇仰する老木の精の妖しい嫉視を浮き彫りにした。以上のどれも、個人の芸力と集団の要たる統率力とに支えられた演劇的精華である）としている。

贈呈式は三月十八日、東京一ツ橋の如水会館で挙行された。

金剛流シテ方　廣田陞一氏逝去

シテ方金剛流・廣田陞一氏は、三月十日、腎盂癌のため逝去された。享年八十九、通夜は三月十三日、告別式は十四日に京都東山区の中央ブライトホールで執り行われた。喪主は長男・幸稔氏。

故廣田陞一氏は、大正十二年京都生まれ。昭和二十八年より弟・廣田泰三氏とともに廣田後援会を主催、京都新聞社謡曲仕舞教室を開設するなど能楽の発展に廣く力を尽くした。

重要無形文化財保持者（総合指定）昭和四十九年芸術最優秀賞、五十四年芸団協表彰、五十七年芸術祭優秀個人賞、平成元年京都新聞文化賞、五年京都市文化功労賞、七年京都府文化賞功労賞、八年双光旭日章叙勲、二十二年京都府文化賞特別功労賞。

日本能楽会理事、日本能楽協会理事、金剛会理事などを歴任、能楽界の重鎮として力を尽くした功績は大きなものがある。

豊春会春の能

５月19日　金剛能楽堂

金剛流・豊春会（豊嶋三千春師主宰）の春の能は、五月十九日(日)午後一時始。

能組は「松山天狗」
（シテ豊嶋三千春、相模坊・北川米喜。天狗・中嶋謙昌、ワキ福王茂十郎）
「石橋・狻猊之式」（シテ重本昌也、椎夫・谷口雅彦、狻獅子・岩切直次）狻獅子・大菅義信、ワキ福王茂十郎）
狂言、「文荷」（太郎冠者・茂山千五郎）ほか一調「玉之段」（豊嶋幸洋）仕舞「谷行」（豊嶋晃嗣）「春日龍神」（植田恭三）独吟「百万」（田中敏之）。
入場料／一般券六〇〇〇円、学生券三〇〇〇円
申込みは京都市東山区知恩院山内林下町四五五、豊春会（TEL 075・561・5408、FAX 075・541・8987）

豊水会春季大会

五月三日（祝日）午前十時始
名古屋能楽堂

番組

素謡　杜若　渡辺　美樹　清水久美子
素謡　雲林院　大戸千代子　高山　弘
仕舞　巴　大江　尚美
能　風　早川真太郎　高安　勝久　河村総一郎　後藤嘉津幸　藤田六郎兵衛　見留　間　井上松次郎　後見　観世喜之　高橋　暸一　奥川　恒治
舞囃子　松虫　高橋　邦充　河村眞之介　船戸昭弘　竹市　学　佐藤　淑子　河村眞之介　船戸昭弘　藤田六郎兵衛
舞囃子　井筒　杉本　雅子　河村眞之介　船戸昭弘　加藤　洋輝　竹市　学
舞囃子　吉野夫人　秋山比登美　河村眞之介　後藤嘉津幸　加藤　洋輝　藤田六郎兵衛
素謡　阿漕　立廻
素謡　隅田川　佐藤　淑子　秋山比登美　杉本　雅子
卒都婆小町　早川　寛　観世　喜正　小島　英明
舞囃子　胡蝶　渡辺　美樹　河村眞之介　船戸昭弘　加藤　洋輝　竹市　学
舞囃子　紅葉狩　急ノ舞　大戸千代子　河村総一郎　後藤嘉津幸　竹市　学
通小町　立廻　清水久美子　河村眞之介　後藤嘉津幸　藤田六郎兵衛
天鼓　素謡　宮地　俊彦　高橋　邦充
主催　豊水会　高橋　暸一

第八回つぼみ会

［御来場歓迎］
［入場無料］
五月五日（日・祝）午前九時三十分始
名古屋能楽堂

素謡　鶴亀　シテ　森　釧太郎　ワキ　島津　元幸　畑中さやか　毛受　暁美　大鹿　暢子　吉田　範子　大山　昭三　前田　洋子　森　峯子　坂井田千代子　成瀬喜代子
仕舞　花筐　クセ　小林　福子　岩船　大松　綾子　玉葛　諏訪　優希
舞囃子　草子洗　前田　洋子　河村総一郎　後藤孝一郎　鹿取　希世
仕舞　嵐山　草間　悠貴　桜川　野村　澄子　三輪　クセ　山本　洋子
素謡　俊寛　江口しげ子　長尾　幸子　三宅　秀治　塚本　照子　伊藤偉津治　神村美智子　伊藤　武利　野村　澄子　山川　尚志　山本　洋子　河田　直侃　前田　育宏
仕舞　加茂　笠之段　島津　元幸　門脇　達祐　唐船　竹内　孝成
能　羽衣　シテ　犬塚　恵　ワキ　飯富　雅介　河村裕一郎　後藤孝一郎　加藤　洋輝　鹿取　希世　後見　水上　輝和　衣斐　正宜　水上　優　地謡　大松　綾子　武田　伊佐　中西　良美　吉田　美香　土屋　周子　水野ゆき子　吉見　令子　林　加代子　田中　信子　衣斐　愛　山本　洋子　渡辺　久代　後藤嘉津幸　竹市　学　河村総一郎　福井　聡介　鹿取　希世
仕舞　芦刈　林　加代子　後藤嘉津幸　竹市　学
仕舞　船弁慶　坂口　侑　河村眞之介　後藤嘉津幸　竹市　学
仕舞　花筐　クセ　小林　福子
仕舞　富士太鼓　小坂　絢子
舞囃子　西王母　坂口　怜　河村総一郎　後藤嘉津幸　加藤　洋輝　竹市　学
能　巴　シテ　丘村美由貴　ワキ　橋本　宰　河村総一郎　福井　聡介　竹市　学　間　佐藤　融　後見　衣斐　愛　内藤　飛能　地謡　星野　猛　中島　暉夫　和久荘太郎　平田　正文　武田　孝史　内田　淳一　水上　優　東川　尚史
素謡　邯鄲　子方　前田　洋子　シテ　森　峯子　ワキ　吉田　範子　ワキツレ　犬山　昭三　岩田　基子　成瀬喜代子　坂井田千代子　毛受　暁美　大鹿　暢子　東松ソノエ　育宏　前田　元幸　島津　信子　田中　洋子　山本　令子　吉見　久代　渡辺
舞囃子　巻絹　吉田　美香　河村総一郎　後藤嘉津幸　加藤　洋輝　鹿取　希世
舞囃子　高野物狂　竹内　淳一　河村眞之介　後藤孝一郎　竹市　学
仕舞　江口　クセ　中島　暉夫　松虫　キリ　平田　正文
能　黒塚　シテ　山本あけみ　ワキ　飯富　雅介　ワキツレ　橋本　宰　問　井上松次郎　河村眞之介　後藤嘉津幸　加藤　洋輝　竹市　学　後見　衣斐　正宜　衣斐　愛　土屋　周子　地謡　門脇　達祐　竹市　孝成　和久荘太郎　藤井　秋雅　水上　輝和　内藤　飛能　武田　孝史　東川　尚史
仕舞　女郎花　クセ　山田あき子　雲雀山　鈴木マチコ
仕舞　難波　千田美和子
舞囃子　杜若　中西　良美　河村眞之介　後藤嘉津幸　加藤　洋輝　鹿取　希世
舞囃子　放下僧　水野ゆき子　河村眞之介　後藤孝一郎　竹市　学
（終演　十七時四十分頃）
附祝言
主催　つぼみ会　衣斐　愛
［入場無料］
名古屋市昭和区御器所２－13－22
サンマンションアトレ御器所Ⅲ202号

春季特別展
花の風姿
金沢能楽美術館
4月27日～7月5日

金沢能楽美術館では「春季特別展」として、四月二十七日（土）から七月五日（金）まで〝花の風姿〟をタイトルに、能に登場する花の精霊や、能装束に咲く花など、能を彩る花々を紹介する特別展示会を開催する。

〈時分の花、年々去来の花、めずらしき花、無上の花、幽玄の花……、そしてまことの花。

世阿弥は能における美の本質とその在りようを「花」の姿にたとえた〉　展示会では、万葉集にも詠われた藤の名所、富山県氷見市が舞台の能「藤」を中心に、能の花の多様性を披露、世阿弥の追い求めた美の世界を訴求する。

紫地藤春草文縫箔
昭和時代

能面
二十余
（裏面）
銘二十餘　日永作
宝生大夫友勝（花押）
室町～桃山時代

紅無地若文鬘扇
明治時代

さらに、次のような関連イベントが行われる。

◇金沢現在夢幻④金沢能楽美術館
五月三日～五日午後六時半～午後九時、入場無料
演出：モリ川ヒロトー氏（映像作家・作曲家）

◇金沢現在夢幻×能「藤」のイメージコラボ
旧市街に咲き乱れる〝花〟と即興夜想曲
五月三日（金・祝）午後七時
特別出演　宝生流能楽師シテ方・藪克徳氏

◇「写謡の会」
第一回五月五日（日・祝）午前十時十五分～十一時十五分
第二回六月二日（日）午前十時十五分～十一時十五分
能の謡を書写し、能の見どころ解説とミニレッスン開講

◇（新連続講座）「幻想の美学―能を愛した作家たち」全五回シリーズ
第一回「泉鏡花と能」六月二十二日（土）午後二時、受講料千円（五回分）、要観覧料
第二回以降（予定）②八月三日・夢野久作③十月十九日・郡虎彦とイエイツ④十二月七日・三島由紀夫⑤二月十五日・赤江瀑と皆川博子［講師＝東雅夫氏］

◇ギャラリートーク
六月二十二日（土）　学芸員が展示について解説
［金沢能楽美術館］
開館時間／午前十時～午後六時
休館日／毎週月曜日▽観覧料／一般・大学生三〇〇円、六五歳以上二〇〇円、高校生以下無料
金沢市広坂1-2-25　TEL076・220・2790　FAX076・220・2791

当地の各流儀・流派・結社
社中の消息を辿る ㊸

竹尾　邦太郎

拾壱　「野村四郎　名古屋公演」②

――承前――

前置き（その二）

野村四郎は昭和一一年（一九三六）一一月二七日生、恵比寿向山の二五世観世宗家へ内弟子に入ったのは昭和二七年という。先輩に関根祥六（昭5生）杉浦元三郎（昭9生）が居り、この二人が出た後、野村四郎の後輩で内弟子に入ったのが藤井徳三（昭13生）角寛次朗（昭14生）木月季行（昭14生）大西智久（昭13生）の四名である。（この項、『観世』誌59巻10号に拠る）　野村四郎は観世会・銕仙会に所属し、「野村四郎名古屋公演」全一九公演（独演一番能が三度あり）全二二舞台のうち地頭はいわゆる同じ釜の飯を食った藤井徳三が六度、銕仙会の浅井文義（昭24生）四度、観世寿夫に師事した大槻文蔵（昭17生）五度、後見には藤井徳三より更に後で宗家内弟子に入った大江将堇（昭19生）が五度、大槻文蔵が五度、観世元昭に師事した山中義滋（昭11生）が五度勤めている。宗家直門や銕仙会系シテ方不在の当地からは祖父江修一（4）久田徹二（1）武田邦弘（1）清沢一政（4）梅田邦久（副地頭1）（括弧内は度数）が地謡に連なるだけである。

平成元年七月八日・第六回　能「松風・戯之舞」を観る会。公演に先立つ春、次の案内チラシが配布される。

拝啓　平成の世を迎え益々ご清祥の御事とお喜び申し上げます

扨来る七月八日熱田能楽殿に於て恒例の野村四郎の会公演に「松風」を演ずることになりました

皆様のなお一層のご支援を賜わ

（③面へつづく）

第十回記念　野村四郎名古屋公演
能安宅　勧進帳　酌掛之伝　延年之舞　貝立
平成5年8月21日(土)　午後2時　開演
熱田神宮能楽殿
☎052(682)1751
招待
を列一　9
A席(1階指定席)　¥12,000(消費税込み)
主催　中部日本放送／中日新聞社
後援　文化庁・愛知県教育委員会・名古屋市教育委員会

第十六回
狂言ござる乃座
五月十二日（日）午後二時始
名古屋能楽堂

狂言　樋の酒　太郎冠者　野村　万作　次郎冠者　主　竹山　悠樹　高野　和憲
狂言　無布施経　僧　野村　萬斎　何某　石田　幸雄
狂言　茸　山伏　野村　萬斎　何某　茸　深田　博治　茸　中村　修一　内藤　連　岡　総史　宇賀　貴雄　小林　桂舟　月崎　晴夫　飯田　豪　竹山　悠樹　高野　和憲　鬼茸

［チケット料金］
S席　7000円
A席　6000円
B席　5000円
学生席　3000円
チケットぴあ／電話　0570・02・9999
（Pコード　427・541）
栄プレチケ92　電話　052・953・7777

主催　万作の会
問い合わせ　TEL　03・5981・9778
東京都文京区関口2-2-7

名古屋幽花会春季大会
五月十九日（日）午前十時開演
名古屋能楽堂

素謡　神歌　村木　寛茂　片山　峻佑
葛城　徳岡　孝二　石川　輝夫
二人静　岡本　耕蔵　長卿　敏明　山邑　英之
舞囃子　養老　比江嶋孝子　水波之伝　河村眞之介　曾和伊喜夫　前川　光範　藤田六郎兵衛
松風　松久　祐子　戯之舞　河村眞之介　曾和　正博　大野　誠
仕舞　羽衣　草子洗小町　姥　山　濱田木耶ラ　徳岡　孝二　長卿　敏明　小塩　片山　幽雪
番外仕舞　杜若　恋之舞　宝生　欣哉　河村総一郎　曾和　正博　前川　光範　藤田六郎兵衛
能　杜若　市野美代子
素謡　熊野　岩瀬多美子　野村　満子　藤原美哉子　黒川　文子
舞囃子　遊行柳　村木　寛茂　青柳之舞　河村総一郎　曾和　正博　前川　光範　藤田六郎兵衛
三輪　石黒　直子　神楽留　河村眞之介　曾和　正博　前川　光範　大野　誠
仕舞　大江山　小田　和季
二人静　松井　律子
善界　木村　厚

先代野村又三郎七回忌追善
狂言やるまい会 第56回公演
五月二十五日（土）午後一時三十分開演
名古屋能楽堂

狂言　魚説法　新発意　野村　信朗　檀家　奥津健一郎
狂言　法師ヶ母　男　野村又三郎　妻　松田　高義
狂言　鶯　何某　野村　万作　飼い主　高野　和憲
素囃子　酌之舞　大鼓　河村眞之介　小鼓　後藤嘉津幸　太鼓　加藤　洋輝　笛　竹市　学
狂言　閻罪人　太郎冠者　野村　万蔵　主　野村　萬　近所の者　野村　扇丞　井上松次郎　佐藤融　奥津健太郎　野口　隆行
（終演予定　午後三時半頃）
［入場料］
A券（前売）六〇〇〇円（当日七〇〇〇円）
B券（前売）四五〇〇円（当日五五〇〇円）
学生・福祉対象者三〇〇〇円（当日四〇〇〇円）
［取り扱い］野村事務所　090・8323・3210
電子チケットぴあ（Pコード427・061）
TEL0570・02・9999
ファミリーマート・サークルK・サンクス

名古屋観衆会
五月二十六日（日）午前十一時半始
名古屋能楽堂

能のお話　山本博通
素謡　経正　安田　志郎　廣田　玉枝
番囃子　望月　子方　宝生　欣哉　ツレ　片山　峻佑　橋本　忠樹　宮崎　晃吉　河村眞之介　曾和　正博　前川　光範　大野　誠　間　今枝　郁雄
舞囃子　百萬　懸　瑛子　河村総一郎　曾和伊喜夫　藤田六郎兵衛
海士　村木　玲子　河村眞之介　曾和伊喜夫　前川　光範　大野　誠
仕舞　田村　松久　恭子　桜川　神谷　映里　邯鄲　林　礼子
素謡　葵上　小田　和季　木村　厚　西野　宏　寺田　豊
番外仕舞　橋弁慶　片山　峻佑　片山　伸吾
附祝言
（午後五時四十五分頃終了予定）
［ご来場歓迎］
主催　名古屋幽花会　片山伸吾

（③面へつづく）

（②面よりつづき）

ります様　又ぜひのご光来心からお待ち申し上げております　先ずは取敢ずご案内迄　敬具

平成元年春　吉日

野村四郎の会

各位様

◎お申し込みは郵便振替用紙（手数料不要）をご利用下さいませ　電話予約も承っております

〇五二―七五一―一八八〇　小嶋方

こゝに「野村四郎の会」とあるが此の年秋、東京では「野村四郎の会」が既に第一二回を迎えることになってをり、この呼称を使うこと罷りならぬの横槍が入ったを仄聞するが、主催が野村四郎ではなく中部日本放送であった故か。

番組は狂言「不見不聞」野村又三郎・井上松次郎・野村信行、仕舞三番「笹之段」大槻文藏「西行桜」山中義滋「船弁慶キリ」武田邦弘、能「松風・戯之舞」野村四郎・藤井完治・西村欽也・佐藤友彦・藤田六郎兵衛・柳原冨司忠・河村総一郎・大槻文藏（地頭）大江将堇（後見）。

平成二年八月一八日・第七回能「半蔀・立花供養」を観る会。

丁度一年前の平成元年八月七日、主催の中部日本放送（CBC）代表取締役会長を退いて間無しの小嶋源作常任相談役が死去・享年八四歳。「野村四郎名古屋公演」には後楯であったろうが敢て追善公演とせずに上演曲目に哀悼の意を委ねるか。

番組は舞囃子「清経・替之型」野村四郎・藤田六郎兵衛・福井啓次郎・河村総一郎・藤井完治（地頭）、仕舞四番「道明寺」藤井徳三「笠之段」武田邦弘「江口キリ」山中義滋「山姥キリ」久田徹二、狂言「蚊相撲」野村又三郎・松田高義・野村信行、能「半蔀・立花供養」野村四郎・藤田六郎兵衛・福井啓次郎・河村総一郎・藤井徳三「佐渡狐」野村又三郎・野村信行・松田高義、仕舞四番「兼平」藤井完治「野宮」大槻文藏「錦木クセ」山中義滋「阿漕」大江将堇、能「自然居士」野村四郎・山中雅志（子方）宝生閑・宝生欣也・野村又三郎・藤田六郎兵衛・柳原冨司忠・河村総一郎・大槻文藏（地頭）山中義滋（後見）。

平成四年七月一八日・第九回野村四郎名古屋公演」。この回から能「△△を観る会」の傍題が消える。番組は狂言「鎌腹」野村又三郎・野村信行・松田高義、仕舞四番「難波」大江将堇「花筐」梅若盛義「鵜之段」山中義滋「融」梅若修一、能「楊貴妃・干之掛・台留」野村四郎・宝生欣哉・野村信行・藤田六郎兵衛・福井啓次郎・河村総一郎・梅若盛義（地頭）大江将堇（後見）。

平成五年八月二一日・第拾回記念野村四郎名古屋公演。舞囃子「高砂」大槻文藏・藤田六郎兵衛・福井啓次郎・河村総一郎・助川龍夫・上野朝義（地頭）、仕舞三番「松虫クセ」藤井徳三「夕顔」大西智久「天鼓」山中義滋、能「安宅・勧進帳・酌掛之伝・延年之舞・貝立」野村四郎・大江広祐（子方）藤井完治・林喜一郎・上野朝義・上野雄三・山本章弘・井上裕久・杉浦豊彦・片山清司・浦田保浩・大江広祐・野村又三郎（強力）野村信行（富樫ノ従者）藤田六郎兵衛・福井啓次郎・河村総一郎・藤井徳三（地頭）大槻文藏（後見）。

平成六年七月一六日・第拾一回野村四郎名古屋公演。狂言「文相撲」野村又三郎・松田高義・野村信行、仕舞四番「箙」片山清司「邯鄲・楽ア ト」杉浦豊彦「殺生石」浦田保浩「弱法師」杉浦元三郎、能「三井寺・無俳之伝」野村四郎・上野朝彦（子方）中村弥三郎・野村信行・杉浦元三郎（地頭）大江将堇（後見）。

平成七年七月二二日・第拾貳回野村四郎名古屋公演。番組に先立ち坂田美子の薩摩琵琶による平家物語「祇園精舎」、能「大原御幸」野村四郎・大槻文藏（法王）上野朝義（内侍）山本章弘（局）中村弥三郎・塩田重喜・飯森正直・山本順三・野村又三郎・片山慶次郎（地頭）山中義滋（後見）。

平成八年七月一三日・第拾参回野村四郎名古屋公演。番組に先立ち笠井賢一による解説「本歌取りの精神――ことばは古きを恭ひ、心は新しきを求め」がある。番組は能舞「相聞」大槻文藏・藤田六郎兵衛・柳原冨司忠・河村総一郎・浅井文義（地頭）、能「融・思立之出・酌之舞」野村四郎・福王茂十郎・野村小三郎・浅井文義（地頭）大槻文藏（後見）。

「相聞」は三聯から成る芥川龍之介の四行詩、観世栄夫の作曲。年譜に拠ると「大正十四年（一九二五）三十四歳、十一月、紀行集『支那游記』を改造社から刊行。この頃、俳句の外、詩にも興味を寄せた。健康はますます悪化した。」とある。

相聞　一

あひ見ざりせばなかなかに
そらに忘れてやまんとや。
野べのけむりも一すぢに
立ちての後はかなしとよ。

相聞　二

風にまひたるすげ笠の
なにかは路に落ちざらん。
わが名はいかで惜しむべき。
惜しむは君が名のみとよ。

相聞　三

また立ちかへる水無月の
歎きを誰にかたるべき。
沙羅のみづ枝に花さけば、
かなしき人の目ぞ見ゆる。

「相聞」は二年前の七月二四日、大槻能楽堂での観世雅雪七回忌・観世寿夫十七回忌追善能にやはり大槻文藏が舞っている。その時の囃子は藤田六郎兵衛・曽和正博・河村総一郎・地頭は観世暁夫。

平成九年七月二六日・第拾四回野村四郎名古屋公演。この年四月三日、名古屋能楽堂の柿落シ、前年まで熱田神宮能楽殿を本拠としてきた「野村四郎名古屋公演」も舞台を移すことになる。舞台が大きくなった訳でもあるまいが番組案内リーフレットもB4半截大からA3半截大に大きくなる（写真）。番組に先立ち歌人・馬場あき子の「古き王家の愛」の題で講演があり、のち舞囃子「清経」大槻文藏・藤田六郎兵衛・福井啓次郎・河村総一郎・上野朝義（地頭）、能「花筐・筐之伝・大返・舞入」野村四郎・山本章弘・竹前万里（子方）福王茂十郎・森本幸治・山本順三・永留浩史・大槻文藏（地頭）山中義滋（後見）。

平成一〇年七月二六日・第拾五回野村四郎名古屋公演。番組に先立ち作家・近藤富枝による講演「光源氏の恋文」仕舞三番「玉鬘」大江将堇「夕顔」浅井文義「葵上」鵜沢郁雄、舞囃子「浮舟」大槻文藏・藤田六郎兵衛・柳原冨司忠・山本孝・浅井文義（地頭）、能「野宮」野村四郎・宝生欣哉・松田高義・藤田六郎兵衛・柳原冨司忠・山本孝・大槻文藏（地頭）大江将堇（後見）。

平成一一年八月二二日・第拾六回野村四郎名古屋公演。堂本正樹の解説のあと能「千手・郢曲之舞」野村四郎・大槻文藏・宝生欣哉・大野誠・後藤嘉津幸・河村眞之介・上野朝義（地頭）浅井文義（後見）、狂言「鐘の音」野村又三郎・野村小三郎、高浜虚子作・新作能「實朝」野村四郎・宝生欣哉・野村小三郎・藤田六郎兵衛・大倉源次郎・河村総一郎・三島元太郎・浅井文義（地頭）大槻文藏（後見）。

――以下次号――

◆初春の舞台から◆

「名古屋能楽堂正月特別公演」「豊田市能楽堂新春能」「名古屋九皐会新春公演」「名古屋宝生会定式能」と「観世会定例公演能」

竹尾邦太郎

「翁」　シテ一政、流儀・流派の宗家・頭領はいざ知らず、何度も勤められるものでなく慣れることのない神聖な曲、場の空気からも誰しも緊張して伸びやかにゆったり余裕をもって舞うのは至難。袖扱い、運びなど些かの生硬も謹直の証、神妙に勤める。千歳は大志、偉丈夫の躍動感の爽やか。三番叟・友彦は鈴之段の、いわゆる「種蒔キ」に脇目も振らず熱中の愚直さ（写真）に年劫をみせる。（1時間6分）

名古屋能楽堂正月特別公演「翁」
清沢一政
（杉浦賢次氏撮影）

名古屋能楽堂正月特別公演「三番叟」
佐藤友彦

「酢薑」　抵園会を売りに上洛するシテ高義と薑を売りに上る鉢合わせして商い争いとなり、互いに商売物の味、酸いと辛いを懸けた秀句を競う口舌合戦は、それ〝〟の出自に及びカラコ天皇にスイコ天皇と破天荒なことに。揚句、埒は明かず酢と薑は合性と両人で笑ヒ留メに。テンポ快調、痛快（19分）

名古屋能楽堂正月特別公演「酢薑」
左より　松田高義、佐藤　融

年頭の「翁」なので続いて脇能・脇狂言の順に雰囲気だけでも式能の形をとって貰いたいが、諸般の事情があろうか。

「葛城・大和舞」　シテ三津子。雪に阻まれ難渋する山伏一行（ワキ勝久ワキツレ元・正樹）を庵に泊めて里女（シテ三津子）、うちとけるうち、後夜の勤行をするワキに悩みを打ち明け、へこの身を済けて賜び給へ、の哀願に切迫感如実。へ露に置かれ、と同情を求めるかにワキへアシラフと〝霜に責められ、とワキと同吟になる重苦しさに感傷も。中入は雪山へ。後シテ、の哀願に切迫感如実。

名古屋能楽堂正月特別公演
「葛城・大和舞」
久田三津子
（杉浦賢次氏撮影）

（④面へつづく）

舞囃子
野宮　杉野　伸江　河村総一郎
杜若　柿坂　正子　船戸昭弘　河村眞之介　船戸昭弘
葛城　素謡　吉田　隆一　荒木豊治郎

仕舞
老松　伊藤慶一朗（幼）
唐船　伊藤ひな菊（小二）
西王母　南　櫛之介（中一）
吉野天人　館村　宗（中一）
鶴亀　服部　宏毅（中一）

羽衣　連吟　伊藤慶一朗　伊藤ひな菊

実盛　素謡　橋詰　弘　橋詰ヒサノ

舞囃子
高砂　竹内美紀子　河村眞之介　加藤　洋輝
三輪　秦野　淳代　後藤嘉津幸　藤田六郎兵衛
　　河村総一郎　加藤　洋輝
　　後藤嘉津幸　藤田六郎兵衛

定家　素謡　山中　節子　安井　敦子

仕舞
紅葉狩　安田　志郎
清経キリ　廣田　玉枝
網之段　川中　陽平
江口　荒木豊次郎

舞囃子
通小町　足立奈々子　河村眞之介　大野　誠
　　後藤嘉津幸
白楽天　伊藤健一郎　河村眞之介　加藤　浩輝
　　船戸　昭弘　竹市　学

能のお囃子講座　山本博通

（終了予定　五時三十分頃）

［御来場歓迎］

主催　名古屋観衛会
後援　正花会
指導　山本博通

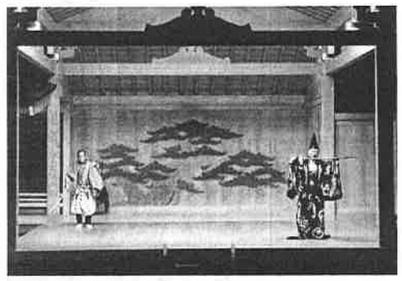
豊田市能楽堂新春能「屋島・弓流」
片山九郎右衛門
（杉浦賢次氏撮影）

豊田市能楽堂新春能「鐘の音」
山本東次郎

豊田市能楽堂新春能「屋島・那須」
山本則重
（杉浦賢次氏撮影）

九皐会新春公演「翁」
中所宜夫

九皐会新春公演「翁・千歳」
小島英明
（杉浦賢次氏撮影）



九皐会新春公演「昆布売」
左より佐藤友彦、大野弘之
（杉浦賢次氏撮影）

九皐会新春公演「望月」
左より駒瀬直也、松浦　薫、
観世喜正
（杉浦賢次氏撮影）

（③面よりつづき）

葛城ノ神は天冠に葛紅葉・緋大口・白地舞衣壺折。〽降る雪の、と常座へ行き扇を木綿付キ榊に替え舞う神楽（写真）ノリよく優美に舞い、キリは地のうちに忽々と二ノ松へ、〽明けぬ前にと、左袖返し舞台へ見込むと返シ句に直り、地を残して入るとワキの合掌留メ、品のよい舞台だった。（1時間20分・1月3日・名古屋能楽堂正月特別公演）

「鐘の音」　伜の元服祝に黄金造の太刀を、と太郎冠者（シテ東次郎）に鎌倉へ金の値を聞きに遣る主（アド則秀）。鎌倉は名だたる相州物の刀鍛冶処であると共に鎌倉五山に代表される寺処でも、迂闊なシテは付け金の値を撞き鐘の音と取り違え独り合点。俗に、鐘が鳴るか撞目が鳴るか、鐘と撞目の間（あい）が鳴る、と言うが、撞目を放して音を聞くシテ（写真）の生真面目が徒（あだ）となること、見所は既に熟知、シテの一所懸命が痛々しい。大蔵流はキリに仲裁人（アド則俊）が出るが、和泉流の太郎冠者と主だけの方が内容の密度が濃い気がする。（32分）

「屋島・弓流・那須」　屋島沖での激しい源平合戦中の、人口に膾炙した一挿話。

漁翁（前シテ九郎右衛門）が旅僧（ワキ欣哉ワキツレ能弘・琢弘）に格調高く仕方に合戦譚を詳細に力強く語って退くと、所ノ者（アヒ則重）がワキの求めに那須与市・扇の的の伝説を再現する。独立した語り物「奈須与市語」として改まった長袴でなく、いわゆる劇中劇での語は常の半袴・肩衣の姿、自ずと身軽に敏捷活発、的に「フップッ」と矢を放つた姿（写真）には漲る力。

後場は旅僧の夢に出現する義経ノ霊。流した弓の強さで己れの器量をはからられては末代の恥とばかりに、拾い上げんとする敵の熊手を太刀で薙ぎ払い、拾い上げる柔らかな身のこなしには強靱な腰（写真）、九郎右衛門、充実ぶりを鮮やかにみせる。

（1時間50分・1月12日・豊田市能楽堂新春能）

「翁」　シテ宜夫。翁烏帽子が板に着くまで拝礼して欲しいが所作端正、いわゆる翁の型（写真）も美しい。千歳は英明、はき〳〵と力一杯舞い、留メ拍子きっぱりと如何にも翁の露払い。三番叟は融、揉之段の烏飛、高く軽快に飛ぶ。（1時間9分）

「昆布売」　大名（シテ弘之）、太刀を持たせたいばかりに昆布売（アド友彦）を嚇し、籠絡したはよいが、甘くみたばかりに巫山戯すぎて反感を買い、持たせた太刀が却って仇、逆に脅されて様々な売り声の節で昆布を売らされる破目に。朴訥な味わいのシテが、柄になく権高に居ても、「お昆布召され候へ」などと手なづけられ（写真）、踊り節に至っては興に乗る稚気、滲み出る芸劫の佳味である。（27分）

「望月」　主君を討たれ扶持を離れて宿の主に納まる旧臣・小沢刑部（シテ喜正）、偶然、旧主の妻子（ツレ直也・子方花若・松浦薫）を泊めれば、奇しくも同夜、泊り合わせる敵の望月秋長（ワキ勝久）。

シテはツレに情況を打ち明け、宿からの持て成しとワキに酒を勧め、肴は花若の八撥と盲御前に扮してツレの謡、と策を授け、自身は獅子を舞い、その間に本望を、と自信に満ちて明快な、確りした詞が聞かせる。ツレと花若の物着あと、シテがワキの下人（アヒ松次郎）との問答を介しワキの賛意を得ると、酒の場に。肴はあろうことか神経逆撫でせんばかりの曽我物の一節、狼狽するアヒを意に介さない自若としたワキの態度が、クセ切の〽敵を討たせ給へや、に触発され「いざ討たう」と息巻く花若の言葉に一変、間髪入れず刀の柄に手を掛け居立ったのが面白い。「暫く」と花若を制し（写真）冷静沈着に事を収めるシテ喜正、器量の大きさをみせる。ツレが退き、アヒも切戸へ退くと、花若が先の態度を悪怯れること無く元気に舞う羯鼓、位進み撥を捨てると乱序の囃子（学・嘉津幸・眞之介）になり、シテは半幕に姿を見せ獅子に。活き〳〵と大きく鮮やかに舞い力量大いに発揮、雄健、品のある舞台だった。子方が巧く舞台が締り、三役も上々。（1時間25分・1月20日・名古屋九皐会新春公演）

「鶴亀」　皇帝（シテ澄子）、百官卿相（ワキ雅介ワキツレ元）の朝賀を受け、ワキの奏聞に長生を約する鶴と亀（子方ツレ片桐賢・遵）の舞が台覧に供され、御感の余り自身「楽」を舞い自祝。

豊頬のシテ、豪華な袷狩衣にいわゆる冠下は唐冠の直面がよく馴染み堂々の皇帝。「楽」三段、悠揚と舞上げ、キリに両袖巻き上げ行くところ英姿颯爽。（42分）

「鬼瓦」　因幡薬師の御利生で訴訟叶ったと大名（シテ松次郎）、有難いお堂を国元に勧請しようと堂の造作を見て回るうち気付く屋根の上の黒い物。太郎冠者（アド融）に質せば鬼瓦と知り泣き出すシテ。それを不審するアドに、シテは国の女共の顔の造作の一々がよく似ると大真面目。即、同意しないアドに「どこやらが似たということがあるものか」と向きになるシテの、女共への一途な愛が大仰で可笑しい。（18分）

「西行桜」　静閑を愛する西行（ワキ雅介）、花見の喧騒を厭い、能力（アヒ俊裕）に花見禁制を触レさせるも遙々やって来る花見人（ワキツレ元・宰・正樹）の、花を愛でる気持ち無下に断われず、所懐を一首の歌「花見んと群れつゝ人の来るのみぞ、あたら桜の科にはありける」に托し、〽月になる夜の、と床几を立つと、花見人は〽花の下臥、の心に切戸へ退き、作物の引廻シが下ろされ、老桜ノ精（シテ正宜）が姿をみせる。ワキの一首に言及するシテの、ワキとの問答は桜を科と思う心に異議ありの強さ。〽心なき草木も、と作物を出るシテ、皺尉・白垂・風折烏帽子・浅葱大口・赤茶単狩衣の姿。下居に〽御法なるべし、とワキに合掌し、〽涙尽き難し、と立つ。クセは都の桜名所尽しの舞グセ、几帳面なというか堅実な舞ぶりは序之舞も。

キリは〽待て暫し待て暫し、と招キ扇、〽白むは、と目付柱の方へ眺め、〽花の枕の、で左袖返シ面蔽い下居は肘枕の態に。〽夢は覚めにけり、と立ち拍子二ツ踏み、地の返シ句に踏む四ツ拍子は、春の夜が明けワキとの惜別の情もだし難い思いもあるか。囃子は希世・孝一郎・眞之介・洋輝、地は保雄・満次郎ら、後見に聡・荘太郎。（1時間22分・1月27日・名古屋宝生会定式能）

「巴」　里女（シテ勘鷗）、粟津の社で出遇う旅僧（ワキ勝久）が木曽の者と知ると、祀る神・木曽義仲と同郷の誼、霊を弔うよう促し、ワキとの值遇を喜ぶと、聞く入相の鐘に〽我も亡者、と消える中入。うら寂しい風趣。

後は女武者・巴（後シテ勘鷗）のみせる義仲自刃前後の、女ゆえに殉死を許されない思いと、剛勇ぶり。〽弓取の身の、と長刀を扇と替えると、正中で馬上の心に床几にかゝり、義仲の武勇譚は、武運拙く粟津が原に霧と消えるまでの居グセから、その最期を活写するロンギへ。〽深田に馬を乗り入れ、てしまい慌しく踏む足拍子、馬上で腰を浮かす心に居立ち、〽鞭を打てども、と腰の辺り二打、後退する心に〽退く方も、と右へ見るも後が無い渚、狼狽し〽浅ましや、とシヲル迄を鮮烈にみせる。

殉死は叶わず、形見は木曽に届けよの君命、〽巴はともかくも、とシヲリ、〽かくて御前を、と立つと、長刀扱いきび〳〵と豪快に、獅子奮迅の勢い、胸が透く、キリは膝をつき〽巴泣く〳〵、と小袖と守の形見を受取る心に扇開いて左手に持ち、〽御暇申し、と立って常座へ、〽君の名残を、と左手の扇は開いたまゝ上に形見の載る心に捧げ持ち右手でシヲルところ、哀感も一入。（1時間20分）

「鏡男」　表裏はどちらか錯覚させる代物で、裏が美しく装飾が施され表は磨かれた平面、田舎に待つ妻（アド郁雄）に都の土産にと鏡屋（アド弘之）から鏡を購った男（シテ融）、早速、試しに映った顔に吃驚したが、試行の末、それが己れの顔と分かり納得。妻はさぞ驚き、そして喜ぶだろうと思ったが案に相違して、鏡に映る女の顔が己れの顔と分らず、嫉妬に狂い激怒して「食い裂こうか、引き裂こうか」と凄じい見幕。早く妻の喜ぶ顔が見たいばかりに、男の説明不足が齎す悲劇、優しい融の巧さが光る。（23分）

「西行桜」　シテ西行は清之舞、老体の舞はゆったりと上品。〽待て暫し、の返シ句に招キ扇、〽白むは、は宝生と異なり笛柱上へ見た。〽花の枕の、と退り扇左にとり沈み面を蔽う。〽夢は覚めにけり、と扇右手に立ち拍子一ツ、地の返シ句に四ツ拍子踏むと、〽嵐も雪も、と地（芳伸・勘鷗・正邦ら）のうちに橋懸へ。〽花を踏んでは、と一ノ松で二ツ拍子、〽少年の春、と左袖返シ、ワキを見込み、〽翁さびて、の返シ句に入る。小書の記載は無いが「脇留」、余情惻々、宗家の気品横溢。ワキ福王茂十郎、ワキツレ和幸、幸治・和夫、アヒ松次郎、囃子は六郎兵衛・源次郎・総一郎・洋輝、後見は邦久・公威。（1時間30分・2月10日・観世会定例公演能）

――○○――○○――○○――

［前号の訂正］3頁七段三行目、又四郎とあるのは「又三郎」。

梅猶会

平成25年度 大阪能楽公演 予定

（第二回以後　大阪能楽会館）

◆第二回　6月1日(土) 午後1時

素謡「藤戸」楠若善高

能「通小町」シテ楠若　猶義、ツレ楠若　善久、ワキ福王茂十郎

狂言「蝸牛」小笠原匡

仕舞「敦盛」小川晴子「天鼓」立花香寿子「道明寺」梅若基徳、「水舞月蔵」赤瀬雅則

能「三輪」シテ井戸和男　ワキ森本幸治

◆第三回　9月7日(土) 午後1時

能「熊野」シテ梅若善久、ツレ立花香寿子、ワキ福王知登

狂言「口真似」善竹隆平

仕舞「清経」クセ池内光之助、「班女」アト井戸良祐「梅ヶ枝」梅若猶義

能「鉄輪」シテ梅若修一、ワキ福王和幸

研究能「菊慈童」シテ小川晴子、ワキ喜多雅人

◆最終回　12月1日(日) 午後1時

能「鉢木」シテ梅若基徳、ツレ井戸良祐、ワキ福王茂十郎

狂言「寝音曲」善竹忠一郎

仕舞「葛城」越知芳彦「花筐」井戸和男「定家」梅若修一「融」梅若善高

能「海士」シテ立花加寿子、ツレ浅見悠花、ワキ広谷和夫

全自由席　前売四〇〇〇円（当日券五〇〇〇円）学生当日券三〇〇〇円

申し込み＝能楽師、公演会場、ローソンチケット（L53461）

梅猶会定期能連絡所＝〒560－0084　豊中市新千里南町3－18－12

電話06・6831・7854

能樂の友

発行　能楽の友社
名古屋市千種区千種２丁目18－18
（郵便番号　464-0858）
電　話（052）731－７９８４
ＦＡＸ（052）733－２８３７
振替口座　00800－6－36393

購読料　１年　１１００円
郵送の場合　１年　１８００円
一　部　１００円

ＮＨＫ放送予定（平成25年５～６月）

◆ＮＨＫ－ＦＭラジオ能楽鑑賞（日曜日６時～６時55分）

５月26日（再放送）素謡「海　人」（喜多流）
シテ　出雲　康稚
６月２日　素謡「雲雀山」（観世流）
シテ　津村礼次郎
６月９日　素謡「草紙洗」（宝生流）
シテ　當山　孝道
６月16日　素謡「通　盛」（金春流）
シテ　高橋　汎
６月23日　素謡「朝　長」（観世流）
シテ　野村　四郎
６月30日　狂言「薩摩守」（大蔵流）
シテ　善竹　十郎

演能カレンダー

◆名古屋能楽堂◆

（TEL 052－231－0088）（能楽関係のみ）

［５月］
25日(土)　第56回狂言やるまい会名古屋公演（先代野村又三郎七回忌追善）（有料）
26日(日)　名古屋観衛会（無料）

［６月］
１日(土)　名古屋能楽堂定例公演（番組①面）（有料）
〔世阿弥生誕650年〕
―今、世阿弥を観る―
８日(土)　若鯱研究発表会（番組①面）（無料）
若鯱能（番組①面）（有料）
９日(日)　名古屋観世会定例公演能（番組①面）（有料）
16日(日)　名古屋宝生会定式能（番組②面）（有料）
23日(日)　三交会大会（番組②面）（無料）

第７回 若鯱会
６月８日 名古屋能楽堂
能３番、狂言１番

能楽協会名古屋支部では、毎年、六月の熱田祭に合わせて奉納能を開催してきたが、平成十九年から名古屋能楽堂で、若手能楽師の発表の場として、「若鯱能」を開催、今回で第７回を迎え、六月八日（土）午後一時から開催される。

番組は、喜多流能「巴」（シテ長田郷）、金剛流能「三井寺」（シテ加藤かおる、子方・佐々木奏太）、狂言（和泉流）「成上り」（シテ藤波徹）、宝生流能「土蜘」（シテ衣斐愛）

チケットは、全自由席一般二千円、学生（中学生以上）千円、小学生五百円（番組①面掲載）

若鯱研究発表会

また能楽協会名古屋支部では、文化庁との共催により、後継者育成をめざして若鯱研究発表会を、六月八日（土）午前十時から名古屋能楽堂で開催する。

演能は、舞囃子「敦盛」狂言ほか、入場無料。（番組①面）

佐藤友彦師名古屋市芸術特賞受賞記念
お酒落 名匠狂言会
７月14日 名古屋能楽堂

平成二十四年度名古屋市芸術賞の伝統芸能部門（狂言）において、和泉流狂言方・佐藤友彦師が芸術特賞を受賞されたが、狂言共同社では、この受賞を記念して「お酒落　名匠狂言会」を七月十四日（日）午後一時から名古屋能楽堂で開催する。

番組は、佐藤友彦氏作による新作狂言「一文酒」はじめ「無布施経」、大蔵流狂言「右近左近」共同社メンバーによる「鶏聟」の四番。

「お酒落」は、狂言共同社創立の中心となった初代井上菊次郎、伊勢門水らが当時流行の「倶楽部」をもじり参加した「愛知酒落部」（あいちしゃらくぶ）通称「御酒落会」（おしゃらくかい）によっている。今回の催会は創立第十四回目にあたる。

前売はＳ席（正面）七千円、Ａ席（脇正面）五千円、Ｂ席（中正面）四千円。（当日券は千円増）

申込はチケットぴあ（ＴＥＬ０５７０・０２・９９９９、Ｐコード４２９・１７７）、名古屋文化振興事業団チケットガイド（ＴＥＬ０５２・２４９・９３８７）名古屋能楽堂（ＴＥＬ０５２・２３１・００８８）狂言共同社（０５２・８３４・８６０７）、または０５２・９１１・８７８４。（番組②面）

豊田市能楽堂 あじさい能
五流派競演 ６月15日（土）

豊田市能楽堂の名物企画として、朗読で背景を知って能を楽しむ企画として「あじさい能」が六月十五日（土）豊田市能楽堂で催される。

番組は、国井雅比古氏による曽我物語の朗読。

仕舞「小袖曽我」は「宝生流」（シテ十郎・玉井博祐、ツレ五郎・衣斐愛）「金春流」（シテ鬼頭尚久）「金剛流」（シテ十郎・竹市幸司、ツレ五郎・百々康治）

「喜多流」（シテ長田驍）

能（観世流）「夜討曽我」前シテ、後シテ武田大志

入場料　全席指定（税込）正面席五千円、脇・中正面席三千五百円

チケット販売は、豊田市コンサートホール能楽堂事務室（ＴＥＬ０５６５・３５・８２００）インターネット予約　http://www.t-cn.gr.jp/

チケットぴあ（ＴＥＬ０５７０・０２・９９９９　Ｐコード４２６・８０５）

主催　豊田市文化振興財団、豊田市、豊田市教育委員会

名古屋能楽堂六月定例公演

六月一日（土）午後二時開演
名古屋能楽堂

狂言（和泉流）伊文字　シテ　松田高義
アド　佐藤　友彦
アド　佐藤　融
アド　伴野　俊彦
後見　野村又三郎

能（喜多流）砧　長田　長田　驍郷
飯富　雅介　河村総一郎　加藤　洋輝
後藤嘉津幸　大野　誠
後見　高林白牛口二　高林　呻二
地謡　福田　勝　高林　昌司　笠井　狩野　琇鵬　渡辺　康喜　栗谷　幸雄　伊藤　英毅　梅津　忠弘

（午後四時二十五分頃終了予定）

［チケット料金］
指定（前売）四千円
自由席（前売）三千円
当日三千五百円
学生二千円

主催　名古屋文化振興事業団（名古屋能楽堂）
能楽協会名古屋支部

若鯱研究発表会

六月八日（土）午前十時始
名古屋能楽堂

舞囃子　竹生島　○角田　尚香　大鼓　河村眞之介　太鼓　加藤　洋輝　小鼓　船戸　昭弘　笛　○山村　友子　地謡　○吉沢　旭　松山　幸親　八神　孝充　東川　尚史　和久荘太郎　江渕　陽三
（○印　育成会会員）

仕舞（宝生流）田　村キリ　○片桐　賢
国　栖　○片桐　遵
地謡　東川　尚史　和久荘太郎　江渕　陽三

舞囃子　敦盛　○江渕　陽三　大鼓　河村慎之介　小鼓　後藤嘉津幸　笛○山村友子
地謡　東川　尚文　和久荘太郎　○江渕　陽三

舞囃子　葛城　○大川　磨美　大鼓　○河村裕一郎　太鼓　加藤　洋輝　小鼓　後藤嘉津幸　笛　鹿取　希世
地謡　鈴村　昌美　熊谷眞知子　伊藤　雅子　羽多野良子

狂言（和泉流）歌　争　シテ　男　○大橋則夫　アド　何某　○中島　知亮

舞囃子　班　女　○吉沢　旭　大鼓○河村裕一郎　小鼓　船戸　昭弘　笛　○山村　友子　地謡　○角田　尚香　松山　幸親　久田　勘鷗　八神　孝充

舞囃子　西王母　○小林　陸　大鼓○長田　小鼓　後藤嘉津幸笛○山村　朋人太鼓　加藤　洋輝　地謡　東川　尚史　和久荘太郎　○江渕　陽三
（宝生流）

十二時頃終了予定

附祝言

入場無料
御来場歓迎

主催　文化庁
共催、公益社団法人能楽協会名古屋支部
お問合せ先　久田勘鷗事務所
TEL・FAX（〇五一）七三四－六一九二

［平成25年度　次代の文化を創造する新進芸術家育成事業］

若鯱能（第七回）

六月八日（土）午後一時始
名古屋能楽堂

名古屋観世会定例公演能

六月九日（日）十二時三十分始
名古屋能楽堂

能　杜若　片山九郎右衛門　高安　勝久　河村総一郎　加藤　洋輝　後藤孝一郎　藤田六郎兵衛
恋之舞
後見　梅田　嘉宏　吉沢　孝充　旭　武田　大志　武田　邦弘　松山　幸親　八神　久田　勘鷗　高橋　暸一　古橋　正邦
地謡

狂言　蝸牛　山伏　佐藤　友彦　太郎冠者　井上松次郎　主人　鹿島　俊裕　後見　今枝　郁雄

仕舞　雨之段　近藤　幸江
駒之段　今沢　美和
鐘之段　久田三津子
鵜之段　前野　郁子
地謡　加賀　敏彦　祖父江修一　梅田　邦久　武田　大志

能　善知鳥　子方　浦部　美有　ツレ　吉沢　古橋　旭　正邦
間　飯富　雅介　佐藤　融　河村眞之介　船戸　昭弘　大野　誠
後見　松山　幸親　片山九郎右衛門
地謡　八神　孝充　本田　清沢　一政　須部　武田　邦弘　甫　久田　勘鷗　梅田　嘉宏　祖父江修一
（午後四時頃終了予定）

［チケット］
年間自由席券　二〇〇〇〇円（４枚綴り）
当日指定券　八五〇〇円
当日自由席券　六〇〇〇円
学生券　二五〇〇円

［チケット］
（全自由席）TEL・FAX（〇五一）七三四－六一九二
一般二千円、学生（中学生以上）千円
小学生五百円

主催　名古屋観世会

能（喜多）巴　長田　郷　飯富　雅介　河村眞之介　後藤孝一郎　大野　誠
後見　長田　驍　アイ　鹿島　俊裕
地謡　伊藤　英毅　栗谷　浩之　高林　昌司　高林　呻二　小出　甚吉　佐藤　寛泰

狂言（和泉）成上り　太郎冠者　藤波　徹　アド　伊藤　融　アド　伴野　俊彦　泰　後見　野村又三郎
子方　佐々木奏太　加藤かおる

能（金剛）三井寺　高安　勝久　杉江　元　椙元　正樹　佐藤　アイ
後見　百々　康治　豊嶋三千春　竹市　幸司
地謡　融　今枝　郁雄　赤星　恵美　四ツ井つや子　伊藤　雅子　熊谷眞知子　鈴村　昌美　大川　麿美　羽多野良子　河村総一郎　後藤嘉津幸　鹿取　希世

能（宝生）土蜘　従者　犬塚　恵
寺女小蝶　坂口　侑
源頼光　玉井　博祐
衣斐　愛
飯富　雅介　橋本　幸　河村眞之介　船戸　昭弘　加藤　洋輝　大野　誠
橋本　叡
オモアイ　井上松次郎
アドアイ　佐藤　融
アドアイ　鹿島　俊裕
後見　衣斐　正宜　竹内　澄子　佐藤　耕司
地謡　竹内　孝成　石森　智幸　平田　正文　東川　尚史　和久荘太郎　江渕　陽三

附祝言

主催　能楽協会名古屋支部
お問合せ先　久田勘鷗事務所
TEL・FAX（〇五一）七三四－六一九二

午後五時半頃終了予定

佐藤友彦師 名古屋市芸術特賞 4月28日 受賞祝賀会 開催

和泉流狂言方・佐藤友彦氏は、一長年にわたる芸術創造活動により、名古屋市の芸術文化の振興に寄与した功績により、ことし二月、名古屋市芸術特賞を受賞、同師の栄誉を讃え、狂言共同社、東海能楽研究会、雲形本研究会の主催により、四月二十八日（日）午後六時から名古屋ガーデンパレスで受賞祝賀会が開催され、百四十人が出席してその栄誉を祝した。

発起人は林和利（代表）飯塚恵理人、井上菊次郎、井上松次郎、大野弘之、筧鉱一、野村又三郎、久田勘鷗、森釗の各氏。

会は林和利発起人代表のあいさつはじめ、名古屋大学山下名誉教授、発起人各氏、安田文吉氏らの祝辞、祝電、花束の贈呈、さらに佐藤友彦作・新作狂言「二文酒」が上演され祝賀会にふさわしい演し物で参会者が鑑賞、受賞者佐藤氏のあいさつが行われ、午後八時半すぎ盛会のうちにおひらきになった。

佐藤友彦氏あいさつ

初舞台より数えて六十余年、若い日には狂言をやめようと思った日々もありました。働き盛りの辛いときには、「もし狂言をやっていなかったら…」などと考えたりしました。そのたびに思い出されたのは、ことあるごとに亡き父が語ってくれた名古屋の和泉流狂言の素晴らしさ、それを伝える共同社への厚い想いでした。今日「狂言をやってきて本当によかった」としみじみ想うと同時に、父や先輩たちが私を導いてくれたものと確信しています。この同じ役目を今後私が果たしてゆかねばならぬと肝に銘じております。

当地の各流儀・流派・結社 社中の消息を辿る ⑤④

竹尾　邦太郎

拾壱　「野村四郎　名古屋公演」③

――承前――

平成一一年八月二二日・第拾六回野村四郎名古屋公演。

此の年は先号に既述の「千手・郾曲之舞」と高濱虚子の新作能「實朝」との独演二番能（写真）。虚子の「實朝」は大正八年（一九一九）雑誌『中央公論』新年号に新作能として発表されたという。虚子、当時45歳、因に同じ素材を扱った土岐善麿（一八八五―一九八〇）の新作能「實朝」は自著『新作能縁起』昭和51年6月・光風社書店刊の「実朝について」に拠れば、

―前略（昭和25年）十月二十八日、この新曲は、まず素謡を鎌倉八幡の拝殿で奉納し、翌十一月十一日、染井能楽堂で初演を行った。鎌倉のときは、高濱虚子翁なども臨場され、染井のときは、窪田空穂翁をはじめ歌壇の知人たちも多数来観された。」とある。

染井でシテを勤めた喜多實（当時50歳）は、自著『演能前後』昭和44年8月・光風社書店刊の「實朝　演出手記」に次のように記している。

―前略―いったい聖徳太子や実朝が、なぜこれまで能にされていなかったか不思議に思う。もちろん「上宮太子」という曲は古くあったが、これは廃曲とされるほどの凡作であり、「実朝」は高浜虚子さんによって初めて採り上げられたばかりで、現行曲には入っておらず、廃曲の中にも見当たらない。楠木正成や和気清麿とちがって、これはもう、すぽっと能にはまり込みそうな人たちであり、題材である。その意味で、土岐さんとの第一作が「夢殿」であり、いままた戦後の第一作が期せずして「実朝」になってしまった。

その「実朝」の演出手記をという土岐さんからの指令である。ところが、大体の構想はできていながら、まだ局部的に、作詞の土岐さんと揉み合っている最中なので、これが謡の節となり、能の型になるまでには、どれほど変って行くか、見当がつかない。大ザッパな考案を話してみるしか仕方がない。

じつは私の頭の中では、中入を境としての、後場のほうが先に幻想されていた。それはこうである。

一昨年だったか、時事の能で金春流の「融の笏之舞」というのを見た。これは常の「融」とは、その後場の舞―早舞という―がたいへん違って、大小鼓、太鼓の三拍子が、一つの手に合流してすこぶる急調となり、天地を震撼させるほどの勢いで打ちまくる部分が、舞の冒頭となる、といった特殊のものだが、それは見ていて胸を圧

（③面へつづく）

第57期・第3回

名古屋宝生会定式能

六月十六日（日）午後一時始　名古屋能楽堂

能　**俊寛**　成経　辰巳大二郎　康頼　内藤飛龍　辰巳満次郎　高安勝久　河村総一郎　後藤孝一郎　鹿取希世　間　奥津健太郎　後見　玉井博祐　衣斐愛　地謡　杉浦敏二　津田節武　稲川寿一　大森尚人　前田晴啓　玉井道夫　衣斐正宜　佐藤耕司

仕舞　**江口弱法師**　竹内澄子　衣斐正宜　地謡　山内崇生　前田晴啓　石黒孝　和久荘太郎

狂言　**茶壺**　スッパ　野村又三郎　中国の者　奥津健太郎　目代　松田高義　後見　伴野俊彦

能　**大江山**　和久荘太郎　橋本雅介　飯富宰　杉江正樹　梶元正樹　有松遼一　岡充　河村眞之介　後藤嘉津幸　加藤洋輝　大野誠　間　井上松次郎　野村又三郎　後見　衣斐正宜　辰巳大二郎　玉井博祐　衣斐愛　地謡　真野久　鈴木久仁七　平田正文　石森智幸　石黒孝　内藤飛龍　山内崇生　辰巳満次郎　（終了予定四時半頃）

主催　名古屋宝生会　事務局　名古屋市昭和区御器所3―23―19―602　衣斐正宜方　TEL／FAX　052・882・5600

正会員券　一八〇〇〇円（年間通用四枚綴り）　鑑賞券　五〇〇〇円　学生券二〇〇〇円

6月2日・ワークショップ開催

第三回名古屋宝生会定式能の鑑賞に役立つワークショップ（事前講座）が六月二日（日）午後二時から名古屋能楽堂地下稽古室で開催される。

参加料千円（年間会員券お持ちの方は無料）開場午後一時半、終了予定午後三時半。

［宝生会定式能］第四回　十一月十七日（日）午後一時始

能「野宮」玉井博祐　能「殺生石」白頭宝生和英　仕舞「龍田」キリ佐藤耕司　仕舞「船橋」内藤飛龍　他狂言

三交会大会

六月二十三日（日）午前十時半始　名古屋能楽堂

番外仕舞　二人静　瀬戸洋子　久田三津子

連吟　鶴亀　外山恵美　北澤育代　渡辺幹子　増永悦子　中村寿賀子　園さなえ　江崎澄子　東北

素謡　**野杜宮若**　二ノ宮眞佐恵　清水義也　杉本昭夫　藤谷音彌

小督　菊池翔子　坂井セツ子　杉山善宏　久田勘鷗

班女　伊藤和美　上田公威　上田彰敏

当麻　秋田恵美子　戸松花枝　早川功一

仕舞　**東北丸**　北澤育代　外山恵美

熊野　二ノ宮眞佐恵　増永悦子　渡辺幹子

弱法師

舞囃子　**花月**　山田紗智子　河村眞之介　後藤孝一郎　竹市学

唐船　山内満智子　河村眞之介　後藤孝一郎　加藤洋輝　竹市学

安宅　大輪真由美　河村眞之介　後藤嘉津幸　竹市学

仕舞　**井筒**　瀬戸勝治　**遊行柳**　後藤阿紀　**歌占**　早川功一　**船弁慶**　菊地翔子

能　**三井寺**　子方　原田祥英　原田千恵子　高安勝久　杉江元　上野義雄　後藤孝一郎　鹿取希世　間　井上松次郎　佐藤融

舞囃子　**高砂**　夏樹陽子　上野義雄　後藤嘉津幸　加藤洋輝　鹿取希世

祝言　能　**猩々**　久田勘吉郎　高安勝久　河村総一郎　後藤嘉津幸　加藤洋輝　鹿取希世

（終了予定五時半頃）

主催　三交会　久田三津子

［御来場歓迎］［入場無料］

佐藤友彦名古屋市芸術特賞受賞記念 第14回 御酒落名匠狂言会

七月十四日（日）午後一時半始　名古屋能楽堂

新作狂言（佐藤友彦作）

二文酒（にもんざけ）　太郎　佐藤融　妻　今枝郁雄　（後見　井上松次郎）

（番組③面へつづく）

（②面よりつづき）

迫されるような、雄壮な感じのものであった。面白いには違いないが、融大臣の遊舞の姿とは何としても受け取りかねた。むしろ菅相丞の憤怒の舞とでもいいたいものであった。いや、それよりも実朝の「大海の磯もとどろによする浪――」、あの大海の歌をこの囃子に乗って舞ったら、きっと面白いぞ、それそれ、と私はこの瞬間に、「実朝」の後場を頭の中に一刷毛で描いてしまった。これは、あるいは「大海の舞」といったほうがいいかもしれないと考えたりした。しかし、これだけでは一曲の能としては成立しない。幸い、といっては変だが、あの悲劇的な運命を中心として、当時の険悪な政情という水の中に、たゞ一滴の油として孤立する苦悩の薄命児、渡宋に敗れ、兇刃に倒れるまでの暗い鬱屈した気分を盛り込んで前場とし、後半を自由豁達の歌人として空や海に奔放させたら、前後の対照抵抗、すこぶる面白くはなかろうか――。後略―

虚子と善麿の「実朝」、能本として舞台に掛けられたのは後発の善麿が先、虚子は鎌倉八幡での奉納素謡をどのように聞いたであろうか。虚子（一八七四―一九五九）の「実朝」初演は漸く平成八年（一九九六）十月二十六日、「ホトトギス創刊百年記念行事」の一環として堂本正樹補綴、節付・作舞に携わった野村四郎（当時60歳）シテで、鎌倉芸術館小ホールで行われる。再演は平成十年二月十四日、野村四郎・大倉源次郎の主催による大槻清韻会能楽堂での大阪公演。当日の番組案内リーフレットには次のようにある。

再演にあたって
ホトトギス編集長　稲畑廣太郎

平成八年十月二十六日「ホトトギス創刊百年記念行事」の一環として「実朝」の初演が果たされた事はまだ記憶に新しい事であります。この感激の醒め遣らぬ平成十年二月十四日に、再び野村四郎先生のシテによる再演が大阪にて実現される事は、初演を御覧になら

なかった方は勿論、再び鑑賞できる私共にとってもこんな嬉しい事はありません。しかも今回は本格的な能舞台での上演。能楽ファン、俳句ファンのみならず是非この夢幻の世界を堪能して頂きたいと存じます。

作能にあたって　野村四郎

虚子作、能「実朝」を舞台に実現する大任を受け、一昨年秋に上演いたしました。作者は実朝の歌とその人物像の、いかなるところに魅かれたのか、そして現代における実朝の魅力は何か、そんなところに思いを馳せ、多くの方々のご協力を得て、作能いたしました。再演に向け、更に工夫を凝らした今回の大阪公演、ご高覧をお願い申し上げます。

虚子作の能「実朝」の特色　堂本正樹

俳人高濱虚子は、明治の文豪夏目漱石らとの交友から謡と能に親しみ、大正二年の「ホトトギス二百号記念文芸家招待能」など、喜多六平太・桜間金太郎・左陣の豪華番組でした。泉鏡花・徳田秋声・岡鬼太郎・岡本綺堂・與謝野晶子・久保田万太郎・正宗白鳥・志賀直哉ら三百人が参会しています。松井須磨子もいるのが時代相。その虚子は鎌倉舞台（現在のものとは違います）などで何度か素人能（写真）も演じ、技術の知識にも長じていました。そこで幾つか新作能を作っています。「奥の細道」など再演を重ねていますが、この「実朝」は意外にも一昨年野村四郎によって初演されたものです。鎌倉に遊んだ旅僧が銀杏の葉を掃く男に実朝卿の人柄を聞くと、この者こそ実朝の幽霊と名乗って消え、後銀杏の樹は割れて船となり、実朝の真の姿が現れて己の人生を物語り、舞います。「割れて砕けて裂けて散った人生」。

実朝が中国に渡ろうと作った船は、海に浮かばずに砂浜に朽ち、彼の挫折のように思われていますが、実は浮かんで宇宙次元の世界に船出していたというのが、虚子の作意です。詩人は詩人を知り、実朝を友として救済したのです。

（筆者註　「ホトトギス二百号記念文芸家招待能楽番組」及び「ホトトギス二百号記念催能来会者」については昭和17年6月・丸岡出版社刊の高濱虚子著『能楽遊歩』に記載がある）

再演時の配役はシテ野村四郎・ワキ宝生欣哉・アヒ野村良介、藤田六郎兵衛・大倉源次郎・柿原崇志・金春国和、浅井文義（地頭）大槻文藏（主後見）。補綴（稲畑汀子）台本・演出（堂本正樹）節付・作舞（野村四郎）脇制作（宝生閑）間制作（野村万蔵）囃子作詞（六郎兵衛・源次郎・崇志・金春惣右衛門）

此の度、第拾六回野村四郎名古屋公演の番組は、堂本正樹の解説のあと能「千手・郢曲之舞」（先号既出）、狂言「鐘の音」野村又三郎・野村小三郎、新作能「実朝」シテ野村四郎・ワキ宝生欣哉・アヒ野村小三郎、藤田六郎兵衛・大倉源次郎・河村総一郎・三島元太郎、浅井文義（地頭）大槻文藏（主後見）。

因に此の六年後、平成一七年七月九日、大槻能楽堂自主公演能・能の魅力を探るシリーズでの上演がある。配役はシテ大槻文藏・ワキ福王和幸・アヒ茂山七五三、野口伝之輔・曽和正博・白坂保行・中田弘美、阿部信之（地頭）泉泰孝（主後見）。

平成一二年七月八日・第拾七回野村四郎名古屋公演。番組は仕舞三番「鵜之段」浅井文義「梅枝」泉嘉夫「天鼓」上野朝義、能「砧」・梓之出」野村四郎・浦田保浩・鏑木岑男・高橋正光・佐藤友彦・一噌庸二・福井啓次郎・河村総一郎・小寺佐七・浅井文義（地頭）泉嘉夫（主後見）。

平成一三年七月三〇日・第拾八回野村四郎名古屋公演。仕舞三番「笠之段」観世暁夫「井筒」泉嘉夫「邯鄲・舞アト」浅井文義・能「江口・干之掛」野村四郎・浦田保浩・浅見慈一・宝生閑・殿田謙吉・梅村昌功・野村小三郎・藤田六郎兵衛・曽和正博・河村総一郎・観世暁夫（地頭）泉嘉夫（主後見）。

「善知鳥」著者一鎌倉能舞台にて
『能楽遊歩』より転載

平成一四年六月二二日・第一九回野村四郎名古屋公演。

能「半蔀」野村四郎・宝生閑・野村又三郎・藤田六郎兵衛・河村総一郎・藤井完治（地頭）浅井文義（主後見）、狂言「膏薬煉」野村又三郎・野村小三郎、能「雷電」野村四郎・宝生閑・野村小三郎・藤田六郎兵衛・柳原冨司忠・河村眞之介・助川龍夫・浅井文義（地頭）藤井完治（主後見）。

第四回・一六回と同様、独演二番能。

平成一五年八月二四日・第二〇回野村四郎名古屋公演。番組は舞囃子「龍田・移神楽」野村四郎・藤田六郎兵衛・福井啓次郎・河村眞之介・観世元伯・上野朝義（地頭）、講演「隅田川の演出」藤田六郎兵衛があり、能「隅田川・彩色」野村四郎・福王茂十郎・福王和幸・藤田六郎兵衛・福井啓次郎・河村眞之介・浅井文義（地頭）赤松禎英（主後見）。

この野村四郎名古屋公演も二十周年を迎えたが第五回・第十回の時のように殊更「記念」とは謳っていない。初回に演じた「隅田川」を、今回は「彩色」の小書付、また、子方無しで再演するのが味噌か。ところで此の公演に先立つ三週間前の八月三日、会の肝煎り後楯であった小嶋克子さんが病を得て亡くなる。翌年、当然、追善能が行なわれるであろうと思ったが何の音沙汰も無く「野村四郎名古屋公演」の会は立消えになってしまった。見所はこれまで採り上げられなかった「道成寺」や老女物は「卒都婆小町」などを期待したであろうが。

無布施経（ふせないきょう）　僧　佐藤　友彦
右近左近（おこさこ）　右近　大藏吉次郎　檀那　大野　弘之（後見　鹿島　俊裕）　妻　大藏　教義（後見　宮本　昇）
鶏聟（にわとりむこ）　聟　鹿島　俊裕　舅　井上松次郎　教え手　井上　蒼大　大橋　則夫（後見　大野　弘之）
地謡　今枝　佐藤　佐藤　中島　郁雄　友彦　融　知亮
（終演予定　十六時ころ）
［前売券］S席七千円　A席五千円　B席四千円（当日券千円増）
主催　狂言共同社

◆仲春から晩春の舞台◆

「青陽会定式能」と「名古屋能楽堂三月定例公演」「茂山狂言会　春」「名古屋宝生会定式能」

竹尾邦太郎

「羽衣」

松立木が正先に、そこに掛けられる長絹（羽衣）は切戸から。舞台整うと独り出る漁夫白龍（ワキ正樹）、三保の松原の春景めでるにも連れ立つワキツレが欲しい。四辺の空気に、香を炷き染めた美しい衣に気付かされ、膝を折り叮嚀に取り上げて立ち、家宝にと持ち帰るところ天人（シテ邦子）に呼び掛けられる。咎めるよりは困惑の風情でワキと問答に出て来るシテ。しおらしく初々しい。衣無ければ天上は叶わず、空飛ぶ鳥に思いを馳せるシテ、〈春風の空に吹くまで懐しや、とシヨル姿を見兼ねて「衣を返し申さうずるにて候」とワキ、これを聞くや漸くシテヨリを解くシテの悲嘆の深さも一転、「あら嬉しや」と素直、思わず手も出ようかの心。問答の末、無事シテの手元に戻る衣（写真）、物着済み舞ゲセは〈蘇命路の山を映して、と雲ノ扇に富士山を見る心（写真）美しく極めるが、次いで序之舞を舞上げワカ、地（修一・嘉宏・大志ら）と掛合になると流石に息が上がる。破之舞からキリの型所、喜悦して天上する勢い余り感じられないが、一所懸命な舞台が好ましかった。囃子は友子・昭弘・裕一郎・義命。若い笛と大鼓、師の六郎兵衛と総一郎、終始後見を務める姿に芸の伝承の大事を目の当りに、嬉しかった。（1時間11分）

青陽会定式能「羽衣」
村井邦子

青陽会定式能「羽衣」
村井邦子
（杉浦賢次氏撮影）

「素袍落」

思い立ったが吉日とはいえ、俄の参宮を言い出す主（アド則夫）、かねて同道を望んでいた伯父（小アド友彦）を誘うよう申し渡されて太郎冠者（シテ郁雄）、先方へ出向けば、急な事で行けぬが門出の祝いにと酒を振舞われて（写真）調子に乗り酔呶（酔ってくだをまく）、辞去の際には餞別に素袍一領を頂戴、それを着用して代参を、と依頼までされる。小歌気分に上機嫌の太郎冠者、酔態を的確にみせれば、捌けたところをみせて伯父、懐の深さを。キリは落した素袍を主に拾われたを引ったくり、「俺がのぢゃ、俺がのぢゃ」と逃げるを「此方へおこせ、此方へおこせ」と主が追込む。狂言の人物に成るには主はこれから。（33分）

青陽会定式能「素袍落」
今枝郁雄
（杉浦賢次氏撮影）

「藤戸」

土地の漁夫から知り得た藤戸の瀬戸の浅瀬、手柄を立てるため此の機密の漏洩を恐れ、彼を刺殺した佐々木盛綱（ワキ元）、目論見通りに戦功を得て恩賞に児島庄を賜り入国、人心掌握のため「何にても訴訟（嘆願）の事あらば罷り出よ」の触レを従者（ワキツレ淳）に出させると、漁夫ノ老母（シテ幸親）がやって来る。シテの哀訴に高圧的だったワキも打たれ、事の一部始終を噛みしめるように、重々しく語るワキ語が惹きつける。シテは、〈あの辺ぞと夕波の、と子が殺害された現場の方を見遣るところ、クセのキリへ亡き子と同じ道に、とワキへ詰め寄る（写真）ところ、払い退けられて五六足も膝退し〈我が子返させ給へや、と双手を差し出すところ（写真）など、全般に思い入れたっぷりの細かい所作・描写に写実の妙をみせるが、それだけにいわゆる当て振りの嫌いも。ワキの命で下人（アヒ融）がシテを私宅へ送込み、亡き漁夫を管絃講で弔う旨を触レて退くと後場。

（④面へつづく）

（③面よりつづき）

弔いは喜ぶが「恨みは尽きぬ妄執を申さんために」と漁夫ノ霊（後シテ幸親）、ワキと掛合に刺殺されるに至るを気合充分に再現。へさるにても忘れ難や、と退詰める心は、氷のようへ刀を抜いて（写真）、とワキにあの時の惨状見せ付けるかの凄味。シテ幸親、力一杯の熱演だった。囃子は希世・孝一郎・総一郎、地頭を勘鷗。（1時間13分・2月17日・青陽会定式能）

青陽会定式能「藤戸」
左より松山幸親、杉江　元

「茸」

いつの間にか屋敷内に夥しい茸がはびこり困惑するばかりか無気味に思えて所ノ者（アド友彦）、法力の強いという山伏（シテ郁雄）を訪ね、膝を折り両手ついて頭を下げ茸退治を懇願。別行もあるが、と勿体を付けやっては来たシテ、加持を施すも一向に埒が明かず、秘法なすびの印を結ぶも処置無く焦るばかり。そこへ機を窺って居たかのような巨大な鬼茸（立頭・菊次郎）に出遇うと、「さて〳〵鈍な事ちゃ、某はそっと去なう」と逃げ出すところを脅されることに（写真）。舞台数が増え進境著しいシテ郁雄、良い味がある。茸はサイボーグでは。（25分）

青陽会定式能「藤戸」
左より松山幸親、杉江　元
（杉浦賢次氏撮影）

「熊野・膝行・三段之舞」

侍女朝顔（ツレ愛）の齋す老母からの文を読む熊野（シテ正宜）、文之段は坦々と読み進める中にも（写真）母の病を案じ滲む憂愁の心持ち、へ命の内に今一度、に感情移入させられる。へ御暇を、と再度シヲル涙の訴えも叶わず、「この春ばかりの花盛り」に我執する平宗盛（ワキ雅介）の、憎げなのもよい。花見車に入り、へ東路とても東山せめて、と左の柱を掴み、左へ、右へ、と見てへ懐かしや、とシヲル（写真）遣る瀬無い姿に望郷の思いをみせる。都路を花の清水寺までの道行は、へ雲かと見え、る花盛りをや、退って右に眺め、へ名に負ふ春の気色、を賀茂河原に見下ろし、へ経書堂は、左に見るうちに地（輝和・満次郎・耕司ら）と掛合にへこゝよりへおりゐの、と下車するシテ、車中概ねクモリがちの面は晴れやらぬ胸のうち。へ佛の御前に、と正先近く下居にへ母の祈誓を、願うところ、従者（ワキツレ宰）に急かされて花見の宴へ。侭ならぬ世の習いを嘆き、自然界の佇まいに平穏を求めるかのサシ・クセ。へ南を遙かに眺むれば、と上ゲ端扇に幕を見込み、へ熊野権現と合掌するところ、唯々祈りあるのみ。

「妾はお酌に」とワキへ立ってゆけば、舞を謂われ、病母を案じる屈託した思いは、短かく舞い上げる心に三段之舞。舞の中、静かにシヲリ下居にシヲリ返シて立つ、などあって舞い続け、右、左に落花を目で追う風情は、「なう〳〵」とワキへアシラヒ、村雨に散る花にワキの注意を喚起、へ散るを惜しまぬ（人やある）、と落花を掬う心はシヲルと大小前に下居。紅い短冊を出して二度に分け歌を認めると扇面に載せ、ワキへ膝行して渡す（写真）と膝退、ワキがそれを一気に読む様子にシヲルとへこれ観音の御利生なり、と合掌のシテ、この辺り感興を唆る。

青陽会定式能「藤戸」
松山幸親

名古屋能楽堂三月定例公演
「熊野・膝行・三段之舞」
衣斐正宜

名古屋能楽堂三月定例公演「茸」
左より今枝郁雄、井上松次郎

名古屋能楽堂三月定例公演
「熊野・膝行・三段之舞」
左より衣斐正宜、飯冨雅介、橋本　宰（うしろ）
（杉浦賢次氏撮影）

キリはへこの侭に、と居立って両手つき一礼して立つと、地のうちに橋懸へ、二ノ松で雲ノ扇し、幕際で地一杯聞いて留メた。いつもながら堅実な舞台だが、顎を引き背筋の伸びた姿勢の逆、背筋が曲がり若々しさに欠け熊野にして年寄りめくのが難、残念。（1時間42分・3月2日・名古屋能楽堂三月定例公演）

「以呂波」

就学前に子に字を教えようと腐心する親は当今も。「イロハ」を教えかけて子（シテ鳳仁）の小賢しさに業を煮やした親（アド千五郎）、物を習うという事は師匠の口写しを真似ること、と教えれば、「イロハニホヘト」の切り「ヱヒモセス京」まできて「ヱヒモセス京、と読め」と教えれば、「と読め」まで真似をし、「いや、京とばかり」と親が正せば、「いや京とばかり」と子の鸚鵡返しに怒れば、怒りの言葉そのまゝが返ってきて親は収拾がつかなくなりお手上げ。実生活では祖父の千五郎を相手に孫たかまさ、無邪気に巫山戯ている景、微笑ましい。（9分）

「二人袴」

買うて下されい」「弁慶の人形を供っ気の抜けない弟（シテ千三郎）の聟入、士烏帽子に赤の頂頭掛が如何にもそれを象徴する。舅方へ一人では行けないと言うのを案じて門前まで付添う兄（アド七五三）、しかし太郎冠者（アド竜也）に見せつけられ二人して舅に。もとより座敷へ上がるつもりのなかった兄、正装の長袴は聟入（アドやすし）の前へ出ることは此の一領だけ。苦慮した兄当人の弟の一領を前後に裁ち、兄弟それ〴〵後ろを警戒しつゝ前だけ宛がってその場を繕い誤魔化すが、宴となって盃が行き交えば肴には舞が。調子づく弟を牽制しつゝ兄、舅のたっての要望で三人が連舞をすることに。小舞は「雪山」、酒の勢いもあり興に乗り、警戒心も途切れてつい後ろが疎かになれば、太郎冠者に後ろを見破られて兄弟、舅と太郎冠者に呵々大笑されるどさくさ紛れに「ちゃっと行け、ちゃっと行け」と兄は弟を叱咤、二人して逃げるを「まづ待たせられい、まづ待たせられい」と追う舅。長袴にこだわらなければならない祝い事も、切羽詰まれば臨機応変に対処、それも破綻すれば如何…。仕来りを軽妙に揶揄する趣は、七五三・千五郎兄弟のくだけた大っぴらな仕方に生彩。そう言えば、勅使接待役の浅野内匠頭長矩も袴が問題だった。（36分）

「箕被」

連歌にかまけて家計を顧みない夫（シテ正邦）に愛想を尽かし暇を取る妻（アド童司）、是が非にもと離縁の印を要求。もとよりすっかんの夫、妻が手慣れた箕を与えれば、手にも提げられまいと被いて去って行く妻。その姿に触発され、面白い、とどこまでも連歌狂いの夫、妻の父も連歌好きとて「未だ見ぬ二十日余りに三日月の」と発句を妻に託せば、妻も妻とてこれまでの生活環境に因る然るべき潜在の才、発句を詠みかけられたら脇句を返すが定、と一旦引返せば、「やれ〳〵それは優しい事をおしゃれ」と夫、妻が「今宵ぞ出づる身こそ辛らけれ」と付ければ、今更のように驚く夫は不徳を恥じ、許しを乞い、縒りは戻って再び固めの盃事に。肴はへかけて通へや岩橋の、と「葛城」の一節や「ざざんざ」、キリは「芦刈」の一節へ浜の真砂は読み尽し読み尽すとも此の道は尽きせぬや只もてあそべ、などと連歌の道を謳歌する（?）のが可笑しく、へ怨みうち忘れてありし昔に帰りあふ縁こそ嬉しかりけれ、は少々都合よすぎるが、「ちゃっと行かしめ、ちゃっと行かしめ」と、夫の誘込みに「参ります。参ります」と応じる妻、初々しい童司が正邦に伍してよい味をみせた。（22分）

「巴」

前場。木曽からの旅僧（ワキ雅介）、上洛の途次、近江は粟津の原の祠でシヲル里女（シテ飛能）に出遇い、不審すれば問答に祠は同郷の木曽義仲を祀ると分かると、里女は同郷の誼に夜もすがら回向して霊を慰められよ、と勧める。中入地（正宜・満次郎・耕司ら）へげに有難き値遇かな、とワキとの出合いを下居に合掌して感謝し、へさる程に、と立つと、笛柱の方に入相の鐘の音を聞く心持ちをみせ、亡者の名をへ知らずは此の里人に、とワキへ左袖アシラヒ詰メルところなど中々の味。シテが中入、ワキは祠に参詣に向かう里人（アヒ菊次郎）と問答に。ワキに乞われアヒが義仲と巴との子細を叮嚀に居語りして退くと後場。

義仲の最期に、女ゆえ殉死を許されぬ憾みは、義仲の戦歴から自刃に至るクセからロンギへの描写に。長刀掻い込む大柄なシテの凛々しい床几の姿も、泥田に馬を乗り入れ焦るところも、籠る力の充実ぶりを。へかゝり処に、と床几を立ち義仲の最期は正先。巴に返り、殉死は叶わず形見は木曽への義仲の厳命。へ涙に咽ぶばかり、とシヲルとへかくて御前を、と長刀取りキッと立つと長刀捌き颯爽と敵を追い橋懸へ。この間に後見は正先に義仲の遺品の白水衣・小太刀を出して置くと、へ今はこれまでなり、と戻るシテはへ御枕のほどに、と下居に遺品を見詰め、へ巴泣く泣く、と遺品双手に戴き面伏せるところ哀感も一入。物着は後見座、へその際までの、と白装束に身を改め常座に、へ一人落ち行きし（後めたさ）、と笠を置きワキに合掌、立って留メ拍子。シテ巴の心情よく掴んだ心の籠る立派な舞台、祖父泰二師を思い出した。（1時間15分）

「咲嘩」

連歌講の当屋になった主（アド郁雄）、宗匠には都の伯父御を、と太郎冠者（シテ友彦）を使いに遣れば、碌に名も所も問わずに出掛ける迂闊。連れて戻ったを見れば伯父御に非ず主もよく知る都で咲嘩の異名をとる名うてのスッパ（アド弘之）。即刻帰せば事が荒立ち、却って害が及ぶを恐れて主、丁重に持て成して帰そう、と太郎冠者に接待をさせれば冷汗もの。堪り兼ねた主は、全て自分の言う通り、為る通りせよ、と釘をさし、「お盃を出せ」と命じれば、太郎冠者は太郎冠者で「お盃を出せ」と咲嘩に命じる始末。主が叱れば叱る程、とばっちりは客人たる咲嘩に及び、為す術も無く咲嘩は只々狼狽するばかり。三者、役柄を得て好演、調和のとれた素晴らしい舞台。（35分）

「邯鄲」

粟飯を一炊する間の夢の中に、人の一生はたゞ一睡の夢の世と悟る哲学青年盧生。

勅使（ワキ勝久）から王位継承のこと告げられるなどあって真ノ来序の囃子（誠・昭弘・総一郎・洋輝）で台上に栄耀栄華の中に在る盧生（シテ愛）、大臣（ワキツレ元）の奏聞に、弥増しの長寿を、と仙薬の酒を勧められ、舞童（子方・侑）の酌。子方の謡はへ我が宿の、だけに張りのある力強い大きな声が欲しい。一般に女児の子方は声がか細く、今回のようにシテが小柄だと、背丈が伸びた子方とは絵になり難い嫌いも。

子方に触発されるかに台上で舞うシテの楽は、所謂空下りに一瞬左足を踏み外し、ハッと引上げるところ、辺りを窺うような気がしたが面白かった。へ万木千草も、と二ノ松へ抜け、へかくて時過ぎ頃去れば、と数拍子踏み、返シ句に小刻みな早足で脇正へ、大臣と舞童は太鼓横から横板を通って切戸へ退いたが、笛座へ向って舞台を斜に突っ切り忽々と消えて行く趣が感じられず、何かこそ〳〵隠れるような気がしないでもなかった。そこに気をとられ分らなかったが、シテはする〳〵と台に寄り拍子踏まず一気に飛込んだか。キリは宿ノ女主（アヒ融）に起され、起き上るとへ（何事も）一瞬の夢、と唐団扇で強く空を打つところに夢を打ち砕く思いをみた。台を下り、へ求むる知識（高僧）は此の枕、と枕を指シ、再び台に上がると枕を押し戴き一礼するところには、へげに有難や邯鄲の、枕への感謝が素直にみえた。そうなくきれいに纏まった印象だが、惹きつける迫力は余り感じられなかった。（1時間17分・3月17日・宝生会定式能）

小舞二番「柳の下」茂山竜正、「宇治の晒」茂山虎真、正邦の双生児で舞台狭しと元気一杯の舞ぶりに栴檀は双葉より芳し、と印象づける。因に茂山狂言会は昭和四七年（一九七二）生の正邦を頭に昭和五十年代から平成九年頃まで、正邦・宗彦・茂・逸平、昭和五八年生の最年少の童司たちが年齢に応じて年毎に入替り小舞を舞ってをり本拠地京都では名物であった。

他に「縄綯」千五郎・正美・あきら、「千切木」茂・七五三・洋海・薫・千三郎・実・守之・浩紀・逸平、があった。（3月16日・茂山狂言会　春）

能楽の友

発行　能楽の友社
名古屋市千種区千種２丁目18－18
（郵便番号　464-0858）
電　話（052）731－7984
ＦＡＸ（052）733－2837
振替口座　00800－6－36393

購読料　１年　1100円
郵送の場合　１年　1800円
一　部　100円

ＮＨＫ放送予定（平成25年６～７月）

◆ＮＨＫ－ＦＭラジオ能楽鑑賞（日曜日６時～６時55分）

６月30日　狂言「薩摩守」（大蔵流）　シテ　善竹　十郎
　　狂言「子盗人」（大蔵流）　シテ　大蔵吉次郎
７月７日　素謡「昭　君」（観世流）　シテ　木月　孚行
７月14日　素謡「鬼界島」（喜多流）　シテ　塩津　哲生
７月21日　素謡「融」「班女」（部分）（観世流）
　　シテ　大西　智久
７月28日　素謡「安　宅」（宝生流）　シテ　今井　泰男

◆古典芸能への招待◆
ＮＨＫ・Ｅテレ
７月28日(日)　21：00～23：00
・金剛流能「正　尊」
　シテ　金剛　永謹、ツレ　豊嶋三千春
　アイ　善竹　隆司
・大蔵流狂言「蚊相撲」
　シテ　善竹忠一郎、アド　善竹忠重・善竹隆平
・一調「蝉　丸」
　謡　金剛　永謹、小鼓　曽和　博朗

名駅薪能

能「鶴亀」「殺生石」
狂言「盆山」

７月28日名駅タワーズガーデン

「名古屋名駅薪能」は、ことし第12回をむかえ、きたる７月28日（日）観世流宗家・観世清和師が来演して、ＪＲ名古屋駅タワーズガーデン特設会場（ＪＲ名古屋駅桜通口駅前広場）で開催される。

開場午後五時、開演午後六時。

入場は無料、ただし整理券が必要。整理券の応募方法は、往復はがきに、郵便番号、住所、氏名、年齢、電話番号、希望席数（１通２名まで）を記入のうえ、次の宛先へ送る。応募締切り７月10日。当選発表は発送をもって替える。

宛先　〒453・0024　名古屋市中村区名楽町４－16、大黒寺内、名古屋名駅薪能実行委員会事務局。電話052・482・3580

ホームページからの応募　http://www.takiginoh.jp

主催　財団法人観世文庫、名古屋名駅薪能実行委員会、後援・愛知県、名古屋市、愛知県教育委員会、愛知芸術文化協会、愛知県観光協会、ＮＨＫほか、民放各社、報道関係各社。

第12回名古屋名駅薪能の開催にあたって

東海旅客鉄道株式会社
代表取締役会長　葛西敬之

名古屋の夏を彩る名古屋名駅薪能の開催を今年も迎えられることを、心よりお祝い申し上げます。

近代都市「名古屋」の玄関口、ＪＲ名古屋駅において日本の伝統芸能である「能」が演じられる非常にユニークなこの催しも着実に回を重ね、今年で12回目となります。これもひとえに財団法人観世文庫や名古屋名駅薪能実行委員会をはじめ、地元の皆様方のご尽力の賜物と感謝致しております。

併せまして、平成21年から始まりました名古屋名駅薪能全国学生能楽コンクールも今年で５回目を数え、名駅薪能が更なる拡がりを見せていることに対し、協賛する一企業として大変嬉しく存じます。

この大変意義深い行事が、今後も多くの皆様に親しまれることを期待いたします。

［能組］

能「鶴亀」　シテ久田勘鵬、ツレ・鶴・久田三津子、亀・久田勘吉郎、ワキ森常好　ワキツレ森常太郎、間狂言・今枝郁雄

笛・藤田六郎兵衛、小鼓・船戸昭弘、大鼓・河村総一郎、太鼓・加藤洋輝

後見・武田邦弘、武田大志

地謡・梅田邦久、上田貴弘、上田拓司、清沢一政、松山幸親、八神孝充、吉沢旭、上田宜照

狂言「盆山」　シテ佐藤融、アド佐藤友彦　後見・今枝郁雄

能「殺生石」前シテ・後シテ・観世清和、ワキ森常好、間狂言・井上松次郎　笛・藤田六郎兵衛、小鼓・久田舜一郎、大鼓・河村眞之介、太鼓・加藤洋輝、後見・上田公威、坂口貴信

地謡・上田貴弘、武田邦弘、上田拓司、祖父江修一、武田大志、松山幸親、八神孝充、吉沢旭

大蔵流狂言方　茂山千作氏逝去

狂言の人間国宝

大蔵流狂言方　人間国宝の四世茂山千作氏（本名茂山七五三・しげやま・しめ）は五月二十三日午前０時23分、肺がんのため死去した。享年九十三。

通夜は二十六日の午後７時　葬儀は27日午後１時から京都市左京区黒谷の金戒光明寺で執り行われた。喪主は長男十三世千五郎氏。

氏は、三世茂山千作の長男、1919年生まれ、68年茂山家当主の名である十二世千五郎を襲名、89年人間国宝認定　94年四世千作襲名、2000年文化功労者、2007年狂言師で初の文化勲章受章、弟の千之丞氏（2010年逝去）とともに、積極的な活動を行い、興隆に大きく貢献した。

演能カレンダー

◆名古屋能楽堂◆

（TEL 052－231－0088）（能楽関係のみ）

［６月］
23日(日)　三　交　会　大　会　（無料）
［７月］
５日(金)　第23回ゆかた会　（無料）
６日(土)　名古屋能楽堂７月定例公演
　（番組①面）（有料）
９日(火)10日(水)　平成25年度名古屋能楽堂
　小・中学生芸術鑑賞会（関係者）
13日(土)　司宝会・涌宝会合同大会　（番組①面）（無料）
14日(日)　第14回御洒落名匠狂言会　（番組②面）（有料）
20日(土)　まいまい狂言会　（番組②面）（有料）
23日(火)24日(水)　夏休み親子能楽堂まつり
　（事前申込制）
27日(土)　狂言　也留舞会発表会　（番組②面）（無料）
28日(日)　全国学生能楽コンクール　（無料）

名古屋能楽堂七月定例公演

═市民能楽セミナー═

七月六日（土）午後二時開演
名古屋能楽堂

解説「野守」について．武田大志

狂言　宝の笠（和泉流）　前シテ　後シテ　梅田嘉宏　太郎冠者　今枝郁雄　主人　大野弘之　素ッ破　野村又三郎　後見　佐藤友彦

能　野守（観世流）　間　高安勝久　藤波　徹　河村眞之介　船戸昭宏　竹市　学　鬼頭義命　後見　武田大志　梅田邦久　地謡　吉沢八神　孝充　旭　清沢　一政　本田　久田　勘鵬　松山幸親　祖父江修一

附祝言

［チケット料金］
指定（前売）三千円
自由席（前売）二千円
当日三千五百円
学生一千円

主催　名古屋文化振興事業団（名古屋能楽堂）
能楽協会名古屋支部

司宝会　涌宝会　合同大会

七月十三日（土）午前九時半始
名古屋能楽堂

素謡　鶴亀　大内　亮　湯浅　景介

仕舞　田村キリ　木下　知佳
雲雀山　内藤　帆南
東北クセ　森口　七生
桜川　山内恵理子
鶴亀　土屋　綾子
嵐山　武田　美佳
胡蝶　杉本有理奈
羽衣キリ　高羽　優花
箙　酒井千絵子
紅葉狩　大内　亮

連吟　絃上　和久八重子　長坂実羽子　和久凛太郎　鈴木裕一郎　尾澤征哉

【名東高校能楽研究部ＯＢ会】
杉本有理奈　高羽　優花　牧原　優衣　加藤のぞみ　松本　海音　森口　七生　矢野紗也香　神谷　蕗美　佐藤まりな　島村みずき　和久八重子　和久凛太郎　清　経キリ　尾澤　征哉

連調　羽衣　謡　後藤　峻作　奥村　岳　森　貴彦　和久荘太郎　加賀山憲治　江口　啓子　水谷　幸子　大林　裕子　小鼓　酒井千絵子　内藤　帆南　木下　知佳

仕舞　竹生島　猩々　和久凛太郎　清　経キリ　尾澤　征哉

舞囃子　巻絹　神谷　恭子　河村眞之介　林　雄一郎　生田敦盛　菊池　尚希　後藤嘉津幸　竹市　学　杜若　藤崎　純子　河村眞之介　後藤孝一郎　大野　誠　後藤孝一郎　大加藤　洋輝　竹市　学

小督　恩田　加代　河村眞之介　後藤孝一郎　大野　誠　畠山　冨子　河村　船戸　昭弘　大林　雄一郎　大野　誠

〈教授嘱託披露〉
能　枕慈童　シテ　岡田　真理　ワキツレ　椙元　正樹　ワキ　橋本　宰　ワキツレ　橋本　叡　河村総一郎　後藤嘉津幸　加藤　竹市　洋輝　学
後見　衣斐　正宜　和久荘太郎　辰巳　和暦　江渕　陽三　森下　光　渡邊　陽介　菊池　尚希　高橋　憲正　辰巳満次郎　宝生　和英　山内　崇生　辰巳大二郎　内藤　飛能　澤田　宏司

独吟　経　政　恩田　義也

仕舞　小歌　丸　酒井　紫野　高砂　鈴木　幸一　金岡　徹　俊成忠度キリ　野守　湯浅　景介　原　麻那美　玉葛　保科芙美子

舞囃子　龍田　早川さとみ　佐藤まりな　河村　大　河村眞之介　後藤嘉津幸　後藤孝一郎　林　雄一郎　大野　誠　花月　永野　進　船戸昭弘　河村眞之介　大野　誠　八島　梅村　恵子　河村総一郎　船戸昭弘　加藤　鹿取　希世　藤　洋輝　希世

〈教授嘱託披露〉
安宅　森下　光　河村眞之介　後藤嘉津幸　竹市　学

能　半蔀　シテ　芳賀カズ子　ワキ　飯冨　雅介　河村　後藤孝一郎　大　鹿取　希世　間　井上松次郎　後見　宝生　和英　佐藤　耕司　澤田　宏司　地謡　酒井千絵子　石黒　実都　山内恵理子　竹内　澄子　佐藤まりな　玉井　博祐　神谷　恭子　衣斐　愛

【照門会】

素謡　鳥追　シテ　青柳　光昭　子方　木嶋　將輔　ワキ　小島　鍵治　ワキツレ　豊田　秀雄

舞囃子　船弁慶　前　江口　啓子　河村総一郎　船戸昭弘　鹿取　希世

〈教授嘱託披露〉
船弁慶　後　渡邊　陽介　河村　後藤嘉津幸　大　林　竹市　雄一郎　学

敦盛　能勢　渉　河村総一郎　船戸昭弘　鹿取　希世

弓八幡　番外舞囃子　和久荘太郎　河村　後藤嘉津幸　大　加藤　竹市　洋輝　学

（十七時終演予定）

［入場無料］

司宝会（しほうかい）
〒四六八－〇〇五六
名古屋市天白区島田一－三〇－一－二－一三一〇
電話　〇五二－八〇三－七三七二
佐藤　耕司

涌宝会（ゆうほうかい）
〒一一四－〇〇二三
東京都北区滝野川六－四－一〇
電話　〇三－三九四九－七三九五
和久荘太郎

後援　巽会　照門会　名東高校能楽研究部

春の叙勲　金春流　本田光洋氏　旭日双光章受賞

政府は四月二十九日付で、平成二十五年春の叙勲褒章者を発表、能楽界からは、シテ方金春流で、重要文化財保持者（総合指定）の本田光洋氏が文化財保護功労の功績で旭日双光章を受章した。

［略歴］昭和十七年東京生まれ。本田秀男の長男。父および金春信高に師事。六歳で能「初雪」にてシテ披露、海外でも多くの公演やワークショップを行っている。

昭和五十一年、文化庁芸術祭優秀賞受賞、金春円満井会常務理事、能楽協会専務理事。

狂言を楽しむ会　七月五日（金）　瀬戸市文化センター文化ホール

瀬戸市文化振興財団では、七月五日（金）、同振興財団主催による「狂言を楽しむ会」を公演、野村万作　野村萬斎氏らが来演する。午後七時開演。

番組は、解説　石田幸雄

狂言「佐渡狐」奏者・野村万作、越後の百姓・月崎晴夫、佐渡の百姓・高野和憲

狂言「悪太郎」　悪太郎・野村萬斎、伯父・石田幸雄、僧・深田博治

全席指定、S席四千円、A席三千円

チケット発売所・瀬戸市文化センター（窓口販売のみ）　瀬戸市西茨町一一三―三　チケットぴあ　0570・02・9999　Pコード427・797

問い合わせ　瀬戸市文化振興財団TEL0561・84・1093

第8回「能の旅人」　8月4日　藤田舞台

第八回「能の旅人」公演がきたる八月四日（日）名古屋市西区幅下の藤田舞台で上演される。

全席指定五千円、午後一時開演

能組は次のとおり。

一調「笠之段」謡・山本博通、大鼓・河村眞之介

一調「放下僧」小歌　謡・寺沢幸祐、小鼓・後藤嘉津幸、一管「大癒」笛・竹市学

能「弱法師」盲目之舞

シテ・俊徳丸・観世喜正、ワキ・高安勝久、アイ・野村又三郎

笛・竹市学、小鼓・後藤嘉津幸、大鼓・河村眞之介、後見・中所宜夫、地謡・山本博通／寺沢幸祐／吉沢旭

問い合わせ　観世九皐会事務所／TEL03・3268・7311　FAX03・5261・2980

当地の各流儀・流派・結社　社中の消息を辿る　㊺

竹尾　邦太郎

拾貳　「藤田昭彦から　藤田六郎兵衛へ」

①「藤田昭彦の会」　発会は昭和五四年四月一五日、前年の暮に先代六郎兵衛の許しを得て、という。発会に至るいきさつは初回能組案内のリーフレット「入会のおすすめ」に詳しい。

藤田昭彦師の後援会をつくりたいと思います。昭彦師は昭和廿八年、御存知の通り能楽囃子方の名門藤田流家元に生まれ、祖父に当る十世藤田六郎兵衛師に三歳より稽古を受け、五歳初舞台、昭和三八年（九歳）家元後嗣披露能に於て鷺を披曲、以後きびしい修業を積んでこられました。猩々乱（十一歳）翁（十二歳）道成寺（十四歳）石橋（十五歳）昭和四九年には一子相伝の秘曲、清経・恋之音取を勤め、そのすぐれた才能と格調の高い音色は早くから注目されて来ました。以来芸一筋に専念、日夜自分の稽古に励むと共に、能楽界の発展に尽くされて居られます。

しかし、名古屋での催しは東京、京阪神にくらべて回数が少なく、地道に稽古を重ねることはもちろん大切ですが、やはり公開の場で人様の前で舞台を勤め、そしてお客様の反応を身に感じ、率直な御批評をきくことが舞台人にとって大変必要なことは言うまでもありません。

芸の道にたずさわる者として、今非常に大切な時期におられる昭彦師に一回でも多く、そういう機会を作り、昭彦師が将来伝統ある能楽笛方藤田流の継承者となられ、先代、当代に劣らぬ名人になってほしいと期待し、及ばずながら声援を送りたい――そんな気持ちで後援会を作りました。

何卒、右の趣旨を御汲取りいただき、藤田昭彦後援会に一人でも多く御加入頂き、御来場たまわりますようお願い申し上げます。

藤田昭彦後援会

初回の能組は、能「三輪・白式神神楽」片山博太郎・西村欽也・野村又三郎・藤田昭彦・大倉長十郎・河村総一郎・観世元信・観世静夫、（地頭）青木祥二郎（後見）、一管「豊後下り端」覧三男、狂言「素袍落」井上松次郎・井上礼之助・佐藤友彦、一管独吟「芭蕉」藤田六郎兵衛・観世銕之丞、仕舞四番「白楽天」青木祥二郎「田村」山本順之「花筐クルヒ」片山慶次郎「熊坂」梅田邦久、能「天鼓・弄鼓」観世静夫・福王輝幸・井上祐一・藤田昭彦・福井啓次郎・柿原崇志・鬼頭喜太郎・片山慶次郎（地頭）片山博太郎（後見）。

なお別紙で藤田昭彦は次の挨拶を寄せる。

本日はお忙しい中を、当催に御出下さいまして有難うございました。

月日の経つのは早いもので、伊勢湾台風の翌日（昭和三四年九月二七日）の初舞台（満五歳）から早くも二十年。皆様の暖いご理解ご支援により、ようやくこの道の入口にたどりつけたのではないかと思っております。もちろん命有る限り修業のこの世界、入口にさしかかったというのも口はばったいことかもしれませんが、「自分は今、出発点にいる。これから長い階段を登るんだ。」と、自分に言い聞かせております。

未熟な私にこの様な立派な会を持たせていただき、ただ〳〵皆様に感謝致しております。このお礼は少しでもよい笛を聞いていただくことと思い、気持ち新に一層斯道に精進いたすつもりでございます。今後もよろしくご後援くださいますようお願い致します。

昭和五四年四月一五日

因に初舞台は社中の龍吟会主催

（③面へつづく）

佐藤友彦名古屋市芸術特賞受賞記念　第14回　御酒落　名匠狂言会

七月十四日（日）午後一時半始

名古屋能楽堂

新作狂言（佐藤友彦作）

二文酒（にもんざけ）　太郎　佐藤　融　妻　今枝　郁雄（後見　井上松次郎）

無布施経（ふせないきょう）　僧　佐藤　友彦　檀那　大野　弘之（後見　鹿島　俊裕）

右近左近（おこさこ）　右近　大蔵吉次郎　妻　大蔵　教義（後見　宮本　昇）

鶏聟（にわとりむこ）　聟　鹿島　俊裕　太郎冠者　井上松次郎　教え手　井上　蒼大　大橋　則夫（後見　大野　弘之）

地謡　今枝　郁雄　佐藤　友彦　佐藤　融　中島　知亮

（終演予定　十六時ころ）

［前売券］S席七千円　A席五千円　B席四千円（当日券千円増）

主催　狂言共同社　電話052・834・8607

第六回　まいまい狂言会

七月二十日（土）十時半開演

名古屋能楽堂

狂言　痺　野村　きよ（6歳）　野村又三郎

狂言　蝸牛　野村又三郎　松田　高義　野村　信朗（十二歳）

狂言でまいろう　親子で楽しむワークショップ　司会　原田さとみ

（終演12時頃）

［有料］　料金二千円（全席指定）　主催　まいまい狂言会

お問い合わせ　マザーリーフ内「まいまい狂言会」TEL080・1618・9713

中京テレビ事業チケットセンター　052・320・9933

狂言也、留舞会　～先代野村又三郎　七回忌追善～

七月二十七日（土曜）

名古屋能楽堂

【第一部】　午前十時開演

萩大名（はぎだいみょう）　大名　宇佐美照子　太郎冠者　奥津健太郎　庭の亭主　林　恭子

魚説法（うおせっぽう）　新発意　伊東　久之　檀家　岩本　明美

盆山（ぼんさん）　男　小川　豪範　何　某　伊藤　泰

千鳥（ちどり）　太郎冠者　高村　幸子　酒屋の亭主　伴野　俊彦　坂倉　純子

（初舞台）いろは　金法師　加美山　響（小学二年生）　親　野村又三郎

素謡　羽衣（はごろも）　シテ　長谷部怜衣子　ワキ　長谷部　元美

狂言小舞　柳の下（やなぎのした）　小島　竹男

入間川（いるまがわ）　大名　山内　理至　太郎冠者　服部　和洋　入間の何某　原　有作

腰祈（こしいのり）　山伏　杉浦　勝裕　祖父　野村又三郎　太郎冠者　奥津健太郎

舟船（ふねふな）　主　安保　育子　太郎冠者　奥津健一郎

茶壺（ちゃつぼ）　スッパ　吉村由紀子　中国の者　吉本　有李　目代　松田　高義

（終演予定　午後一時三十分頃）

【第二部】　午後二時開演

雁大名（がんだいみょう）　大名　白石　敦子　太郎冠者　野口　隆行　雁屋　野村又三郎

痩せ松（やせまつ）　山賊　東　信彰　女守屋　善巳

魚説法（うおせっぽう）　新発意　加美山　舞（小学四年生）　檀家　奥津健一郎

竹生島参（ちくぶしままいり）　太郎冠者　藤　百々　主　松田　高義

隠狸（かくしだぬき）　太郎冠者　田嶌　晴雄　太郎冠者　田嶌慎太郎

狂言小謡　狂言小舞　石河藤五郎（いしことうごろう）　市川　敬子

素謡　井筒（いづつ）　シテ　田口　文子　ワキ　都島　久美

梟山伏（ふくろうやまぶし）　山伏　堀場　将吾（小学四年生）　親　藤波　徹　子（病人）　野村　さよ

舎弟（しゃてい）　弟・次郎　神谷　愛々（小学三年生）　何　某　兄・太郎　野村　信朗　加美山　舞

杭か人（くいかひと）　太郎冠者　小瀬木弘子　主　野村又三郎

呂蓮（ろれん）　旅僧　磯村　美和　男　野口　隆行　妻　吉村由紀子

（終演予定　午後五時三十分頃）

御来場歓迎（入場無料）

（主催）也留舞会

（参加）如月会　熊本／菊池みのる会　NHK文化センター・名古屋教室　観世流華寿会

（指導）野村又三郎

（連絡先）（株）野村事務所　名古屋市中区平和一丁目二十番四号　TEL（〇五二）三五〇―七九七一　FAX（〇五二）三五〇―七九七二　URL http://kyogen.net

（②面よりつづき）

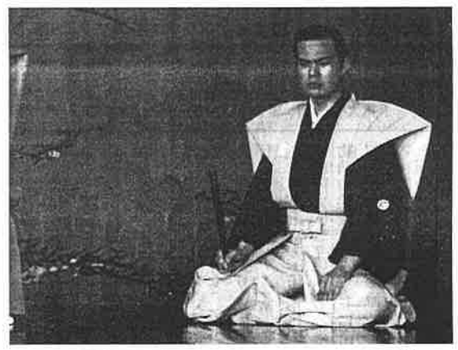
・先代九世宗家藤田清兵衛重孝三十三回忌追善能で冒頭に勤めた一管「中之舞」。当日に先立つ九月廿五日。中部日本新聞夕刊は三段抜キの見出シ「五つの坊やが笛方で初舞台」に――27日、熱田能楽殿の追善能で――藤田流宗家の愛孫昭彦君、の傍題で次の記事を掲載する。

名古屋に本拠を持つ能楽の笛方、藤田流宗家藤田六郎兵衛師の愛孫昭彦君（五つ）が、豆能楽師の貫禄も十分に、この二十七日熱田神宮能楽殿で開かれる先代藤田清兵衛重孝三十三回忌追善能に、かれんな初舞台をふむ。

この昭彦坊やは育った家が家だけに、なにより笛を吹くことが大好きで、鬼ごっこや他の遊びは二のつぎという芸熱心。昭彦坊やが笛（能楽では正式には能管と呼んでいる）を覚え始めたのはことしの夏のはじめごろから。ふつうは十歳をこえないとムリだが、昭彦坊やはまだ指も小さいので、京都でふつうの能管よりやや小型のものを特別にこしらえてもらい、ヒマさえあれば笛になじんでいる。

六郎兵衛師は「朝、目がさめるとすぐ〝おけいこをお願いします〟とくる。日に三度も教えるので、一ヶ月のおけいこで、まずふつうのお弟子さんの小一年分はあるでしょう。今回は一管で〝中之舞〟だけですが、先代の三十七回忌にあたる四年後には、能一曲を十分つとめることができるようになりましょう」と、成長を今から楽しんでおり、当の昭彦坊やも「僕も大きくなったら、おじいちゃんのようなりっぱな笛を吹く人になりたい」と子ども心に強い決心だ。

自宅での稽古風景　後方は先代藤田六郎兵衛


第2回藤田明彦の会（リーフレットより転載）

第二回　藤田昭彦の会　昭和五五年四月五日（土）午後一時半始。能組は舞囃子「養老・水波之伝」梅田邦久・藤田昭彦・大倉長十郎・柿原崇志・金春惣右衛門・片山博太郎（地頭）、狂言語「奈須与一之語」井上松次郎、一調一管「獅子」金春惣右衛門・藤田昭彦、仕舞「笹之段」観世銕之丞・片山慶次郎（地頭）、能「江口・平調返」片山博太郎・小林慶三・橋保向・宝生閑・坂苗融・高井松男・野村又三郎・藤田昭彦・大倉長十郎・柿原崇志・観世銕之丞（地頭）青木祥二郎（後見）。

なお、一調一管「獅子」は先代金春宗家（惣右衛門国泰）と当代藤田宗家（六郎兵衛重明）との相談により昭和一四年当流追善能（四月一六日・先々代六郎兵衛重政四三回・先代清兵衛重孝一三回忌）の為に作られた曲でございます。又、「江口・平調返」は、笛方の秘曲で特に観世流の平調返は当地にては三百五十年来上演記録の無い曲でございます、と。

昭和39年7月26日　第3回調友会
連管「草子神楽」藤田昭彦（10歳）、10世六郎兵衛

第三回　藤田昭彦の会　昭和五六年一一月一五日は故田鍋惣太郎・田鍋惣一郎を偲ぶ、とあり、能組案内の小冊子に次の挨拶がある。

本日はおいそがしい中、当会において下さいまして誠に有難うございました。

五十三年暮に父の許しを得、五十四年四月に発会致しまして、今回が三回目になります「昭彦の会」、昨年十月に亡くなりました父が最後に企画致しました番組でございます。

父の親である田鍋惣太郎、又、兄である惣一郎、共に亡くなりまして今年で拾年目をむかえます。当初は父も一管を手向けるといっておりましたが、それもできなくなりましたので、一調一管として唯一の録音テープである「江口」（昭和四十三年）により両故人を偲んでいただきたいと存じます。又、惣一郎の乱拍子は藤田流追善能（昭和四十四年）のおりのテープでございます。相手は私がさせていただいております。

大きな支えを失った私でございますが、皆様の暖かいはげましにより、この一年を何とか過ごしてまいりました。いたって未熟ではございますが、これからもどうか宜しくお願い申し上げます。

能組は舞囃子「百萬」片山慶次郎・篤三男・福井啓次郎・河村大・鬼頭喜太郎・片山博太郎（地頭）、能「清経・恋之音取」観世銕之丞・梅田邦久・西村欽也・藤田昭彦・後藤孝一郎・吉田定男・片山博太郎（地頭）青木祥二郎（後見）、狂言「昆布柿」野村又三郎・井上松次郎・井上礼之助、（録音テープによる）一調一管「江口」田鍋惣太郎・藤田六郎兵衛・林喜右衛門（謡）、「乱拍子」田鍋惣一郎、能「融・十三段舞返」片山博太郎・西村欽也・佐藤友彦・藤田昭彦・大倉長十郎・篤鉱一・観世元信・観世銕之丞（地頭）片山慶次郎（後見）。能組のあと、次の閉会の辞がある。

皆様のお陰をもちまして「昭彦の会」も三回目を迎える事となりました。しかしながら明年十一月、亡父の追善を機に家元名である六郎兵衛を名乗らせていただくことになりましたので、今回で一応「昭彦の会」は終りといたします。有難度うございました。

又、皆様に親しんでいただける会を企画したいと思っております。その節には宜しくお願い致します。

なお「藤田昭彦の会」は初回こそ主催藤田昭彦後援会となっているが二・三回の主催は藤田昭彦。先代十世藤田六郎兵衛宗家は昭和五五年十月二六日、午後四時五五分、肝臓ガンのため入院先の名古屋保健衛生大学病院で死去、享年七一歳。

昭和五七年一一月二一日（日）午前十時始の先代藤田六郎兵衛重明三回忌追善能は能組に記載はないが昭彦の十一世六郎兵衛襲名披露能にも。能組冒頭に次の挨拶がある。

月日のたつのは早いもので先代藤田六郎兵衛が亡くなりまして本年で三回忌となりました。此処に亡き父への感謝と手向の意をこめまして追善能を催させていただきます。

各流宗家並びに代表者の方々を迎え、又、地元楽師の御協力に依りまして左記の様な豪華な番組となりましたこと、まことに故人の遺徳かと感無量でございます。

尚私事で恐縮でございますがこれを機に代々の家名である六郎兵衛を名乗らせていただきます。この後家名を汚さぬ様一層精進致します覚悟でございます。何卒よろしく御後援下さいます様お願い申し上げます。

十一世　藤田昭彦

手向「朝長」梅田邦久・久田秀雄ほか当地観世流同人一二名、舞囃子五番「海人」金春信高・篤三男・幸義太郎・篤鉱一・鬼頭好信・本田光洋（地頭）「頼政」観世元昭・鬼頭季信・柳原富司忠・吉田定男・坂井音重（地頭）「雪」金剛永謹・鹿取希世・福井良久・篤鉱一・豊嶋三千春（地頭）「邯鄲」喜多節世・森本重一・山口亮・鬼頭英二・助川龍夫・地頭不明・「乱」観世銕之丞・片山博太郎・篤三男・後藤孝一郎・河村大・鬼頭喜太郎・大槻文蔵（地頭）、能「張良」宝生英雄・衣斐正宜・高安勝久・佐藤友彦・森田光春・曽和博朗・河村総一郎・金春惣右衛門・辰巳孝（地頭）大坪十喜雄（後見）、狂言「腰祈」和泉元秀・野村又三郎・井上礼之助、能「定家」観世元正・宝生閑・井上松次郎・藤田六郎兵衛・大倉長十郎・谷口正喜・関根祥六（地頭）片山博太郎（後見）、「石橋・大獅子」山本勝一（前）観世喜之（白）橋岡久共（赤）大槻文蔵・梅若盛義・福王輝幸・一噌庸二・福井啓次郎・亀井忠雄・観世元信・上田照也（地頭）観世銕之丞（後見）。

――以下次号――

◆仲春の舞台から◆

「第35回・邦謡会能」「京都観世会第二回復曲試演の会　橋姫　プレ公演」

竹尾邦太郎

邦謡会能「花争」
左より井上松次郎、佐藤　融
杉浦賢次氏撮影

「花争」

春爛漫、太郎冠者（シテ松次郎）を花見に誘う主（アド融）、折から満開の桜を眺め「あの花を見よ、見花見の友とこそ言え桜見の友とは言わんぞ、と応ずる主。挙句、花・桜論争は太郎冠者の古歌立ての賢しら、古歌で決着を求めることに。「桜散る木の下風に寒からで」と貫之の一首を吟じれば、「花の色は移りにけりな徒に」と主は小町で応じ、「山桜霞の間より仄かにも、見てし人こそ恋しかりけれ」と太郎冠者が返せば、「久方の光のどけき春の日に、しづ心なく花の散るらむ」と主。詰った太郎冠者、さらば謡にも桜、と〜桜かざしの袖ふれて、まで謡曲「小塩」の一節を吟じ、慌て、口を噤むと「ヤイヤイ、その後を言へ〜」と責め立てる主は〜花見車〜暮るより月の花よ待たうよ、と後を付け、花見に咎がついた苛立ちに太郎冠者を「退りをらう」と叱り留メに。言動に主を逆撫でしかねない猪口才な太郎冠者に松次郎、味をみせる。それにしても当時の庶民の教養の高さよ！（15分事なものではないか」せれば、花でなく桜で差すように絡む太郎冠は言うが花狩とは、と揶揄けば、

「道成寺」

女人禁制の鐘供養の庭に舞を奉納したいと白拍子（シテ嘉宏）、披キの昂揚、意気込みに声が高音で出たせいで道行の〜急ぐ心か未だ暮れぬ、は少々苦しいが、これも披キの清新の妙。能力（アヒ又三郎・高義）が禁を破り「心得をもって」庭に入れた計らいはシテの色香ゆえか。烏帽子を着け身支度整うと、鐘への一途な怨みは一ノ松からグッと鐘を見込むシテ、大鼓一調裂帛の気合に励まされるように舞台へ入り、眼目の乱拍子へ。ポテンシャル・エネルギー（潜在する・活動力）を徐々に沸点まで高め踏んでゆく乱拍子（小鼓・昭弘）、踏む度に蓄えられる鐘への執心は中之段で扇が左手へ驚掴みに渡ったところ（写真）、低い姿勢が伸び蛇体が暗示される。更にワカの一句〜、胸に刻むように乱拍子踏み続け、〜道成寺とは名づけたりや、と四ツ拍子踏むと、地（九郎右衛門・邦久・

（④面へつづく）

邦謡会能「道成寺」
梅田嘉宏（乱拍子）
杉浦賢次氏撮影

大槻能楽堂　改築30周年記念公演

大槻能楽堂では、改築三十周年の記念公演として、能楽最高の演目とされている老女を扱った能〝五曲〟を名手をそろえて、今秋十月から五回にわたり公演する。

▽十月十九日（土）午後二時始
能「檜垣」片山幽雪
▽十一月十六日（土）午後二時
能「姨捨」観世清和
▽平成二十六年
一月二十五日（土）
能「卒都婆小町」友枝昭世
▽二月二十二日（土）午後二時
能「鸚鵡小町」大槻文蔵
▽三月二十二日（土）午後二時
能「関寺小町」梅若玄祥

前売S席一二〇〇〇円、A席九七〇〇円、B席六五〇〇円
問い合わせ大槻能楽堂（電話06・6761・8055）

一色町能楽保存会 物故者追善能

6月30日　一色町昌久寺

伊勢の「一色町能楽保存会」（吉川貞夫会長）は、過去に一色能舞台で活躍した方で、平成12年以降に逝去された方の慰霊のため、六月三十日（日）、一色町・桂林山昌久寺で「一色町能楽保存会物故者追善能」を開催する。当日は午後一時半始。保存会会員、遺族、昌久寺関係者の参加とともに、一般の鑑賞希望者の参加を歓迎している。入場料は不要。

当日の慰霊物故者は、石原清蔵、石原進、荘司たづ子、龍田恭一、土谷喜八郎、中村滋、中村正、野北稔、畑のぶ子、福吉恵子、藤本利三郎（五十音順）の諸氏。

次第は、白隠禅師・坐禅和讃／読経・昌久寺住職、仕舞・石原隆明

半能「采女」シテ稲葉秀美、ワキ久谷憲之、笛・菊川満子、小鼓・後藤嘉津幸、大鼓・石原隆明

狂言語「鐘の音」連吟「藤戸」「源氏供養」仕舞「羽衣」「誓願時」「杜若」「金札」「花筐」独吟「朝長」

舞囃子「海人」シテ高林白牛口上、笛・菊川満子、小鼓・後藤嘉津幸、大鼓・石原隆明、太鼓・大形いく子（終了午後四時予定）

主催　一色町能楽保存会、後援・一色町自治会。

問い合わせ／伊勢市一色町一三〇六番地の二、TEL0596・25・6526

梅猶会 第三回 九月 大阪能楽公演

九月七日（土）午後一時始

能　熊野　朝顔　立花香寿子　熊野　梅若　善久
後見　井戸　良祐　井戸　和男　地謡　福王　知登　喜多　雅人　上田　敦史　上野　義雄　赤井　啓三　上野　朝彦　小川　晴子　小松　勝憲　林本　大　大西　礼久　池内光之助　梅若　善高　基徳

狂言　口真似　太郎冠者　善竹　隆平　主人　善竹忠一郎　お客　上西　良介　後見　上吉川　徹

仕舞　清経　クセ　池内光之助　班女　井戸　良祐　梅枝　梅若　猶義　地謡　小松　勝憲　岡田　晃一　井戸　和男　今村　哲朗

能　鉄輪　前　女　後　女ノ生霊　梅若　修一　福王　知登　是川　正彦　守家　由訓　荒木　賀光　中田　弘美　斉藤　敦
後見　大西　礼久　梅若　善高　地謡　梅若雄一郎　岡田　晃一　上野　雄介　梅若　猶義　永田　克己　今村　哲朗　間　善竹　隆司

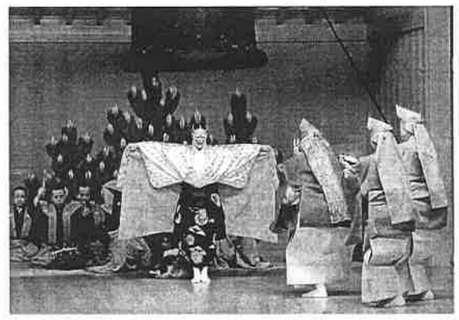
研究能　慈童　小川　晴子

研究能

菊慈童　喜多　雅人　森山　泰幸　上田　敦史　上田　悟　赤井　要佑
後見　梅若　善久　梅若　猶義　地謡　梅若雄一郎　上野　雄介　永田　克己　林本　大　井戸　良祐　立花香寿子

附祝言　終了　午後五時三十五分頃予定

［前売　四五〇〇円］　主催　大阪梅猶会



邦謡会能「道成寺」
梅田嘉宏
杉浦賢次氏撮影

邦謡会能「道成寺」
梅田嘉宏
杉浦賢次氏撮影

（③面よりつづき）

道治ら）へ山寺のや、でテンションも高潮、急之舞は若さの、鋭角的な舞もしなやか。スミへ出、鐘を見込まんとキッと面を上げる直前、烏帽子が脱げる奇禍も委細構わずへ狙ひ寄りて、と烏帽子払い落し鐘に肉迫のところは型だけ、きっぱりと見せて鐘入はきれいに吸い込まれる（鐘後見は道喜・玄ら）。能力二人、鐘の落下をどちらがワキに御注進に及ぶかを橋懸で言い合っている内に後見は烏帽子をひき、言い出しっぺのオモアヒが。報告をし終え、緊張が解けて「心がさっぱりとした」と胸撫で下ろし走り込む又三郎が如何にも安堵を。

さて、といった風情に、重々しく鐘と女人にまつわる「恐ろしき物語の候」とワキツレに語り出すワキ、毒蛇が「川を易々と」と足使いに泳ぐ様を、「此處彼處を」と面使とに尋ね回る様を見せるところなど気合が入る。語り終え、鐘を元に戻そうと功力（くり）を恃み、ワキツレと共に祈るうち、鐘を持ち上げるかに姿を現わす蛇体の後シテ（写真）。鐘が上がり切り、がばと双手をついて伏す蛇体は疲労に寸時あたりの気配を窺うよう。すっと立ち、先の唐織を大きく拡げ（写真）右、左、と胸高に巻きつけるとイノリ（誠・昭弘・眞之介・慎也）にワキとの闘争。鱗落シで身軽に、幕際まで逃げるも、盛り返しシテ柱での柱巻キ、長身の蛇体がぎり〳〵と巻いてゆき、鐘をキッと見上げるところ、宿怨に悶える姿が如実。

キリは〈日高の川波、と走り込み幕内で飛び、ワキが常座でユウケン扇に留メ。奇禍はあったが勢いのある力の籠った立派な披キだった。（1時間48分・4月7日・第35回邦謡会能）

復曲「橋姫」
井上裕久
京都観世会提供

京都観世会第二回 復曲試演プレ公演

「橋姫」

曲名と同じ専用面をもつ「景清」「俊寛」「弱法師」など現在能でなくとも夢幻能「頼政」「猩々」などにも専用面が。なぜ面・橋姫がありながら「橋姫」が世に出ないのは、の不審もあっての復曲。

名所旧跡で里人が土地の伝承など旅僧に語り、消えたのち再び正体を現わし、思いを言葉や舞に残して消える、という常套的な図式。

旅僧（ワキ遼一）、貴船神社参詣から大和春日明神への途次、宇治で里女（シテ裕久）に呼掛られ問答に。「何処より此処へ御入り候ぞ」と問われ、「貴船より」と応えれば「さればこそ貴船にて他処乍ら見参らせ候ひつる程に、扨こそ問ひ参らせ候へ」と、貴船で見たことがあるので声を掛けた、という情況が珍しく、如何にも、待ってました、の雰囲気。訝るワキがシテに住居を問えば、宇治だが「毎夜貴船に参り候」の返事に不審する間もなく「此橋本に御入り候はば、橋守の御神　橋姫と申す神に御渡り候へ」橋姫と申すは貴船の神と御一体ゆえ橋姫ノ神と申すのです、と一方的に話柄が橋姫へ移るのも、ワキとの再会（？）に胸に溜っていることを伝えたい逸る心でもあろう。今回の「橋姫」上演予定詞章・初同前のワキ・シテ掛合は

ワキへげに〳〵橋姫の御事は止ん事なき御神の今人の世に住せ給ふ有難さよ

復曲「橋姫」
井上裕久
京都観世会提供

復曲「橋姫」
井上裕久
京都観世会提供

シテへそれ本地の法身垂迹し光を和らげ今は又、人間に値遇し給ひて衆生済度の御方便

ワキへ神とも現れ

シテへ人ともなりて

とあるが、復曲の参考ともなった『謡曲叢書』では

ワキへげに〳〵橋姫と申す神は人間として人の世に住み給ひける御事よなう

シテへそれは本より其人の後には神と現れて又人間に生を受けて

ワキへ衆生済度の御方便

シテへ神とも現れ

ワキへ人ともなりて

とあり、話の筋はこちらが分り易いか。へ世を渡る習ひは宇治の橋姫の云々、の初同（豊彦・保浩・隆之・寿晃ら）となり、『謡曲叢書』はワキの「なほ〳〵橋姫の古の御事委しく御物語候へ」の詞があって橋姫の閨怨の嘆きを述べるクリ・サシ・クセだが、上演予定詞章には此のワキの詞が無く、即、初同となるので、改めて委しく語って貰うためにも間（ま）にワキの詞が欲しいところ。

シテはサシへ昔この里に住みける人妹背の中にあり侘びて、で正中に下居すると、居ゲセの中へ更け行く鐘の声、を居立ッて右へ聞き、へ恨めしや、とスッと居立ち扇で膝を打ち、へ何時かは袖を干さまし、のシヨリ（写真）、上ゲ端へ思ひ余りて待つくれの、とシヨリ解きつゝ立ち、地のうちに橋懸へ。この辺りの情趣、惹きつける。橋懸へ入ると、へ其方の空を、とワキを見込み、へ月のみ出づる、とシテ柱に左手を掛け、へ懸けてもせめて思へかし、の心情掬すべき、へ今はさながら遠妻の、と幕へ見ると、へ稀にだに訪ひ来ぬ宇治の橋姫ぞ、と膝をつき勾欄に右手を置き左手シヨルところは哀感も一入。ワキに素姓問われて立つと、へ恥づかしながら我こそは、とロンギに舞台へ戻りつゝ入ると、身の成れの果へ顕さん、と開いた扇を徐々に上げてゆくところに時の推移をみせ、悪鬼の姿で亦へ此処に来らん、とワキへ迫る怖さはキリ〳〵小廻りから一ノ松へ走ると、隠れる心に膝をつくやスッと立ち早鼓で中入するのも鮮やか。代って里人（アヒ匡）が小歌気分で小舞謡「宇治の晒」を謡いながら出ると一ノ松で立シャベリ、「橋へ行て心を慰めばやと」舞台へ入ると例によって「これは見慣れぬ御僧」とアヒ・ワキ問答からワキに宇治の橋神の橋姫のこと問われ居語に、『狂言集成』「能問篇番外曲」にある其尽でなく小笠原匡の師・野村萬の作詞という、両茂山家在の京都で和泉流は珍しい。鉄輪女のことども語って（八分）退くと後場。なおアヒ狂言の間、大小鼓は床几を下りなかった。

待謡から出端（洋一・一郎・保彦・弘美）で橋姫神ノ霊（裕久）鶯色の被衣、珍しい白長袴で一ノ松に。一旦被衣を上げ（写真）辺り窺い、へさ莚に苔の衣を片敷きて我を待つらん宇治の橋姫、と謡い乍ら舞台へ入るとワキと問答。面色変る恐ろしさ、橋姫が鬼神となった謂れを問われ、「貴船の神に祈りをかけて」と答えれば、直ぐ「百夜参詣」と応じるワキが、さらに詞の継穂を探す間も無く、シテは「願ひ叶ひて」と常座そば、被衣深々とかぶり跪まり物着に。後見座での物着でなく難しそう。地となりへたちまちに其形、の返シ句で現われる姿は黒頭に面は泥眼が橋姫に替り、白摺箔・白綾蜜折（か）を金地赤鱗箔に、白長袴を赤地半切の裳着胴姿の猛々しくも恐ろしい姿。へわざと作れる鬼一口の扱ひ種（噺の種）も繁からん（煩い）、であろうが此の羞恥で飛行の通力が奪されたとシテ、切地へ宇治の山里に帰りつゝ、と今や我が庵に帰る欣喜雀躍であろう。へ（川波の）上を走り、と軽々と脚を上げ、へ（まきの板橋）踏み鳴らし、と数拍子踏み、二ノ松へ往き勾欄に片足掛けて頭取り（写真）、遠くワキを見込むところは、へ（是迄なりや鬼の形）浅まにならじ、とワキに揚言する姿であろう。トメは地を残し走込ミ、ワキが常座へ出て合掌、留メ拍子は踏まなかった。起伏に富んだ作劇で、何よりも働き盛りの実技者達が学者・研究者を含まず、衆知を集めて一丸となり事に当ったことが清々しく、力の入った舞台だった。シテ裕久の瑞々しい技の切れ味、力量発揮の三役、豊彦率いる力強い統制のとれた地謡陣、素晴らしい復曲だった。手直しの部分もあろうが舞台を重ねていって欲しい。（1時間10分・4月8日・京都観世会館・京都観世会復曲試演の会）

能楽の友

発行　能楽の友社
名古屋市千種区千種２丁目18－18
（郵便番号　464-0858）
電　話（052）731－７９８４
ＦＡＸ（052）733－２８３７
振替口座　００８００－６－３６３９３

購読料　１年　１１００円
郵送の場合　１年　１８００円
一　部　１００円

ＮＨＫ放送予定（平成25年７～８月）

◆ＮＨＫ－ＦＭラジオ能楽鑑賞（日曜日６時～６時55分）
７月28日　素謡「安　宅」（宝生流）　シテ　今井　泰男
８月４日　シリーズ「人間国宝に聴く」①
　小鼓方　幸　流　曽和　博朗
８月11日　シリーズ「人間国宝に聴く」②
　シテ方　喜多流　未定
８月18日　シリーズ「人間国宝に聴く」③
　狂言方　大蔵流　山本東次郎
８月25日　シリーズ「人間国宝に聴く」④
　狂言方　和泉流　野村　万作

◆古典芸能への招待◆
ＮＨＫ・Ｅテレ　７月28日(日)　21：00～23：00
・金剛流能「正　尊」
　シテ　金剛　永謹、ツレ　豊嶋三千春
　アイ　善竹　隆司
・大蔵流狂言「蚊相撲」
　シテ　善竹忠一郎、アド　善竹忠重・善竹隆平
・一調「蝉　丸」
　謡　金剛　永謹、小鼓　曽和　博朗

演能カレンダー

◆名古屋能楽堂◆

（TEL 052－231－0088）（能楽関係のみ）

［７月］
27日(土)　狂言　也留舞会発表会　（無料）
28日(日)　全国学生能楽コンクール　（無料）
　（10：00～13：00）
28日(日)　名古屋名駅薪能
　（会場：名古屋駅タワーズガーデン）
　※雨天の場合（19：00～21：00）
　（名古屋能楽堂）

［８月］
３日(土)　青陽会定式能　（有料）（番組①面）
18日(日)　七彩会　（無料）（番組②面）
19日(月)　名古屋学生能楽連盟例会　（無料）
25日(日)　第29回衣斐正宜後援会　（有料）
28日(水)　和泉会例会　（有料）

名古屋能楽堂　9月定例公演
能楽普及公演　2部制で開催

名古屋能楽堂の九月定例公演は〝能楽普及公演〟として【第一部】（午前十時始）観世流能「弓八幡」（シテ古橋正邦）宝生流能「通小町」（シテ玉井博祐）和泉流狂言「三人長者」（シテ野村又三郎）【第二部】（午後二時始）観世流能「敦盛」（シテ武田大志）喜多流能「鵜」（シテ長田郷）和泉流狂言「入間川」（シテ佐藤友彦）金剛流舞囃子「松風」（シテ熊谷真知子）が上演される。

主催／名古屋市文化振興事業団（名古屋能楽堂）能楽協会名古屋支部

チケット料金（一部・二部各部）指定・前売四〇〇〇円、自由席・前売一般三〇〇〇円、学生二〇〇〇円、自由席のみ当日五〇〇円増。

前売券取扱い／名古屋能楽堂（052・231・0088）名古屋文化振興事業団（052・249・9387）栄ブレチケ92（052・953・0777）チケットぴあ（0570・02・9999／Pコード430・157）

能楽への誘い

8月10日　多治見市文化会館

多治見市文化会館では、〝能楽へのいざない〟をテーマに、八月十日（土）多治見市文化会館で、能の魅力に触れる企画を公演する。午後一時開演。

第一部、能楽体験ワークショップ、第二部おはなし「能楽へのいざない」第三部舞囃子「屋嶋」「羽衣」講師・久田勘鷗師。

全席自由二〇〇〇円。取扱い＝多治見市文化会館（0572・23・2600）チケットぴあ（0570・02・9999　Pコード427・975）ローソンチケット・まなびパークたじみなど。

第29回芸術創造賞
能楽笛方　竹市　学氏受賞
名古屋市文化振興事業団

名古屋市文化振興事業団（平野幸久理事長）は、第29回芸術創造賞の受賞者として、藤田流能楽笛方・竹市学氏を決定、六月十六日午後三時半から名古屋能楽堂で授賞式が行われた。

この芸術創造賞は、名古屋市の芸術文化の向上と発展に寄与した方に贈る年度賞で、前年度（平成24年４月～平成25年３月）における芸術創造活動が特に顕著で、今後の活躍が大いに期待される個人又は団体を対象としている。個人は45歳以下を、団体は３年以上の活動実績のある団体を対象とする。表彰は、正賞（賞状・メダル）と副賞30万円が贈られる。

（受賞者紹介②面）

演能案内

青陽会定式能（第257期第25回）

八月三日（土）十二時半開演
名古屋能楽堂

能組

仕舞　籠太鼓　前野　郁子
　松虫　久田三津子　地謡　角田　尚香　今沢　美和　幸江　近藤　星野　路子

能　巻絹　吉沢　八神　旭　孝充　杉江　淳　河村総一郎　後藤嘉津幸　加藤　洋輝　竹市　学　間　佐藤　融　後見　前野　郁子　梅田　邦久　地謡　須部　久田三津子　松山　幸親　高橋　瞭一　甫　武田　祖父江　修一　武田　幸親　清沢　一政　大志　邦弘

仕舞　雨の段　敦盛　キリ　高橋　瞭一　菅原　クセ　清沢　一政　花子　梅田　邦久　班女　舞アト　加賀　敏彦　融　松山　幸親　地謡　武田　久田　勘鷗　邦弘　梅田　嘉宏　大志

狂言　柿山伏　鹿島　俊裕　井上松次郎　後見　佐藤友彦

能　井筒　星野　路子　高安　勝久　河村眞之介　後藤嘉津幸　竹市　学　間　今枝　郁雄　後見　近藤　幸江　祖父江　修一　地謡　吉沢　幸親　松山　旭　今沢　清沢　美和　久田　前野　郁子　梅田　嘉宏　加賀　敏彦　一政　勘鷗

附祝言
［有料］
前売券二、五〇〇円
当日券三、〇〇〇円
学生一、〇〇〇円

主催　青陽会
名古屋市名東区一社三の一六二
久田勘鷗事務所
電話〇五二－七三四－六一九二

名古屋観世会　山本勝一　山本博通
観世清和
十世片山九郎右衛門　片山幽雪　京都市東山区新門前通大和大路東入西之町224　〒605－0088　電話（〇七五）五六一－二九一一
大槻清韻会　大槻文蔵　〒540－0005　大阪市中央区上町Ａ番七号　電話（〇六）六七六四－〇八九八番
鳳鳴会　武田志房　武田友志
名古屋観世九皐会　観世喜之　観世喜正　高橋瞭一
名古屋観鴎会　山本勝一　山本博通
梅若玄祥
浦田保浩　〒606－0814　京都市左京区下鴨芝本町58　電話（〇七五）七二三－六八五〇
梅猶会　猶諷会　梅若猶義
邦謡会　梅田邦久　清沢一政　須部甫　本田勲　今沢美和　梅田嘉宏　〒466－0033　名古屋市昭和区台町二丁目十六－五　電話（〇五二）八四一－四六三三番
壺泉会　泉嘉夫　名古屋市昭和区山手通３・８・２・306　電話（〇五二）八三一－三一八五　西宮市甲陽園目神山町二三－二五　電話（〇七九八）73二四五八

伺　御　中　暑

（①面関連）

竹内学氏略歴
積極的な舞台創造

竹内学氏は一九七二年二月二十七日生れ。一九八三年能楽笛方藤田流宗家十一世藤田六郎兵衛に入門研鑽を積む。確かな技術に裏打ちされた能笛は、名古屋能楽界からの信頼も厚く、東京・京都などの能楽師が中心となる海外公演にも数多く出演、全国的にも高い評価を得ている。

平成24年度の活躍も顕著であり、観世喜正らとともに能楽の普及を目的として立ち上げた同人会である「能の旅人」の第7回講演では「屋島　弓流」を素晴らしい演奏で聴かせ、同じく武豊町ゆめたろうプラザで行われた「能の旅人」公演では演奏に加え、ワークショップ講師も務めた。また二〇一三年一月には名古屋観世九皐会にて難曲「望月」の笛を務めている。

江戸時代より名古屋に伝承されている藤田流の確かな演奏技術を継承し、優れた舞台成果をあげており、他ジャンルとのコラボレーションや市民への能楽の普及にも積極的に取組む姿勢からも、今後一層の活躍が期待される。

第三十五回　七彩会

八月十八日（日）午前十時始
名古屋能楽堂

会員一同
学生一同

素謡　鶴亀
竹生島

仕舞　羽衣（竹尾美穂）
八島（伊藤佳奈）
藤蝉丸（川口美夢）（原田由美）
大江山（鈴木みな子）
草紙洗（土蔵美保）
経政（山口香）

素謡　通小町（片桐真）
仕舞　竹生島（片桐賢）
敦盛（小林陸）
猩々（片桐遼）

能　葛城（渡辺千恵）
飯富雅介　橋本叡
河村総一郎　成田達志　加藤洋輝　鹿取希世
問　佐藤融

仕舞　高砂（鈴木勝）
桜川（山岸二三男）

舞囃子　玉葛（杉浦俊宏）
河村総一郎　後藤嘉津幸　竹市学
歌占（森奈美江）
河村大　後藤嘉津幸　蚊取希世

仕舞　敦盛（水藤典子）
邯鄲（星咲花）
葵上（佐藤路子）
松虫（小島久恵）
田村（酒井千絵子）

舞囃子　松風（伊藤利香）
河村　成田達志　大竹市学
紅葉狩（上滝早苗）
河村総一郎　成田達志　鹿取希世

能　雲林院（津田節哉）
飯富雅介　橋本宰
河村　後藤嘉津幸　大加藤洋輝　竹市学
問　佐藤友彦

素謡　橋弁慶（水藤典子）
仕舞　羽衣（伊藤風香）
岩船（市原貢子）
玉ノ段（片桐真）
山姥（道家静奈）
半蔀（小野塚圭）
鵺（井川典子）
女性一同

舞囃子　海人（松浦祥子）
安宅（阪口奈子）
河村裕一郎　成田達志　加藤洋輝
竹市学　河村裕一郎　成田達志　竹市学

能　猩々（竹内澄子）
橋本宰
前野美津子　後藤嘉津幸　加藤洋輝　鹿取希世

七彩会（にじのかい）

〒四六六五―〇〇七八
名古屋市名東区にじが丘三―三七―一
電話〇五二―七八二―四一七一
竹内澄子

御来場歓迎
入場無料

第29回　衣斐正宜後援会能

八月二十五日（日）午後一時始
名古屋能楽堂

「富士太鼓」と「梅枝」について
衣斐愛
富士太鼓　装束附けと物着の実演
水上和久荘太郎優
内藤飛龍

舞囃子　高砂（衣斐愛）
河村裕一郎　後藤嘉津幸　加藤洋輝　鹿取希世

仕舞　鵜（内藤飛龍）
地謡　高橋亘　水上輝和　水上優
地謡　水上光優　東川夫　和久荘太郎

能　富士太鼓（シテ衣斐正宜）
飯富雅介
河村眞之介　後藤嘉津幸　鹿取希世
問　佐藤融

附祝言（子方坂口怜）

（午後四時頃終演）

名古屋能楽堂九月定例公演

九月一日（日）
第一部午前十時開演
第二部午後二時開演

［入場料］五〇〇〇円（学生二〇〇〇円）
お問い合せ　衣斐正宜後援会事務所　TEL　052・882・5600

［第一部］

能　弓八幡（観世流）
梅田嘉宏　古橋正邦
杉江元　相元正樹　杉江淳
河村眞之介　船戸昭宏　加藤洋樹　竹市学
問　井上松次郎

狂言　三人長者
野村又三郎
衣斐愛　玉井博祐
奥津健太郎　野口隆行

能　通小町（宝生流）
高安勝久
河村総一郎　後藤孝一郎　大野誠

［第二部］

能　敦盛（観世流）
前ツレ　吉沢孝旭
前ツレ　八神充
前ツレ　松山幸親
武田大志
問　橋本宰
今枝郁雄
河村眞之介　後藤嘉津幸　鹿取希世

狂言　入間川
佐藤友彦　鹿島俊裕　佐藤融

（金剛流）舞囃子　松風
熊谷眞知子

（金春流）仕舞　山姥
長田郷　広瀬雅弘

能　鵺（喜多流）
飯富雅介
河村総一郎　後藤嘉津幸　加藤洋輝　鹿取希世
問　松田高義

［有料］　主催　名古屋能楽堂

暑中御見舞申し上げます

梅若万三郎

観芳会　観世芳伸

幽花会　片山伸吾

怡楽会　山階彌右衛門　山階弥次

久田観正会　久田勘鷗

郁風会　前野郁子
松語会　松山幸親　星野路子
〒465―0093　名古屋市名東区一社3―162
電話（〇五二）七〇五―一五八五

武田謳楽会　武田欣司　武田邦弘　武田大志

笙月会　中川雅章
〒526―0036　長浜市地福寺町八ノ二九
電話（〇七四九）62〇六三〇番

初陽会　武田宗和　宗典

上田観正会能楽堂
上田観正会　TEL〇七八―六九一―五四四九
上田貴弘　拓司　公威　大介

橋岡会舞謡会　橋岡久太郎
＊＊＊＊＊
坪内芷路之　荒木亮　宮下功　小出年彦　塚田章　吉田重雄　松原章　宮内美樹　小倉美富　橋岡佐喜男　橋岡信明　野池尚美　島田博人

春鶯会　梅若善高　梅若善久
〒560―0084　豊中市新千里南町三丁目18―12
電話（〇六）六八三一―七八五四
〒166―0003　東京都杉並区高円寺南4・27・7・908

名古屋修諷会　梅若修一

梅春会　井戸和男　良祐
〒545―0004　大阪市阿倍野区文の里3―16―17
電話〇六―六六二一―二二一九

名古屋淡交会　橋岡慈観

三交会　久田三津子
〒465―0093　名古屋市名東区一社3―162
電話（〇五二）七〇五―一五八五

公益財団法人鎌倉能舞台　中森貫太
鎌倉市長谷3―5―13

洗心会　奥村富久子

松盛会　小松勝憲
松舞台
〒511―0851　三重県桑名市西別所一〇六一の五
TEL・FAX（〇五九四）二三―四五八二

賀水会　桑名賀水会　名鉄百貨店友の会　加賀敏彦
〒463―0035　名古屋市守山区森孝二丁目七〇九
電話（〇五二）七七一―八九四五番

当地の各流儀・流派・結社 社中の消息を辿る ⑤⑥

竹尾　邦太郎

拾貳　「藤田昭彦から藤田六郎兵衛へ」

②「能と狂言」
「能と狂言の会」
「能と狂言に親しむ会」

先年（昭和五七年）一一月二一日、先代六郎兵衛重明・三回忌追善能で十一世六郎兵衛を襲名した新たに会の名を名乗らず「能と狂言」として会を主催する。

昭和五八年一〇月一六日「能と狂言」、能組は舞囃子「三笑」観世銕之丞・片山慶次郎・梅田邦久・筧三男・後藤孝一郎・吉田定男・鬼頭喜太郎・観世暁夫（地頭）、狂言「萩大名」野村又三郎・野村耕作・野村万之丞、能「姥捨」片山博太郎・宝生閑・野村万之丞・藤田六郎兵衛・大倉長十郎・河村総一郎・小寺俊三・観世銕之丞（地頭）青木祥二郎（後見）、能組あとに藤田六郎兵衛の挨拶がある。

皆様のご後援により昭和五十四年に「昭彦の会」を始めさせていただき、昨年は又、先代追善能と毎年大曲を勉強する機会を得られ誠に有難うございました。

私事ではございますが、本年で初舞台より満二十五年を迎えました。今日迄無事舞台を勤めることが出来ましたのも、偏に皆様方のお陰だと思っております。

今回勤めさせていただきます「姥捨」は能二百数十曲中特に別格にされている秘曲で滅多に上演されることのない名曲でございます。当地にては昭和十五年に先代金剛巌氏、先代六郎兵衛以来の上演であり観世流にては全く初めての上演になります。

昭和五九年八月一五日　藤田六郎兵衛主催研究能として舞囃子八番と一調一管一番が非公開で行なわれる。「高砂」久田徹二・西部恵司・柳原富司忠・河村眞之介・助川治・観世暁夫（地頭）、「通小町・雨夜之伝」観世銕之丞・梅田邦久・鹿取希世・福井啓次郎・大倉正之助・片山博太郎（地頭）、「融・十三段之舞」片山慶次郎・藤田六郎兵衛・柳原富司忠・河村大・上田悟・片山博太郎（地頭）、一調一管「獅子」藤田六郎兵衛・上田悟、「龍田・移神楽」観世暁夫・松田弘之・大倉源次郎・大倉正之助・助川治・観世銕之丞（地頭）、「柏崎・思出之舞」観世銕之丞・藤田六郎兵衛・大倉源次郎・河村総一郎・片山慶次郎（地頭）、「江口」梅田邦久・鹿取希世・後藤孝一郎・筧鉱一・観世銕之丞（地頭）、「延年之舞」観世銕之丞・藤田六郎兵衛・福井啓次郎・河村総一郎、「猩々」清沢一政・西部恵司・後藤嘉津幸・河村眞之介・助川治・梅田邦久（地頭）。

昭和59年9月24日　熱田神宮能楽殿
「能と狂言の会」パンフレット表紙

同年九月二四日、「能と狂言」が「能と狂言の会」に改められる。能組は能「通小町・雨夜之伝」観世銕之丞・梅田邦久・西村欽也・筧三男・福井啓次郎・大倉正之助・野村四郎（地頭）、狂言「雁礫」井上松次郎・井上礼之助・大野弘之、一調一管「獅子」藤田六郎兵衛」上田悟、仕舞三番「笹之段」観世栄夫「西行桜」野村四郎「鉄輪」山中義滋、能「道成寺・赤頭」観世暁夫・西村欽也・飯冨雅介・杉江元・井上祐一・佐藤友彦・藤田六郎兵衛・大倉源次郎・河村大・助川治・観世銕之丞（地頭）観世栄夫（後見）野村四郎（鐘後見）。

昭和六〇年八月一八日、「能と狂言の会」は藤田六郎兵衛昭和五九年度名古屋市芸術奨励賞受賞記念公演。「舞囃子七番」の題で他に小舞二番、脇語・一調各一番。「三番叟」野村信行（三番叟）野村耕介（面箱）藤田六郎兵衛・福井啓次郎（頭取）柳原富司忠・福井良治・河村眞之介、「絵馬」梅田邦久・久田徹二・武田邦弘・鹿取希世・後藤嘉津幸・河村大・観世元則・片山九郎右衛門（地頭）、「遊行柳」観世銕之丞・赤井啓三・福井啓次郎・筧鉱一・上田悟・野村四郎（地頭）、小舞二番「海道下り」井上松次郎「通円」野村又三郎、脇語「鵜越之語」西村欽也、一調「歌占」吉田定男・内藤泰二（謡）、「智恵子抄」片山慶次郎・観世暁夫・藤田六郎兵衛・大倉源次郎・大倉正之助・観世銕之丞（地頭）、「卒都婆小町」片山九郎右衛門・赤井啓三・後藤孝一郎・河村総一郎・観世銕之丞（地頭）、「天鼓」大槻文蔵・赤井啓三・柳原富司忠・河村大・観世元則・片山慶次郎（地頭）、「猩々乱」武田志房・野村四郎・藤田六郎兵衛・大倉源次郎・大倉正之助・上田悟・観世暁夫（地頭）。

同年春、藤田六郎兵衛は観世流梅田邦久と「能と狂言に親しむ会」を立ち上げる（毎日新聞コラム『梅の木のごとく』に拠る）。

同年（昭和六〇年）冬、師走三日（火）午後六時半始の初回は新作能「雪女」試演会。

素囃子「盤渉楽」藤田六郎兵衛・久田舜一郎・大倉正之助・上田悟、新作能「雪女」梅田邦久・西村欽也・野村又三郎・藤田六郎兵衛・久田舜一郎・大倉正之助・上田悟・小野朗（地頭）武田欣司（後見）。

「雪女」の詞章を載せる番組案内パンフレットには「能・狂言に親しむ会」の梅田邦久・藤田六郎兵衛の挨拶と、新作能「雪女」試演に際して、と題する梅田邦久の次の言葉がある。

「能・狂言に親しむ会」は、本年発足したばかりの会でございます。第一回の活動は、セントラル・パークでの「新能」でした。

とかく能・狂言と言うと、限られた場所で限られた観客を対象に演じられる閉鎖的な世界と思われがちです。これをもっと沢山の方々に、気軽に観ていただき、識っていただきたい、こんな気持で年に二、三回いろいろな場所で後援を、と考えております。

今回は、梅田邦久が創りました新作能「雪女」を取り上げました。皆さまおなじみの「雪女」の民話、伝説を基に、親しみやすい作品をと心がけました。これも、私どものチャレンジのひとつ、と考えております。どうかご高覧の上、ご批評をお聞かせくだされば幸いです。

なお、来年度は二月十四、十五日の両日、新栄の名古屋市芸術創

（④面へつづく）

暑中御見舞申し上げます

観修会　祖父江　修一
〒507-0848 多治見市日ノ出町2の2
電話（〇五七二）二二―三六五六

幸謡会　近藤　幸江
〒444-2122 岡崎市鴨田本町十一番地ノ三
電話（〇五六四）㉓二五二九

千早会　八神　孝充
〒464-0818 名古屋市千種区池園町2―9
電話・FAX（〇五二）七五三―四一二九

名古屋宝生会
〒466-0051 名古屋市昭和区御器所3―23―19
衣斐正宜方

宝生和英

近藤乾之助
〒170-0002 東京都豊島区巣鴨五―二三―八
電話〇三（三九一五）一三七六番

名古屋巽会
豊橋巽会
辰巳満次郎

倉本雅
〒658-0081 神戸市東灘区田中町1―13―22―809
電話（〇七八）四四一―五四六五番

惠美寿会
衣斐正宜
衣斐正宜後援会
〒466-0051 名古屋市昭和区御器所3―23―19
御器所パークマンション802号
電話（〇五二）八八二―五六〇〇番

佐野由於
玄宜
弘宜

司宝会
佐藤耕司
〒468-0056 名古屋市天白区島田二丁目三〇一
島田橋住宅二―一三一〇
電話（〇五二）八〇三―七三七二

金剛永謹
龍謹

廣田鑑賞会
廣田幸稔

菊之会
菊扇会
廣田泰三
廣田泰能

松野恭憲能の会
松野恭憲

金剛流
今井清隆
今井克紀

豊嶋能の会
豊春会
豊嶋三千春

金剛流
宇髙通成
竜成
徳成

シテ方金春流宗家
金春安明
〒167-0052 東京都杉並区南荻窪三丁目17―16
電話〇三（三三三一）二五七一番

本田光洋
〒164-0002 東京都中野区上高田二ノ二五ノ二
電話〇三（三三八六）二六四一番

金春穂高
〒631-0821 奈良市西大寺東町一―三―十五
電話（〇七四二）三三―九七二〇

（③面よりつづき）

造センターに於てひとつの演目を照明家による演出と、ろうそく照明で比較する試みを予定しております。またわかりやすい「能の入門講座」を二月より（年六回）で開催の予定です。あわせてご後援の程、宜しくお願い申し上げます。

能・狂言に親しむ会

新作能を創りたいと思い始めたのは、昭和四十二、三年頃から、冬の季節に演じられる三番目物の能（鬘物）が欲しいなと思ったのがきっかけでした。

題材は私が昔から好きだった民話や伝説の「雪女」をベースにしてと、これも長い間、思い続けていたのでした。

新作曲とは言っても、あくまで伝統にそった作品、古典の「羽衣」や「葛城」を頭に思い浮べて創ってみました。

脚本は京都の室山三柳氏に、大鼓、小鼓は故大倉長十郎氏、太鼓は三島元太郎氏、笛は藤田六郎兵衛師にそれぞれお願いをしました。

節付に少し新味をと色々工夫してみてありますが、とにもかくにも初めての事、ぜひとも皆さまのご意見、ご批評をいただきたいと思っています。そしてまた少しでも良い能に育てあげたいというのが、いまの私の願いです。

雪のもつ清浄感、童心の浄らかさがこの新作能「雪女」のテーマであるが、はたしてそれがどこまで出せるか、精一杯舞台を勤めたいと思っています。

昭和60年12月3日　熱田神宮能楽殿
「能・狂言に親しむ会」パンフレット表紙
試演会　新作能「雪女」

セントラルパーク薪能

セントラルパーク七周年記念に運営を委嘱された「能と狂言に親しむ会」が企画立案、構成し昭和60年8月30日・午後7時始、セントラル広場で第一回が行なわれた。当時の本紙『能楽の友』は二段抜キ見出しで、セントラルパーク「薪能」盛会　3千人越える観能、と報じる。その後、第二回・第三回はそれぞれ二夜続きで昭和62年まで行われた。因に各回の能組は

昭和60年8月18日　「能と狂言の会」入場券

第一回　60年8月30日

能「猩々乱・双之舞」青木道喜・河村和重・飯冨雅介・藤田六郎兵衛・柳原冨司忠・河村大・上田悟・小野朗（地頭）橋本雅夫（後見）、狂言「盆山」佐藤友彦・井上松次郎、能「葵上・梓之出・空之祈」梅田邦久・祖父江修一・西村欽也・杉江元・野村信行・藤田六郎兵衛・大倉源次郎・大倉正之助・上田悟・小野朗（地頭）武田欣司（後見）。

第二回・第一夜　61年8月29日

半能「井筒」梅田邦久・飯冨雅介・鹿取希世・柳原冨司忠・河村総一郎・橋本雅夫（地頭）武田欣司（後見）、狂言「雷」井上礼之助・井上松次郎、半能「石橋・大獅子」橋本雅夫（白）武田邦弘・青木道喜・河村和重・高安勝久・藤田六郎兵衛・大倉源次郎・大倉正之助・上田悟・梅田邦久（地頭）武田欣司（後見）。

第二夜　61年8月30日

半能「天鼓・弄鼓」梅田邦久・中村弥三郎・藤田六郎兵衛・福井啓次郎・河村大・鬼頭喜太郎・地頭・後見不明、狂言「太刀奪」井上松次郎・井上礼之助・佐藤友彦、能「土蜘蛛」清沢一政（前）祖父江修一（後）今沢美和（胡蝶）須部甫（頼光）松山幸親（トモ）中村弥三郎・森本光治・広谷和夫・西部恵司・後藤孝一郎・河村眞之介・助川龍夫・武田欣司（地頭）梅田邦久（後見）。

第三回　第一夜　62年9月11日

狂言「昆布売」井上松次郎・井上礼之助、能「一角仙人・酔中之舞」梅田邦久・西村欽也・飯冨雅介・杉江元・藤田六郎兵衛・柳原冨司忠・河村眞之介・上田悟・久田徹二（地頭）近藤幸江（後見）。

第二夜　62年9月12日

狂言「清水」野村信行・大矢高義、半能「采女・美奈保之伝」梅田邦久・飯冨雅介・鹿取希世・大倉源次郎・吉田定男・小島一英（地頭）今沢美和（後見）。

――以下次号――

◆「晩春から初夏の舞台」◆

「梅若吉之丞三回忌追善・名古屋梅猶会」と「豊田市能楽堂ふじ能」「第16回ござる乃座」「先代野村又三郎七回忌追善・第56回やるまい会」

竹尾邦太郎

「悪太郎」　伯父（アド高義）が飲酒を非難していると仄聞して押し掛ける悪太郎（シテ又三郎）、大髭の強面ぶりは凄味を利かせる長刀捌きに心胆寒からしめるも、そこは伯父の年の功、毒を以て毒を制す、とばかりに「一つ飲うでゆかぬか」と。一方、悪太郎も然る者、素っとぼけて「何を」と一呼吸置くところなど中々。一旦、酒が入れば案の定、酔いの勢いは「先づ第一にお気が結構なり」などと掌を返すようなお追従が可笑しい。挙句、小謡気分は〈ざざんざ浜松の音はざざんざ、と浅酌低唱ならぬ深酌高唱の内に安座のま、寝入ってしまう体たらく。

悪太郎が帰途に就けば、「路次のことが心許無い」と伯父、果たして路傍に泥酔睡臥の態。伯父は長刀・小刀を除け、着衣脱がせ剃髪・剃髭、枕頭に佛衣調え、悪心翻して佛道に入り後世を願えと因果を含め、「汝の名を南無阿弥陀佛と付くるぞ」と下す託宣（テレパシー？）。目覚めた悪太郎は辺りの空気を不審しながらも、酔夢の中で刷込まれた南無阿弥陀佛の名は、以後、同じ名を聞くと反射的に反応せざるを得ないことに。折からやって来た僧（小アド松次郎）に、己が名を呼ばれたと合点して早速返事をする悪太郎を怪訝がる僧は、南無阿弥陀佛と六字の名号を唱える度に返事をされて気味悪がり、「あの様な奴には踊り念佛を始めて浮からかいてやらう」とテンポを速めれば、それに合わせて返事も速める悪太郎。漸くおかしいと気付く僧に名の因って来る経緯が分れば、南無阿弥陀佛に対する知識の齟齬、懸隔へげに今こそは悟りたり、と悪太郎、僧と連吟に〈只一念に弥陀を頼み念佛申して別れけり、と晴れやかにも亦しみ〴〵〉とした留メ、又三郎・松次郎が両者がっぷり四つの力演。（37分）

「隅田川」　萌黄引廻シの塚が如何にも春浅い趣に大小前。隅田の渡しで船客を待つ渡守（ワキ勝久）、高安流は「雨に水気に見えて候程に旅人の一人二人にては渡し申すまじく候」と、水嵩が増し小人数では乗船させない、と強い意志を示すが、福王流では「今日は舟を急ぎ人々を渡さばやと存じ候」とあり、在所で大念佛があるゆえ僧俗を問わず人数を集める、と既に大念佛に触れる。また、最初の船客が、高安流では都で商いを済ませ本国へ戻る東国方の商人（ワキツレ正樹）であるのに、福王流は東国に知人を尋ねて下る都の者で旅人、シテ登場後は各流概ね変化はないが、此の冒頭部分の違いが何故起こるのか、見所は知りたいところ。――閑話休題――

我が子・梅若丸（子方・利成）が人商人に攫われて途方に暮れ、居ても立っても居られないカケリの焦燥、人商人は東に下ったと聞き及び気も狂わんばかりの母（シテ猶義）が肩を竦める様に運ブ姿に疲労の色をみせへ跡を尋ねて迷ふなり、とシヲルところ、心細さも一入に〈尋ぬる心の果やらん、と脇正から遠く右へ眺め渡す風情は、やって来た長い道程への感慨。隅田川に着けば、渡守と一悶着あって事は水鳥の名に及び、業平の一首「名にし負はば、いざ言問はん都鳥、我が思ふ人は有りや無しやと」に己が心情を重ね、吐露するシテ・ワキ掛合の呼吸がよい。〈思へば限りなく、と笠に手

（⑤面へつづく）

伺　御　中　暑

伊勢金春会
宇仁田吉邦
〒516-0076 伊勢市八日市場町5-16
電話〇五九六㉕五二九八

長田驍後援会
〒514-2221 津市高野尾町三三五一-四六
電話〇五九二(30)〇六九七番

福王茂十郎
和幸
知登

高安勝久

西村同門会
飯冨雅介
杉江元
椙元正樹
橋本宰

谷田同門会
原大努
小林
有松遼一
岡充

宝生欣閑
能楽の友社

清水利宣
〒569-0817 高槻市桜ヶ丘北町11-25
電話〇七二(六九四)五〇一七

藤田舞台
藤田六郎兵衛
〒451-0041 名古屋市西区幅下2-10-9
TEL&FAX 〇五二-五七一-五七六三

大倉源次郎

幸友会
福井四郎兵衛

桂会
後藤孝一郎
嘉津幸

弘耀会
船戸昭弘
〒509-0103 各務原市各務東町4-67

（④面よりつづき）

をやり茫洋たる彼方を右へ眺める心は、是が非でも乗船を、と切り出す前の思案。へさりとては、とワキへ膝を進めるかに膝をつき、笹で一ツ床を打ち指スところ並々ならぬ気迫。

船中は「構へて舟のうちにてもの に狂ひ候な」とワキ、笹と笹を左手に静かに下居のシテは面深井・襟浅黄・露芝文白摺箔着付・納戸地縫箔腰巻・浅黄水衣。ワキ語は淡々とした中にも語り慣れた緩急抑揚に味をみせる。当初、寂然と居たシテが徐々に気持を昂らせてくる辺り身ごなしの妙。長物語のうちに船が着いても立てないシテ、シヲリを解き「なう舟人」とワキに事の次第の一々を質すうち我が子と分り、へなうこれは夢かや、と悲嘆に暮れるシヲリが切ない。ワキの介添で立ち塚の前に下居、クドキにへこの土を、と一掬いして居立チ、へ今一度この世の姿を、と双シヲリの激情には感情移入させられる。

念佛の段はワキのへはや夜念佛の、で子方は塚に入る。柔らかな哀調を帯びた地謡（善高・和男・晃一・善久ら）が素晴らしく、我が子の幻影を双手を拡げ追い求めるシテが、捕らえ損ないがっくり膝を折り茫然と居るところなど、実の我が子との共演に自然体の如実。子方もよく稽古されてをり品よく旨かった。キリは、へ我が子と見えしは、と塚を見遣ると足弱に寄り、塚をさする様にして膝をつき、立つとシヲル。殊更に大仰にはせず却って悲しみは深い。子と孫が、父と祖父に手向ける「隅田川」、好演に泉下の吉之丞師の満足が偲ばれる。囃子は希世・嘉津幸・眞之介。（1時間21分・4月20日・梅若吉之丞三回忌追善名古屋梅猶会）

ふじ能「金岡」
野村万蔵

ふじ能「金岡」
左より野村万蔵、野村万禄
（杉浦賢次氏撮影）

「金岡」

巨勢金岡は平安初期に実在の宮廷絵師、屏風画が有名というも確かな作品は伝存しないと。

夫・金岡（シテ万蔵）が十日余りも戻らず、噂に物に狂い洛外を彷徨していると聞いて案じる妻（アド万禄）、探し出し連れ帰ろうと人出の多い清水寺へ。そこへ一声ノ囃子（誠・嘉津幸・眞之介）で呆けた心焉に在らずの態の夫がへ乱れ心や狂ふらん、の地謡（太一郎・浩一郎ら）で舞台に入ると、狂おしく笹で働キ・カケリの、侭ならぬ片恋の焦燥。夫が下居にシヲル様を見付け「是は先づ何とした事」と妻が咎め、問答になるうち「さてははや色に現れたか」と夫、様子を聞きたい妻に、聞かせてもどうなるものではない、と拒むを、決して腹を立てないを条件に夫は語り出す。

いつぞや御殿へ絵を描きに通った折、大勢のお女中が見物する中に「美女が一人出させられての」と。思わせ振りな言葉に気色ばむ妻を牽制すると、得々とその艶姿を讃美し、美女から扇に絵を、と求められゝば「嬉しさは嬉し御意は重し」の有頂天。扇を手渡すときには我慢できずに手を握り締めたら色目を使われ、ニッと笑ったお顔のその美しさに明けても暮れても、寝ても覚めても忘れられず、斯様に物に狂う、とぬけ〳〵と双シヲリの狂態（痴態か）。

怒り心頭の妻だが腹は立てない の言質ゆえ鉾を収め、女は化粧次第、己れの顔を天下に隠れもない絵師の手で、と促せばその気になる夫、徐に彩管を執り「面影は屹度見覚えて居る」美女を瞼に描き精神統一する（写真）と、膝をつき、床几に掛けさせた妻を下から嬲めつ眇めつ眺める。一筆入れるとスミから出来栄えを案じ、二筆目を入れて角度を替えワキ座から眺めて驚くと、背後を回り常座へ。へもしもやと思ひつゝ、へまた立ち寄りて、唇に紅をさせば（写真）恋しい人に似るも愚か、へ狐の化けたるに異ならず、の形相。キリは悪態をついて逃げる夫を妻がへ腹立や腹立や、と追込ミ。人目を憚らず臆面もなく惚気る有名絵師の驕り・我儘・無邪気・万蔵、機微細かに演じ、万禄また女の意気地きっぱりみせる。（31分）

ふじ能「巴」
左より狩野了一・橋本宰・椙元正樹・飯冨雅介

「巴」

曲、二月「観世会」三月「宝生会」五月今回「ふじ能」

今年度上半期の多出木曽から上洛する旅僧一行（ワキ雅介ワキツレ正樹・宰）、途次、江州粟津が原に着き「暫く一見せばや」と座着くと、アシラヒ（大・眞之介、小・嘉津幸）で出る里女（シテ了一）が常座からへ面白や鴉の浦波、と謡い乍ら正中へ、今日は御神事でへ巫どもゝ参らばやと思ひ候、と下居、社に向かう心にへあら有難や候、と合掌するとへ昔の事の思ひ出でられて候、とシヲルのをワキが「不思議やな」と見咎めシテ・ワキ問答に。問答のうち分かり、「拝み給へや旅人よ」と促されてワキはへ神前に向ひ手を合はせ、合掌するとシテの思いを伝える初同（邦生・雄人・敬一郎ら）に。へ（古のこれこそ君よ）名は今も、で合掌を解くワキに、返シ句は亡き義仲の存在を強調する。へ旅人も一樹の陰他生の縁、とシテはワキにアシラヒ、同郷の誼に夜もすがら経を上げ御霊を慰められよと勧め、ワキとの此の有難い出逢いをへげに有難き値遇かな、と返シ句を繰り返すことで深い謝意を伝え、ワキに合掌する。へさる程に、と立つとへ入相の鐘の音を正面でや、面伏せ聞く心持に味をみせ、へ我も亡者、と常座辺りでワキへ左袖アシラヒ正中へずいと出ると、我が名が誰とへ知らずは此の里人に、と含みを持たせ小廻りにワキから直り、へ草のはつかに入りにけり、と右へ廻り橋懸へ、送り笛（誠）で入る。代って里人（アヒ太一郎）、所の神事に参詣とてワキに出合い、乞われて義仲・巴の子細を居語、力の籠った立派な語りだった。太一郎は筆者初見、子が親に似るは当然とはいえ亡き万之丞の若い頃を彷彿させる風姿に接し嬉しかった。

後場。義仲に殉死を請うも許されず、その執心の残る巴の霊を弔う待謡に現われる武装の巴（ノ幻・後シテ了一）、へあら有難や、と回向を喜ぶもワキとの掛合から地謡へ、薙刀突きつゝ、舞台一巡、恨みの一端をへ最期に臨んで後名を惜しまぬ者やある、と吐露、薙刀掻い込んだまゝ、正中の床几に掛るところ、気負いをみせ妙、義仲の盛衰を述べるクセに。クセ中、義仲自裁の所へ此処ぞお僧達、と念を押すかにワキへアシラヒ、同郷なれば へ弔はせ給へや、と指すところ故人への徒ならぬ敬慕。ロンギは義仲の最期と巴の訣別を描く。馬が深田にはまって足掻き、へ前後を忘じて、義仲、呆然馬上に竦むかの床几の型が如実。殉死はならずへ巴はともかくも、と平伏、シヲリへかくて御前を立ち上がり、敵の大勢を橋懸へ眺めると、薙刀扱い鮮やかに捏ねつゝ、膝行して敵を追い立て二ノ松へ、へ跡も遥かに見えざりけり、と左へ遠く眺める風情には義仲を残して激戦あとの感慨が。舞台へ戻るとワキ・ワキツレの前に後見が出して置いた義仲形見の白小袖を戴き（写真）、立つと行きかけて膝を折りシヲルとへ死骸に御暇、する心に右手をつき一礼、へ（行けども悲しや）行きやらぬ、と遺体へ振り返りへ君の名残を如何にせん、とシヲルと後見座へ、物着に。この辺りの情趣、厚みのある好調な地謡と相俟って素晴らしい。物着は唐織を脱いで形見の小袖に替え、烏帽子も脱ぎ右手に笠を持つとへ小太刀を衣に、掻い込みスミへ出るとへ信楽笠を、と差し翳す（写真）が、義仲との約束を果し神（義仲）も御照覧あれの心だろうか。左へ廻り正先から常座へ、一人落ち行くへ後ろめたさ、と笠を置き下居ワキへ合掌へ執心を弔ひて賜び給へ、と返シ句に立ち拍子踏まず留メ。キリなど

（⑥面へつづく）

ふじ能「巴」
狩野了一
（杉浦賢次氏撮影）

御伺　中暑

大倉流小鼓　松月会
久田舜一郎
久田陽春子
高橋奈王子
〒662-0097 西宮市柏堂町六-三〇-二〇一
電話（〇七九八）七三-一六五八六

叶石会　河村総一郎
河村眞之介
〒466-0821 名古屋市昭和区前山町一丁目二三
電話（〇五二）七六一-四八八二

河村大
〒603-8313 京都市北区紫野下柏野町五九-一
電話（〇七五）四六二-四一一五

石井仁兵衛
石井保彦
〒606-0913 京都市左京区松ヶ崎芝本町一-一-403
電話〇七五（七二三）五〇〇一

飯嶋六之佐
〒920-0961 金沢市香林坊2-8-17
電話（〇七六）二六一-四三四〇

亀井俊一
忠雄
保雄
実

下田文庫
こども能楽教室
筧鑛一
〒453-0802 名古屋市中村区下米野町3-29
電話（〇五二）四五一-九七九七

金春流太鼓
青耀会
上田悟
〒594-0041 和泉市いぶき野4-2-101
電話（〇七二五）三〇-一三七〇
名古屋稽古場　名古屋市中区栄5-6-4 栄能楽堂
電話（〇五二）二六二-一一八三

長生会
鬼頭義命
〒490-1323 愛知県稲沢市平和町城西137
電話（〇五六七）㊾一九六〇番

茂山千五郎
七五三
千三郎

茂山良暢
〒606-8265 京都市左京区北白川東小倉町28
電話〇七五（七〇一）二〇一一番
FAX〇七五（七〇一）二一三一

大蔵会
大藏狂言会
大蔵彌太郎
千太郎
基誠
〒177-0053 東京都練馬区関町南4-22-7-304
電話（〇九〇）三一一三-六九二三

㈱大阪能楽会館
〒530-0015 大阪市北区中崎西2-3-17

⑤面よりつづき）

他流と異なり面白かった。（1時間20分・5月11日・豊田能楽堂ふじ能）

「樋の酒」

主（アド悠樹）が外出すると、留守に召使う太郎冠者（シテ万作）と次郎冠者（小アド和憲）が示し合わせて盗み酒をするので太郎冠者には米蔵（一ノ松）を、次郎冠者には酒蔵（大小前）の番をするようきつく申し渡して出掛けると案の定、酒宴の果てに主の怒りを買い追われることに。

太郎冠者は預った蔵の米俵をどうこうするわけにもゆかず、酒蔵を預る次郎冠者を羨み無聊をかこって居ると、次郎冠者の方は淋しさ紛れに酒壷の封を切り飲み出すことに。それを見咎め太郎冠者、次郎冠者が飲みたれば来いと誘うが主命に律儀な太郎冠者「預った蔵が空けられぬ」と。朋輩としては何とか飲ませたい次郎冠者、一計を案じ窓から窓へ樋を通し流し素麺ならぬ流し酒。初め「息どほしい」と噎せた太郎冠者も巧く飲むようになるが窮屈、主が戻る迄間があろうから其方で飲む、と少しでも酒が入れば律儀も何処へやら、中へ入ると尻を据え酒盛りに。肴に謡い舞う小舞、小歌、中で「小鼓」の〽愛し若衆との小鼓は締めつ緩めつの調べつゝ、やら「よしの葉」のへざゝと鳴るはの〳〵よしの葉のよい女郎参りて酌をとりたうは候へど、などと意味深な艶歌（？）にはしゃぎ気分も昂揚、酒もすゝもうか。万作・和憲、息の合った悪さの無邪気。（20分）

「無布施経」

読経中、ふっと経を止め施主（アド幸雄）と世間話をするなど極く自然体に余裕のあった僧（シテ萬斎）も今日に限っていつも出るお布施が出ず焦りだす。僧の面子もあり請求することもならず、一旦は辞去するつもりもお布施が頭から離れず躊躇、「教化を以て取らう」と戻ると、法話にお布施を思い起こさせる字句を鏤め意気込んではみても、施主はお布施のことなどすっかり失念して居り、僧に水を向けられても合点したとばかりで埒が明かず僧は苛立つばかり。僧の法話は長口舌で執拗だが口跡爽やかに明晰、憎めない。萬斎、真骨頂を発揮するが、幸雄の、お布施への顧慮が欠けた記憶の抜けっぷりも見事。（42分）

やるまい会「法師ヶ母」
左より野村又三郎・松田高義
（杉浦賢次氏撮影）

「茸」

〳〵宅地に茸がにょきに何某（アド博治）、法力が強いと聞き及ぶ山伏（シテ萬斎）に退治して貰おうと出掛けると、別行あるが我御寮ゆえ行ってやろう、と勿体ぶって横柄。大仰に加持祈祷を施すが一向に効き目はなく、様々な形の様々な色の笠をもった茸は減るどころか増えるばかり。面（ツラ）も様々で賢徳・嘘吹・登髭・乙・祖父・武悪と多彩。立衆頭（鬼茸・和憲）は鬼出立、「取って噛もう」と山伏を威嚇すれば、他の茸は笠をとり「ホイ〳〵」と逃げ出す山伏を追う。茸の装束付が面白かった。（21分・5月12日・第16回ござる乃座）

「魚説法」

不在の住持に代り新発意（シテ信朗）、お布施千匹にも惹かれ檀家（アド又三郎）の二親追善の堂供養を執り行うも碌に経が読めず、苦肉の策は海辺育ちで魚の名に精通するのをよいことに、それらを連ね説法らしく節を付け読み上げる横着。途中でアドはそれと気付き、腥（なまぐさ）を忌む寺が何事、と激怒、シテを追い込む。当初、アドは健一郎で子供狂言が楽しめる筈が都合で信朗の師父又三郎が代勤、シテは却って緊張も無く、父相手に伸び〳〵と、キリで「こち（鯔）また寺へ飛魚〳〵」と飛び跳ねるように逃げるところなど役を楽しみ上々。（15分）

やるまい会「魚説法」
野村信朗

「鶯」

小鳥の鳴き声の優劣を競わせる小鳥合せ、鶯合せは当世にも存在、当然、鶯にも訓練が必要で、所ノ者（アド和憲）が野に出て子飼の鶯を啄らせているところへ、騎射笠・布羽織・長袴・太刀を佩き鵜竿を持つ立派な風体の男（シテ万作）が。仕える梅若殿は特に鶯を好き、方々から歓心を得ようと鶯が献上されるが、男には高價で手が出せず自分で捕獲しようと野に来た次第。鳴き声たよりに鶯を見付け持ち帰るところ、アドに咎められ一悶着。シテ手にみせる皮肉。太刀・小刀を取られ鶯も得られず、それにつけて思い出させるは大和国高天の寺の住持と夭折した梅若殿という稚児との故事。ある時、稚児は鶯と化して寺の梅の木に留り、「初春の朝夕毎には来れども、逢はでぞ帰る元の住処に」の一首を住持に手向ければ一山涙したと語り、「思はば〳〵此の竿ゆえちゃ」と憎げに鵜竿を投げ出すと「しないたり、しないたり」と入る。舞台に残された万作の独白は、口惜しさや情けなさ、梅若殿の喜悦も得られぬ空しさ交々、寂しみ一杯だった。（26分）

やるまい会「鬮罪人」
左から野口隆行・野村万蔵（鬼・シテ）奥津健太郎・野村萬（アド）佐藤融・井上松次郎・野村扇丞（立頭）　（杉浦賢次氏撮影）

やるまい会「鶯」
左より野村万作・高野和憲

「法師ヶ母」

DV（家庭内暴力）のシミュレーション（模擬）を見る思い。改めて、いつの世にも在るのだなあ、と考えざるを得ない。

酒乱の男（シテ又三郎）が事ある毎に妻（アド高義）の言葉尻を捕らえてはガミ〳〵異を唱え妻の言う事など聞こうともしない。堪り兼ねて家を出る妻に「疾う〳〵出て失せう」と荒けない男は未だ飲み足りないか、「もそっとどれへぞ行て」と酔歩中入へ、〽都なれや東山、と謡気分は微吟ならぬ高吟、酒量の程も知れようというもの。

酔いの醒めた後場、〽物に狂ふも五臓ゆへ酒の仕業と覚えたり、などと謡い乍ら出る。酒癖の悪さを己れのせいにはせず胃の腑や酒のせいにする強かさだが、追い出した妻の在処を尋ね歩く弱さも。カケリの焦慮は、地となりへ法師ヶ母ぞ恋しき、と安坐双シヲリの大仰、妻が聞きつけたろうか掛合となり、男の巧言に載せられる妻、子は綏とよく言ったもの、一件落着し「南無三宝愛しの人よちゃっとござれ」と連れ立って帰る大団円。男のエゴが最後まで残るきらいも蓋し又三郎熱演。（28分）

「鬮罪人」

祇園会の山車の趣向を相談する講中の面々（立衆、扇丞・松次郎・融・健太郎・隆行）、当屋の主（アド萬）は何事につけとかく口を出す太郎冠者（シテ万蔵）に予め釘を刺して置くも相談が進むにつれ、その都度横槍を入れてくる。主もその度毎に太郎冠者を睨めつけ脅して追い払うが、面々は思いついた事があるようだから呼んで聞いてみては、と。「あれらづれの申す事が取上げらるゝもので御座るか」と露骨に嫌な顔の主、一方、面々を味方につけて活き〳〵と持論を展開する太郎冠者。結局、鬼が罪人を責めるという筋書の太郎冠者案が採用され、面白くないのは主、飼犬に噛まれるはこのことか。更に配役を鬮で決める段となれば誰しも罪人役の札を意識、嫌な余感、不安に苛まれようというものである。

鬼は太郎冠者が、罪人は主が引き当て深刻な事態に。主の立場をないがしろにされ憤懣遣る方無い萬、面々の前で叱責され受ける恥辱・鬱憤徒ならぬ万蔵、両人の心情・心理描写が鮮やかだった。（43分・5月25日・先代野村又三郎七回忌追善やるまい会）

伺　御　中　暑

和泉流
狂言共同社
代表　井上菊次郎
鷺　今井友彦
鹿　佐藤弘
大蔵　野村萬斎
佐藤　枝松郁雄
井上　枝島俊郎
見　枝島靖行
政　靖裕
〔事務所〕〒466-0826 名古屋市昭和区滝川町54 サンハウス滝川3D
電話 FAX 052・834・8607

狂言やるまい会
野村又三郎
松田高義
野口隆行
奥津健太郎
〒460-0021 名古屋市中区平和一―二〇―四 野村事務所 気付
電話 052(350)7971
FAX052(350)7972

五〇〇年余の伝統を護る
一色能
一色町能楽保存会
会長　吉川貞夫
〒516-0011 伊勢市一色町1306番地の2
電話(〇五九六)二五―六五二六

ウシマド写真工房
牛窓正勝
雅之
〒602-8381 京都市上京区北野上七軒
TEL(〇七五)四六一―三四一
FAX(〇七五)四六一―五七七二

朝日カルチャーセンター
囃子教室
小鼓　後藤孝一郎
丸栄スカイル10階

名古屋能楽堂
名古屋市中区三の丸一丁目一―一
TEL052(231)0088

豊田市能楽堂
豊田市西町一丁目二〇〇番地
豊田参合館8階
TEL0565(35)8200

栄能楽舞台
名古屋市中区栄五―六―四
電話(一六一)一一八三番

楽諷庵舞台
ご連絡は　名古屋市昭和区川名山町一〇五
電話(八三二)三四九一番

葵心庵舞台
尾張旭市東大道町原田二四九三ノ二
若杉ビル(旭市役所南)
電話　〇五六一五③二三四六番
能舞台　電話〇五六一五④〇六九八

〔おことわり〕暑中広告の掲載にあたりましては、紙面の都合により順不同とさせて頂きましたので何卒ご理解賜わりますようお願い申し上げます。

能樂の友

発行　能楽の友社
名古屋市千種区千種２丁目18－18
（郵便番号　464-0858）
電　話（052）731－７９８４
ＦＡＸ（052）733－２８３７
振替口座　００８００－６－３６３９３

購読料　１年　１１００円
郵送の場合　１年　１８００円
一　部　１００円

ＮＨＫ放送予定（平成25年９月）

◈ＮＨＫ－ＦＭラジオ能楽鑑賞（日曜日６時～６時55分）

９月１日	素謡「千　手」（観世流）	シテ	角寛次朗
	「蘆　刈」（部分）		
９月８日	素謡「半　蔀」（宝生流）	シテ	前田晴啓
９月15日	素謡「松　風」（観世流）	シテ	上田貴弘
９月22日	素謡「黒　塚」（喜多流）	シテ	佐々木宗生
	「錦　木」（部分）	シテ	金子敬一郎
９月29日	素謡「小　督」（金春流）	シテ	櫻間右陣

演能カレンダー

◆名古屋能楽堂◆

（TEL 052－231－0088）（能楽関係のみ）

［８月］
25日(日)　第29回衣斐正宜後援会　（有料）
28日(水)　和泉会別会　（有料）

［９月］
１日(日)　名古屋能楽堂９月定例公演　（番組①面）
７日(土)　東海巽会大会　（番組①面）
16日(月)　名古屋観世会定例公演能　（番組①面）
21日(土)　第８回名古屋片山能　（番組①面）
22日(日)　和久荘太郎主宰「第一回演能空間」（番組②面）
28日(土)　和泉流狂言大会　（番組②面）
29日(日)　和泉流狂言大会

［10月］
６日(日)　久田観正能　（番組②面）

第33回伝統文化ポーラ賞
観世清和宗家が「大賞」

公益財団法人ポーラ伝統文化振興財団は八月十二日、第33回（平成25年度）伝統文化ポーラ賞の受賞者を発表、財団法人観世会・一般財団法人観世文庫・観世清和理事長（二十六世観世宗家）の「大賞」受章が決定した。

「伝統文化ポーラ賞」は、伝統工芸技術や伝統芸能、或いは民族芸能・行事など、無形の伝統文化の分野で貢献し、今後も活躍が期待される個人・団体に対して贈呈される。「大賞」は、顕著な功績が認められる個人または団体を顕彰するものとされており、最近十年間では、第24回（16年度）の友枝昭世氏、第28回（20年度）の中村吉右衛門氏以来となる。

受章贈呈式は十月二十四日（木）ＡＮＡインターコンチネンタルホテル東京で執り行われる。

受章内容　能楽の伝承・振興

観世清和氏（五四）は、平成二年観世流家元を継承（二十六世宗家）、平成三年財団法人観世文庫を設立、理事長に就任した。

舞台活動としては、観世会定期能をはじめ「三輪・誓納」「江口・平調返」、「定家・袖神楽・露之紐解・中之掛」など大曲、秘曲を勤め、国内外で幅広く公演・普及活動を継続している。また昨年七月には観世宗家としては実に二百年振りとなる最奥の秘曲「関寺小町」を演じ、五老女すべてを勤めあげた。

受賞歴としては、平成七年度芸術選奨文部文部大臣新人賞、平成九年フランス芸術文化勲章シュヴァリエ賞、平成24年度芸術選奨文部科学大臣賞を受賞。

第12回
名古屋名駅薪能

「第12回名古屋名駅薪能」は、猛暑のつづく七月二十八日（日）観世流宗家観世清和師が来演してＪＲ名古屋駅・タワーズガーデン特設会場で開催された。

演能に先立ち、全国学生能楽コンクール参加の金城学園大学、名古屋市立大学、京都学園大学、甲南大学、国学院大学、学習院大大学、名古屋大学観世会、法政大学の審査結果の発表があり、最優秀賞・学習院大学・優秀賞・名古屋大学観世会、審査員特別賞・法政大学に表彰状が授与された。

演能は能「鶴亀」狂言「盆山」能「殺生石」の上演で熟気の都心に〝幽玄〟の境が繰りひろげられた。

［写真㊤能「鶴亀」㊦学生能楽コンクール授賞式］

名古屋能楽堂九月定例公演

九月一日（日）　第一部午前十時開演　第二部午後二時開演

［第一部］

能　弓八幡（観世流）
梅田　嘉宏　古橋　正邦　杉江　元　杉江　正樹　杉江　淳　河村眞之介　船戸　昭宏　加藤　洋樹　竹市　学　井上松次郎
間

狂言　三人長者
衣斐　愛　玉井　博祐　野村又三郎　奥津健太郎　野口　隆行

能　通小町（宝生流）
高安　勝久　河村総一郎　後藤孝一郎　大野　誠

［第二部］

能　敦盛（観世流）
前ツレ　吉沢　孝旭　前ツレ　八神　孝充　前ツレ　松山　幸親　武田　大志　橋本　宰　河村眞之介　後藤嘉津幸　鹿取　希世　今枝　郁雄
間

狂言　入間川
佐藤　友彦　鹿島　俊裕　佐藤　融

（金剛流）舞囃子　松風　熊谷眞知子

（金春流）仕舞　山姥（キリ）　広瀬　雅弘　長田　郷　飯富　雅介　河村総一郎　後藤嘉津幸　加藤　洋輝　鹿取　希世

能　鵺（喜多流）
松田　高義

［有料］　主催　名古屋能楽堂

名古屋観世会定例公演能

九月十六日（祝）十二時三十分始
名古屋能楽堂

能　半蔀
祖父江修一　杉江　元　河村総一郎　後藤孝一郎　竹市　学　奥津健太郎
間　後見　吉沢　清沢　一政　旭　地謡　八神　孝充　本田　須部　甫　勲　古橋　正邦　武田　大志　久田　松山　幸親　甫　勘鶴　梅田　嘉宏

狂言　二人大名
大名　野村又三郎　使の者　奥津健太郎　井上松次郎　後見　伴野　俊彦

仕舞　通盛　武田　大志　高橋　暸一　松風　武田　邦弘　地謡　八神　孝充　梅田　嘉宏　梅田　邦久　虫　加賀　敏彦　鉄輪　清沢　一政

能　殺生石
観世銕之丞　白頭　森　常好　河村眞之介　後藤嘉津幸　加藤　洋輝　大野　誠　松田　高義

［チケット料金］
指定席五〇〇〇円、自由席四〇〇〇円
学生席二〇〇〇円
［取扱い］片山家能楽・京舞保存財団（TEL　075・551・6535）
名古屋能楽堂（052・231・0088）
文化振興事業団（052・249・9387）
栄ブレチケ92（052・953・0777）
チケットぴあ（0570・02・9993）

主催　名古屋片山能制作委員会

第八回　名古屋片山能

九月二十一日（土）午後二時開演
名古屋能楽堂

［要会員券］
当日指定券八五〇〇円、自由席六〇〇〇円

主催　名古屋観世会
事務所　名古屋市名東区一社３－１１６２
TEL（052）734・6192

能
橋本　忠樹　武田　大志　片山　伸吾　古橋　正邦
鬼揃　高井　松男　平木　豊男　大日方　寛
間　野村又三郎

紅葉狩
殿田　謙吉　河村眞之介　後藤嘉津幸　加藤　洋輝　藤田六郎兵衛
後見　味方　玄　観世　喜正　地謡　吉沢　旭　本田　須部　甫　勲　武田　邦弘　梅田　邦弘　片山九郎右衛門　清沢　一政　橋　保向
（終了予定午後四時頃）

半能
子方　片山　清愛　片山九郎右衛門

橋弁慶
河村眞之介　後藤嘉津幸　藤田六郎兵衛
後見　橋　片山　保向　幽雪　地謡　吉沢　河村　和貴　梅田　嘉宏　清沢　一政　旭　橋本　光史　味方　玄　喜正　観世　分林　道治

仕舞　通小町　片山　幽雪　地謡　河村　和貴　武田　邦弘　梅田　邦弘　分林　道治

後見　祖父江修一　久田　勘鶴　地謡　吉沢　旭　松山　幸親　高橋　暸一　武田　武田　清沢　一政　梅田　邦弘　古橋　正邦　大志　武田　邦久
（午後四時十五分頃終了予定）

第3回 久田観正能

能「俊寛」10月6日公演

NPO法人名古屋能楽振興協会主催の「第三回久田観正能」は十月六日（日）名古屋能楽堂で能「俊寛」を上演する。

「俊寛」は、能楽二一〇曲のなかでも重きを置かれる曲「習物」（ならいもの）の一曲であり、能楽師にとっても研鑽の曲である。

番組は舞囃子「竹生島」「定家」仕舞「頼政」「船弁慶」、能「俊寛」開演午前十時半。

なお九月七日（土）午後三時から四時半まで、名古屋東急ホテルで「俊寛」の事前鑑賞講座が開催される。参加費二千円（申込み先着百名）＝番組②面掲載。

小牧山薪能

9月21日小牧山史跡公園

小牧山城築城450年記念事業として、きたる九月二十一日（土）「小牧山薪能」が催される。主催小牧市、小牧市教育委員会。

会場／小牧山史跡公園、入場無料。

番組　午後五時四十五分、火入れ式▽観世流能「杜若」（シテ清沢一政）▽和泉流狂言「附子」（シテ佐藤友彦）▽観世流能「鞍馬天狗」白頭（シテ久田観鵬）終演午後八時十五分。

新作能面展

9月18日より名古屋市博物館

中部能面研究社主催

中部能面研究社（代表磯部峯雲氏）では、第十一回新作能面展を九月十八日（水）より九月二十三日（月・祝）まで名古屋市博物館三階ギャラリー第一室にて開催する。

入場無料。後援愛知県教育委員会、名古屋市教育委員会。

演能案内

宝生流能楽師　和久荘太郎主宰

第一回 演能空間

九月二十二日（日）午後二時開演

名古屋能楽堂

番組

挨拶　和久荘太郎

演目解説　金子　直樹

舞囃子　高砂　宝生和英　河村眞之介　後藤孝一郎　加藤洋輝　竹市学

当地の各流儀・流派・結社 社中の消息を辿る ㊼

竹尾　邦太郎

拾貳　「藤田昭彦から藤田六郎兵衛へ」

③「能と狂言に親しむ会」

――承前――

先号既述の通り藤田六郎兵衛が梅田邦久と立ち上げた「能と狂言に親しむ会」が二年目を迎え、素囃子「獅子」笛・藤田六郎兵衛、能「善知鳥」シテ梅田邦久、二番の同一番組を以て時・所を替え三回の公演を行なう。初回と第二回は名古屋市芸術創造センター仮設舞台、番組パンフレットに「照明家　吉田鋭治　松原吉晴が、能に挑戦」とあるように劇場機構を駆使した異色の舞台。第三回は熱田神宮能楽殿の本格舞台である。

昭和六一年二月一四日（金）六時半始・照明吉田鋭治。素囃子「獅子」藤田六郎兵衛・柳原富司忠・山本孝・上田悟、能「善知鳥」梅田邦久・祖父江修一・河村和貴（子方）西村欽也・野村又三郎・藤田六郎兵衛・柳原富司忠・山本孝・武田邦弘（地頭）青木道喜）後見。

昭和六一年二月一五日（土）六時半始・照明松原吉晴。素囃子「獅子」藤田六郎兵衛・後藤孝一郎・筧鉱一・助川龍夫、能「善知鳥」梅田邦久・清沢一政・青木喜雄（子方）西村欽也・野村信行・鹿取希世・後藤孝一郎・筧鉱一・橋本磯道（地頭）青木道喜（後見）。

昭和六一年三月一日（土）二時半始。素囃子「獅子」藤田六郎兵衛・久田舜一郎・河村総一郎・鬼頭喜太郎、能「善知鳥」梅田邦久・松山幸親・河村和貴（子方）西村欽也・佐藤友彦・藤田六郎兵衛・久田舜一郎・河村総一郎・橋本雅夫（地頭）近藤幸江（後見）。

「能と狂言に親しむ会」入場券

昭和61年2月14日・15日・3月1日「能と狂言に親しむ会」パンフレット裏表紙

此の公演番組パンフレットには裏表紙にイラストで能「善知鳥」の物語の筋が描かれてをり邦文・英文の解説が付く懇切叮嚀（挿図）。なお前二回公演を見てゐれば第三回は無料招待の趣向、入場券にチケットと英語で印刷されてゐる（挿図）のも珍しく、外国人の集客を大いに期待してゐることが窺われる。

「能と狂言に親しむ会」昭和六二年は三月一八日と一九日、所は前年に同じ名古屋市芸術創造センター。初日は仕舞「忠度」梅田邦久、能「松風・見留」片山九郎右衛門・片山清司・西村欽也・野村又三郎・藤田六郎兵衛・柳原富司忠・河村総一郎・梅田邦久（地頭）武田欣司（後見）。

第二日　仕舞「百万」梅田邦久、能「砧・梓之出」観世鉄之丞・片山清司・西村欽也・佐藤友彦・藤田六郎兵衛・大倉源次郎・河村大・助川治・梅田邦久（地頭）武田欣司（後見）。

前年、昭和六一年八月一日から一〇日まで名古屋城夏まつり（挿図）が行なわれ、その一環として藤田六郎兵衛の企画・構成により能楽協会名古屋支部の全面的バックアップのもと天守閣前特設能舞台で連夜薪能（挿図）が催され、初年度は和泉会・名古屋学生能楽連盟・龍吟会・也留舞会・能楽協

（③面へつづく）

第三回 久田観正能

十月六日（日）午前十時半始

名古屋能楽堂

（入場無料・ご来場歓迎）

主催　狂言共同社

（終演予定・十六時二〇分頃）

竹生島参
水掛聟
名取川
苞山伏
小舞　鵜飼　七つ子　大原木
昆布売
附子
宗論
空腕
悪坊
福之神

（終演予定・十六時二〇分頃）

仕舞　鶴亀　クセ　竹内澄子
経政　キリ　内藤飛龍
祇王　玉井博祐　衣斐愛
狂言語　那須語　野村又三郎
一調　勧進帳　辰巳満次郎・大鼓　河村総一郎
仕舞　駒之段　佐藤耕司
笹之段　衣斐正宜
頼政　近藤乾之助
子方　片桐和久荘太郎　賢
能　船弁慶　飯冨雅介　亀井広忠　橋本宰　後藤嘉津幸　金春国和　橋本叡　藤田六郎兵衛
地謡　井上松次郎　澤田宏司　高橋憲正　小倉健太郎　野月聡　武田孝史　高橋章　大坪喜美雄　辰巳満次郎
（終演予定　十七時頃）

和泉流狂言大会

（初日）九月二十八日（土）十三時開演
（二日目）九月二十九日（日）十一時開演
名古屋能楽堂

〔入場料〕S席八千円、A席七千円、B席六千円
自由席　五千円、学生券　二千円
取扱い／演劇空間事務局
名古屋能楽堂（052・231・0088）電話03・3655・2681
プレイガイド＝名古屋文化振興事業団チケットガイド、中日サービスセンター、栄プレチケ92

（初日）九月二十八日（土）十三時開演

狂言組

末広かり　果報者　高橋芳子　太郎冠者　石塚則恵子　スッパ　大橋則夫
井杭　算置　何某　三輪島章　井杭　主人　各務文歌　上杭　太郎冠者　井上蒼大歌
お冷し　昆布売　大名（高一）　佐藤貝谷美世　大名　昆布売（中一）　尾崎友彦　山賊　女　尾崎玄忠　石黒令忠　佐藤定融子
瘦松　語り　巴　各務文歌
鈍太郎　鈍太郎　下京婁　上京女伏　春木秀雄　今枝太郎　中島俊裕　鹿島則夫　知亮　大友彦　佐藤芳夫　大沢純　河田杉本和代　今枝良治　今枝孝夫　今枝信二
蝸牛　新発意　住持　傘借　馬借　施主　松井山上康子　蒼
骨皮
（二日目）九月二十九日（日）十一時
福之神　福之神（小五）　今枝良治
鈍根草　参詣人（小一）　今枝孝夫　今枝信二　太郎冠者　服部摩里子　主人　市川光子

（終演予定・十六時五〇分頃）

主催　NPO法人名古屋能楽振興協会
事務局　名古屋市名東区一社3・162
TEL　052・743・6192
FAX　052・705・1585
〔チケット料金〕一般（全自由席）五千円　学生三千円
取扱いプレイガイド、チケットぴあ（0570・02・9999）
Pコード（431・008）
名古屋能楽堂、名古屋能楽振興協会

舞囃子　竹生島　久田勘吉郎　河村総一郎　加藤洋輝　林吉兵衛　藤田次郎
地謡　笠田祐樹　吉沢旭　藤谷音彌　下川宜長　笠田昭雄
舞囃子　定家　久田三津子　河村総一郎　林吉兵衛　藤田次郎
地謡　八神孝充　松山幸親　山田義高　藤井徳三　笠田稔
お話・本日の能　作家　林望
仕舞　頼政　キリ　藤井徳三　上田貴弘
船弁慶　地謡　吉沢旭　上田拓司　笠田稔　八神孝充
成経　笠田祐樹　康頼　藤谷音彌　久田勘鷗
能　俊寛　福王和幸　山本哲也　久田舜一郎　藤田次郎
間　野村又三郎
後見　笠田昭雄　下川宜長
地謡　久田勘吉郎　吉沢旭　上田拓司　笠田稔　八神孝充　上田貴弘　松山幸親　山田義高
（終了予定　午後一時頃）

（②面よりつづき）

会名古屋支部・邦謡会・鼓と笛の会・正風会・久田観正会がそれぞれ〈参加したが「能と狂言に親しむ会」としては主催公演がなかった。二年度になる昭和六二年は七月三一日から八月九日までの会期中（熟田神宮での恒例の名古屋薪能の第22回開催日に当った八月八日を除く）、名古屋城夏まつり薪能オープニング特別公演として七月三一日と八月五日の特別公演に登場する。

七月三一日　狂言「磁石」野村又三郎・佐藤友彦・井上礼之助、能「熟田」梅田邦久・祖父江修一・清沢一政・高安勝久・杉江元・大矢高義・藤田六郎兵衛・福井啓次郎・河村総一郎・上田悟・味方健（地頭）近藤幸江（後見）。

「熟田」は観世流現行曲には籍が無く五流の中、金春流のみが現行する脇能「源太夫」に似るらしいが、これとてこれまでに昭和40年5月23日の名古屋金春会で本田秀男が勤めたのみの稀曲。丸岡桂著『古今謡曲解題』には「朝臣熟田に参り源太夫の神（熟田の宮摂社の一）の奇特を見る」とあり、平成24年・筑摩書房刊の『能楽大事典』には「世阿弥が『五音』に亀阿曲として引用する〈熟田〉の詞章が、現行〈源太夫〉のサシ・クセの部分とほぼ一致する。これにより、〈源太夫〉の古名を〈熟田〉といったか、あるいは曲舞謡〈熟田〉をもとに能〈源太夫〉が作られたか、いずれかと考えられる」とある。能「熟田」の再演を切望する。

八月五日　狂言「重喜」小柳保志・井上松次郎、能「紅葉狩・鬼揃」梅田邦久・武田邦弘・中川雅章・高橋瞭一・須部甫・松下幸親・西村欽也・飯富雅介・杉江元・佐藤友彦・大野弘之・藤田六郎兵衛・柳原冨司忠・筧鉱一・助川龍夫・久田徹二（地頭）小島一英（後見）。

昭和六三年度「能と狂言に親しむ会」は熟田神宮能楽殿・六月二二日、三年前に復曲された観世流「三山」名古屋初演の昼夜二部公演。

昼の部　解説・観世栄夫、能「三山」観世銕之亟・片山清司・西村欽也・野村又三郎・藤田六郎兵衛・柳原冨司忠・河村総一郎・梅田邦久（地頭）観世暁夫（後見）。

夜の部　解説・観世銕之亟、能「三山」観世栄夫・観世暁夫・西村欽也・野村又三郎・藤田六郎兵衛・大倉源次郎・河村大・梅田邦久（地頭）武田欣司（後見）。

『三山』上演にあたって　の題で次の言葉がある。

二十六世宗家　観世清和

『三山』は先代二十五世左近が以前より心に留めておりましたものを、分家銕之亟氏にその任をお願いし、昭和六十一年復曲に至りました。

私も流儀の春の佳曲と致したいという先代の思いを継ぎ、先年京都観世会において初演を致しました（平成六年九月廿五日）。

本年も引き続き、二月に神戸、名古屋（平成七年二月十二日）福岡、三月に大阪、四月には東京の各地観世会にて演じさせて頂きます。

『三山』が皆様に広く親しまれる曲となりますよう、御高覧御高評頂ければ幸いに存じます。（括弧内筆者注）

八世　観世銕之亟

先代左近氏御存命中、まだ元正さんの頃よりこの美しい詩情に満ちた春の能『三山』が復曲の候補にのぼっておりました。そして昭和六十一年、機が熟したと申しましょうか、左近氏よりお前がとにかく叩き台を創りなさいとのことで、この大役をお受けしました。

その時に左近氏は「もちろん復曲に際しては、何故に流儀においてこの曲が廃曲に至ったか、その経緯についても思いを致し、その上で、現代に生きうる新たな工夫考案を加えて復曲致さねばならぬ」と言われたことが、今でも耳に残っております。そして御自身が全国で皆が上演出来るようにと考えられた矢先に、惜しくも他界されました。あれから六年の月日が流れ、より良い流儀の能にと心掛けて練り上げ、この度の新宗家の全国巡演が実現致しました。今後より多くの方々の上演と多くの観客の方々の御高評によって、一層の完成度の高いものとしてゆきたいと思っております。

また「能と狂言に親しむ会」の催主の一人として藤田六郎兵衛は毎日新聞に連載中の「梅の木のごとく　笛の家に生まれて」の第10回（昭和63年6月13日付）に「三山」の梗概のあと次のように述べている。

――前略――「親しむ会」では毎回、照明能・蠟燭能・新作能というように、何か目的を持って公演してきました。今回の「三山」は、観世流が二百年ぶりに復曲した能なのです。宝生流・金剛流では跡絶えることなく、「三山」は上演されています。観世流では昭和六十年十二月に今回、シテを演じられる観世銕之亟氏と横道萬里雄氏により詞章修補・演出・節付されました。東京・関西では上演されましたが名古屋では今回が初の上演になります。この観世流の「三山」の魅力は、なんといっても現代に復曲された曲であるということです。無論、下地になる謡は江戸時代から残っていたわけですが、横道氏が学者の立場から文章のながれの不自然な個所を訂正し、早稲田小劇場（現スコット）等との演劇体験を持っている現代の能役者、観世銕之亟氏が謡の節付、型付をしていること。現代を生きている人間の感性により再生された「三山」に私は魅力を感じます。能を見慣れている人、初めて能に出合う人、いずれも関係なく能の演劇性に新たな魅力を感じてもらえるものと信じています。

また、この能はある意味で生まれたての能です。再演を重ねることによって完成されていく部分があります。皆さんは「三山」の歴史に立ち会うことになるのです。

なお前後するが、藤田六郎兵衛が主宰の「能楽講座」案内散らシに次の通りある。

昭和63年度　第1回能楽講座

いま一度、歴史の流れの中の「能」、現代社会の「能」についてお話したいと思います。一九六四年演劇シンポジュムに参加したイヨネスコが言った「能はたいへん前衛的でありその演出には永遠性がある」という言葉を我々能にたずさわる人間と、観客であるみなさんと共に考えてみたいと思います。

今年は3・9・12月（各月第2火曜）といたします。そして6月22日観世流復曲「三山」名古屋初上演3千5百円全自由席、昼1時半、夜6時半の公演にご招待致します。本年度は年会員のみとします。

年会費　1万円（4回受講と公演ご招待）

日時　3月8日（火）2時と6時30分

会場　今回から場所が変わりました。ご注意下さい。第2ワシントンホテル前　和風喫茶　大黒屋本店ビル3F

第2回は能「三山」徹底究明と題し講演致します。（6月14日・火）

（注　右散らシの元は横書き。昭和63年度以前及び以後の「能楽講座」の情報は筆者寡聞にして不明）

三年目を迎えた名古屋城夏まつり薪能は八月二日から十四日まで。うち「能と狂言に親しむ会」の主催公演は以下。

八月二日　仕舞三番「高砂」生駒里翠「松風」前野郁子「山姥」、近藤幸江、能「羽衣」今沢美和・高安勝久・藤田六郎兵衛・福井啓次郎・河村眞之介・助川龍夫・近藤幸江（地頭）梅田邦久（後見）。

八月三日　仕舞三番「屋島」本田勲「三輪」清沢一政「歌占」久田徹二、能「熊坂」松山幸親・杉江元・大矢高義・竹市学・後藤孝一郎・鬼頭英二・鬼頭喜太郎・久田徹二（地頭）今沢美和（後見）。

八月四日　仕舞三番「兼平」高橋瞭一「富士太鼓」清沢一政「玉之段」梅田邦久、能「天鼓」祖父江修一・飯富雅介・大矢高義・鹿取希世・柳原冨司忠・河村大・加賀敏彦（地頭）梅田邦久（後見）。

八月八日　仕舞三番「簾」前野郁子「葵上」梅田邦久「善界」松山幸親、能「天鼓」清沢一政・杉江元・大矢高義・藤田六郎兵衛・梅田邦久（地頭）前野郁子（後見）。

八月九日　仕舞三番「笠之段」近藤幸江「花筐」生駒里翠「鉄輪」今沢美和、能「羽衣」前野郁子・飯富雅介・鹿取希世・福井良治・鬼頭英二・鬼頭好信・近藤幸江（地頭）久田徹二（後見）。

八月十日　仕舞三番「難波」今沢美和「松虫」本田勲「野守」梅田邦久、能「花月」須部甫・高安勝久・野村信行・竹市学・後藤嘉津幸・河村眞之介・梅田邦久（地頭）今沢美和（後見）。

八月十一日　仕舞三番「邯鄲」加賀敏彦「笹之段」須部甫「殺生石」祖父江修一、能「車僧」久田徹二・西村欽也・佐藤友彦・藤田六郎兵衛・柳原冨司忠・河村大・鬼頭喜太郎・高橋瞭一（地頭）近藤幸江（後見）。

八月十二日　仕舞三番「加茂」梅田邦久「班女」加賀敏彦「小鍛冶」須部甫、能「半蔀」高橋瞭一・高安勝久・大矢高義・鹿取希世・福井良久・河村眞之介・祖父江修一（地頭）梅田邦久（後見）。

八月十三日　仕舞三番「放下僧」祖父江修一「野宮」久田徹二「昭君」高橋瞭一、能「巴」近藤幸江・杉江元・佐藤友彦・竹市学・後藤孝一郎・鬼頭英二・久田徹二（地頭）今沢美和（後見）。

八月十四日　仕舞三番「巻絹」松山幸親「井筒」祖父江修一「春日龍神」清沢一政、能「安達原」梅田邦久・飯富雅介・杉江元・野村信行・藤田六郎兵衛・福井啓次郎・河村大・助川龍夫・清沢一政（地頭）前野郁子（後見）。

セントラルパーク薪能

セントラルパーク開園10周年を記念して初回（昭和60年9月23日）から数え第四回目となる薪能が9月23日・24日の両夜行なわれる。

第四回　第一夜　狂言「痺」野村信行・大矢高義、能「船弁慶」祖父江修一・今沢美和・祖父江智子（子方）西村欽也・飯富雅介・野村又三郎・鹿取希世・柳原冨司忠・河村眞之助・助川龍夫・久田徹二（地頭）近藤幸江（後見）。

――以下次号――

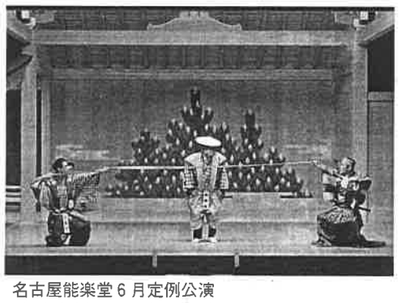
㊤入場券　㊦昭和61年名古屋城夏まつり薪能（8月1日～10日）番組表紙

第四回　第二夜　狂言「柿山伏」大矢高義・野村信行、能「松風」梅田邦久・清沢一政・西村欽也・藤田六郎兵衛・柳原冨司忠・筧鉱一・中川雅章（地頭）須部甫（後見）。

◆仲夏の舞台から◆

「名古屋能楽堂六月定例公演」「名古屋観世会定例公演能」「名古屋宝生会定式能」

竹尾邦太郎



名古屋能楽堂6月定例公演
「伊文字」左より　佐藤　融、松田高義、佐藤友彦
（杉浦賢次氏撮影）

「伊文字」

うと太郎冠者（小アド融）を伴い清水の観世音に詣る主（アド友彦）、汝の妻は西門一の階に在りとの御霊夢を得、太郎冠者を遣れば一ノ松に佇む女（小アド俊彦）が。住居を問えば、女は「恋しくば問うても来ま妻を授けて賜お

せ伊勢の国、伊勢寺本に住むぞ妾は」の言葉を残し匆々と消える。事の次第を聞いて主、太郎冠者が「恋しくば、問うても来ませ、伊」とまでしか覚えていないのに落胆すれば、歌の上の句では、と察した太郎冠者、新しい関所を設けて通る人を止め、下の句を付けさせよう、の気転、早速一人の通行人（シテ高義）が網にかゝる（写真）。多忙の身で迷惑ながらも下の句を強要されて思案し始めるところなど高義好人物ぶりをみせる。

歌は節（ふし）、通行人と太郎冠者、掛合に〈伊の字の付いた国の名、と振りを付け拍子にかゝり（写真）朗吟すれば自ずから記憶も甦ろうというもの。徐々に下の句が紡ぎ出されて形が整い、遂に復元が成れば嬉しさ喜びも一入だが賑やかだっただけに、まこと名残り惜しい別れの感傷。〈梅は、と笠を捨てへほろりと落つれども、の通行人の寂しみも一入。三者のガッシ留メ、調和のとれた好舞台。因に和泉流で女と通行人が一人二役でないのは野村又三郎家。（34分）

名古屋能楽堂6月定例公演
「伊文字」松田高義

「砧」

シテ驍。平成12年7月の定例公演以来の喜多流「砧」、当時の配役はアヒ（友彦）太鼓（龍夫）地謡（政允・陸ら）他は今回に同じ。13年ぶりで何が無し懐かしい。

喜多流は前場にワキは登場せず侍女・夕霧（ツレ郷）が次第・名宣から主・芦屋某の意を受け西下する道行に。前場の雰囲気をつくるツレ郷、進境をみせ舞台を締める。一ノ松から幕へ芦屋某ノ妻（シテ驍）を訪うと大小アシラヒの囃子で三ノ松に姿を見せるシテ、空閨を守る侘しさをサシにへ晴間稀なる心かな、とツレに向き合い問答に。観世流の「なに夕霧と申すか、人までもあるまじ此方へ」とシテがツレを招じる態に舞台へ入ると互いに下居、掛合となるのと趣を異にし、喜多流は問答・掛合を橋懸で向き合って行なう。〈鄙の住居に秋の暮、とシテの思い心情を代弁する初同（幸雄・琇鵬ら）となり、〈三年の秋の夢ならば、の返シ句にツレとシテ共に運ビ出し、〈昔は変り跡もなし、とツレは地前に、シテは〈愚かの心やな、と大小前に下居。孤閨を唧ち夫の不実を恨む心は内向し、砧の音に唐土の故事も想起され益々狂おしくなるばかり。

砧ノ段は、その前に物着となる観世流と異なり〈夜寒を風や知らすらん、のあと物着に。その間に作物が正先へ。〈よも問はじ、の後イロエになる。

（④面へつづく）

（③面よりつづき）

て風北にめぐり、の一セイはツレが謡い、〻西より来る秋の風の、と脇柱上へ眺め、〻吹き送れと、シテ柱の方へ目を遣るのは風の通い路の先に夫を見る心か。〻君が其方に吹けや風、と扇で虚空を二ツ打ち遙か右前方を眺める辺り夫への思いの丈も偲ばれる。〻夏衣薄き契りは忌はしや、と踏む四ツ拍子には空閨の苛立ちが、右ウケて作物に視線を移すところには忌々しさも。〻落つる露涙、と作物まえに下居、〻ほろ〳〵はら〳〵はら、と砧搗つ型に木槌を握す扇がほろりと手を離れ〻何れ砧の音やらん、と双シヲリになるところには募る悲しみ、一聯の型には濃やかな情念。歳晩、夫の下向はならずの言伝に苦悶のクドキは、シテと地、相俟ち哀傷も一入に、〻乱るゝ（草の花心）、と立つと、すっと橋懸へ向かう死出の旅の静けさ、中入に趣。次いでツレも退き芦屋某ノ下人（アヒ松次郎）が出、立シャベリにシテの死を言い、幕へ芦屋某（ワキ雅介）へ「急ぎ御出候へ」と促すと厚板着付・白大口・掛絡の姿でワキが何事もなく舞台へ、アとは切戸でなく幕へ退く。

ワキは常座で名宣、法事を行うとて作物前に下居、〻無慙やな、以下哀悼は〻言葉を交はす哀れさよ、の返シ句で合掌するところに極まる。後場、芦屋某ノ妻ノ亡霊（後シテ驍）が出端の囃子（誠・嘉津幸・総一郎・洋輝）で現われる。面を曲見から痩女に替え、杖をつく。邪淫の報いはクドキから因果の妄執に苛まれるところ、〻苛責の声のみ、と恐ろしさに杖を手放し、たじ〳〵と退り安座、両手で耳を蔽うところ技の切れをみせる。〻羊の歩み、の返シ句に立つと〻味きなの浮世や、とシヲリ、〻怨みは葛の葉の、と踏む六ツ拍子の地団駄、〻執心の面影の、とワキを指ス気合は、〻そもか、る人の心か、と大小前からワキをキッと見込むのも凄まじい。キリ前の、〻夢ともせめてなど、と正中に安座、〻思ひ知らずや、と扇で激しく床を打つ気迫には、合掌するワキも怖じ気をふるう程の鬼気迫る勢いだった。（1時間45分・6月1日・名古屋能楽堂六月定例公演）

名古屋能楽堂6月定例公演
「砧」長田　驍（杉浦賢次氏撮影）

「杜若・恋之舞」

東下りの途次、三河国は沢辺の美しい杜若に憩う旅僧（ワキ勝久）を見咎め声を掛ける里女（シテ九郎右衛門）、問答・掛合に在所自慢は伊勢物語を引き合いにここ三河八橋は古歌にもある名所、と八橋の謂れや在原業平の歌に及び、杜若と業平の縁を敷衍する初同（邦久・勘鷗・正邦ら）のキリ、〻やがて馴れぬる心かな、の返シ句で一ノ松から運び出すシテに如何にもワキとの気持ちが通い合う情趣が。

物着に初冠（巻纓・老懸・日蔭糸・梅花ノ心葉）・白地縫箔紅入腰巻・浅葱地長絹・真ノ太刀を佩く姿に「これを見よと承るは何と言ひたる事やらん」と驚くワキに、「これこそ」とシテ、唐衣は高子の后の、冠は業平の形見、「身に添へ持ちて候なり」とや、両腕を開き気味にワキへ詰メル辺りは見せびらかす様。次元は全く異なるも当今、当地で人気のコス・ブレ（コスチューム・プレー）も思われ面白い。地次第の〻（著つゝや舞を）奏づらん、と拍子一ツ踏むと、小書で一セイ・クリ・サシ・クセの部分を省き、シテの〻花前に蝶舞ふ紛々たる雪、を受ける地の〻柳上に鶯飛ぶ片々たる金、で薄く面使フと恋之舞に。二段すぎ二ノ松へ流れ勾欄へ寄ると、袖を濡らさぬようにか左袖を抱え、沢辺の杜若を見下ろす心に暫時佇む姿は胸中、業平の面影を偲び懐かしむ趣。舞台へ戻り三段を舞上げ、〻植ゑ置きし昔の宿の杜若〻色ばかりこそ昔なりけれ、とワカから〻昔男の名を留めて、と舞い進むと、立廻に業平への強い思いを杜若に托し舞台を一巡、〻花橘の匂ひ移る、と踏む三ツ拍子にもその思いが。キリの型所きれいに極め気品あるすっきりした舞台だった。囃子は六郎兵衛・孝一郎・総一郎・洋輝。（1時間6分）

名古屋観世会
「杜若・恋之舞」片山九郎右衛門
（杉浦賢次氏撮影）

「蝸牛」

修行終え下山途次の山伏（シテ友彦）、行力を広言するも長旅の疲労、藪で横臥のところ、主（アド俊裕）の言い付けで長寿の祖父御の更なる延命に効あるという蝸牛を捕りに太郎冠者（小アド松次郎）がやって来る。蝸牛を知らぬ太郎冠者、藪に居て頭黒く腰には貝、時々角を出し大きいは人程も、と聞かされてはいたが藪に横臥の頭の黒いに、もしや蝸牛では、と問答のうちに山伏を蝸牛と盲信。呆れた山伏は愚鈍な太郎冠者を面白がり、誑かしてやろうと多忙を口実に同行を拒むが、太郎冠者たっての願いに囃子物に乗ってなら、と〻雨も風も吹かぬに出ざかま打割ろ、囃子物を伝授。山伏自身は〻でん〳〵むし〳〵、と合の手を入れゝば、浮きに浮き陶酔境に（写真）。迎えに出て驚く主に再三注意を促され、やっと醒めた太郎冠者、主に与して山伏懲らしめんとするが、山伏は隠遁の術で姿を消し、二人を打ち倒し「許せ〳〵」と入る。不足は無い舞台だが、素っ惚けた味わいの、灰汁（あく）が抜け洗練されてゆくのは時代のなせることか。丘造・卯三郎・礼之助などを思い出してもみる。（28分）

名古屋能楽堂6月定例公演
「蝸牛」左より井上松次郎、佐藤友彦、鹿島俊裕

「善知鳥」

立山禅定（霊山）に籠る修行者（ワキ雅介）から下山の旅僧（ワキ雅介）を呼び止める老翁（シテ正邦）、陸奥へ下るなら昨秋死んだ外の浜の猟師を尋ねて妻子に蓑笠を手向けて欲しい、とワキと問答に。易い事だが何か証が無くてはとワキ、成程とばかりにシテは着ている麻衣の片袖を証にと千切るを、ワキは初同（勘鷗・邦弘・修一ら）のうちに一ノ松へ。〻涙を添へて、の返シ句にシテから（写真）片袖を受け取ると左手でつまみ持ち、陸奥へ下る心に地前へ、シテは〻客僧は奥へ、で二ノ松からワキを見送る風に振り返り〻亡者は泣く〳〵、とシヲルと〻行く方知らず、と地一杯に中入。

さて、地前のワキは片袖を懐中して常座へ、陸奥に着いた心に「外の浜在所の人のわたり候ふか」と案内を乞い、一ノ松の所ノ者（アと融）との問答で猟師の家の所在を知ると一旦後見座にクツロギ、アとはそのまゝ切戸へ退き後場。

〻千代童が髪を掻き撫でて、のところ、左手大きく一つ虚空を撫で、次いで自身の髪に手を遣りへあら懐かしや、と寄らんとする（写真）胸中は如何ばかりか。眼目のカケリは、〻捕られやすかた、と拍子一ツ強く踏み、〻とう、と哭声、正先の笠を目掛けて行き左側を打つと橋懸は一ノ松先まで静かに杖ついて出抜け、一ノ松に戻ると勾欄に寄って笠を見込み、杖に左手も添え虚空を一ツ打ちキッと面切り幕へ見ると静かに戻り大小前へ。右廻りに笠へ進み、弾みつけるため少し退ると二打、三ツ拍子踏み〻親は空にて、となった。内に籠もる殺生に憑かれた趣がよくみてとれた。杖を捨て、笠を拾い上げ両手に持つと、降る血の涙を避けるところ、笠を巧みにカザシ〻なほ降りかゝる、から〻紅葉の橋の、で笠を投げるが舞台に止まらず白洲に落ちたのも一興。キリは〻立ち得ぬは羽抜鳥の報いか、の臥膝返シが具象の型の妙、印象的だった。囃子は誠・昭弘・眞之介。（1時間11分・6月7日・名古屋観世会定例公演能）

名古屋観世会「善知鳥」古橋正邦

「俊寛」

鬼界が島へ流刑になった俊寛（シテ満次郎）康頼・成経（ツレ飛能・大二郎）、ツレ二人は在京中、三熊野詣を発願するが満願にならないうちに流刑になると、島に三熊野を勧請してまで参詣するという篤信家なら、シテは俱介孤高、二人を軽侮している向きも。問答に、参詣から戻る二人がシテに気付き、康頼が「何の為に御出でにて候ぞ」と問えば、はや見咎めたか、とシテ。参詣帰りを道でお迎えに酒を持参で、と人を食った返答は如何にも挑発的。それとシテの性格を知っては居ても桶をのぞく態に近寄る康頼。シテとツレ二人の掛合となり、酒の話題になるうち懐旧の思いに耽れば、今は五衰滅色の秋、〻落つる木の葉の盃、と右へ目を遣り、〻飲む酒は谷水の、と桶を取って底に左手を添え、立ってツレ二人に酒を勧める風情に〻物思ふ時しも、と桶手放して双シヲリになるところ、流石に狷介孤高のシテも気弱に。

赦免使（ワキ勝久）が船頭（アヒ健太郎）と来島し、赦免状がシテに渡ると康頼に読ませるシテ。「御名はあらばこそ」と康頼がシテのところへ立ってゆき状をシテに戻すと、「さては筆者の誤りか」と声を荒げるシテ。同じ情況下で一人だけ網に洩れ、〻沈み果てなん事は如何に、と状を手にしてシヲルのが硬骨漢だったことを忘れさせる。繰返し状を読み、又、巻返して見、〻更になし、と状を空しく捨て去るのも哀れ。独り取り残され、〻もとの渚に、と正先そばで安座双シヲリは慟哭であろう。キリは立つと縋るように常座へ出、右手高く翳して船を見送りシヲリ留メに。シテの装束付は面俊寛・花帽子・白地小格子着付・黒水衣・白紺染分腰蓑・左手に杉桶、シテ満次郎充実ぶりをみせる。（1時間）

名古屋観世会「善知鳥」
左より古橋正邦、浦部美有
（杉浦賢次氏撮影）

「茶壷」

国ノ者（アド健太郎）、梅尾で詰めた茶壷を背に「邯鄲」の一節を謡いながらの一杯機嫌も疲れて路傍で酔臥のところ、折しもやって来たスッパ（シテ又三郎）、酔臥の輩が抜かりなく荷縄の片方に肩を入れているので引っ剥す訳にもゆかず、こっちも、もう片方に肩を入れて横臥。目覚めれば互いに茶壷の所有権を争い、所の目代（小アド高義）に事の決着を委ねることになる。目代が、両人に此の地に来た経緯を問えば全く同じ事を述べて埒が明かず、思案の末、入日記（内容明細書）を訊ねることに。いっそのこと拍子に掛かって、のアドの言が容れられ、〻我が物ゆえに骨を折る、云々と茶の銘・出所を舞に舞い、謡を謡えばシテも巧く真似て、シテ・アド連舞に。シテはアドと若干ずれがちになるが目代は看過するか。結局、相違が無いとて目代、「論ずるものは中から取れ」と茶壷を攫って「ならぬぞ〳〵」と遁走、「やるまいぞ〳〵」と追われる。いつも乍ら元気一杯の又三郎、肩衣の花札文様が意味深長。（22分）

「大江山」

明治34年（一九〇一）【幼年唱歌】に「おおえやま」一番から六番がある。一番の歌詞のみを記すと

むかし、たんばの、おおえやまおにどもおおく、こもりいて、みやこにでては、人をくい、わかき、ひめをば、ぬすみゆく

【日本昔ばなし】にもあり、此の物語は人口に膾炙してをり、当今の後期高齢者には懐かしい。酒呑童子（シテ荘太郎）頼光（ワキ雅介）独武者（ワキツレ宰）保昌・貞光・綱・公時（ワキツレ元・正樹・遼一・充ら）、強力（アヒ松次郎）洗濯女（アヒ又三郎）。前場、ワキ・ワキツレは山伏姿、山中で迷った態に出合う洗濯女に強力を介し、酒呑童子に宿を乞えば、出家には手を出さないと桓武天皇に誓っていては泊めざるを得ない童子、その由を洗濯女から聞き宿を貸すことに。これより先、奇しくも強力は女と旧知、「おぬしは京の今出川の者ではないか」「糊屋のいちゃでござる」「先づそちが喰はられいで幸はせぢゃ」などと互いの消息を訊ね合うエピソードが面白い。

さて、居並ぶ山伏達と対面の童子（面童子・黒頭・襟浅黄赤・摺箔着付・半切・浅黄地唐織壷折）、頼光との問答・掛合に打ち解け酒宴となってへいざ〳〵酒を、と頼光は童子へ酌に立ち、〻頃しも（秋の山草）、と玉座を下りて童子、数拍子踏むやら〻天も花に、と頭トルなどして酔余の舞、そのまゝ酔歩に中入地（満次郎・孝・崇生ら）〻夜の臥処に、入る。ワキ・ワキツレ一同も中入すると、一旦切戸から退いていた女が再び切戸から出、また強力との問答は違引の趣。先の上首尾を喜び、強力はこの際とばかり結婚話を持ち出し言い寄るも即答を避ける女、「強い女ちゃ、益々好きになった」と強力は臆面もない。此の度は女も幕へ退くが、次いで出す一畳台が時間の掛かりすぎで興を殺ぐ。ワキ座へ据えられると、松明を翳し何事もなく出る頼光、独武者と共に側次を着るが他は裳着胴、兜巾が白鉢巻に替り凛々しい。一方、童子は面髪・赤頭・金地法被の鬼神（後シテ荘太郎）に変じ、働キは頼光との一騎討ちきび〳〵と若さの力強さ、活き〳〵と力溢れる群像劇だった。脇方がよく統制がとれてをり、狂言方の大活躍だった。囃子は誠・嘉津幸・眞之介・洋輝。（1時間5分・6月16日・名古屋宝生会定式能）

先号の訂正

2頁1段2行目　内→市

5頁1段9行目　笹と笹→笹と笠

能楽の友

発行　能楽の友社
名古屋市千種区千種２丁目18－18
（郵便番号　464-0858）
電　話（052）731－７９８４
ＦＡＸ（052）733－２８３７
振替口座　００８００－６－３６３９３

購読料　１年　１１００円
郵送の場合　１年　１８００円
一　部　１００円

ＮＨＫ放送予定（平成25年９～10月）

◆ＮＨＫ－ＦＭラジオ能楽鑑賞（日曜日６時～６時55分）

９月29日	素謡「小　督」（金春流）	シテ	櫻間右陣
10月６日	素謡「夏」「敷　島」（観世流）	シテ	観世清和
10月13日	素謡「三井寺」（宝生流）	シテ	三川淳雄
10月20日	狂言「宗　論」（大蔵流）	シテ	茂山七五三
10月27日	素謡「定　家」（観世流）	シテ	山本順之

演能カレンダー

◆名古屋能楽堂◆

（TEL 052－231－0088）（能楽関係のみ）

［９月］
28日(土)　和泉流狂言大会
29日(日)　和泉流狂言大会

［10月］
５日(土)　恵美寿会　（無料）
６日(日)　久田観正能　（番組８月号）（有料）
12日(土)　壷泉会大会　（番組①面）（無料）
13日(日)　邦謡会発表会　（番組①面）（無料）
14日(祝・月)　武田謡楽会秋季大会　（番組②面）（無料）
18日(金)　名古屋能楽堂十月定例公演　（番組②面）（有料）
19日(土)　第12回狂言三の会　（番組②面）（有料）
25日(金)　狂言なのり座公演
二世井上松次郎改名記念　（番組②面）（有料）

第12回全国新作能面公募展

２月に名古屋能楽堂展示

越前池田能楽の里が選ぶ能面展として平成二十五年度の「第12回全国新作能面公募展」は、きたる十一月八日(金)から十一月十八日(月)を募集期間として行われる。

この公募展は、前年度第11回までに延べ四千四十七名の方より新作面五千六百七点の出品があり、全国の能面作家に高い関心がよせられている。

募集要項は次のとおり。

［作品規定］本公募展未出品で新作の能・狂言面に限る。一人２面まで［出品料］１面出し３０００円。２面出し４５００円。

［審査］平成25年11月20日、21日［賞］最優秀賞　能楽の里文化交流会館、電話０７７８・４４・８００６。

▽池田町長賞▽能楽の里賞など入賞20点、佳作30点、入選100点。明春２月池田町美術館展示、２月28日～３月24日名古屋能楽堂に展示。

問い合わせ　福井県今立郡池田町藪田５－１　能楽の里文化交流会館、電話０７７８・４４・８００６。

大倉流大鼓方　筧鑛一氏逝去

名古屋能楽堂建設に尽力

大倉流大鼓方・重要無形文化財保持者（総合指定）は、八月三十日午前八時四十五分、肺気腫で逝去した。享年八十二。

通夜は九月一日午後六時、葬儀は二日午前十一時から名古屋市中村区の太閤通愛昇殿で執り行われ、能楽関係者はじめ多数の会葬で故人を偲んだ。喪主長男・清澄氏。

故筧鑛一氏は、昭和六年一月五日、筧家の五男として生まれ、昭和二十八年大鼓方大蔵流入門、二十歳で能楽大鼓方として能楽界の進展につくし昭和五十三年重要無形文化財に認定、総合指定を受ける。

能楽協会名古屋支部副支部長をつとめ、名古屋能楽堂の建設に尽力。愛知県芸術文化選奨文化賞受賞。東海能楽研究会代表として資料の収集、子ども向けの能楽教室の開催と普及に取り組んだ。

和泉流　大蔵流　名匠狂言会

11月19日　名古屋能楽堂

中日新聞社主催「名匠狂言会」は、十一月十九日(火)名古屋能楽堂で開催される。

演目は、〈名古屋〉和泉流「墨塗」大名・佐藤友彦、太郎冠者・佐藤融、女・野村又三郎

〈京都〉大蔵流「素袍落」太郎冠者・茂山七五三、主人・茂山宗彦、伯父・茂山千五郎

〈東京〉和泉流「小傘」僧・野村万作、田舎者・深田博治、新発意・野村萬斎、参詣人・高野和憲、内藤連、中村修一、岡聡史、尼・石田幸雄

入場料／Ｓ席八五〇〇円、Ａ席七五〇〇円、Ｂ席六五〇〇円

取り扱い／中日新聞コンサートデスク（ＴＥＬ０５２・３０８・８２８２）チケットぴあ（ＴＥＬ０５７０・０２・９９９９／Ｐコード４３１・４２０、サークルＫサンクス、セブンイレブン。

廣田鑑賞会能

10月６日　金剛能楽堂

第二十一回廣田鑑賞会能は、十月六日（日）金剛能楽堂で開催、能「黒塚・白頭」、狂言「鳴子遺子」を上演する。午後一時半始曲。

狂言「鳴子遺子」シテ茂山あきら、能「黒塚・白頭」シテ廣田幸稔、ワキ高安勝久、ワキツレ小林努、アイ茂山童司、笛・左鴻泰弘、小鼓林吉兵衛、大鼓・谷口正壽、太鼓・井上敬介

チケット／一般券八〇〇〇円（正面・脇正面席）、一般券五〇〇〇円（中正面席）

取扱い／広田後援会（電話０７５・７２２・９１２３）金剛能堂（電話０７５・４４１・７２２２）ローソンチケット（Ｌコード５２８４９）京都新聞文化センター

壺泉会大会

十月十二日（土）午前九時五十分始
名古屋能楽堂

	番組	
仕舞	白楽天	泉　嘉夫
仕舞（金城学院中）	熊野	山崎みのり
	蝉丸	石原　麻衣
仕舞	経正キリ	高橋　実来
	岩船	加藤　佑望
仕舞	春日龍神	吉沢　旭
仕舞（金城学院高）	井筒	浅井　理子
	大江山	西脇　玉乃
	巴	横江　彩香
仕舞	三輪 八神	孝充
	二人静	田中　友梨 佐藤舞佑子
舞囃子	善知鳥	泉　眞澄 河村眞之介 船戸　昭弘 加藤　俊彦
素謡	鉢木	吉沢　旭 倉田　一郎
舞囃子	紅葉狩	木曽果奈子 泉　眞澄 河村眞之介 加藤　俊彦
	遊行柳 青柳之舞	杉浦　万里 河村総一郎 船戸　昭弘 加藤　洋輝 竹市　学
独調	景清	石川　晴子
		後藤嘉津幸
舞囃子	松風	亀井　清子 河村総一郎
	菊慈童	御厨　博子 後藤孝一郎 河村眞之介 後藤嘉津幸 加藤　洋輝 竹市　学
仕舞	鵜飼	不破麻佑子
	船辯慶キリ	内藤ひとみ
	敦盛キリ	平井香菜子
独吟	松虫	橘　進
舞囃子	野宮 破之舞	伊藤　洋子 河村総一郎 後藤孝一郎 竹市　学
	融	切本　陽子 河村眞之介 後藤嘉津幸 加藤　洋輝 竹市　学
独吟	大原御幸	五段早舞 嶋田都彌子
舞囃子	山姥 立廻り	長屋　文裕 河村総一郎 船戸　昭弘 加藤　洋輝 鹿取　希世
素謡	砧	木田　乾 康子　昌博 泉　雅一郎
舞囃子	梅枝	峰　ゆき 河村総一郎 後藤孝一郎 鹿取　希世
	養老 水汲之伝	横井　美穂 河村眞之介 後藤嘉津幸 加藤　洋輝 鹿取　希世
仕舞	江口クセ	大坪由紀子
	通小町	内藤　悦子
舞囃子	小鍛冶	唐松　仁味 河村総一郎 船戸　昭弘 鹿取　希世
	高砂 五段初舞	高橋　典子 河村眞之介 船戸　昭弘 加藤　洋輝 鹿取　希世
仕舞	鵺	下川勢津子
舞囃子	天鼓	坂野　晃 バンシキ 黒田　正泰
	実盛	泉　房之介 泉　雅一郎
仕舞	舎利	
附祝言		主催　壺泉会

邦謡会発表会

十月十三日（日）午前九時半開演
名古屋能楽堂

番外仕舞	老松	梅田　邦久
素謡	小督 トモ ツレ	高崎　照美 久米　明子 仙波　晶子 山田　正秋
仕舞	右近	飯田　尋子
	丸	角田小夜子
	松風	高津　信子
	猩々	高津　行弘
素謡	三井寺	白木栄美子 高野千勢子 林　昭 兼松　三欣
仕舞	隅田川	仙波　晶子
	砧	前　西川　幸子
素謡	葵上	横江　美貴子 美濃辺眞知子 野田ちず子 野田　ゑつ
仕舞	経正クセ	林　昭
	実盛キリ	兼松　三欣
	自然居士	三口　謙介
素謡	班女	遠山美津子 尾隠山明宏 尾藤　英邦 長谷川雅彦
仕舞	弱法師	
舞囃子	葛城 大和舞	角谷　知子 河村総一郎 後藤嘉津幸 上田　慎也 竹市　学
	藤戸	戸井喜久子 河村総一郎 後藤嘉津幸 竹市　学
素謡	卒都婆小町	三口　謙介 佐藤　英生 田中　齊
仕舞	求塚	森崎　紀子
舞囃子	養老 水波之伝	三浦百合子 河村真之介 船戸　昭弘 上田　慎也 鹿取　希也
	源氏供養 舞入り	林家　倭子 河村真之介 船戸　昭弘 鹿取　希世
	砧	森　幹子 河村真之介 船戸　昭弘 上田　慎也 鹿取　希也
番外仕舞	定家	片山　幽雪
	鵜之段	片山九郎右衛門
舞囃子	百萬	西村　歌子 後藤嘉津幸 竹市　学 河村真之介 上田　慎也
	江口	田中　建昭 後藤嘉津幸 竹市　学 河村真之介 上田　慎也
	融 十三段舞返	井上　苑枝 後藤嘉津幸 竹市　学 上田　慎也
素謡	山姥	森崎　紀子 瀬辺　聡子 木村万寿豊
能	吉野天人 天人揃	天女　岩田　宏子 天女　平泉　和子 天女　佐伯　裕子 天女　森　明美 天女　岩田　時代 飯富　雅介 河村総一郎 船戸　昭弘 上田　慎也 鹿取　希也
番外仕舞	岩船	後見　梅田　嘉宏 梅田　邦久 片山　伸吾 梅田　嘉宏 本田　勲 須部　分林 地謡　清沢　一政 橋本　忠樹 武田　正道 古橋　治 武田　邦弘 青木　道喜
終演六時前		主催　邦謡会 梅田　邦久 嘉宏

［御来場歓迎］

追悼　筧鑛一先生

漸く秋めく折柄、先生の訃を八月三十一日の朝刊で知りました。二ヶ月余りの病床から退院され八月十九日消印の残暑見舞を頂戴したばかりで俄かには信じられませんでした。酷暑の今夏を乗り切られた先生を、涼しくなったら四方山話を聞きにお訪ねしようと思ってゐたところでした。

先生は予て中京能楽界が今日に至る歳月の中で、その礎を営々と築き上げてきた先人の、有名無名を問わずその足跡を留めるのに「東海能楽研究会」を立ち上げられ、そこで『近代名古屋の能楽を支えた人々』大部の三巻本を上梓されました。

若松の鏡板問題には積極的に関与、流出の危機にあった森村宜稲揮毫の老松の鏡板を私費で購い、育成する小・中学生を本格舞台に上げて能楽の裾野の拡大に腐心する先生は主催の「伝統芸能上演会」では若松の鏡板の上に宜稲鏡板を掛ける硬骨漢ぶりもみせました。

また、三巻本でも分るように、先生は古資料の散佚をいつも憂慮、昨年には観世流の故下田益三・雄三の父子が二代に亘り旧蔵の厖大な、貴重な古典籍類の寄託を受け「下田文庫」として公開に漕ぎつける御苦労でした。

同じく晩年、小・中学生の稽古に使用の公共の場が狭められると私費を投じ、自邸に稽古場を造ってしまう程、能楽のためには無垢な心、頭が下がるばかりです。

可成りな私費を能楽関係に投じられたに違いない先生、奥様の内助の功の大なるを思うとき、先生は感謝の御生涯であったでせう。

ざっくばらんに話される先生の、名古屋弁の話柄のあれこれがもう聞かれないのは寂しいばかりです。長い間ありがとうございました。謹んで先生の御冥福をお祈り致します。

さようなら。

竹尾邦太郎

〔写真〕
〈在りし日の筧鑛一師〉
「小鍛冶・白頭」シテ長田驍、ワキ飯富雅介　中央は筧鑛一。鏡板は、森村宜稲画伯揮毫（２００３年７月21日　名古屋能楽堂）

当地の各流儀・流派・結社
社中の消息を辿る ㊺８

竹尾　邦太郎

拾貳　「藤田昭彦から藤田六郎兵衛へ」

④「能と狂言に親しむ会」

――承前――

昭和六四年一月七日、今上天皇崩御、元号が昭和から平成と改められる。『書経』大禹謨「地平天成」・『史記』五帝本紀「内平外成」より採られたという。

平成元年度、「能と狂言に親しむ会」は当地での「世界デザイン博覧会」に協賛、昨年に続き八月五日から一四日まで「名古屋城夏まつり薪能」。

八月五日　仕舞「通小町」小島一英、能「敦盛」近藤幸江・高安勝久・鹿取希世・後藤嘉津幸・鬼頭英二・高橋暸一（地頭）。

八月六日　仕舞二番「笹之段」今沢美和「女郎花」松山幸親、半能「巴」前野郁子・杉江元・大野誠・柳原冨司忠・河村眞之介・久田徹二（地頭）。

八月七日　仕舞二番「腹」高橋暸一「花筐・クルヒ」前野郁子、能「吉野天人」松山幸親・飯冨雅介・佐藤友彦・鹿取希世・福井啓次郎・筧鉱一・鬼頭好信・久田徹二（地頭）。

八月八日　仕舞二番「笹之段」須部甫「殺生石」清沢一政、能「鉄輪」久田徹二・西村欽也・飯冨雅介・大野誠・後藤孝一郎・河村眞之介・助川龍夫・梅田邦久（地頭）。

八月九日　仕舞「班女」今村嘉男、能「千手」今沢美和・加賀敏彦・飯冨雅介・竹市学・福井良治・吉田定男・梅田邦久（地頭）。

八月一〇日　仕舞「野守」久田徹二、半能「東北」高橋暸一・杉江元・藤田六郎兵衛・福井啓次郎・河村総一郎・久田徹二（地頭）。

八月一一日　仕舞二番「松風」生駒里翠「船弁慶キリ」近藤幸江、能「花月」祖父江修一・高安勝久・大矢高義・鹿取希世・後藤孝一郎・鬼頭英二・梅田邦久（地頭）。

八月一二日　仕舞二番「菊慈童」加賀敏彦「山姥キリ」中村和男、能「清経」清沢一政・生駒里翠・高安勝久・竹市学・福井良久・河村眞之介・梅田邦久（地頭）。

八月一三日　仕舞「藤戸」梅田邦久、能「経正」須部甫・杉江元・大野誠・柳原冨司忠・筧通・梅田邦久（地頭）。

八月一四日　仕舞「兼平」祖父江修一・能「葵上・梓之出」梅田邦久・松山幸親・飯冨雅介・杉江元・大矢高義・藤田六郎兵衛・福井啓次郎・河村大・鬼頭喜太郎・祖父江修一（地頭）。

平成元年九月二七日　「能と狂言に親しむ会」五周年記念能。番組は一管「中之舞」藤田六郎兵衛、舞囃子二番「龍虎」観世喜之・喜正・竹市学・柳原冨司忠・河村眞之介・助川龍夫・梅田邦久（地頭）、「清経」片山九郎右衛門・大野誠・柳原冨司忠・筧鉱一・片山慶次郎（地頭）、素囃子「鷺乱」鹿取希世・後藤孝一郎・河村総一郎・鬼頭喜太郎、狂言「佛師」野村又三郎・大矢高義、能「半蔀・立花供養」梅田邦久・西村欽也・井上礼之助・藤田六郎兵衛・福井啓次郎・吉田定男・片

（③面へつづく）

能と狂言に親しむ会
五周年記念能

平成元年９月27日(水)午後１時始
於　熱田神宮能楽殿

会　員　券

御

会費金参千円

主催　能と狂言に親しむ会
梅田邦久
藤田六郎兵衛

武田謳楽会秋季大会

十月十四日（祝・月）午前十時始
名古屋能楽堂

番外仕舞　熊坂　武田邦弘
仕舞　高砂　武田大尚

素謡　清経　若林典子　山本ますみ　大杉淳
実盛　前山鎮男　加藤愛郎

舞囃子　竜田　岡田明子
班女　笹之伝　市川敦子
通小町　雨夜之伝　井田順子

河村総一郎　船戸昭弘　河村総一郎　船戸昭弘　河村総一郎　船戸昭弘

独鼓　岩船　桑原壽子・加藤洋輝
独調　雲林院クセ　下里紀子　船戸昭弘

番外仕舞　雨之段　片山九郎右衛門

素謡　定家　井出モト子　武田大志

舞囃子　頼政　齋藤忠佳
芭蕉　小瀬古喜代子
紅葉狩　急之舞　小瀬古勝巳

河村総一郎　船戸昭弘　河村総一郎　船戸昭弘　河村総一郎　船戸昭弘

加藤洋輝　藤田六郎兵衛　藤田六郎兵衛　藤田六郎兵衛　藤田六郎兵衛　藤田六郎兵衛

素謡　砧　井田順子　永田慶子

仕舞　江口キリ　田中蔦子
遊行柳クセ　松陰真澄
采女キリ　山本三江
藤戸　川合圭子
阿漕　奥田えつこ

長谷川邦彦

素謡　求塚　新田中信子　蔦子

仕舞　菊慈童　白井京子
野宮　前川桂子
弱法師　長谷川邦彦
鉄輪　加藤愛郎

連吟　俊寛　小畑嘉蔵　川崎元彦　小林郁夫

番外仕舞　船弁慶キリ　武田大志

附祝言

（終了予定五時）

〔御来場歓迎〕

主催　武田謳楽会　武田邦弘　武田大志

名古屋能楽堂十月定例公演

十月十八日（金）午後六時半始
名古屋能楽堂

狂言　若和布　シテ佐藤融　アド佐藤友彦　アド井上松次郎　アド野村又三郎

（和泉流）

能　恋重荷　飯冨雅介　河村総一郎　後藤孝一郎　加藤洋輝　竹市学

（観世流）

久田三津子　久田勘鷗
間　野口隆行
後見　奥津健太郎

（午後八時三十分頃終了予定）

主催　名古屋市文化振興事業団
公益社団法人　能楽協会名古屋支部
〔名古屋能楽堂〕

チケット料金
前売　指定四〇〇〇円、自由席一般三〇〇〇円
学生二〇〇〇円
〔名古屋能楽堂　ＴＥＬ０５２．２３１．００８８〕

第12回　狂言三の会

十月十九日（土）午後二時始
名古屋能楽堂

狂言　鏡男
狂言　鐘の音
狂言　牛盗人

有料
チケット五〇〇〇円、学生三〇〇〇円
主催　狂言三の会
事務局　０９０・６７０７・４７１４

狂言　なのり座公演

二世井上松次郎改名記念

十月二十五日（金）午後六時半始

狂言　靱猿　猿曳　井上松次郎　大名　奥津健太郎　太郎冠者　野口隆行　小猿　井上真珠乃

小舞　幼けしたる物　井上蒼大
独吟　八島　謡　衣斐愛
一調　橋弁慶　謡　坂真太郎　大鼓　河村眞之介

狂言　武悪　武悪　野村又三郎　主　佐藤融　太郎冠者　井上松次郎

〔入場料〕千円（全席一律・座席自由）
申込先　狂言共同社（電話０５２・８３４・８６０７）
野村事務所（電話０９０・８３２３・３２１０）
電子チケットぴあ（電話０５７０・０２・９９９９　Ｐコード４３０・６１６）

主催　狂言なのり座
武田邦弘
武田大志

（②面よりつづき）

山九郎右衛門（地頭）武田欣司（後見）・川瀬敏郎（立花）。

平成二年度「名古屋城夏まつり薪能」は八月三日より一五日まで。但し「能と狂言に親しむ会」主催以外の八月四日（名古屋学生能楽連盟）八月一一日（正風会）八月十二日（市民参加・謡曲・仕舞・囃子の会）を含む。

八月三日　仕舞「雲林院クセ」高橋瞭一、能「三輪」前野郁子・高安勝久・井上靖浩・鹿取希世・柳原富司忠・筧鉱一・助川龍夫。

八月五日　仕舞「玉之段」加賀敏彦、舞囃子「融・五段」梅田邦久・大野誠・福井啓次郎・河村眞之助・鬼頭好信、能「猩々」今沢美和・杉江元・大野誠・福井啓次郎・河村眞之助・鬼頭好信。

八月六日　仕舞「山姥キリ」祖父江修一、能「半蔀」清沢一政・飯富雅介・佐藤友彦・藤田六郎兵衛・後藤孝一郎・鬼頭英二。

八月七日　仕舞「花筐クルヒ」須部甫、能「巻絹」近藤幸江・今村嘉勇・杉江元・井上祐一・鹿取希世・柳原富司忠・河村眞之介・助川龍夫。

八月八日　仕舞「笠之段」今村嘉勇、能「胡蝶」松山幸親・飯富雅介・竹市学・福井良治・河村総一郎・鬼頭好信。

八月九日　仕舞「屋島」清沢一政、能「杜若」高橋瞭一・杉江元・竹市学・後藤嘉津幸・河村眞之介・鬼頭喜太郎。

八月一〇日　能「頼政」久田徹二・高安勝久・松田高義・竹市学・後藤孝一郎・吉田定男。

八月一三日　仕舞「通小町」松山幸親、能「葵上」祖父江修一・今沢美和・飯富雅介・杉江元・野村信行・大野誠・福井啓次郎・鬼頭英二・鬼頭喜太郎。

八月一四日　仕舞「鉄輪」前野郁子、能「羽衣・和合」加賀敏彦・西村欽也・大野誠・福井良久・河村眞之介・助川龍夫。

八月一五日　仕舞「野宮」近藤幸江、能「菊慈童」須部甫・高安勝久・藤田六郎兵衛・後藤嘉津幸・筧通・鬼頭喜太郎。

平成二年一一月七日　「能と狂言に親しむ会」特別公演。番組に先立ち講演「道成寺について」藤田六郎兵衛、能「道成寺・赤頭」梅田邦久・西村欽也・飯富雅介・杉江元・野村又三郎・佐藤友彦・藤田六郎兵衛・大倉源次郎・河村眞之介・上田悟・観世銕之丞（地頭）片山慶次郎（後見）観世暁夫（鐘後見）。

平成三年度「名古屋城夏まつり薪能」は八月二日より一四日まで。名古屋城天守閣前　特設舞台　毎夜七時開演。主催名古屋城夏まつり実行委員会　企画「能と狂言に親しむ会」

八月二日　解説「能面の話」梅田邦久、能「楊貴妃」近藤幸江・高安勝久・野村信行・鹿取希世・柳原富司忠・筧鉱一・梅田邦久（地頭）。

八月五日　解説「装束の話」久田徹二、能「葵上」清沢一政・加賀敏彦・高安勝久・飯富雅介・井上礼之介・大野誠・後藤孝一郎・鬼頭英二・鬼頭喜太郎・久田徹二（地頭）。

八月六日　解説「囃子の話」藤田六郎兵衛、能「三輪」祖父江修一・飯富雅介・松田高義・藤田六郎兵衛・後藤嘉津幸・河村眞之介・鬼頭喜太郎・梅田邦久（地頭）。

八月七日　解説「装束の着付」古橋正邦、能「清経」松山幸親・瀬戸三津子・杉江元・大野誠・福井良久・筧鐵一・古橋正邦（地頭）。

八月八日　解説「装束の話」久田徹二、能「井筒」前野郁子・杉江元・大野弘之・鹿取希世・福井啓次郎・吉田定男・久田徹二（地頭）。

八月九日　解説「装束の話」梅田邦久、能「融」久田徹二・飯富雅介・井上靖浩・大野誠・後藤孝一郎・鬼頭英二・鬼頭好信・梅田邦久（地頭）。

八月一三日　解説「囃子の話」藤田六郎兵衛、能「安達原」高橋瞭一・杉江元・飯富雅介・佐藤友彦・大野誠・福井啓次郎・河村眞之介・助川龍夫・梅田邦久（地頭）。

八月一四日　解説「装束の話」梅田邦久、能「羽衣」須部甫・高安勝久・藤田六郎兵衛・福井良治・河村総一郎・鬼頭好信・梅田邦久（地頭）。

平成四年度「名古屋城夏まつり薪能」は八月四日より一六日まで。

八月四日　能「鶴亀」久田徹二
八月五日　能「東北」今沢美和
八月六日　能「竹生島」加賀敏彦
八月七日　能「田村」松山幸親
八月九日　能「吉野天人」近藤幸江
八月十日　能「船弁慶」古橋正邦
八月一一日　能「羽衣」前野郁子
八月一二日　能「土蜘蛛」須部甫
八月一三日　能「小袖曽我」高橋瞭一
八月一四日　能「紅葉狩」清沢一政
八月一五日　能「大佛供養」梅田邦久
八月一六日　能「経正」祖父江修一

平成五年度「名古屋城夏まつり薪能」は八月三日より一五日まで。

八月三日　能「清経」古橋正邦・三村恵子・飯富雅介・藤田六郎兵衛・後藤嘉津幸・河村眞之介・梅田邦久（地頭）。

八月四日　能「鵜飼」清沢一政・高安勝久・松田高義・竹市学・福井啓次郎・河村総一郎・助川龍夫・梅田邦久（地頭）。

八月五日　能「葛城」今沢美和・杉江元・飯富雅介・大野弘之・大野誠・後藤孝一郎・鬼頭英二・鬼頭好信・梅田邦久（地頭）。

八月六日　能「杜若」瀬戸三津子・高安勝久・藤田六郎兵衛・柳原富司忠・吉田定男・鬼頭喜太郎・久田徹二（地頭）。

八月八日　能「吉野天人」須部甫・飯富雅介・野村信行・大野誠・福井啓次郎・河村総一郎・鬼頭喜太郎・清沢一政（地頭）。

八月九日　能「芦刈」高橋瞭一・三村恵子・杉江元・佐藤友彦・竹市学・後藤嘉津幸・筧鉱一・古橋正邦（地頭）。

八月一〇日　能「巴」松山幸親・高安勝久・松田高義・大野誠・後藤孝一郎・吉田定男・高橋瞭一（地頭）。

八月一一日　能「百万」近藤幸江・松山晃之・飯富雅介・野村信行・鹿取希世・柳原富司忠・鬼頭英二・鬼頭喜太郎・古橋正邦（地頭）。

八月一二日　能「田村」久田徹二・杉江元・佐藤融・竹市学・福井啓次郎・河村眞之介・古橋正邦（地頭）。

八月一三日　能「安達原」前野郁子・高安勝久・飯富雅介・井上礼之助・大野誠・後藤嘉津幸・河村総一郎・鬼頭好信・久田徹二（地頭）。

八月一四日　能「玄象」梅田邦久・加賀敏彦・今沢美和・上野嘉宏・藤田六郎兵衛・柳原富司忠・河村眞之介・助川龍夫・久田徹二（地頭）。

八月一五日　能「花月」祖父江修一・飯富雅介・井上祐一・鹿取希世・福井良治・筧鉱一・久田徹二（地頭）。

平成五年八月一五日、予て暖めていたらしい腹案が「花傳の会」の名のもと実現することになり、その第一回例会能が名古屋芸術創造センター特設舞台で行なわれる。能組案内リーフレットに催主・藤田六郎兵衛の次の挨拶がある。

私は高校、大学と音楽の学校にて声楽を学びました。明治生まれの先代の勧めがあったからです。「これからは、能にも演出家のいる時代が来るだろう。能を知るには能以外の世界を知らなければならない」と。

この音楽大学での様々な体験が、私の体にある「能」と「ヨーロッパ音楽」の二つの世界を融合してくれたのだと思っています。

二十代後半から三十代中頃までは、観世流シテ方の梅田氏の協力を得て「能と狂言に親しむ会」を結成し、数多くの企画、演出、能楽講座を実現しました。この時代は「とにかく能を見てほしい。その為には出会いの場を多く作らなくては」と、言わば能の社会に生まれ育った私にとって世の中と能のかかわり方に疑問を持った第一の出発でした。

現代に生きている「能」。「能」の持つ素晴らしい「花」を私たちも再確認し、そして一人でも多くの人に知ってもらいたいのです。

世阿弥の時代に「能」は色々な空間で上演されていました。この空間、時間帯ならばどういう曲が最良なのか、それならば、どう演出を考えなければならないのか。あらゆることを考えながら「能」は創造されていたのです。

今一度、世阿弥の柔軟、かつ世に対する挑戦的な精神に立ち返りたいと思います。

「若尾綜合舞台」の未来を担う若き人達と若き能楽師達が出会い、空間と「能」の新たな可能性を探るのです。

一人でも多くの方にご参加いただき、この新しい創造がおこなわれる空間と時間を私たちと共有していただきたいのです。

よろしくお願いいたします。

なお、藤田六郎兵衛の私淑する八世観世銕之丞が次の稿を寄せる。

この「花傳の会」は、藤田六郎兵衛君が能の笛方として日頃考えてこられた、能の新しい見方の中からより能の本質を探るための実験をするために作られた会です。

能はそのはじまりから寺院の本堂、神社の本殿、また川原の仮設舞台など様々な空間を生かして演じる自由さを持っていました。現在でも薪能やホールでの能が盛んになり、照明、音響、美術といったスタッフの人たちの協力により、新たな空間に即した演能がなされてきています。

今回の一番の眼目はこれらのスタッフの人たちとの共同作業をより緊密にして、能役者や囃子方、地謡と同じレベルで参加していただき、「井筒」という世阿弥が六百年前に作った能の名作中の名作を、劇場という新しい器のなかでより良く作り上げることにあり、ここに今回の目的があります。

六郎兵衛君とは舞台の上での長いお付き合いで、日頃から能という伝統芸能の本質を失うことなく、しかも、少しでもわかりやすいかたちで、どうすれば今日能が生きるかということを絶えず話し合って来ました。私は「花傳の会」の企画にしたがって、舞台の外側から見て全体をまとめる、いわば監修といった立場で、若い能の人達とスタッフの方々と仕事が出来ることを今から楽しみに、又大きな責任を感じています。これまでおろそかにされてきた細部に至るまで、心のゆきわたった舞台を創りあげていきたいと思っています。

能組は一管「盤渉之音取」藤田六郎兵衛、一調「善界」上田悟（太鼓）観世銕之丞（謡）、能「井筒」片山清司・宝生欣哉・野村信行・藤田六郎兵衛・大倉源次郎・河村眞之介・観世暁夫（地頭）梅田邦久（後見）。

――以下次号――

◆晩夏の舞台から◆

「名古屋能楽堂七月定例公演」「第一四回御洒落名匠狂言会」と「青陽会定式能」

竹尾邦太郎

「宝の笠」

宝競べ流行の御時世とて太郎冠者（シテ郁雄）に自家の宝の有無を問う主（アド弘之）、然るに此の度は並の宝でなく現奇特のある宝が求められると。現奇特とは珍しい現象を目の前で見せられるの謂、その様な宝が無いと分かり主は急遽太郎冠者を都へ遣わす。「縁がのうて都へ行た事が無かった」太郎冠者の気持の昂りは、肝腎な宝屋の所在を確めずに出て来た迂闊。「うーん、鈍な事をした」とは言うものゝ、賑やかな都のこと、売り買う物も呼ばわれば調うと分かる才覚も。「宝買はう〳〵」の連呼にはあっさり宝屋と詐るスッパ（小アド小三郎）の餌食にされ、鎮西八郎為朝が鬼ヶ島で得た三つの宝の一で、着ければ姿の見えなくなるという古笠を求めることに。弁舌爽やかに力説するスッパの狡猾ぶりと、のほほんとした朴直な太郎冠者が巧く絡み惹きつける。万疋で購い戻れば、「戻ったなあ」と待ち兼ねた主、「は、然らば御覧ぜられませ」と古笠を渡せば「此の様な物は要らぬ」とポイと捨てる主に勿体ないと「南無宝〳〵」と太郎冠者。事の次第を説き、持ち主が被れば余人にその姿は見えない、などと吹聴するが、いざ主が着けてみれば明らかに有りの侭の姿が。さてはスッパに謀られたかと狼狽する暇も無く、何とか誤魔化しはしても、姿が見えなくなる効果を見たい主に笠を着けるよう強要されては万事休す、「己れ、皆見ゆるぞ」と威喝（写真）されては弁明も嫌に釘、「己れ、まだそのつれを言ふか」と逃げる太郎冠者を追う主・弘之、これでは期待外れで宝競べには出られず、憤懣やるかたないじり〳〵した怒り、得難い渋い味をみせる。（32分）

名古屋能楽堂７月定例公演「宝の笠」
左より今枝郁雄、大野弘之
（杉浦賢次氏撮影）

「野守」

茶色引廻シの塚が大小前に。大峯葛城へ赴く山伏（ワキ勝久）、道行に大和春日の里に至り里人に名所など尋ねんと憩うところ、現われる

（④面へつづく）

名古屋能楽堂７月定例公演
「野守」
梅田嘉宏（アト）

（③面よりつづき）

老翁（シテ嘉宏）、新春、辺りの景を眺め、野守の翁と名乗り、神佛を敬信して歳を重ねるを喜び、かの仲麿が望郷の念を思い遣り此処のどかな春日の風向を愛でる伸びやかな謡と相俟ち、その風姿の瀟洒（写真）。ワキとの問答になり、野の溜り水を野守達が水鏡に使うゆえ、これを俗に野守の鏡と称するが、本来、野守の鏡は鬼神の所持する鏡、とシテ。野守の鏡が二様に存在するを不審のワキに「昔この野に住みける鬼のありしが、昼は人となりて此の野を守り、夜は鬼となって此れなる塚に住みけるとなり」と杖一ツとんと突くところに説得力をみせるシテは、ワキとの掛合に二様の説を納得させつゝ「御覧ぜよ、と促すようにワキへ詰メル。初同（勘鷗・正邦・修一ら）へ立ち寄れば然にも野守の水鏡、と映る己が姿に懐旧の情を。ワキの求めに、箸鷹の野守の鏡の謂れを正中に杖置き居語、「狩人ばっと」と杖取り立つと正先へ、へ正しく水底に、と下を覗く辺り機敏な動きが若さの痛快。地が語を受け、御狩で逃げた鷹を水鏡に映る木に探し当て、御意に適った面目も今は老いの思い出の世語、へ申せばすゝむ（涙かな）と塚の前に下居、ワキへシヨル。

ロンギは、真の野守の鏡を見たいワキに「疑はせ給ふかや、とキツとアシラウと、鬼の所持する鏡、へ見ては恐れやし給はん、と威をみせ、すっと立ち塚へ中入のところ、後場を仄めかす。代って「徒然に候間、春日野に参らうと存ずる」と里人（アヒ徹）、ワキと問答から居語に野守の鏡の謂れを語るが語調に強さが欲しく、や、平板。

後場。ノットにワキは塚前へ立って行き下居、へかゝる奇特に逢ふ事も、と謡い出し、へ南無帰依佛、と祈ると、出端（学・昭弘・眞之介・義命）で塚の内よりへありがたや、と謡いへ野守の鏡は、と鏡を掲げ鬼神（後シテ）が塚を出る（写真）。へ恐ろしや、とワキ、へ恐れ給はば帰らんと、後ろを見せ戻ろうとするシテ、それをへ暫く鬼神待ち給へ、と止めるワキ。いつも此の場面、一見恐そうだがユーモラスにも思える小鹿見のシテ、コミカルな味の印象を受けるが今回は余り感じられなかった。歳を重ねたシテから醸される隠し味の不足だろうか。が、舞働、鏡の扱い、合膝や飛返り、などきび〳〵極め鮮やかだった。

（1時間15分・7月7日・名古屋能楽堂七月定例公演）

御洒落名匠狂言会「二文酒」
左より今枝郁雄、佐藤　融

「二文酒」

世帯が侭ならずこゝ。「二人の為にお酒はあるのこと」は少々勇み足では。ともあれ会話の運ビ、間（ま）の良さ、好舞台だったが、退いて行くとき酔歩がみられなかったが。以前、「煎物」の小道具「荷茶屋」を用いたが今回は「荷い樽」、前者が可では。（26分）

御洒落名匠狂言会「無布施経」
左より佐藤友彦、大野弘之

「無布施経」

家（アド弘之）へ経を上げにゆく僧（シテ友彦）、読経の途中さりげなく檀家に世間話を仕向ける辺りいわゆる昵懇の間柄の和み。話題が花に及べば、先日は客がありお寺へ花を御無心、と和泉流、大蔵流は逆に、いつぞやは見事な菊の花を下されて、と寺が花を頂戴する立場に。さて、毎月の事で御聴聞は無用、御用があれば下って結構、と僧に言われ中座したせいか、僧が帰る段になっても檀家は布施を渡すのをすっかり失念、それは困るとばかり僧は気付かせようとあれこれ作為を何度も試みるが全く駄目。どこ吹く風と涼しい顔の檀家の巧まざる旨さが光れば、焦り苛立ちながらも平静を装い、教化を口実に口舌の徒と化して執拗に絡んでくる僧も中々。果ては、懐中に隠した袈裟を探す態にうろ〳〵し、布施に鎌をかけた言い草に檀家もやっと気付くが、僧は柄にも無く沽券に拘わるとばかり素直には受け取らない。それならば、と檀家も意地を張り十疋の布施を僧の懐中に押し込み、手を抜けば出てきた袈裟、「出難いお布施が出ましたれば袈裟までが出ました」と苦しい強弁の僧（写真）、へ南無妙法蓮華経、も心なしか力抜け、「ようお出なされました」と檀家も気抜けの態、面白かった。（45分）

御洒落名匠狂言会「右近左近」
左より大蔵教義、大蔵吉次郎

「右近左近」

百姓右近（シテ吉次郎）、己れの田を左近の牛が荒したを論難するが、畜生のした事と相手にされず、訴えると言えば御勝手にの言い草に腹が立ち、地頭に訴訟のつもりと妻（アド教義）に相談するが、妻も左近の言い分は尤もゆえ看過をしては、と。憤懣やる方なく立場も無い右近、宥める妻は、左近殿は村の顔役で口達者、地頭殿も左近殿の思うが侭にされ、口の利きようでは理を以てしても非に落ちるが関の山、止めた方がよいと。それならば我御寮代りにと懇願するも「こなた有りながら」と峻拒され、ば騎虎の勢いの右近、「そちはくまぬ」と息巻くのを案じて妻、臨場感あるお白洲作法のリハーサルを、と自身は地頭に扮し稽古をつける。これも、左近と徒ならぬ仲の妻の遠慮深謀、右近はすっかりその気になり、自邸であるにも拘わらず白洲へ至る道筋の一々を確めつゝ辿って行くところ、生真面目ゆえに滑稽。白洲へ出れば慣れぬ場として怖じ気づき、初手から地頭に居丈高となられて気が動顛し論旨もしどろもどろに。そこを衝かれて縮み上がり目を回し卒倒する右近だが、意識が戻れば許せぬ妻の仕打ちに、今こそ、と口に出さず居た左近との不倫を喚き立てれば、妻も負けじと反発、右近が棒をとって振り掛かるを受け止め（写真）逆に打ち倒すと「勝ったぞ〳〵」と。残された右近、「己れは左近贔屓ぢやいやい、笑へ〳〵」と寝取られ男の口惜しさ、苦さ、吉次郎・教義の父子息の合った力演。（30分）

御洒落名匠狂言会「鶏聟」
左より井上松次郎、井上蒼大、鹿島俊裕
（杉浦賢次氏撮影）

「鶏聟」

聟入は辞儀作法が難しいとて教え手（則夫）の許へ習いにゆく聟（シテ俊裕）、人の悪い教え手は大昔・中昔・当世様とあるがどれをお望みか、と尋ね、聟が当世様を選べば、舅（アド・松次郎）の方では鶏の鳴く真似や蹴合う真似を、と教え、着けていた士烏帽子を鶏冠（とさか）に似せた洞烏帽子に替えさせる。舅宅で太郎冠者（小アド蒼大）に案内を請い、一ノ松で〜聟は舅の家にゆき、と謡い、返シ句以下を地（友彦・融ら）が謡う中、へくう〳〵〳〵、と鶏の声音を真似る聟に驚く舅は太郎冠者と呵々大笑、「さてさて興がった者ぢやな」とは言うも「聟の恥は舅の恥」と物着に鶏冠烏帽子を誂え、へ舅はこれを見るよりも聟のしつけに劣らじと、羽搏きして立ち、闘鶏の形態模写は聟との蹴合いに（写真）。へここは処もかゝり（蹴鞠の庭）なれば、と聟が謡い、後をへ柳桜を追ひ廻し松はもとより常磐なれば紅葉に紛うとつさか蹴られて云々、と地謡が受け、へ勝関つくって帰りけり、で聟と舅「くーくーくーくーこつか〳〵〳〵」と晴れ〳〵と留メる。活き〳〵と無邪気に楽しく戯れ合う趣の舞台は実に愉快。

（26分・7月14日・第14回お洒落名匠狂言会）

青陽会定式能「巻絹」
左より八神孝充、吉沢　旭

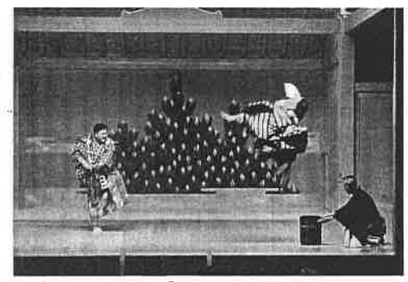
「巻絹」

三熊野に巻絹を納める都ノ男（ツレ旭）、途次、梅の香に誘われ音無天神に寄り一首を案じていたため刻限に遅れ、臣下（ワキ淳）の怒りを買い、下人（アヒ融）に縛められて居るを知って音無天神の憑依した巫女（シテ孝充）「その縄解けとこそ」（写真）とワキに抗議。シテはワキとの問答にツレの敬神、和歌を嗜む風流を説き、へとくとく免し給へや、と縄を解き放つと、アヒは切戸へ退き、ツレは地前に下居。舞クセに和歌の徳を強調し、ワキに促されノットから神楽（学・嘉津幸・総一郎・洋輝）を女幣で舞う、途中、幣を扇に替え神舞に直って舞上げると、へ神語するこそ恐ろしけれ、と扇を再び幣に替えイロエに。イロエは徐々に神憑りの狂気が醒めてゆく趣にも。キリはへ地に又躍り、と合膝返シ、へ神は上ら給ふ、と弊を背後に投げ捨て、へと言ひ捨つる、膝をつき立つと扇を取り常座でトメ。ワキは未だ生硬だが役に適い、シテは慎重几帳面、舞に腰が不安定をみたが大過無く堅実な勤めぶりだった。地頭邦弘。（1時間7分）

青陽会定式能「井筒」
星野路子

「柿山伏」

修行終え下山の途次、「腹中が淋しうなった」と山伏（シテ俊裕）、柿の木を見つけて「そこもとに柿主は居らぬか」と一応断りはするも応え無く、採ることにして礫をうつも徒労、「見れば此の木は木付きがよい」と、背に腹かえられず「登らるればよいが」の不安を克服、枝上の人となって柿を喰つているところを見つけた柿主（アド松次郎）、「よう見れば鳥ぢや」「あれは犬ぢや」「あれは猿ぢや」などと声音や仕草の真似をさせ、「こりや中々よい慰みぢや」と散々に山伏を愚弄する。挙句は「よう見れば鷹ぢや」と「ピーヨロ〳〵」鷹にされ（写真）、へハア飛ぼうぞよ〳〵〳〵、と拍子にかゝって囃されて飛ばざるを得ない仕儀（写真）。強か腰を打ち看病せいと迫るが聞かない柿主、「後で悔まうぞ」と山伏がへ台嶺の臺を凌ぎ、と帰りかける柿主に折りかけるうち、行力で引き戻された柿主、「汝の方へ連れて往んで養生せい」と命じられて背負うが直ぐ振り落し「恐ろしや〳〵」と逃げるを「捕えてくれい〳〵」と山伏。狭い鬘桶の上に立ち、様々な所作を姿勢正しく美しく演じなければならないシテの優れた平衡感覚と相俟ち、小品ながら緊張感のある立派な舞台だった。（20分）



青陽会定式能「柿山伏」
右より井上松次郎、鹿島俊裕、佐藤友彦
（後見）

「井筒」

シテ路子。前シテ里女ではへ眺めは四方の秋の空、と慎ましやかに右へ眺める風情、へ何の音にか覚めてまし、と下居に木ノ葉を置き合掌のところ優しい情趣。旅僧（ワキ勝久）との問答掛合に業平のこと問われ、「故も所縁もあるべからず」とは言え初同（勘鷗・一政・嘉宏ら）へ一叢ずすきの穂に出づる、と井筒の芒を沁々見込み、退るとへ草茫々、と懐旧の情に耽るかに右へ眺め渡す情緒も中々。以下、気を詰めた集中力が途切れたよう。

後シテ（有常ノ娘）は序之舞を舞果せ、へ業平の面影、と左袖返シ井筒に寄り、芒を掻き分けへ見れば懐しや、と中を凝視するところ（写真）腰をひねった様な姿の艶。トメへ夢は破れ、と軽く踏む拍子は一時間三三分の長丁場を舞い終えて如何にも力無くを思わせた。（8月3日・青陽会定式能）

能樂の友

発行　能楽の友社
名古屋市千種区千種2丁目18－18
（郵便番号　464-0858）
電　話（052）731－7984
FAX（052）733－2837
振替口座　00800－6－36393

購読料　1年　1100円
郵送の場合　1年　1800円
一　部　100円

NHK放送予定（平成25年10～11月）

◆NHK－FMラジオ能楽鑑賞（日曜日6時～6時55分）

10月27日	素謡「定　家」（観世流）	山本順之
11月10日	素謡「江　口」（観世流）	関根祥六
11月17日	素謡「野　宮」（金剛流）	松野恭憲
11月24日	素謡「浮　舟」（観世流）	浅見真州

演能カレンダー

◆名古屋能楽堂◆

（TEL 052－231－0088）（能楽関係のみ）

［11月］

3日(日)	名古屋金春流友会	（無料）（番組①面）
	第34回名古屋金春会	（有料）（番組①面）
4日(月)	やっとかめ能楽舞台	
	十一世藤田六郎兵衛　笛の世界	（有料）
10日(日)	名古屋観世会定例公演能	（有料）（番組①面）
15日(金)	やっとかめ能楽舞台	（有料）
	和泉流狂言づくし	
16日(土)	やっとかめ能楽舞台　御殿能	（有料）
17日(日)	名古屋宝生会定式能	（有料）（番組②面）
19日(火)	名匠狂言会	（有料）（番組②面）
24日(日)	久田観正会	（無料）（番組②面）

先代野村又三郎七回忌追善
狂言　やるまい会
12月8日　東京・喜多六平太記念能楽堂　東京公演

狂言やるまい会（野村又三郎師主宰）は本年第二十九回東京公演をむかえ、先代野村又三郎の七回忌に当たり、祖父の代まで野村家の狂言方であった小早川家の協力を得て、手向けの曲として「半蔀」をはじめとして、野村又三郎家にのみ伝承されている番外狂言「善意」、一門による「仁王」、狂言小舞など和泉流野村派一色の番組構成で追善公演を十二月八日（日）午後一時から東京・品川区上大崎の喜多六平太記念能楽堂で開催する。番組は次のとおり。

能「半蔀」立花供養（シテ小早川修、ワキ宝生欣哉、アイ野村又三郎、笛・一噌隆之、小鼓・鵜澤洋太郎、大鼓・柿原弘和、後見・浅見真州、浅見慈一、地謡・清水寛二、西村高夫、柴田稔、馬野正喜、谷本健吾、小早川泰輝）

狂言小舞「尼ヶ崎」（奥津健一郎）

狂言「善意」（男・野村又三郎、有徳人・奥津健太郎、金法師・野村信朗）

狂言「仁王」博奕打・野口隆行、何某・松田高義、在所の者・藤波徹、在所の者・伊藤泰

入場料　正面（前売）五〇〇〇円／当日六〇〇〇円　脇正面（前売四〇〇〇円／当日五〇〇〇円　中正面・（前売）、二階三〇〇〇円（当日四〇〇〇円）

取扱い　野村事務所（電話090・8323・3210、電子チ・ケットぴあ（電話0570・02・9999、Pコード431－662）

五色の会　能を観る
能「自然居士」
12月23日　岡崎　花朋会舞台

金剛流・朋の会（羽多野良子師主宰）による「五色の会・第十五回能を観る」公演は、きたる十二月二十三日（月・祝）、岡崎市の花朋会舞台（岡崎市大西町奥長入四七－四）で開催される。

「五色の会・能を観る」公演は、長年愛好者はじめ多数の鑑賞で、徳川家康ゆかりの岡崎で、金剛流シテ方羽多野良子師が活躍、熱い支持を博しており、歴史ある岡崎での能楽鑑賞の機会として関心も高く、市民から期待されている。

後援・岡崎市教育委員会。

入場料・前売り五〇〇〇円、当日五五〇〇円、高校生以下三〇〇〇円。

番組は次のとおり。開演午後二時。

仕舞「求塚」（シテ・宇高通成、地謡廣田幸稔、地謡・宇高竜成、宇高徳成、惣明貞助）

狂言「腰祈」（祖父・野村又三郎、卿ノ殿・松田高義、太郎冠者・藤波徹、後見・野村信朗）

能「自然居士」（シテ羽多野良子、子方・伊藤詩実、ワキ高安勝久、楫元正樹、アイ・野村又三郎、後見・廣田幸稔、伊藤雅子、小鳴利辺華、地謡・宇高通成、宇高竜成、宇高徳成、百々康治、竹市幸司、惣明貞助）

問い合わせ・朋の会事務局／岡崎市中町五－二－一五、電話0564・23・4364、090・4855・4013。

伊勢の伝統の能楽まつり
11月16日　伊勢内宮・参集殿

能楽三座の流れを汲む一色能・通能と馬瀬狂言の各保存会が結集し、伊勢の伝統の能楽を継承する会が組織され、毎年秋に公演している「伊勢の伝統の能楽まつり」は、ことし第十六回を数え、本年はとくに〝伊勢神宮・第六十二回式年遷宮〟の神事にあたり、この奉祝行事として、十一月十六日（土）、伊勢神宮・参集殿で開催される。入場無料。

演能は、能「翁」（一色能）、狂言「瓜盗人」（馬瀬の狂言）、狂言「棒縛」、（馬瀬の狂言）、仕舞「猩々」「羽衣」（通能）連吟「杜若」（通能）一管「中の舞」（通能）独吟「金札」（一色能）、仕舞「七騎落」ほか（一色能）など。

主催／伊勢の伝統の能楽を継承する会（事務局・伊勢市一色町一三〇六番地二、電話0596・25・6526）

共催一色町能楽保存会、通町能楽保存会、馬瀬町狂言保存会

第34回名古屋金春流友会
十一月三日（日）午前九時半開演　名古屋能楽堂

独吟「鶴亀」玉井　泰行　「蟬」丸渡辺　博士
「邯鄲」永田　隆司　「玉葛」沢田　典子
「鵜之段」中村　出

仕舞「小袖曽我」中村　正子　仕舞「八島」伊藤　力
「羽衣」キリ矢代　隆夫
「鶴亀」氷見　啓明

仕舞「紅葉狩」橘高まりあ　仕舞「小塩」クセ箕浦　遵
「春日龍神」伊藤　理紗
「紅葉狩」廣瀬　雅弘

仕舞「羽衣」クセ大島洋子
「玉葛」小島　貴子

仕舞「弓八幡」杓谷　桂子
「放下僧」コウタ杉浦里江子
「竜田」クセ　豊田　均

仕舞「蓑老」加藤　英昭
「田村」キリ後藤　吉孝
「紅葉狩」青木　邦友

仕舞「小袖曽我」袴田　康裕
「井筒」山田　信善

仕舞「花月」キリ寺田まち子
「羽衣」キリ石原　誠

仕舞「田村」キリ酒井　丈夫
「笹の段」酒井　幸子

仕舞「阿漕」林　功
「黒塚」氷見　泰子

仕舞「高砂」加藤　剛
「安宅」箕浦　郁子
「紅葉狩」一野　研志

仕舞「江口」キリ後藤美代子
「船橋」林　由華

仕舞「弱法師」小島　芳樹
「山姥」キリ前田　登

仕舞「三井寺」永吉　容子
「鵜」松本　久子

独吟「野宮」鬼頭　瑠美子　「角田川」小野瀬荘樹

（午後一時頃終了）

主催　名古屋秀麗会
名古屋春栄会
春敲会
デンソー能楽部
トヨタ車体謡曲部OB会

［入場無料］［御来場歓迎］

第34回名古屋金春会
十一月三日（日）午後一時半開演　名古屋能楽堂

番組

仕舞　八島　高橋　忍
松風　辻井　八郎
本田　芳樹

地謡　金春　憲和
金春　安明
鬼頭　尚久
本田布由樹

子方　金春　嘉織
シテ　金春　穂高

能　生田　橋本　宰　河村眞之介
後藤嘉津幸　大野　誠

後見　本田布由樹
鬼頭　尚久

地謡　豊田　均
廣瀬　雅弘
箕浦　遵
加藤　剛
佐藤　俊之
金春　安明
高橋　忍
金春　憲和

能　半蔀　シテ　本田　光洋
高安　勝久　河村総一郎
後藤嘉津幸　鹿取　希世
立花　アイ　野村又三郎

後見　本田　芳樹
安達　裕香

地謡　永田　孝司
小島　芳樹
前田　登
小野瀬荘樹
高橋　八郎
吉場　汎
廣瀬　雅弘
本田布由樹

午後四時頃（休憩）十五分

狂言　佐渡狐　シテ　野村又三郎　アド　野口　隆行
小アド　松田　高義
後見　伴野　俊彦

仕舞　松竜田　虫　クセ　吉場　廣明
キリ　金春　安明

地謡　廣瀬　雅弘
金春　穂高
佐藤　俊之
箕浦　遵

能　熊坂　シテ　鬼頭　尚久　飯富　雅介　河村眞之介
アイ　野口　隆行　船戸　昭弘　加藤　洋輝
大野　誠

後見　金春　穂高
金春　憲和

地謡　後藤　吉孝
加藤　英昭
林　功
青木　邦友
辻井　八郎
本田　光洋
高橋　忍
本田布由樹

〈午後六時頃終了〉

附祝言

［チケット料金］
正面指定席　五〇〇〇円
中ワキ自由席　一般四〇〇〇円
学生　三〇〇〇円
［前売券］名古屋能楽堂　TEL052・231・0088
名古屋金春会（マツオカ）TEL0586・45・1539

主催　名古屋秀麗会
名古屋春栄会
後援　（公社）金春円満井会
中日新聞社

名古屋観世会定例公演能
十一月十日（日）十二時三十分開演　名古屋能楽堂

能　実盛　梅若　玄祥　杉江　元
高安　勝久
楫元　正樹

間　鹿島　俊裕

後見　梅田　嘉宏
武田　邦弘

地謡　河村眞之介
久田舜一郎
加藤　洋輝
鹿取　希世
吉沢　清沢
久田　勘鷗
八神　孝充
本田　旭
松山　久田
清沢　勘一
勘鷗　政
高橋　幸親
武田　邦弘
梅田　邦久
古橋　正邦

狂言　鳴子遣子　茶屋　井上松次郎　男　佐藤　融
男　今枝　郁雄
後見　佐藤　友彦

仕舞　兼平　古橋　正邦
定家　久田　勘鷗
善界　梅田　嘉弘

地謡　高橋　暸一
清沢　一政
祖父江修一
加賀　敏彦

武田　大志
梅田　邦久

能　蝉丸　飯富　雅介
橋本　宰
杉江　淳

河村総一郎
後藤嘉津幸　大野　誠

間　佐藤　友彦

後見　吉沢　旭
久田　勘鷗

地謡　八神　孝充
須部　甫
松山　武田
高橋　幸親
梅田　嘉宏
古橋　正邦
武田　邦弘
祖父江修一

附祝言

（四時半頃終了予定）

［チケット］
当日指定券　八五〇〇円
自由席券　六〇〇〇円
学生券　二五〇〇円

主催　名古屋観世会
事務所　名古屋市名東区一社3－162
TEL　052・734・6192
FAX　052・705・1585

12月演能案内

名古屋

名古屋能楽堂　十二月特別公演

12月1日（日）十二時三十分開演
名古屋能楽堂

能（宝生流）**百萬**
子方　坂口衣斐　愛玲
飯冨　雅介
間　奥津健太郎
後見　竹内澄子　玉井博祐
地謡　竹内孝成　石森智幸　平田正文　竹内淳一　和久荘太郎　衣斐正宜　佐藤耕司　内藤飛能

狂言（和泉流）**懐中聟**
シテ　鹿島俊祐
アド　舅　佐藤融
アド　太郎冠者　今枝郁雄
アド　教え手　野口隆行

舞囃子（金剛流）**清経**
加藤かおる
後見　河村眞之介　後藤嘉津幸
佐藤友彦　竹市学

能**融**（観世流）
仕舞　養老（金春流）
鬼頭尚久
地謡　田中春奈　熊谷鈴村知子　大川眞美　鐘美羽多野良子
仕舞　雲林院（喜多流）
長田驍
地謡　松井俊介　長田昌美　伊藤雅子
八神孝充
高安勝久
アイ　野村又三郎
後見　吉沢久田勘鷗旭
地謡　本田勲　須部武田邦弘　松山幸親　高橋暸一　梅田邦久　祖父江修一　清沢一政
（午後四時半頃終了予定）

主催　名古屋市文化振興事業団　能楽協会名古屋支部

［チケット料金］
前売　指定五〇〇〇円
自由　一般四〇〇〇円
（自由席のみ当日五〇〇〇円増）
取扱い／名古屋能楽堂（052・231・0088）
チケットぴあ（0570・02・9999　Pコード432・237）

大阪

梅猶会　能楽公演
12月1日　大槻能楽堂

梅猶会主催の平成二十五年度第四回大阪能楽公演は、十二月一日(日)大槻能楽堂で、能「鉢木」能「海士」狂言「寝音曲」で開催。午後一時開演。番組次のとおり。

能**鉢木**
井戸良祐　梅若基徳
喜多雅人　福王茂十郎　森本幸治　是川正彦　谷口正壽　久田舜一郎
貞光義明
間　善竹隆司　善竹隆平
後見　斎藤信輔　梅若修一
地謡　上野朝彦　小川晴子　小松勝憲　水田雄唔　梅若雅一　池内光之助　梅若猶義　寺澤幸祐

狂言**寝音曲**
太郎冠者　善竹忠一郎
主人　上西良介
後見　上吉川徹
仕舞　葛城　越知芳彦
花筐　井戸和男
定家　梅若修一
融　梅若善高
地謡　水田雄唔　梅若善久　池内光之助　梅若雅一

能**海士**
浅見悠花　立花香寿子
喜多雅人　広谷和夫　是川正彦
石井慎也　吉阪一郎　保彦　上田左鴻　雅義
間　善竹隆司

附祝言
後見　井戸良祐　梅若善高
地謡　梅若雄一郎　越知芳彦　上野朝彦　小川晴子　斎藤信輔　井戸和男　梅若善久　寺澤幸祐
（終了　午後五時頃予定）

主催　大阪梅猶会
連絡所　豊中市千里南町3―18―12（梅若善高方）
電話　06・6381・7854

［入場料］
全自由席　前売　四五〇〇円
（当日五〇〇〇円）
学生　二五〇〇円
［申し込み］
出演楽師、吉田書店、ローソンチケット（L53461）

観阿弥生誕六六〇年
世阿弥生誕六五〇年
観世宗家展　風姿花伝

松坂屋美術館（名古屋店・南館七階）では、観阿弥生誕六六〇年、世阿弥生誕六五〇年を記念して、歴代の観世宗家が所蔵してきた貴重な歴史的資料や能面、装束など約百三十点を十月十九日(土)から十一月二十四日(日)まで展観している。
また、日本最古の能楽論「風姿花伝」、その原本である世阿弥直筆の「花伝第六花修」と「花伝第七別紙口伝」を公開し、世阿弥が書き残した能の美とその精神を紹介する。
入場料（税込）千円、高・大生八百円。開館時間午前十時～午後七時三十分、最終日十一月二十四日は午後六時閉館（入館は閉館三十分前まで）
主催・松坂屋美術館、日本経済新聞社、テレビ愛知、後援・愛知県・岐阜県・三重県・名古屋市各教育委員会。

第57期　名古屋宝生会定式能

十一月十七日（日）午後一時始
名古屋能楽堂

能**野宮**
玉井博祐
高安勝久　河村総一郎　後藤嘉津幸　竹市学
間　野口隆行
後見　辰巳満次郎　和久荘太郎　藤田光子　犬塚恵　竹内澄子　廣島栄里子　衣斐愛雅
地謡　阪口泰子　芳賀カズ子

狂言**太刀奪**
太郎冠者　松田高義
主　使いの者　野村又三郎　野口隆行
後見　伴野俊彦

仕舞　龍田（キリ）　佐藤耕司
船橋　内藤飛能
地謡　和久荘太郎　衣斐正宜　水上優　辰巳大二郎

能**殺生石**
宝生和英
飯冨雅介　河村眞之介　後藤孝一郎　鬼頭義命　鹿取希世
間　野村又三郎
後見　衣斐正宜　辰巳大二郎
地謡　清水達郎　石森智幸　大森尚人　玉井道夫　和久荘太郎　辰巳満次郎　水上優　内藤飛能
（終了予定　五時頃）

附祝言

主催　名古屋宝生会
事務局　名古屋市昭和区御器所3―23―19―802
衣斐正宜方
TEL/FAX　052・882・5600

入場料
（全自由席）
正会員券　一八、〇〇〇円（年間通用四枚綴り）
鑑賞券　五、〇〇〇円（各回一回限り）
学生券　二、〇〇〇円（各回一回限り）

名古屋

名匠狂言会

十一月十九日（火）18時30分開演
名古屋能楽堂

「名古屋」和泉流
墨塗
大名　佐藤友彦
太郎冠者　女　佐藤融
野村又三郎
後見　井上松次郎

「京都」大蔵流
素袍落
太郎冠者　茂山七五三
主人　茂山宗彦
伯父　茂山千五郎

「東京」和泉流
小傘
僧　野村万作
田舎者　深田博治
新発意　野村萬斎
参詣人　高野和憲
参詣人　内藤連
参詣人　中村修一
参詣人　岡聡史
尼　石田幸雄

後見　島田洋海

久田観正会

十一月二十四日（日）
開演　午前九時半
名古屋能楽堂

連吟　竹生島
宮間明子　小島芳枝　川田純子　中田久栄　森田篤子　加藤利幸　近藤精宏
忠度
仕舞　高砂　浅見夏代
野宮　堤賢太郎

素謡　田村　小川浩　工藤伸太郎　豊島庸子　岡島由果
巴　廣瀬之彦　石川保博
松虫　柴田雄次　飯田吉平
敦盛

舞囃子　半部　柴田得美子　河村眞之介　久田舜一郎
山姥　岡田信道　加藤洋輝　河村眞之介　藤田六郎兵衛　久田舜一郎　藤田六郎兵衛

仕舞　花筐（狂）　大久保由実

素謡　隅田川　市川公子　岡佳代子　岡田信道　佐藤隆男

能**卒都婆小町**
志賀禮子
高安勝久　杉江元　安福光雄　久田舜一郎　藤田六郎兵衛
一度ノ次第

素謡　望月　角田尚香　前川千鶴子　前川幸子　上田拓司

番囃子　**楊貴妃**
小田あさ乃
高安勝久　河村眞之介　船戸昭弘　竹市学

素謡　鸚鵡小町　前川千鶴子　久田勘鷗　瀬戸洋子　小林曙　後藤玲子

求塚　大竹富三江　安福光雄　久田舜一郎　安福光雄　船戸昭弘　加藤洋輝　竹市学　竹市学

舞囃子　高砂　濱口矩光

班女

後見　月崎晴夫

［入場料］
S席　八五〇〇円
A席　七五〇〇円
B席　六五〇〇円
取扱い＝中日新聞コンサートデスク／TEL 052・308・8282
チケットぴあ　TEL 0570・02・9999　Pコード 431・420
サークルK・サンクス・セブン・イレブン

主催　中日新聞社
特別協賛　盛田エンタプライス株式会社
協賛　岡谷鋼機株式会社

（番組③面へつづく）

当地の各流儀・流派・結社・社中の消息を辿る ⑲

拾貳

竹尾　邦太郎

⑤「能と狂言に親しむ会」と「花傳の会」及び「名古屋城夏まつり薪能」

「藤田昭彦から藤田六郎兵衛へ」

――承前――

藤田六郎兵衛と梅田邦久とが立ち上げた「能と狂言に親しむ会」の企画・構成のもと昭和六一年（一九八六）より名古屋城夏まつりの一環として行なわれてきた薪能は平成一六年（二〇〇四）、諸般の事情に因り終焉を迎えるが、藤田六郎兵衛の催能との煩雑を避けるため今回「名古屋城夏まつり薪能」を一括して纏め、特に記述なき場合、曲目とシテのみとする。

平成6年8月3日―8月15日
3日「半　蔀」　前野郁子
4日「巻　絹」　今沢美和
5日「天　鼓」　高橋瞭一
7日「羽衣・和合」近藤幸江
8日「船弁慶」　清沢一政
9日「小　督」　須部　甫
10日「杜　若」　祖父江修一
11日「殺生石」　松山幸親
12日「葵　上」　久田徹二
13日「橋弁慶」　梅田邦久
14日「鞍馬天狗・白頭」　梅田邦久
15日「熊　坂」　古橋正邦

平成7年8月3日―8月15日
3日「高　砂」　祖父江修一
4日「半　蔀」　須部　甫
6日「狂言「磁石」野村又三郎「鶴　亀」　梅田邦久
7日「巴」　前野郁子
8日「安達原」　今沢美和
9日　半能「山姥・白頭」　久田徹二
10日「船弁慶」　清沢一政
11日「羽　衣」　松山幸親
13日　狂言「蝸牛」　井上靖浩
狂言「清水」　茂山宗彦
狂言「榛縛」　野村信行
14日「葵　上」　近藤幸江
15日「菊慈童」　高橋瞭一
半能「石橋」　梅田邦久　古橋正邦

平成8年8月6日―8月18日
6日　狂言「伯母ヶ酒」「吉野天人」　今沢美和
7日「田　村」　古橋正邦
9日「杜若・恋之舞」　久田徹二
10日「海士・窕」　梅田邦久
11日「清　経」　須部　甫
12日「東　北」　近藤幸江
13日「巻　絹」　松山幸親
14日　狂言「酢薑」「経　正」　瀬戸三津子
15日「羽　衣」　祖父江修一
16日「巴」　清沢一政
17日「花　月」　前野郁子
18日「葵　上」　高橋瞭一

平成9年8月5日―8月17日
5日「通小町」　高橋瞭一
6日「班　女」　前野郁子
7日「杜　若」　松山幸親
8日「阿　漕」　久田徹二
10日「蝉　丸」　今沢美和
11日「安達原」　近藤幸江
12日「巻　絹」　瀬戸三津子
13日「芦　刈」　須部　甫
14日「鵜　飼」　祖父江修一
15日「羽　衣」　清沢一政
16日「井　筒」　梅田邦久
17日「東　北」　古橋正邦

平成10年8月4日―8月16日
4日「羽衣・和合」高橋瞭一
5日「清　経」　清沢一政
6日「経　正」　古橋正邦
7日「殺生石」　前野郁子
9日「半　蔀」　今沢美和
10日「杜　若」　須部　甫
11日「班女・笹之伝」　梅田邦久
12日「小　督」　加賀敏彦
13日「鉄　輪」　近藤幸江
14日「葵　上」　久田三津子
15日「安達原」　松山幸親
16日「猩々乱」　梅田邦久
祖父江修一

平成11年8月3日―8月15日
3日「葵上・梓之出」　古橋正邦
4日「花　月」　松山幸親
5日「巴」　須部　甫
6日「半　蔀」　近藤幸江
8日「胡　蝶」　今沢美和
9日「班　女」　祖父江修一
10日「清経・替之型」　高橋瞭一
11日「巻　絹」　前野郁子
12日「杜　若」　清沢一政
13日「羽衣・和合」久田三津子
14日「天鼓・弄鼓」梅田邦久
15日「安達原・黒頭」　久田勘鷗

平成12年8月3日―8月15日
3日「羽衣・和合」今沢美和
4日「東　北」　前野郁子
6日「千　手」　近藤幸江
7日「清　経」　加賀敏彦
8日「安達原」　清沢一政
9日「通小町」　須部　甫
10日「融」　祖父江修一
11日「小　督」　松山幸親
12日「船弁慶・前後」　久田勘鷗
13日「百　万」　古橋正邦
14日「井　筒」　高橋瞭一
15日「葵上・空之祈」　梅田邦久

平成13年8月3日―8月16日
3日　狂言「水掛聟」佐藤　融
狂言「茶壷」　井上靖浩
5日「巴」　今沢美和
6日　狂言「鈍太郎」野村小三郎
狂言「附子」　井上靖浩
7日「班　女」　近藤幸江
8日「葵　上」　祖父江修一
9日「鵜　飼」　松山幸親
10日「船弁慶」　古橋正邦
11日「富士太鼓」　梅田邦久
12日「巻　絹」　須部　甫
13日「田　村」　清沢一政
14日「高　砂」　高橋瞭一
15日「杜　若」　前野郁子
16日「海　士」　久田勘鷗

平成14年8月2日―8月18日
2日「融」　梅田邦久
4日「井　筒」　近藤幸江
5日「阿　漕」　高橋瞭一
6日「清　経」　祖父江修一
7日　狂言「蚊相撲」井上祐一
狂言「清水」　今枝靖雄
8日「天　鼓」　古橋正邦
9日「千　手」　今沢美和
10日「東　北」　清沢一政
11日　狂言「昆布売」佐藤友彦
12日　狂言「附子」　今枝郁雄
「百　万」　久田三津子
13日「芦　刈」　松山幸親
14日「羽衣・和合」須部　甫
「花　月」　上野嘉宏
16日　狂言「鐘の音」野村又三郎
狂言「井杭」　野村小三郎
17日「葵　上」　前野郁子
18日「忠　度」　久田勘鷗

平成15年8月1日―8月12日
1日「羽衣・和合」今沢美和
2日「鉄　輪」　高橋瞭一
3日「橋弁慶」　久田勘鷗
4日　狂言「水掛聟」佐藤友彦
狂言「榛縛」　野村小三郎
5日「千　手」　松山幸親
6日「三　輪」　前野郁子
7日「葛　城」　近藤幸江
8日「班　女」　須部　甫
10日「小　督」　祖父江修一
11日「葵　上」　清沢一政
12日「小鍛冶」　上野嘉宏

平成16年7月30日―8月12日
30日「鉄　輪」　清沢一政
31日　狂言「萩大名」松田高義
狂言「長光」　佐藤　融
1日「杜　若」　三村恵子
2日「東　北」　須部　甫
3日「安達原」　祖父江修一
4日「殺生石」　梅田嘉宏
5日「井　筒」　前野郁子
6日　狂言「昆布売」奥津健太郎
狂言「咲嘩」　野口隆行
8日「半　蔀」　今沢美和
9日「田　村」　松山幸親
10日　狂言「鐘の音」井上靖浩
狂言「鈍太郎」佐藤友彦
11日「班　女」　高橋瞭一
12日「富士太鼓」久田三津子

平成6年に始まり16年までの「名古屋城夏まつり薪能」の多出曲は羽衣9・葵上9・杜若7・班女6・安達原6・東北・半蔀・巻絹・清経各5・井筒・小督各4。

平成六年九月六日(火)七日(水)の両日第二回「花傳の會」が現代作品による、の名目で熱田神宮能楽殿で行なわれる。演能に先立ち初日は観世銕之丞・大倉源次郎・藤田六郎兵衛、二日目は大倉源次郎に代り観世暁夫が入って「現代における能楽の創造」のテーマで鼎談がある。番組は舞囃子「智恵子抄」観世暁夫（光太郎）片山清司（智恵子）藤田六郎兵衛・後藤嘉津幸（清水皓祐）山本哲也・観世銕之丞（地頭）、堂本正樹「春駒まりて」より素囃子「春愁」藤田六郎兵衛・大倉源次郎（清水皓祐）山本哲也・上田悟、芥川龍之介「相聞」より能舞「相聞」観世銕之丞（女）藤田六郎兵衛・大倉源次郎（成田達志）河村眞之介・観世暁夫（杉浦豊彦）（地頭）青木道喜（後見）。括弧内の氏名は二日目、他は両日同じ。木下順二作・狂言「彦市ばなし」茂山千五郎（彦市）茂山千作（殿様）野村信行（天狗ノ子）藤田六郎兵衛（笛）。

平成六年十一月十一日、「能と狂言に親しむ会」が平成二年十一月七日の特別公演「道成寺」以来久しぶりの公演は蝋燭能「砧・梓之出」。番組は藤田六郎兵衛の解説のあと蝋燭点火、仕舞二番「笠之段」片山慶次郎「玉之段」片山九郎右衛門、能「砧・梓之出」梅田邦久・片山清司・中村弥三郎・野村又三郎・藤田六郎兵衛・曽和博朗・河村総一郎・前川光長・片山九郎右衛門（地頭）武田欣司（後見）。

これ以後、「能と狂言に親しむ会」の主催公演を知らないが、この年、梅田邦久には「邦謡会能」が国立能楽堂でも第十六回を数えてをり、藤田六郎兵衛は昨年「花傳の會」を発会させたばかり、といった事情もあったろうか。なお、この第二回公演以降、案内リーフレット（散ラシ）に回数を明記したものはないが、藤田六郎兵衛が愛知文化振興事業団主催の「ブラック・シアター能」のように企画・監修などに携わった催能は煩を避けるため割愛し、一応、便宜上恣意的に回数を記すことにする。

平成七年四月十九日　第三回「花傳の會」特別企画・次代を担う能役者達の熱気あふれる舞台をお楽しみ下さい。

一管「鈴之段」藤田六郎兵衛、舞囃子「絵馬」山本勝一・大槻文蔵・観世暁夫・竹市学・後藤嘉津幸・河村眞之介・上田慎也・松浦信一郎（地頭）、狂言「見物左衛門」野村信行、能「天鼓・弄鼓之舞」山本博通・福王和幸・野村信行・大野誠・成田達志・山本哲也・中田弘美・大槻文蔵（地頭）山本勝一（後見）。

平成七年七月廿九日・昼・夜二回公演　第四回「花傳の會」野外能時代のスペクタクル能、四百六十年ぶりの再演、名古屋市芸術創造センター。

昼の部　能「杜若・恋之舞」観世栄夫・宝生欣哉・鹿取希世・福井啓次郎・河村眞之介・桜井均・梅田邦久（地頭）河村和重（後見）、狂言「宗論」茂山千作・野村又三郎・茂山真吾、復曲能「渇水龍女」片山九郎右衛門（龍女）観世銕之丞（帝王）大槻文蔵（王子ノチニ龍王）河村和晃（太鼓ノ精）赤瀬雅則・角当直隆（廷臣）福王茂十郎（敵将陳恵孜）宝生欣哉・山本博通・生一知哉（敵兵）茂山千五郎（鯛ノ精）茂山真吾・松本薫（鱗ノ精）藤田六郎兵衛・大倉源次郎・山本孝・金春惣右衛門・山本勝一（地頭）観世栄夫（後見）。

夜の部　能「猩々乱」観世銕之丞・福王和幸・藤田六郎兵衛・後藤嘉津幸・河村大・上田悟・梅田邦久（地頭）河村和重（後見）、狂言「棒縛」野村信行（太郎冠者）野村又三郎（主）井上靖浩（次郎冠者）、能「渇水龍女」片山九郎右衛門・観世栄夫（帝王）大槻文蔵・河村和晃・浦田保親・梅若盛彦（廷臣）宝生閑（敵将陳恵孜）山崎正道・福王和幸・武富康之（敵兵）茂山千之丞（仙人）茂山千五郎（鯛ノ精）丸石やすし・茂山千三郎（鱗ノ精）藤田六郎兵衛・大倉源次郎・山本哲也・金春惣右衛門・羽多野晋（地頭）観世銕之丞（後見）。

――以下次号――

八月十七日(日)
不易流行『紅葉狩』その世界」
花傳の會　名古屋城夏まつり
能・狂言　特別公演
秘曲の会「小鼓の世界」
八月十六日(土)
平成9年8月16日(土)・17日(日)午後2時開演（1時開場）
■名古屋能楽堂（名古屋市中区丸の内3-1-5）　各日4,000円（全自由席）
お求めはチケットぴあ TEL(052)320-9111 花傳の会　事務局 TEL(052)251-3464 ※詳しくは下記お問合せ先へ

（②面より久田観正会番組つづき）

素謡　紅葉狩　大川　宏　水無瀬量瑞　井澤雅夫

番外仕舞　清経　久田　勘鷗
葛城　久田三津子
鞍馬天狗　久田勘吉郎

附祝言

（終了六時十五分頃）

［入場無料・御来場歓迎］

主催　久田観正会
久田勘鷗
名古屋市名東区一社三―一六二
TEL〇五二―七三四―六一九二

◆初秋の舞台から◆

「第29回衣斐正宜後援会能」と「名古屋能楽堂九月定例公演・一部」

竹尾邦太郎

「富士太鼓」

宮中の管絃の会に楽人・浅間が召されたと聞く同業の富士が、勅諚も無いまゝ己れの力量を恃み上洛と知る浅間は富士を殺害、と予め一曲の冒頭に背景を説く臣下（ワキ雅介）の、富士ノ妻への重苦しくも惻隱の籠る語りが先づ舞台を締める。夫が殺害されたとは露知らず富士ノ妻（シテ正宜）、夢見の悪さを案じ娘（子方・怜）を先立て、夫を尋ねると橋懸での次第・道行の連吟に述べるが、子方が女児ゆえ声に張り無くシテも少々謡いあぐねるのでは。舞台に入り、下人（アヒ融）にワキを引き逢わされてシテ、ワキとの問答は事慰の深刻に、初同（乾之助・輝和・光夫・亘ら）へ（さしも名高き富士はなど）煙とは（なりぬらん）、で思わず笠を手放し子方に目を遣りシヲル。ワキから形見の裟束を両手に受け下居するとクドキ。シテへその面影は身に添へど、を地が継ぎへ（真の主は亡き跡の）忘れ形見ぞよしなき、と形見を高く掲げ見入るも切なく、物着前、へ歎くぞ哀れなる、で立ち上がろうとして膝にがくっときて立たれぬ辺り微妙。鳥兜を着け萌黄地舞衣を壷折に着ると一気に昂る狂気、「あれに夫の敵の候ぞや」と羯鼓台に迫り、子方と掛合に太鼓こそ夫の敵、親の敵と子方を太鼓の前へ連れて行き、撥を持たすが、女児の子方相手の掛合では緊張感というか迫力が発揮されない憾みが。へなほも思へば腹たちや、で踏む二ツ拍子、返シ句に前へ出、へ心詞も及ばれぬ、と七ツ拍子踏み、へ幽霊来ると見えて、と子方が地前に下居するとシテは撥を持ち、へもどかしと太鼓打ちたるや、と打つ型をして退ると楽（がく・希世・嘉津幸・眞之介）に。舞上げ、へ持ちたる撥をば、から型どころきび〳〵極め、へ（名の下）空しからず、と撥を捨て、へ類ひなや懐かしや、のシヲリの際に左袖で面が隠れる風情には、夫への想いの深さが。懐中から扇を取りロンギ、へ思ふ敵は討ちたれ、と扇面で羯鼓台の太鼓をたおやかに打つ姿には安堵の心。退って正中下居すると、へこれまでなりや、とキリへ。後見が鳥兜・舞衣を脱がせて笠を右脇に置くと、へ我が心、と笠をつまみ持ち立つとトメはスミから左へ廻って小廻りに常座へ、太鼓こそ憂き人の形見へ見置きてぞ帰りける、と笠を翳し沁々羯鼓台を眺め、返シ句に名残りを惜しんだ。好地謡に応えシテも力演だったが舞台効果を更に上げるには子方の採用に配慮が欲しい。（1時間17分・8月25日・第29回衣斐正宜後援会能）

名古屋能楽堂九月定例公演「弓八幡」
左より古橋正邦、杉江　元
（能楽写真家協会会員・杉浦賢次氏撮影）

「弓八幡」

古代・賀茂神社・石清水八幡宮などの祭儀には神楽・東遊の管弦や歌に携わる陪従（楽人）が奉仕したという。

宣旨を受け如月初卯、陪従として男山石清水八幡宮の神事参詣に赴く勅使一行（ワキ元・ワキツレ正樹・淳）、道行の連吟颯爽と晴れやか。座着くと老翁（シテ正邦）が男（ツレ嘉宏）を先立て登場、長閑な春景を愛でる一セイの連吟からツレの二ノ句へ花の都の空なれや、と舞台へ入りツレは正中、シテは常座、と向き合いシテのサシへ君が代は……、の朗吟を受け、御代を言祝ぎ八幡の神徳を讃える下歌・上歌のシテ・ツレ連吟が、めりはりの利いた小気味よい調子で脇能に相応しい爽快、素晴らしい。上歌へ（さやけき）影に来て、とツレはスミ、シテは正中と場を替え、神前に立つ心。ワキがシテの担ぐ錦の袋を不審すればシテ・ワキ問答に。袋の中は桑の弓、睫民ゆえ御勅使に託し君に献上を、とシテ。その考えは私見か神の託宣か、とワキ。掛合となってツレも加わり応答にも熱が。若さに逸るかのツレの言葉を受け、シテ・ツレ連吟に桑の弓・蓬の矢は治世太平の証、へよくよく奏し給へとよ、となるところなど説得力。弓を袋から出すなど以ての外、弓は袋に剣も箱に納むるこそ、へ泰平の御代の證なれ、は正に当代、武器（核）の保有は世界平和の為の抑止力でこそあれ、戦争の為の道具ではない、の警世の言葉である。

名古屋能楽堂九月定例公演「弓八幡」
古橋正邦（アト）
（能楽写真家協会会員・杉浦賢次氏撮影）

初同（勘鬘・修一・一政・大志ら）へ桑の弓取るや蓬の八幡山、とシテは恭しく弓袋をワキに渡す（写真）と常座へ退き、扇持ち舞台を一巡、へ神託ぞめでたかりける、と正中に下居、ワキの求めに、桑の弓、蓬の矢での治世は当社の御神力、とその謂れを神功皇后の三韓征伐、八幡宮の縁起などをクリ・サシ・クセに語り、ロンギに如月初卯に祭儀の神慮を感謝。中入地へ高良の神（八幡宮の末社）とは我、と立ち、此の御代守らんと此処に来たはへ八幡大菩薩の御神託ぞ、とワキへキッと指シ、へ掻き消すやうに失せにけり、と小廻りに返シ句で橋懸へ、ツレも立ち中入りすると代つて山下（さんげ）ノ者（アヒ松次郎）ワキの求めに形通り居語に当社の由来、如月初卯は卯の刻の神事のことども詳しく語り退くと後場。

ワキ・ワキツレ連吟に待謡、出端（学・昭弘・眞之介・洋輝）で高良ノ神（後シテ正邦）面邯鄲男・黒垂・透冠・紅白段厚板着付・金色波文大口・紺袷狩衣の姿で一ノ松のサシへ高良の神とは我が事なり、と開キ、地へ如月の初卯の神楽おもしろや、と狩衣の露取り早足に常座、達拝掛神舞に。偉丈夫の舞はきびきびと壮快、右袖きりりと巻上げる姿も大きい。舞上げてキリはへ月の桂の男山、と雲ノ扇（写真）、へ皆神体と現れ、で両袖巻上げる辺りも胸が空く。脇能の、力ある整った美しい舞台だった。上演頻度の比較的低い曲とはいえ地謡が不安定なところがあり少々残念。（1時間19分）

名古屋能楽堂九月定例公演「三人長者」
左より野口隆行、奥津健太郎、野村又三郎
（杉浦賢次氏撮影）

「三人長者」

士烏帽子・段獅斗目着付・括袴・掛素袍・小刀の正装で上京した各地の里人、在京の荘園領主から長者の称号を拝領、念願叶い喜び国許へ下る大和国市森長者（小アド健太郎）と近江国蒲生ノ長者（アド隆行）同道するところ、二人と同装だが士烏帽子は赤の上頭掛に獅斗目は紅白段の仁体と出逢い、言葉を交わせば河内国せなぎ長者（シテ又三郎）と分かり意気投合、長者と成った互いの経緯を自慢げに話し合い、お定まりの酒宴となり（写真）、へめでたかりける時とかや、と達拝から三人で賑やかに舞う三段之舞。興に乗る三人長者は、へあれなる長者の名は如何に、へ大和の国に隠れもなき市森長者は我が事なり、などと掛合万歳よろしく浮かれ、はしゃぎ合い、へ何れも劣らぬ三人の長者悉く名乗り合ふ、と連吟もめでたく舞留メに（写真）。野村又三郎家当代当主を守り立て一門の息の合った舞台。（27分）

蛇足　半世紀も昔、トニー谷が番組で「あなたのお名前なんて―の」と喚いていたのを思い出した。

名古屋能楽堂九月定例公演「通小町」
玉井博祐
（能楽写真家協会会員・杉浦賢次氏撮影）

名古屋能楽堂九月定例公演「通小町」
左より玉井博祐、衣斐　愛
（能楽写真家協会会員・杉浦賢次氏撮影）

「通小町」

木の実や爪木を持ち日参の里女（実は小町ノ霊・ツレ愛）、夏安居の僧（ワキ勝久）も無愛想では居られず、先づツレに木の実の名を尋ねれば、昔恋しきは、へ花橘の一枝、の返シ句に初めてワキにアシラフ。これを機にワキがツレの素性問えば、市原野辺の姥、へ跡弔ひ給へ、とワキにアシラフも名は告げずに、失せる心は後見座にクツログとワキの独白。ツレの片言隻語を思い合わせ、小町の幽霊と確信するとへこの草庵を立ち出でて、の返シ句に立ち、市原野辺を尋ね下居合掌に弔う。

一セイの囃子（誠・孝一郎・総一郎）で紺無地獅斗目を被き四位少将ノ霊（シテ博祐）が出、それとは知らず後見座に居た小町ノ霊（ツレ愛）、常座へ立ち出でへ嬉しのお僧の弔ひやなな、と喜びの黄色い声でワキにアシラフのが此処に利く。それを遮り被衣のまゝへいやお僧戒授け給はば怨み申すべし、とシテ。迷いも戒を受ければ成佛できない筈はなく、へ共に戒を、とワキを代弁する地、しかしツレとシテは掛合に互いの自論を言い張るのみ。ツレは、へ出でてお僧に弔はれんと、ワキを蒸い正中へ出ると、一ノ松のシテも、へ包めど我も、と被衣を脱ぎ捨て招キ扇に、へ止れかし、とツレを威圧するが、ツレの心を代弁する地、へ思ひは山の鹿にて（決心は堅く）へ更に止るまじ、とツレ。へさらば煩悩の犬となつて、とシテ、へ打たるゝと離れじ、とツレに向かい舞台へ。へ袂を取つて、と肩を抑え付け引き留めるところは余り凄味を感じなかったが、へ引かるる袖も、と踏む六ツ拍子には込み上げる怒りを。

「さては小野の小町四位の少将にてましますかや」とワキ、そうと分れば百夜通いの有様を、と。シテを百夜通いさせた当事者のツレ、当然この場を免れたい気持もあろう、ワキが座をずらした隣へ退くとツレ・シテ掛合に百夜通いのシミュレーション（模擬）。へ君を思へば徒跳足、で後見から笠を受け、へ涙の雨か、と頭上に笠を両手で翳スとイロエに舞台を一巡、へあら暗の夜や、と嘆息を洩らすのにツレが無神経に、へ夕暮は一方ならぬ思ひかな、と反応すれば、へ夕暮は何と!!、とツレを見込んだ怒気が凄まじく、へ（我をば待たじ）虚言や、と踏む拍子にも。

へかやうに心を尽し〳〵て、とツレにアシラヒへ欄の数々、と指折り数え（写真）、へ嬉しやとて、と直り、へ急ぎて行かん、と立つとへ笠も見苦し、と笠を後ろへ捨て、へすははや今日も、と逸る心は正中から笛柱へ眺め、へ衣紋けたかく引きつくろひ、はその暇も無いか特に型はなく、へ飲酒は、とワキ正へ行き、へ月の盃（なりとて）、と扇を左手に取り前へ受ける様に出し、へ戒めならば保たん（守らん）、と唯一念の悟り、へ多くの罪を滅して、とハネ扇に煩悩を霧散霧消させ、常座で、へ共に佛道成りにけり、と合掌、返シ句に留メ拍子踏んだ。シテの執念深さは淡泊に思えたが、女流らしい肌理細かな綺麗な舞台だった。（51分・9月1日・名古屋能楽堂九月定例公演第一部）

［先号の訂正］

四頁一段8行目　（写真）削除

四頁七段16行目　ら給ふ→らせ給ふ

能樂の友

発行　能楽の友社
名古屋市千種区千種2丁目18－18
（郵便番号　464-0858）
電　話（052）731－7984
ＦＡＸ（052）733－2837
振替口座　00800－6－36393

購読料　1年　1100円
郵送の場合　1年　1800円
一　部　100円

ＮＨＫ放送予定（平成25年11～12月）

◆ＮＨＫ－ＦＭラジオ能楽鑑賞（日曜日6時～6時55分）

12月1日	素謡「鉢　木」（観世流）	シテ	坂井　音重
12月8日	素謡「七騎落」（宝生流）	シテ	武田　孝史
12月15日	素謡「山　姥」（喜多流）	シテ	香川　靖嗣
12月22日	素謡「玉　鬘」（観世流）	シテ	梅若　紀彰
12月29日	狂言「米　市」（和泉流）	シテ	三宅　右近

演能カレンダー

◆名古屋能楽堂◆

（TEL 052－231－0088）（能楽関係のみ）

［11月］

24日(日)　久田観正会　（無料）

［12月］

1日(日)　名古屋能楽堂十二月特別講演　（有料）（番組①面）

4日(水)　平成25年度名古屋能楽堂小・中学生芸術鑑賞会　（関係者）

13日(金)　名古屋華舞会　（完売）

23日(月)　青陽会定式能　（有料）（番組①面）

名古屋観世会定例公演
平成26年度4回定式能

平成二十六年度の名古屋観世会の定例公演能は、観阿弥生誕六八〇年、世阿弥生誕六五〇年の歴史を銘記して、年間四回の公演を行う。

初回は二月九日(日)十二時三十分開演

能「邯鄲」（古橋正邦）、狂言「樋之酒」（松田高義）能「梅」（観世清和）

［第二回］六月八日(日)能「楊貴妃」（谷留（大槻文蔵）能「鵜飼」（観世芳伸）

［第三回］九月十五日(祝)能「賀茂」（観世喜正）能「遊行柳」青柳之舞（久田勘鶴）

［第四回］十一月九日(日)能「清経」（清沢一政）　能「砧」梓之出（梅若玄祥）

ＳＳ席年間特別指定券四五〇〇円（呈茶券付）▽Ｓ席年間指定券三〇〇〇〇円▽Ａ席年間指定券二五〇〇〇円▽年間自由席券（四枚綴り）二〇〇〇〇円。

入場料　正面席六〇〇〇円、脇・中正面席四〇〇〇円、販売所・豊田市コンサートホール・能楽堂事務局（豊田参合館8階）電話0565・35・8200、インターネット予約http//www.t-cm.gr.jp/、チケットぴあ（TEL0570・02・9999、Pコード430・123）

豊田市能楽堂 特別公演
喜多流能「天鼓」狂言「茶子味梅」
12月8日 午後2時開演

豊田市能楽堂は十二月八日(日)特別公演として、午後二時から能「天鼓」狂言「茶子味梅」を上演する。

主催・公益財団法人豊田市文化振興財団、豊田市・豊田市教育委員会。

番組は　和泉流狂言「茶子味梅」（さすあんばい）シテ（唐人）佐藤友彦、アド（妻）佐藤融、アド（男）鹿島俊裕、笛・松田弘之、小鼓・林吉兵衛、大鼓・佃良太郎、太鼓・前川光長）後見・今枝郁雄。

喜多流能「天鼓」前シテ（王伯）後シテ（天鼓の霊）友枝昭世、ワキ（勅使）宝生閑、アイ（官人）井上松次郎）後見・中村邦生、佐々木多門、地謡・粟谷範夫ほか解説・村瀬和子

第25回四日市能
能「善知鳥」狂言「井杭」
12月9日 四日市文化会館

「第25回四日市能」は、きたる十二月九日(月)四日市市文化会館で開催される。午後六時半開演。

演能は、狂言「井杭」と能「善知鳥」、主催・公益財団法人・四日市文化まちづくり財団、能と狂言に親しむ会四日市研究会。助成・公益財団法人岡田文化財団、協力四日市能楽連盟。

狂言「井杭」シテ（井杭）井上蒼大、アド（算置き）井上松次郎、アド（旦那）佐藤融、後見・今枝郁雄。

能「善知鳥」前シテ（尉）大槻文蔵、後シテ（猟師）大槻文蔵、ツレ（猟師の妻）観世喜正、子方（千代童）未定、ワキ（旅僧）福王和幸、アイ（所の者）井上松次郎、笛・藤田六郎兵衛、小鼓・成田達志、大鼓・山田哲也、後見・駒瀬直也、地謡・梅田邦久ほか。

チケット料金　Ｓ席五〇〇〇円、Ａ席四五〇〇円

チケット販売　パソコン/http://yokkaichi-shinko.com/yonbu。四日市文化会館窓口、チケットぴあ（TEL0570・02・9999／Pコード430・735）。問い合わせ　公益財団法人四日市文化まちづくり財団（TEL059・354・4501）

演能案内
十二月特別公演

十二月一日（日）十二時三十分開演
名古屋能楽堂

能（宝生流）**百萬**
子方　坂口衣斐　愛玲
飯冨　雅介
間　奥津健太郎
後見　竹内澄子　玉井博祐
地謡　竹内孝成　石森智幸　平田正文　竹内淳一　和久荘太郎　衣斐正宜　佐藤耕司　内藤飛能

狂言（和泉流）**懐中聟**
シテ　鹿島俊祐
アド　舅　アド　太郎冠者　アド　教え手
後見　佐藤友彦
佐藤融　今枝郁雄　野口隆行

舞囃子（金剛流）**清経**
加藤かおる
河村眞之介　後藤嘉津幸
竹市学
地謡　田中春奈　熊谷知子　大川磨美　伊藤雅子　鈴村昌美　羽多野良子

仕舞（金春流）**養老**
鬼頭尚久
地謡　前田小島　廣瀬雅弘　加藤英昭

仕舞（喜多流）**雲林院**
長田驍
地謡　松井俊介　長田郷　伊藤英毅

能（観世流）**融**
八神孝充
高安勝久
アイ　野村又三郎
後見　吉沢久田勘鶴旭
地謡　本田須部松山高橋幸甫武田邦親梅田邦久祖父江修一勲清沢一政
（午後四時半頃終了予定）

主催　名古屋市文化振興事業団
能楽協会名古屋支部

［チケット料金］
前売　指定五〇〇〇円
自由　一般四〇〇〇円
（自由席のみ当日五〇〇円増）
取扱い／名古屋能楽堂（052・231・0088）
チケットぴあ（0570・02・9999　Pコード432・237）

青陽会定式能（第357期第3回）

十二月二十三日（月・祝）十二時半開演
名古屋能楽堂

仕舞　**船弁慶**　クセ　星野路子
小鍛冶　クセ　村井邦子
地謡　角田尚香　前野都子　近藤幸江　久田三津子

能　**野宮**
清沢一政
杉江元
河村大　後藤孝一郎
大野誠
間　今枝郁雄
後見　今沢美和　久田勘鶴
地謡　角田尚香　村井邦子　吉沢旭　八神孝充　梅田嘉宏　武田邦弘　久田邦久　祖父江修一

仕舞　**花月**　キリ　須部甫
胡蝶　八神孝充
山姥　武田邦弘
鄙　祖父江修一
地謡　松山幸親　古橋正邦　久田勘鶴　加賀敏彦

狂言　**痺**　井上蒼大　井上松次郎
後見　佐藤融

能　**三輪**
武田大志
橋本宰
河村総一郎　船戸昭弘
問　鹿島俊裕
後見　久田三津子　武田邦弘
地謡　吉沢八神　今沢孝充　美和旭　古橋梅田　正邦松山　嘉宏幸親　前野郁子　高橋暸一

附祝言

主催　青陽会
後援　中日新聞

［有料］
前売券二、五〇〇円、当日券三、〇〇〇円、学生一、〇〇〇円
取扱い　チケットぴあ（0570・02・9999）
名古屋能楽堂、出演者宅

蝋燭能

能「鉄輪」「石橋」

12月24日　東急ホテル

名古屋東急ホテルでは、2013年のフィナーレを飾る「蝋燭能」を十二月二十四日㈫同ホテル3階ヴェルサイユの間で開催する。

協力：NPO法人名古屋能楽振興協会。受付午後六時。

番組は、観世流能「鉄輪」前シテ久田三津子、後シテ久田勘鷗、間語り・夏樹陽子▽観世流能「石橋」大獅子・久田勘鷗、久田勘吉郎ほか。

チケット（能鑑賞・着席コースディナー、フリードリンク、サービス料、税金込）特別席三〇〇〇円、S席二八〇〇〇円（S席会員価格二五〇〇〇円）、A席二三〇〇〇円。

予約・問合せは、名古屋東急ホテル・ディナーショー係（電話052・251・5200）東急ホテルは名古屋市中区栄4―6―8。電話052・251・2411、FAX052・251・2422。

なおディナーショー特別宿泊プランも用意されている。ツインルーム2名様一室、チケットにプラス一一八〇〇円。（一人一泊、朝食・サービス料）

金沢能楽美術館コレクション企画展

11月2日～3月16日

金沢能楽美術館では、十一月二日㈯から明年三月十六日㈰まで「〈企画展〉金沢能楽美術館コレクション―新収品を中心に―」を開催する。

出展は、本年寄贈された元加賀藩お手役者相馬五十八郎（諸橋権之進）自筆の謡本をはじめ、華麗な能装束など、新たにコレクションに加わった作品を披露、加賀藩ゆかりの「前田家旧蔵宝生流能狂言双六」も特別展示される。

なお正月特別開館イベントとして、一月二日「新春謡初め」午後一時からと午後二時二十分からの二回「一調一管が聴ける」「班女」などの催し、一月三日㈮は「新春狂言」が午前十時半から開催される。申込み不要。

また二月十六日、三月九日には、SPレコードで聴く謡の鑑賞会が催され、蓄音機で伝説の名人の謡を聴く催しが行なわれる。要観覧料。要申し込み。

名古屋宝生会定式能

26年度　年4回公演

名古屋宝生会平成26年（第58期）の定式能年間番組は次のとおり。

〔第一回〕一月二十六日㈰
能「高砂」内藤　飛　能「鞍馬天狗」白頭　辰巳満次郎

〔第二回〕三月十六日㈰
能「須磨源氏」和久荘太郎　能「隅田川」衣斐　正宜

〔第三回〕六月十五日㈰
能「半蔀」竹内　澄子　能「雷電」宝生　和英

〔第四回〕十一月十六日㈰
能「三井寺」玉井　博祐　能「飛雲」衣斐　愛

※正会員券　一八〇〇〇円（年間通用四枚）

平成26年度　大槻能楽堂新春公演

注目される自主公演能

大槻能楽堂の平成二十六年新春公演は、一月三日、四日の二日間行なわれる。

▽一月三日㈮午後二時始
能「翁」観世銕之丞、茂山千三郎
狂言「蝸牛」茂山千五郎
能「国栖」（白頭・天地之声）山本順之

▽一月四日㈯午後二時始
能「翁」野村四郎、野村萬斎
狂言「法師ヶ母」野村万作
能「烏帽子折」大槻文蔵

前売　S席八四〇〇円、A席六八〇〇円、B席五七〇〇円、学生席四二〇〇円

大槻能楽堂自主公演　改築三十周年記念公演
〝老の美と悴〟

▽平成二十六年一月二十五日㈯午後二時始
お話　村上　湛
能「卒都婆小町」友枝昭世

▽二月二十二日㈯午後二時始
お話　中西　進
能「鸚鵡小町」杖三段之舞・大槻文蔵

▽三月二十二日㈯午後二時始
お話　馬場あき子
能「関寺小町」梅若玄祥

前売　S席一二、〇〇〇円、A席九七〇〇円、B席六五〇〇円、学生席四八〇〇円

大槻能楽堂　大阪市中央区上町A番7号　電話06・6761・8055、FAX06・6761・3399

武蔵野大学公開講座

12月9日、12日開催

武蔵野大学能楽資料センターは、2013年度公開講座として、十月に「能面・狂言面制作実演」「狂言にみる東國のセミナー」を開催、ひきつづいて十二月に次の二講座を開催する。

▽十二月九日㈪「能楽入門―能を体験してみよう―」講師：武蔵野大学教授・リチャード・エマート、司会進行、同大学准教授・岩城賢太郎。武蔵野キャンパス6号館雪頂講堂。午後二時四十分～午後四時。

▽十二月十二日㈭「能と現代音楽」講師：能謡・能舞　青木涼子、午後二時～午後四時、武蔵野キャンパス一号館一一〇一教室。

聴講無料、予約不要。

問い合わせ　武蔵野大学能楽資料センター（東京都西東京市新町一―一―二〇、一号館3階、電話042・468・9742）

◆よくわかる能にしたい!!◆

スーパー能「世阿弥」

林　伸氏　寄稿

ことしは、世阿弥生誕六五〇年（一三六三年生）に当り、全国各地の能楽堂で世阿弥能の上演が行われてきた。とくに国立能楽堂では、同能楽堂開場三十周年記念の特別企画公演として、四月十九日㈮にスーパー能「世阿弥」が上演され、さらにNHKのEテレビで十月六日㈰放映され、関係者の大きな関心が寄せられている。

この機会に、本紙の読者で、能楽愛好者の林伸氏は、次の一文を本紙に寄せられた。以下その要約である。

〝能の常識を越えた未来能の一石を投じたスーパー能〟、世阿弥生誕六百五十年を期に、併せて国立能楽堂開場三十周年記念の委嘱作品として、世阿弥の波瀾万丈の生涯を綴ったスーパー能が披露された。芸を継承することへの困難と執心。未来への決意が骨子……

私たちも世阿弥の能を通して芸論やら、芸術的且つ思想的な価値についても学ぶこと多く、謡本は「人生の教本」とさえ云われています。

しかし、能の台本は中世文学、中世芸能を土台に作られており、古典語文体にて言葉の理解が難かしく、このままでは五十年先、百年先、能離れの時代が来るのではないかと危惧されていることも事実。そこで世阿弥生誕六五〇年に当る今年、一つの能が誕生しました。それがスーパー能「世阿弥」です。

すべての言葉が現代語で上演されました。役者も地謡もアイ狂言も…地謡座から後座一杯にかけ作物で背景を描き出し、地と囃子方は地謡座後の覗部屋より演奏、スポット照明による舞台効果を高めるなど革新的な能の演出工夫がなされ話題を集めました。果シテ五十年先、百年先、謡本も現代語に移っていくのでしょうか。考えさせられました。

現代語による能「世阿弥」は、（十月六日日曜日）NHKEテレ、午後三時～四時半迄の一時間半ノーカットで放映されました。以下はTV画面より編集いたしました。

平成二十五年九月十八日
国立能楽堂にて収録

能「世阿弥」

国立能楽堂三十周年記念
スーパー能
作　梅原　猛
現代語による脚本作成
演出　梅若六郎玄祥
照明効果・舞台演出

世阿弥　梅若　玄祥
寿椿　味方　玄
元雅　片山九郎右衛門
越智　宝生　欣哉
禅竹　上野　雄三
音阿弥　上野　朝義
将軍の刺客　大槻　裕一
同　川口　晃平
語り手　野村　万作
笛　藤田六郎兵衛
小鼓　大倉源次郎
大鼓　安福　光雄
太鼓　観世　元伯
後見　山崎　正道
角当　直隆
小田切康陽
杉山　隆之
地謡　大槻　文蔵
赤松　禎英
山本　博通
寺沢　幸祐
武富　康之

スーパー能「世阿弥」

あらすじ（演能時間約八十分）

前段

舞台は京都世阿弥の家。世阿弥夫婦は息子元雅に危険が迫っていることに不安を隠し得なかった。世阿弥は能楽界のトップである観世大夫の地位を才能豊かな元雅に継がせようと考えていた。

しかし、時の将軍六代足利義教は世阿弥の甥の音阿弥に継がせようと圧力をかけて来ていた。

そこへ元雅がやって来て、しばらく伊勢に逃れることを打ち明ける。世阿弥夫婦は不安のうちにも息子を見送る。

中段

作者の梅原　猛さん役の語りべ（アイ）が現われ、能への想いを語る。

能の型式の一つである間狂言の場面となる。舞台は中段に入り、野村万作がユーモアを混えて独特の雰囲気を醸し出す。

後段

元雅が将軍の刺客に殺される。能でいう切組で始まる。元雅の死を知らされ絶望のあまり心中を図ろうとする世阿弥夫婦。

そこへ元雅の亡霊が現われ、世阿弥夫婦を慰さめる場面となる。能面を着た亡霊に合せ世阿弥も舞台の中で面をかけて応対する。

（見せ場）舞台の最後の場面において、息子（亡霊）の言葉に力を得た世阿弥は音阿弥と共に能の未来を切り拓く決意を表わす「継承の舞」（世阿弥、元雅、音阿弥の三人舞）を舞い終幕する。

名古屋能楽堂

正月特別公演

平成二十六年一月三日（金）
午後一時開演
名古屋能楽堂

能　翁（観世流）

翁
千歳　久田　勘鷗
三番叟　久田勘吉郎
面箱持　井上松次郎
奥津健太郎

笛　竹市　学
脇鼓　成田　達志
小鼓頭取　曽和　尚靖
脇鼓　古田　知英
大鼓　河村総一郎
後見　梅田　嘉宏
武田　邦弘
狂言後見　野村又三郎
野口　隆行

地謡　吉沢　孝旭
八神　祖父江修一
本田　梅田　邦久
須部　武田　大志
甫　勲

狂言　三本柱（和泉流）

シテ（果報者）　大野　弘之
アド（太郎冠者）　佐藤　融
アド（次郎冠者）　鹿島　俊裕
アド（三郎冠者）　今枝　郁雄

笛　大野　誠
小鼓　後藤嘉津幸
大鼓　河村眞之介
太鼓　加藤　洋輝
後見　松田　高義
野口　隆行

能　高砂（観世流）

前シテ　木守りの老人　清沢　一政
後シテ　住吉明神　松山　幸親
ツレ　木守りの姥　高安　勝久
ワキ　旅の神職　杉江　正樹
ワキツレ　同行の神職　椙元　正樹
ワキツレ　同行の神職　佐藤　友彦
アイ　浦人

笛　大野　誠
小鼓　後藤嘉津幸
大鼓　河村眞之介
太鼓　加藤　洋輝

地謡　吉沢　孝旭
八神　修一　高橋　暸一
本田　武田　祖父江修一
須部　保勲　梅田　邦弘
嘉宏

［有料］
［チケット料金］
前売（指定）五〇〇〇円
（自由）一般四〇〇〇円
学生二〇〇〇円
（自由席のみ当日五〇〇円増）
［前売券取扱］名古屋能楽堂（TEL052・231・0088）
名古屋文化振興事業団（TEL052・249・9387）
栄ブレチケ92（TEL052・953・0777）
チケットぴあ（TEL0570・02・9999／Pコード432・852）

主催　名古屋文化振興事業団（名古屋能楽堂）
（能楽協会名古屋支部）

当地の各流儀・流派・結社・社中の消息を辿る ⑥⓪

拾貳　「藤田昭彦から藤田六郎兵衛へ」

竹尾　邦太郎

⑥「花傳の會」

平成七年十二月十三日　第五回「花傳の會」若手能。於　熱田神宮能楽殿

「能のおはなし」藤田六郎兵衛、一管「鷺」藤田六郎兵衛、舞囃子「猩々乱・双之舞」片山清司・青木道喜・大野誠・柳原冨司忠・白坂信行・井上敬介・梅田邦久（地頭）、能「邯鄲」古橋正邦・松山晃之・飯冨雅介・杉江元・辻本正樹・橋本宰・佐藤融・竹市学・吉阪一郎・守家由訓・前川光長・片山清司（地頭）片山九郎右衛門（後見）。

平成八年六月廿七日　第六回「花傳の會」若手能。於　熱田神宮能楽殿

「能のおはなし」藤田六郎兵衛、舞囃子「融・酌之舞」観世暁夫・大野誠・後藤嘉津幸・河村眞之介・上田慎也・片山清司（地頭）、能「杜若・恋之舞」山本博通・中村弥三郎・竹市学・清水皓祐・河村大・上田慎也・観世暁夫（地頭）山本勝一（後見）。

平成八年八月十七日　第七回「花傳の會」特別公演・笛　秘曲の会。熱田神宮能楽殿

連管「津嶋」一噌庸二（一噌流）杉市和（森田流）藤田六郎兵衛（藤田流）、解説「中之舞」一噌幸弘（一噌流）、松田弘之（森田流）、藤田六郎兵衛、一管「平調之音取」一噌庸二、「雙調之音取」杉市和、「黄渉之音取」藤田六郎兵衛、「盤渉之音取」松田弘之、「一越之音取」一噌幸弘、一調一管「豊後下り端」一噌庸二・観世元伯（太鼓）、一管「筑紫」藤田六郎兵衛、「真之神子神楽」杉市和、「双調神楽」松田弘之、解説「獅子」杉市和、一噌幸弘、藤田六郎兵衛、一管「蚊ノ大軍」一噌幸弘、一調一管「安宅」大倉源次郎（小鼓）藤田六郎兵衛（笛）大槻文蔵（謡）。

番組案内リーフレットに主催・藤田六郎兵衛の次の挨拶がある。

今回の上演曲目は解説二曲を除き、すべて秘曲、秘曲と呼ばれるものです。一管、一調一管の曲は常の能には演奏しない特殊な曲ばかりです。私はかねてよりそれらの曲を一噌・森田の各流の方にお集まりいただき能の笛・三流儀の会を持ちたいと思っておりました。そして皆様方に能の笛の持つ新たな一面を再発見していただきたい、という夢を持っておりました。ようやくこの会でその思いが叶います。

お盆の最中になりますが、なにとぞ一人でも多くの方にご参加いただき「笛の世界」をお楽しみいただきたいと存じます。

平成八年十二月七日　第八回「花傳の會」特別公演（十世・藤田六郎兵衛を偲ぶ）熱田神宮能楽殿。

舞囃子「百万・法楽之舞」梅田邦久・松田弘之・後藤孝一郎・吉田定男・片山清司（地頭）、仕舞三番「通盛」山本順之「江口キリ」片山慶次郎「鵜飼キリ」観世暁夫・一調「花筐」福井啓次郎・観世銕之丞（謡）能「檜垣」片山九郎右衛門・宝生閑・茂山千作・藤田六郎兵衛・大倉源次郎・河村総一郎・観世銕之亟（地頭）片山慶次郎（後見）。

平成八年十二月廿一日　第九回「花傳の會」特別公演（十世・藤田六郎兵衛を偲ぶ）熱田神宮能楽殿。

能「翁・法会之式」観世喜之・観世喜正・井上祐一・佐藤融（面箱）竹市学・後藤孝一郎・柳原冨司忠・福井良治・河村大・梅田邦久（地頭）梅若盛義（後見）、舞囃子「姨捨」山本勝一・鹿取希世・福井啓次郎・筧鉱一・金春国和・武田志房（地頭）、狂言小舞「祐善」野村又三郎・野村小三郎（地頭）、脇語「藤戸」高安勝久、舞囃子「海士」梅若盛義・杉市和・柳原冨司忠・河村真之介・助川龍夫・観世暁夫（地頭）、一調一管「龍田」金春国和・藤田六郎兵衛・観世清和（謡）、能「道成寺・赤頭」観世芳伸・福王茂十郎・福王和幸・山本順三・野村小三郎・井上靖浩・大野誠・後藤嘉津幸・山本哲也・前川光長・観世暁夫（地頭）観世清和（後見）武田志房（鐘後見）大野弘之（鐘吊）。

平成九年八月十六日　第十回「花傳の會」特別公演・秘曲の会「小鼓の世界」。この年、四月三日、「翁」観世清和で名古屋能楽堂開館記念式典があり、以後特に記述が無いとき催能会場は全て名古屋能楽堂。

一調一管「五様闌曲」杉市和（森田流）助川治（観世流）　笛方森田流と太鼓方観世流とによる一調一管で〈下り端〉〈鷺乱〉〈神楽〉〈早笛〉〈獅子〉の五種目を特殊な手配りで組曲ふうに演奏する（近著『能楽大事典』平成廿四年刊より引用。様は葉にも）。一調一管「班女」佃良勝（高安流）藤田六郎兵衛（藤田流）大槻文蔵（観世流）　打楽器一謡一の一調と一管との合奏。謡が入らぬ曲もある。一調「屋島」柳原冨司忠（幸清流）片山清司（観世流）、一調一声「玉鬘」宮増純三（観世流）観世栄夫（観世流）　一調の変形、謡と打楽器は大・小鼓。解説・能の小鼓、各流儀の違い。一調一声「小督」幸正昭（幸清流）梅田邦久（観世流）、一調「松虫」成田達志（幸流）観世暁夫（観世流）、一調一声「三井寺」大倉源次郎（大倉流）大槻文蔵（観世流）。

主催者挨拶　本年は能の小鼓・四流儀の違いをお聞きいただきます。能の世界の小鼓には大倉・観世・幸・幸清の四流儀がございます。皆様が能をご覧になるときにも、一日のうちに二流派、もしくは三流派お聞きになっていらっしゃるのですが、その違いは仲々聞き分けられるものではございません。

今回は特に一調（謡と小鼓のみで能一番のクライマックスを謡い、そして小鼓の一調専用の普段打たない細かな演奏法で表現する）という上演形式により各流儀の特徴がよく現れる曲を選ばせていただきました。

そしてプログラムにあります解説のときには各流儀の道具（小鼓）の扱い方の違い、音色の特徴、また中之舞の同じ部分を同時に演奏いただき皆様に四流儀の違いをお話したいと思っております。プログラムの前半には笛・太鼓の一調一管「五葉闌曲」をお聞きいただきます。これは森田流秘曲で五種の舞の曲を特殊な唱歌（譜）を曲の間に入れ連続している曲の如く演奏いたします。趣の変わった笛の秘曲に太鼓を加えた一調一管の演奏形式でお聞きいただきます。

私の演奏いたします一調一管「班女」はめずらしく大鼓との組み合わせでございます。大鼓は能の楽器のなかで一番手数が少なく、そしてこの「班女」の舞は舞の中でも特に静かな序之舞です。「五葉闌曲」とは違った「静」の世界をお楽しみください。

平成九年八月十七日㈰二時始　第十一回「花傳の會」能・狂言特別公演・不易流行「狂言その世界」

主催者挨拶　「花傳の會」二日目は、不易流行「狂言その世界」と題してお贈りいたします。

茂山様の解説をお読みいただければお分かりいただけるようにこの二曲は新作曲と言える曲でございます。しかし「彦市ばなし」はもはや古典と同じ扱い、いや古典、新作と区別すべき曲ではないように私は思っております。

一般的には能、狂言の世界は何百年前にできた二百曲前後の曲を再演し続けているわけです。しかし、過去に上演された能、狂言の記録をしらべると何千という曲が存在していたのです。最近ではこれらの過去に埋もれている作品の見直し（復曲活動）が盛んに進められています。そしてまた現代の能、狂言として新たに作曲試演もされています。

これは安易に曲を増やそうというのではなく、先人たちが作り諸々の事情で消えていった曲の主題がよりドラマを的確に表現するものであり、現代の人々に共感していただけるものがあれば、という事です。

私はこれらの作品が何回も再演され、磨き上げられることにより能の世界の新たなレパートリーとなることを期待しています。

能の世界は一見すると時代とは関係なく動いているように思われています。しかし、目立った変化はなくても曲の表現に関しては絶えず時代ごとの変化が舞台の上では起こっているのです。

能は伝統保存芸能ではありません。能は生きています。

解説　茂山千之丞「彦市ばなし」

戦後第一次「狂言ブーム」と呼ばれる一時期がありました。能楽の中に埋没してしまっていたかに見える狂言が、一つの演劇形態として再発見された現象に対して、ジャーナリストが付けたものです。その「狂言ブーム」の頃、新作狂言が多く作られ、又屡々上演されました。その大部分は、古典狂言の様式―例えば狂言の文体・構成・衣装等の中へ、新しい主題・物語を盛り込む方法での作品でした。その意味では、新作狂言と言う言葉はまことに適切でした。文字通り新しく作られた「狂言」と言う古典演劇なのです。

ところが、「彦市ばなし」はそうした意味では新作狂言とは言えないと思います。まず戯曲そのものが、新作狂言の場合と違って、狂言として上演される事を予期して書かれたものではありません。木下順二さんが新劇若しくは新劇的な演出による舞台を想定して書き下ろされた現代劇です。したがって用語一つとってみても、「…でござる」と言う文体ではなくて肥後地方に今も用いられている「…バッテン」と言う話し言葉です。又、決して能舞台や狂言の古典的な演出・演技術を予想して書かれてはいません。この、何処から見ても現代戯曲の一つである台本を、古典演劇狂言の手法を用いて舞台化した現代劇が、狂言「彦市ばなし」だと言うことが出来るでしょう。

「彦市ばなし」は熊本県八代を中心に語り継がれて来た、嘘つきの名人彦一――同地方ではヒコシヤンと呼んでいます――を主人公とする複数の物語を素材として作られた所謂「木下民話劇」の代表作品です。此の土の匂いの豊かな、ドライでユーモラスな戯曲を、是非我々狂言役者が舞台にかけたい……そうした思いにかられた私が、演出を武智鉄二さんにお願いして初めて上演したのは一九五五年十月で、あれからもう四十年以上もたつてしまいました。その初演の舞台は京都の大江能楽堂、配役は彦市・茂山千之丞、殿さま・茂山千作（当時七五三）天狗の子・野村万作のトリオで上演しました。

『室町歌謡組曲』について　茂山千之丞

室町歌謡という言葉は近年になって使われ出したもので、一般には室町時代を含む中世の民間歌謡を「中世歌謡」と称されています。それらは、京都を中心にした畿内の町衆達によって歌われ出し、流行していった歌謡――普通「室町小唄」と呼ばれているもので、作者も作曲者も分かりません。又、都会を背景にしていた点で、農民等の中で歌われていた鄙の歌謡である民謡と異なります。

そうした民間の流行り歌が、中世――特に室町時代に形作られてきた狂言の中に、色々な形で採り入れられ、現代まで伝承されてきています。そして、狂言が生きたセリフによって「口写し」で伝承されてきたことから、その歌謡も室町期に実際に歌われていたものがほぼそのままの形で伝わってきていると推定されるのです。それらはたしかに稚拙な面はありますが、その直截な歌詞や節付けには、中世を力一杯生き抜いた町衆達のドライでダイナミックなエネルギーを感じさせるものがあります。

狂言の中に散り散りに採り入れられているこうした「室町歌謡」を、一つのテーマ――例えば（遊び）など――よって何曲かをピックアップし、さらに中世歌謡を筆録した歌謡集「閑吟集」、「崇安小唄集」等から選出した歌詞に狂言の節をつけたものを加えて、メドレーとして編成したものが『室町歌謡組曲』です。一九七九年三月、私の構成・演出で京都府文化芸術会館で初演しました。この時はコンガと歌舞伎下座　楽の笛の伴奏によりましたが、その後今までに二十数回上演しています。パーカッションやシンセサイザーを使ったりもしました。近年は能の四拍子による上演が多くなっています。

素囃子「男舞・瀧流」藤田六郎兵衛・吉阪一郎・佃良勝、狂言（木下順二作）「彦市ばなし」茂山千作（殿様）茂山千五郎（彦市）野村小三郎（天狗の子）、「室町歌謡組曲」茂山七五三・茂山千三郎・丸石やすし・松本薫・茂山正邦・茂山茂・茂山千五郎・藤田六郎兵衛・吉阪一郎・佃良勝・中田弘美。

平成九年十月十一日㈯六時半始　第十二回「花傳の會」特別公演・大倉流十六世宗家大倉源次郎・藤田流十一世宗家藤田六郎兵衛共同プロデュース蝋燭能「鵜羽」。

番組に先立ち、ゲストに観世栄夫を迎え藤田六郎兵衛と大倉源次郎の対談「能の世界に生まれて・能の現在とこれから」がある。

能「鵜羽」大槻文蔵（海女ノチ豊玉姫）赤松禎友（海女）福王茂十郎（恵心僧都）茂山千作（鱗ノ精）茂山千三郎・松本薫・茂山宗彦・藤田六郎兵衛・大倉源次郎・河村眞之介・上田悟・観世暁夫（地頭）観世栄夫（後見）。

挨拶　大倉源次郎　人には、様々な思い入れやこだわりがあります。

藤田六郎兵衛さんも小生も、常々会う立場からですが、現代に通じる能を考え、共に演じていると考えています。

今回、花傳の會を共同プロデュースさせていただくことにより、能とそれを取り巻く様々な問題を二人の立場から整理をする事ができると期待しています。

――以下「挨拶」次号へ　つづく――

◆仲秋の舞台から◆

「大阪梅猶会・平成廿五年度第三回公演」「名古屋観世会定例公演能」

竹尾邦太郎

「熊野」

折柄花の季節、宗盛（ワキ知登）の寵妾・熊野（シテ善久）のもと、故郷から老母の文をもたらす侍女・朝顔（ツレ香寿子）、受けとるシテが「あら嬉しや」と静かに目を通すうち、「あら笑止や、この御文のやうも頼み少う見えて候」と老母の病篤しを慨嘆するをツレが受け「さやうに御入り候」と相槌打つ言葉を抜き、直ぐ「この上は朝顔をも連れて参り」と逸る気持。これまでは帰省の暇願いを一顧だにされなかつたを、此の度は文を頼りにツレを伴い文を掲げ舞台へ。

文之段は少々重苦しく湿っぽい印象も当然か。へたゞ返す〴〵も命の内に、とワキへ視線をやるところには帰省つよく訴えかける目ぢから。へそもこの歌と申すは、と地（善高・光之助・基徳ら）が謡い継ぐまでシテは文を見詰め遣る方無いその胸中、切ない。返シ句に文畳み地のうちに後見がひく。へ御暇を、とワキへアシラフと、「（老母の労りはさる事）なれども」の冷たいワキの言葉に直ルのも、その先きくまでも無しの鬱積の心。しかし、老母への思いに〜御言葉を返せば、と再びワキへアシラヒ語気やゝ強めるが、へたゞ御暇を、とシヲルところには諦念。心重く乗る花見車の中、へ其路とても東山、と左ウケ、へ其方の懐かしや、とシヲリつゝ、直ルところ、尾を引く望郷の念。へ路中に路多うして道窮りなし、の辺り地が少々怪しかったが春の洛中の景を描く道行は柔らかに流麗、往き交うへ老若男女貴賤都鄙、を右ウケ暫し立ち尽すかに眺める風情に、籠の鳥ならぬ叶わぬ羨望を見る。車降り、へ佛の御前に、と下居合掌する急かされると侍る酒宴の場。

舞クセは〜深き情を人や知る、で酒を酌む型からワキへ酌に立つと舞を所望するワキの、空気が読めない頓着の無さに失望、居た堪れずシヲリの侭二ノ松へ走るシテの胸中は如何ばかりか。憂愁の思いの舞あと、雨に散る花にへあら心なの村雨やな、と踏む四ツ拍子には老母の命運への惧れ、ぢり〴〵した焦燥をみせ、短冊之段では、取り出した短冊を老母への思いを凝らすかに見詰めると、一首を一気に書き下ろす。へ馴れし東の花や散るらん、の情趣、流石のワキもシテを解放することに。ワキの班気を恐れ忽々に発つキリ、へ花を見捨つる雁の、辺りの詩趣も中々だった。

一体に端正で品の良い舞台、控え目で慎ましやかなツレ、恣意に嫌味のないワキも結構だった。囃子は啓三・敦史・義雄。（1時間30分）

「口真似」

到来の酒に好ましい相手欲しさに主（アド忠一郎）、太郎冠者（シテ隆平）に命じて連れて来られたは、主に近付きは無いので、と渋っていた何茉（アド良介）。一目見て名うての酔狂人と知る主、追い返すと言う太郎冠者を制止、適当にあしらって返すについては「汝のやうな腰の高い者が務まらうか」と危惧、「何事もそれがしが言ふ様する様にせい」と釘を刺し、先づ「太郎冠者、お盆を出せ」と命じれば、「太郎冠者、お盆を出せ」と復唱、「お盆を出せとは己れが事ぢや」と主が怒れば、またその通りに復唱し、一事が万事方量（際限）が無い。腐揚な物腰の主を困惑させながら、おかしいとも思わず素直に、生真面目に応対する太郎冠者が醸す諧謔味、普段の師弟父子の関係も思われてケレンの無い、騒がしくない舞台が好ましい。（19分）

名古屋観世会定例公演能
「半蔀」
祖父江修一
（杉浦賢次氏撮影）

「鉄輪」

貴船神社の社人（アヒ隆司、洞烏帽子・敷斗目着付・括袴・縷水衣の姿）、御霊夢を蒙り、丑ノ刻参りの女が来たらば御夢想の様を伝えよの託宜に待つところ、現れる男を呪う女（シテ梅若修一）。へ月遅き夜の、と右ウケ鞍馬川を眺める風情に泥眼の面の妖気、着セリフに脇正で床几に、笠を脱ぐとアヒが声をかけ問答に。鬼になる願望叶えよう、の子細を伝えるアヒ、沈んだ空気の中、歯切れよく明晰な語調が御夢想の現実味を。他人事では、と否定のシテ、初同（猶義・晃一・基徳ら）へ言ふより早く色かはり、と余所見にも変貌の怖さは、へ緑の髪は空さまに、と左手真直ぐ上げる怒髪天を衝く凄み。へ立つや（黒蠱の）、とすくと立ち、へ雨降り風と、キツと面切れば妬心爆発、笠捨てへ思ひ知らせん、と走込ミの中入鮮やか。

代って男（ワキツレ正彦）、夢見の悪さに陰陽師・清明（ワキ知登、小立烏帽子・厚板着付。白大口・縷狩衣の姿）を訪ね、加持を請い退くと正先に祭壇が整いノット。壇に上るワキ、御幣を取りへいで〴〵転じ返へんとて、祈禱を捧げ、へ雨降り風落ちの荒天ふり払うかに〜御幣もざざめき、と力強く幣を祓い、へ恐ろしや、と壇を降り笛前に下居、幣をワキ後見に。

出端（敦・賀光・由訓・弘美）で女ノ生霊（後シテ修一）一ノ松へ、祭壇を見込みへそれ花は、と因果応報の世の習いを述べるサシから地と掛合に。生霊と化した己が身、男への憤怒に駆られ、へ赤き鬼となって、と面ヲ切ルと運ビへ臥したる男の、と壇上に片膝つき、クドキ。へあら恨めしや、と打杖で身を支えるかに両手を掛け、形代睨め付けへ捨てられて、と、がっくり安座、面そむけるかに右ウケて地の返シ句にシヲル辺り、愛憎ただならぬ感情の起伏鮮やかにみせる。へ夫を喞ち、と立ち、壇降りるとへ命は今宵ぞ、と打杖で形代を指ス無気味は、へ思ひに沈む恨みの数、と踏む三ツ拍子の悲憤に。へいで〴〵命を取らん、と再び壇上は、打杖振りかぶり髪に手を絡巻きへ打つや宇津の山の、と激しく打つと、更にへ思ひ知れ、と強く打ち据える怒気。

キリはワキの通力に出現する三十番神に追い立てられるところ。手首の力しなやかに打杖扱いの力強さ。へ時節を待つべし、と打杖捨て、へ先づ此の度は、と懐中から扇をとり、へ（目に見えぬ鬼とぞ）なりにける、と片膝扇で面を隠し留メ。終始力の籠る切レのよい若々しい好舞台だった。（1時間2分・9月7日・大阪能楽会館・大阪梅猶会）

名古屋観世会定例公演能「二人大名」
左より　野村又三郎、井上松次郎、奥津健太郎

名古屋観世会定例公演能「二人大名」
左より　奥津健太郎、井上松次郎、野村又三郎　（杉浦賢次氏撮影）

「半蔀」

紫野雲林院の僧（ワキ元）、花の供養を行ないワキ座に退くと大小アシラヒ（総一郎・孝一郎）で遅ればせのように楚々とした佇まいの里女（実は夕顔ノ上ノ霊シテ祖父江修一）が一ノ松に。へ手に取れば、と謡い出し、へ三世の佛に花奉る、にワキはその白き花に〜如何なる花、と質せば、へ愚かのお僧の仰せやな、とシテ、察しがつかないのを憐れむか。へ名は人めきて、とワキに近付く心に運ビ舞台へ、へ夕顔の花にて候、と教えればシテに興味をみせるワキ、掛合に素姓を問うがシテは〜五条辺と夕顔の、と仄めかし、へ空目せし間に、とや〜右ウケ夢の彼方を茫っと眺めやるかに中入のところ、嫋々たる送り笛（学）と相俟って余情津々。

代って所ノ者（アヒ健太郎）、花の供養を営むワキに謝意を示し、乞われて五条辺りの光源氏と夕顔ノ上との子細を神妙に語って退くと後場。

半蔀屋は常座、青の瓢箪に白い花。へ草の半蔀押し上げて、と静かに立ち出づるシテの、緋大口に白の長絹の姿は気品に溢れまさしく夕顔ノ上（写真）。光源氏との逸話を述べるクセ、へあの花折れと、扇で半蔀屋を指シ、大小前に行き扇を開き、両手に高く捧げ、へこの花を折りて参らする、と出て、上ゲ端へ源氏つく〴〵と、両手を普通の高さに下ろし沁々扇面に見入るところに感慨を。へ折々尋ね寄るならば、とハネ扇から扇右に取り両袖返スところには行く末頼りになろう、と抱擁する心か。序之舞の中、袖被キ退つて半蔀の下へ入るところも美しく、キリは正面から半蔀屋に入り、地一杯（そのまゝ夢とぞ）なりにける、と通り抜け留メ。堅実几帳面な舞台だった。（1時間26分）

名古屋観世会定例公演能
「殺生石・白頭」観世銕之丞
（杉浦賢次氏撮影）

名古屋観世会定例公演能
「殺生石・白頭」観世銕之丞

「二人大名」

大名・甲（シテ又三郎）、大名・乙（アド健太郎）を語らい出掛けたはよいが自身で太刀を持つのは人目に憚るか、行きずりの通行人（アド靖浩）を強引に同道させ、勝手な頼み事を先方の承諾も得ぬまゝ、頭を下げ一礼、断られゝば太刀に物を言わせる無体。太刀持たされた通行人、唯々諾々従えば、傲慢な大名二人して高笑いに我慢の限界の通行人、太刀はこちらの物とばかり立場の逆転に大名二人を脅し、先づ脇差を取り上げ、烏帽子が鶏のトサカに似るとて鶏の蹴合（写真）をさせ、小袖上下を取り上げると犬の噛み合いを、更には小歌掛りに都に流行の起き上がり小法師の真似（写真）をさせて嘲弄する。様々になぶられるうち、単細胞の大名の無邪気は次第に興がつて乗ってくるところ、生気撥剌おかしい。演者自身面白がつて演るのが狂言の粋。（26分）

「殺生石・白頭」

玄翁道人（ワキ常好）錦襴の沙門帽子の威風は、伴う能力（アヒ高義）が石の上を通る飛ぶ鳥が其処で落下するという超常現象に驚くのにも騒がず、平然と応対するところに、呼掛で「なうその石の辺へ（写真）立ち寄らせ給ひそ」と、妖美な面（泥眼）の里女（シテ銕之丞）が出る。シテ・ワキの問答・掛合に明かされる妖狐玉藻前の事蹟。クセ中、へ玉藻化生を本の身に、と背筋ぐつと伸ばしワキにアシラフところには事蹟の一端納得させんの気迫が。「さて〴〵かやうに委しく語り給ふ御身は」と素姓問われてシテ、直ルと「今は何をか包むべき」と低く強い語調に凄味を。へあら恥かしや我が姿、と居立ッてワキにアシラフと、へ立ち帰り、の地（邦久・邦弘・正邦ら）に立ち、へ懺悔の姿現さんと、寸刻、一思案あるかに佇立のところ無気味。へ恐れ給はで待ち給へ、と三ノ松に走り、へ石に隠れ失せにけり、と入る。シテを不審するアヒに、ワキが玉藻前の事を尋ねれば八分余の居語に。「小賢しくも語り候ものかな」とワキに言わしめる長口舌が立派。「急ぎ払子を」の ワキの命に、「然らば払子を」とアヒが届けて切戸に退くと後場。

へ急々に去れ〴〵、とワキが払子を捨てゝ常座へ出、片膝つき数珠を揉みへ摂取せよ、と祈りワキ座に戻ると出端（誠・嘉津幸・眞之介・洋輝）。へ石に精あり、と幕内で謡い出し、へ（石魂忽ち現れ）出でたり、と走り出る妖狐ノ精（後シテ銕之丞）正中右の床几にかゝる。白頭・輪冠に九尾の狐を象徴する立物・面は玉藻前をイメージする創作面か、白地金鱗箔着付・金地紺山形文半切・赤地三ツ巴鱗散シ文舞衣壷折の妖艶な姿。玉藻前を名乗り、へ玉体に近づき奉れば、とワキにアシラフ妖気は、へ玉藻に御幣を持たせつゝ、と扇を幣に擬して持ち（写真）、へやがて五体を苦しめてと足拍子踏むところには苦痛を逃れんの足掻き。苦痛の因をなす幣を奪いへ取りて飛ぶ空の、とサシ廻シ、へ雲居を、と床几立ちへ隠れ棲む、と下りて袖被キ下居は潜伏の姿。その後勅使立つて、と三浦の介と上総の介両人に勅命、捜索が始まり、犬追物の場に。

へ草を分つて、へ身を何と那須野の原に、と悪怯れる風もなく現わす姿（写真）の迫力は、へ追っつまくっつ、と射構え（写真）、射伏せられるところなど型の美しさ、技の切レ味、見事。キリはへ約束堅き石となつて、と二ノ松へ走り、踞り石となると、へ鬼神の姿は失せにけり、と立ち袖返シ留メ、静かに幕へ入る。装束付からみても何か趣の違う別の能を見ている気がしないでも無かったが、気力充実の魅力充分な舞台だった。（1時間5分・9月16日・名古屋観世会定例公演能）

名古屋観世会定例公演能
「殺生石・白頭」観世銕之丞

「殺生石・白頭」

能樂の友

発行　能　楽　の　友　社
名古屋市千種区千種2丁目18－18
（郵便番号　464-0858）
電　話（052）731－7984
ＦＡＸ（052）733－2837
振替口座　00800－6－36393

購読料　1年　1100円
郵送の場合　1年　1800円
一　部　100円

ＮＨＫ放送予定（平成26年1月）

◉新春謡曲狂言（10：00～11：00）
◈1月1日㈭　番囃子「神楽式」（金剛流）　翁：金剛　龍謹
　番囃子「岩　船」（金剛流）シテ：金剛　永謹
◈1月2日㈭　狂　言「夷毘沙門」（和泉流）　野村　万蔵
　「岡太夫」（大蔵流）　山本東次郎
◈1月3日㈮　舞囃子「熊　野」（観世流）　梅若万三郎
◉新春能狂言（Ｅテレ）
1月3日㈮（7：10～8：10）　能「高　砂」（宝生流）
　前シテ：大坪喜美雄
　後シテ：宝生　和英
◉ＦＭ能楽鑑賞（6：00～6：55）
1月5日㈰「鵜　祭」（金春流）　金春　安明
1月12日㈰「羽　衣」（宝生流）　高橋　章
1月19日㈰「鸚鵡小町」（観世流）　片山　幽雪
1月26日㈰「葵　上」（観世流）　岡　久広

演能カレンダー

◆名古屋能楽堂◆

（TEL 052－231－0088）（能楽関係のみ）

［26年1月］
2日㈭　名古屋能楽堂新春謡初め　（無料・要整理券）（番組②面）
3日㈮　名古屋能楽堂
　正月特別公演　（番組①面）（有料）
11日㈯　第58回学生能・狂言の会　（無料）
13日（月・祝）　名古屋清韻会　（番組②面）（無料）
25日㈯　第15回万作を観る会　（有料）
26日㈰　名古屋宝生会定式能　（番組②面）（有料）

観世寿夫記念法政大学能楽賞

国川　純氏　高桑いづみ氏　受賞

法政大学（増田壽男総長）は、一九七九年（昭和五四年）に「観世寿夫記念法政大学能楽賞」を設定し、すでに三十四回の贈呈を重ねているが、平成二十五年も各方面の識者の推薦による候補者について、選考委員（福田好朗法政大学国際学術支援本部担当常務理事・徳安彰法政大学法人部担当常務理事・みなもとごろう・松本雍・西野春雄・観世銕之丞・宮本圭造・山中玲子）が慎重に審議した結果、第三十五回の受賞者を次のように決定した。

◎国川　純氏
（くにかわ　じゅん）
［贈呈理由］安福春雄氏の薫陶を受けた氏は、師匠譲りの気迫あふれる芸を基本としつつ、堅実な技に裏打ちされた緩急自在の演奏によって、独自の気品ある芸風を確立している。曲趣に相応しい掛け声と調子には、調和のとれた安定感があり、囃子方の要として数々の舞台を成功に導いている。近年は特に〈檜垣〉（井筒）などで優れた成果を見せ、その芸の円熟を強く印象づけた。

◎高桑　いづみ氏
（たかくわ　いづみ）
［贈呈理由］多年にわたって能楽の音楽的研究を重ねてきた氏は謡や囃子の歴史的変遷を音楽面から明らかにする様々な業績によって、能楽研究に新境地を切り開いてきた。近年は鼓胴・能管といった古楽器研究でも新たな成果を挙げるなど、あらゆる分野で能楽の音楽的研究を牽引する活動を見せている。その成果は、世阿弥時代の謡物の復元などの形で、実演の場とも深くつながっており、研究の社会への還元にも大きな成果を挙げている。

秋の叙勲

旭日小綬章　大槻文蔵氏

平成二十五年秋の叙勲で発表され、能楽界からは、シテ方観世流で、重要無形文化財保持者（総合指定）の大槻文蔵氏が芸術文化功労で旭日小綬章を受賞した。

［大槻文蔵氏の略歴］　昭和十七年生。大槻秀夫氏の長男。父および祖父の大槻十三、観世寿夫、八世観世銕之亟に師事。昭和二十三年「鞍馬天狗」で初舞台。初シテは二十五年「猩々」。以後「鷺」「道成寺」「卒都婆小町」「檜垣」「関守小町」「姨捨」などを披演。復曲や実験的上演にも積極的に取り組み、優れた成果を示している。

平成十年文化庁芸術祭優秀賞受賞、十二年芸術選奨文部大臣賞、十四年紫綬褒章受章。大槻能楽堂理事長、能楽協会常務理事、大阪能楽養成会副会長などを歴任。

豊田市能楽堂新春能

1月13日「独翁」「小鍛冶」「戎毘沙門」

豊田市能楽堂は、平成二十六年一月十三日（月・祝）「新春能」を上演する。開演午後二時。番組は次のとおり。

「独翁」　翁・山階彌右衛門、地謡・観世芳伸、久田勘鶴、清水義也、武田大志
狂言（和泉流）「戎毘沙門」シテ野村又三郎、アド野口隆行、奥津健太郎
能（観世流）「小鍛冶」　前シテ・後シテ　観世喜正、ワキ福王和幸、ワキツレ喜多雅人、アイ野村又三郎

入場料　正面席六千円、脇・中正面席四千円
チケット販売＝豊田市コンサートホール、能楽堂事務局TEL0565・35・8200ほか

催花賞

喜多流　大島能楽堂

法政大学は、服部康治氏からの観世新九郎家文庫受贈を記念して、1988（昭和63）年4月に「服部記念法政大学能楽振興基金」を設定し、同基金に基づく事業の一つとして、能楽三役の功労者及び能楽の普及・発展に貢献の大きい個人・団体を顕彰する「催花賞」を設けた。観世新九郎家伝来の「催花」の額に基づく名称である。

各方面の識者により推薦された候補者について、法政大学能楽研究所と能楽賞選考委員とが慎重に選考した結果、受賞者を下記のように決定した。

◎喜多流大島能楽堂（きたりゅうおおしまのうがくどう）
［贈呈理由］
大正三年に建設された大島能舞台を前身に持つ喜多流大島能楽堂は、通算二百三十五回に及ぶ定期能を行い、質の高い能・狂言の催しを長年にわたって地域に提供してきた。地元の伝承に取材した新作能や、英語能の制作など、能楽の新たな可能性を探る試みに意欲的に取り組むとともに、小学生を対象とした能楽体験学習を長年にわたって行うなど、地域に密着した普及活動にめざましい成果を挙げていることも高く評価される。

演能案内

名古屋能楽堂

新春謡初め

平成二十六年一月二日（木）
午後一時～二時半（開場午後零時半）
名古屋能楽堂

連吟　四海波（観世流）　久田　勘鶴ほか
舞囃子　高砂（金剛流）　鈴村　昌美
舞囃子　猩々（観世流）　梅田　邦久
　大鼓　河村眞之介　太鼓　鬼頭　義命
　小鼓　船戸　昭弘　笛　大野　誠
入場無料（要整理券）
※整理券は十二月十一日（水）午前十時より名古屋能楽堂及び名古屋市文化振興事業団チケットガイド（ナディアパーク八階、平日午前九時から午後五時まで）で配布します。（お一人様二枚まで）
問合せ　名古屋能楽堂
　TEL〇五二－二三一－〇〇八八
　名古屋市中区三の丸一－一－一（名古屋城正面前）

名古屋能楽堂　正月特別公演

平成二十六年一月三日（金）
午後一時開演
名古屋能楽堂

能　翁（観世流）
　翁　千歳　三番叟　面箱持　久田　勘鶴
　笛　脇鼓　小鼓頭取　脇鼓　竹市　学　成田　達志　曽和　尚靖　古田　知英　河村総一郎
狂言　三本柱（和泉流）
　シテ　アド　アド　アド　大野　弘之　佐藤　融　鹿島　俊裕　今枝　郁雄
　地謡　吉沢　孝旭　八神　高橋　瞭一　本田　祖父江修一　須部　梅田　邦久　甫　武田　勲　大志
能　高砂（観世流）
　前シテ　木守りの老人　後シテ　住吉明神　ツレ　木守りの姥　ワキ　旅の神職　ワキツレ　同行の神職　ワキツレ　同行の神職　アイ　浦人　清沢　一政　松山　幸親　高安　勝久　杉江　正樹　椙元　友彦　佐藤　誠
　笛　小鼓　大鼓　太鼓　大野　誠　後藤嘉津幸　河村眞之介　加藤　洋輝
　地謡　吉沢　孝旭　八神　高橋　瞭一　本田　祖父江修一　須部　武田　邦弘　梅田　嘉宏　保　勲
舞囃子　猩々（観世流）　梅田　邦久
　大鼓　河村眞之介　太鼓　鬼頭　義命　小鼓　船戸　昭弘　笛　大野　誠

［有料］
［チケット料金］
前売（指定）五〇〇〇円
（自由）一般四〇〇〇円
　学生二〇〇〇円
（自由席のみ当日五〇〇円増）
［前売券取扱］名古屋能楽堂（TEL052・231・0088）
名古屋文化振興事業団（TEL052・249・9387）
栄プレチケ92（TEL052・953・0777）
チケットぴあ（TEL0570・02・9999／Pコード432・852）

主催　名古屋文化振興事業団（名古屋能楽堂）
（能楽協会名古屋支部）

法政大学能楽賞受賞者の経歴

◎国川　純氏

［主な経歴］

高安流大鼓方。1948（昭和23）年7月27日、東京に生まれる。小学4年の頃から謡曲愛好家の叔父に観世流の謡を習い、64年より中森晶三に師事して謡と仕舞の習得に努める。翌65年に故安福春雄に入門。66年、舞囃子〈桜川〉にて初舞台。68年に〈熊坂〉（シテ武田宗和）で初能を勤める。以後、大阪能楽鑑賞会での〈錦木〉（シテ観世寿夫）、繭の会での「野守」（シテ浅見真州、地頭観世寿夫）など、観世寿夫とも多くの舞台で共演。71年〈猩々乱〉、74年〈翁〉、78年〈道成寺〉、87年〈卒都婆小町〉、98年〈姨捨〉、2006年〈鸚鵡小町〉、09年〈檜垣〉を披く。72年の喜多流アメリカ公演、90年の銕仙会イタリア公演、2012年の能楽協会アルジェリア・フランス公演、東京芸術大学イギリス公演など、海外公演にも多数参加。新作能〈晶子みだれ髪〉（光の素足）の初演、〈常陸帯〉の復曲初演など、新作能・復曲能への出演も多い。最近は、能楽界の若い人達が結成した東日本大震災支援能「息吹の会」に実行委員補佐として加わり、義援能を積極的に行っている。重要無形文化財総合指定保持者。日本能楽会会員。公益社団法人日本能楽協会理事。東京芸術大学邦楽科非常勤講師。国立能楽堂研修講師。

◎高桑　いづみ氏

［主な経歴］

東京文化財研究所無形文化遺産部無形文化財研究室長。1956（昭和31）年1月9日生まれ。専攻テーマは能を中心とした日本音楽史。1978年東京芸術大学音楽学部楽理科卒業。1982年東京芸術大学大学院音楽研究科修士課程修了。東京芸術大学在学中に横道萬里雄氏の指導を受ける。東京国立文化財研究所芸能部調査員、国立音楽大学・東京音楽大学非常勤講師を経て、1982年東京国立文化財研究所芸能部研究員。2002年に早稲田大学大学院文学研究科より博士号（文学）授与。2003年に著書『能の囃子と演出』（音楽之友社）を出版。同年、東洋音楽学会第21回田邊尚雄賞受賞。2002年に早稲田大学・横浜能楽堂共催「秀吉の見た卒都婆小町」で桃山時代の謡の復元を手がけるほか、2013年には能楽学会大会で世阿弥作〈四季祝言〉（敷島）の復元に携わるなど、実践に基づきながら幅広く能の音楽を研究している。近年は鼓胴や能管などの楽器の調査にも精力的に取り組む。NHK「日本の伝統芸能入門」、FM「能の音楽」への出演のほか、『岩波講座　能・狂言　能楽図説』（1992年　岩波書店）『日本の音の文化』（第一書房）『日本の伝統芸能講座　音楽』（企画・編集　国立劇場2008年　淡交社）などの編著書がある。

催花賞受賞

◎喜多流　大島能楽堂

［主な活動履歴］

喜多流大島家所有の能楽堂。1914（大正3）年に大島寿太郎によって福山の新馬場（現・福山市霞町）に創建された大島能舞台を前身に持つ。福山空襲で同舞台は焼失したが、戦後まもない1948（昭和23）年、大島久見により舞台が再建、さらに1971（昭和46）年になって現在の能楽堂が新たに建設された。三階建てのビルの中にある能舞台は当時としては珍しく、舞台披きには十五世喜多実・後藤得三らが来演した。1958（昭和33）年に始まった定期公演は、年に4、5回のペースで行われ、2013年12月公演で通算236回を数える。地域の伝統や文芸を素材とした能や小謡の新作など、地元に根差した活動にも精力的に取り組んでおり、1917（大正6）年に大島寿太郎が作詞、自らシテを勤めた〈鵜浦〉、2004年大島能楽堂で上演された〈鵜のむろの木〉（作・帆足正規、節付型付・大島政允）などを制作。この他、同能楽堂が関わった企画として、英語能（PAGODA）の制作及び同曲によるヨーロッパ三ヵ国と北京・香港での海外公演がある。広島・岡山県を中心とする学校現場での能楽教育にも長年にわたって取り組んでおり、年間20校ほどの学校で能楽に関する教育を実施。1914年の大島能舞台の舞台披きから数えて百年目にあたる本年12月には、大島能舞台創建百周年記念能を開催する。現在は、大島政允、大島衣恵、大島輝久が中心となって、様々な演能普及活動を行っている。

観世流　橋岡会渡欧公演

オランダ、オーストリアで

二ツ折番組の表紙

九世橋岡久太郎は、在ウィーン国際機関日本政府代表部、在オーストリア日本大使館、ウィーン世界美術館より能公演の招請を受け十一月初旬、彼地で「猩々」を舞い、また、これに先立ちオランダ・ライデン大学にて在オランダ蘭日協会五十五周年記念式典で祝能「高砂」を勤め、民間外交の実をあげた。一行はシテ方を橋岡久太郎・坪内　宏・橋岡伸明、囃子方は成田寛人・森　貴史・内田輝幸・大川典良。

在オーストリア日本大使館主催公演王宮の世界博物館にて

名古屋清韻会

平成二十六年一月十三日（月・祝）
午前十一時始
名古屋能楽堂

素謡　夕顔　安藤美奈子　古橋千津恵
地謡　梶原恵美子　岩田正子　古井佐季　伊藤るり子　佐藤加代子

素謡　藤戸　佐藤尚雄
仕舞　花筐　谷口寛子　佐藤加代子

三老女の内
素謡　檜垣　篠田幸子　宝生欣哉
仕舞　鸚鵡小町　渡辺節子
独吟　笠取　古井佐季

三老女の内
素謡　姨捨　鬼頭貴代子　大槻文蔵
能　羽衣　杉浦壽康　宝生欣哉　河村大　後藤嘉津幸　加藤洋輝　藤田六郎兵衛
和合之舞

舞囃子　遊行柳　佐久間美親　河村総一郎　船戸昭弘　加藤洋輝　藤田六郎兵衛
山姥　立廻り　加藤千一　河村大　船戸昭弘　加藤洋輝　藤田六郎兵衛
船弁慶　重キ前後之替　福間克彦　河村大　船戸昭弘　加藤洋輝　藤田六郎兵衛

仕舞　江島　大槻裕一
老松　大槻文蔵

終了予定五時

［御来場歓迎］

主催　大槻清韻会

新春能面展

名古屋鶴舞図書館で　1月5日～2月2日

平成二十六年（第二十二回）「新春能面展」は、新春一月五日（日）から二月二日（日）まで名古屋市鶴舞中央図書館一階コーナー（昭和区鶴舞一―一―一五五）で催される。

開催時間は火～金・午前九時半～午後八時。土・日・祝午前九時半から午後五時（展示初日は午前十一時開館）、休館日一月十四日（火）一月十七日（金）毎週月曜日。但し一月十三日・成人の日は開館。

出展は能面作品十九面、能舞台写真一点（展示の能面を使用した舞台写真）能絵計十五点。

出展者　能面研究会・面紹社社中十名　保田紹雲、水野観雲、岩田刻雲、久保暁雲、山崎周雲、一色青雲、金入慧雲、漆畑健治、田崎未知、高橋純子

責任者　愛知県海部郡大治町花常東江端39番地　代表　保田紹雲（TEL052・441・1538）

名古屋宝生会定式能（第158期）

平成二十六年一月二十六日（日）
午後一時始
名古屋能楽堂

番組

能　高砂　當山淳司　内藤飛能　橋本雅介　宰　飯冨雅介　椙元正樹　河村眞之介　船戸昭弘　鬼頭大野　義命　誠
間　野村又三郎
後見　竹内澄子　玉井博祐　地謡　清水達郎　真野久尚人　森下光　衣斐和久荘太郎　佐藤正宜　辰巳大二郎　耕司

狂言　清水　シテ　鹿島俊裕　アド　佐藤友彦
後見　佐藤融

仕舞　小塩　クセ　竹内澄子　玉井博祐　地謡　金井雄資　衣斐正宜　佐藤耕司
三山　花見片桐遵　花見片桐　花見尾澤征哉　花見内山美希　花見和久八重子　牛若片桐賢　花見中村優文

能　鞍馬天狗　白頭　飯冨雅介　橋本叡　河村総一郎　後藤嘉津幸　加藤洋輝　藤田六郎兵衛
間　井上松次郎　今枝郁雄
後見　衣斐正宜　辰巳大二郎　衣斐愛　地謡　杉浦敏二　鈴木久仁七　竹内孝成　平田正文　内藤飛能　金井雄資　和久荘太郎　當山淳司

附祝言

終了予定　四時半頃

正会員券　一八、〇〇〇円（年間通用4枚綴り）
（入場券料）鑑賞券　五千円
学生券　二千円
鑑賞券は芸文、栄プレチケ、名古屋文化振興事業団で取扱い　主催　名古屋宝生会
名古屋市昭和区御器所3―23―19―802
TEL/FAX　052・882・5600
衣斐正宜方

平成26年度　梅猶会大阪定期公演

梅猶会の平成二十六年度大阪定期能楽公演の予定番組次の通り。

▽第一回、一月十九日(日)
「神歌」梅若猶義　能「東北」井戸和男、狂言「棒縛」善竹隆司、能「山姥」梅若善久、ほか仕舞・各回とも午後一時開演、会場・大阪能楽会館

▽第二回、六月七日(土)
能「邯鄲」立花香寿子、狂言「清水」、能「葵上」空之祈・梅若基徳、ほか仕舞

第三回　九月六日(土)
能「吉野天人」池内光之助、狂言「苞山伏」小笠原匡、能「項羽」井戸良祐、ほか仕舞、研究能「経正」小川晴子

▽第四回　十二月一日(日)
舞囃子「砧」梅若善高、狂言「酢薑」善竹隆平、能「船弁慶・重キ前後之替」梅若猶義

入場料前売券五千円（当日五千五百円）学生前売券二千五百円（当日三千円）　年間会員券（四枚綴）一万八千円　申し込みは、出演各楽師、吉田書店、公演会場連絡所、ローソンチケット（Lコード53623）

当地の各流儀・流派・結社・社中の消息を辿る ⑥1

竹尾　邦太郎

（承前）大倉源次郎氏の挨拶

様々な娯楽が氾濫する中で、能を見なければ味わえない面白さとは何なのか。それが見たいが為に、能楽堂に足を運んでしまう人を増やすにはどうすれば良いか。逆に言うと能の役者自身が能は何を以て能と呼ぶのかを自問自答する機会であると考えます。お客様に対しては、本質的な能の面白さを十二分に味わっていただくことが大切です。二千年以上前の神話が伝説となり、それを六百年前の人たちが能に作りました。永らく上演が途絶えましたが、平成の役者たちによって復曲された能「鵜羽」は現代の観客にはどのように見られるのでしょうか、制作する側の醍醐味です。

挨拶　藤田六郎兵衛　今回は大倉源次郎さんとの共同プロデュースの「花傳の會」です。いつも出演していただいているのですが今回は曲目、内容とも二人で仲良く相談しつつ決めさせていただきました。私がこれまで「花傳の會」以前に「能楽講座」や「能と狂言に親しむ会」を皆様との「能」との出会いの場として作ってきました。そのエネルギーの基は源次郎さんとの出会いから始まったのです。彼に出会っていなければ非常におとなしく目立たない笛方になり、そして静かな人生もあったたはず。多分……。彼も私に出会っていなければ……と、言つていますが。そんな二人の出会い、今の能楽界これからどうやっていくのか、これらを皆さんを証人に語り合いたいと思います。途中いろいろな意味での大先輩の観世栄夫様にも登場願いましてお話をお伺いしたいと思います

そして能は名古屋能楽堂初の蝋燭能「鵜羽」です。シテは大槻文蔵様にお勤め願います。大槻様は大倉源次郎、藤田六郎兵衛の初舞台から見ていただいている方です。私たち若い者が企画することについて、いつも多大なご協力をいただいております。

平成十年度「花傳の會」は、大槻文蔵との企画・制作による「能で観る平家物語」と銘打つ四月を初回に平成十一年三月を終会とする全十二回シリーズ。この間、八月には「花傳の會」を二回挟むが便宜上このシリーズ一括して記す。全て土曜日の二時始で毎回、能の前に作家・伊沢元彦の上演曲にまつわる講演がある。

「能で観る平家物語」

平成十年四月十八日　第一回

復曲「松山天狗」片山九郎右衛門・片山伸吾（白峰の相模坊）味方玄・分林道治（眷属の小天狗）森常好・山本東次郎・藤田六郎兵衛・曽和正博・河村大・助川治・片山清司（地頭）大槻文蔵（後見）。

五月二十三日　第二回

「鞍馬天狗・白頭」梅若六郎・梅若慎太郎（沙那王）上田彰敏・山本研二郎・上田顕崇・山中景晶（花見の稚児）谷田宗二郎・小林努・野村小三郎（能力）松田高義（木葉天狗）藤田六郎兵衛・後藤嘉津幸・山本哲也・上田悟・山本勝一（地頭）山中義滋（後見）。

六月二十日　第三回

「俊寛」大槻文蔵・赤松禎英（平判官康頼）武富康之（丹波少将成経）宝生閑・茂山千三郎・藤田六郎兵衛・大倉源次郎・河村総一郎・山本順之（地頭）泉嘉夫（後見）。

七月二十五日　第四回

「頼政」観世栄夫・森常好・丸石やすし・藤田六郎兵衛・飯田清一・山本孝・野村四郎（地頭）泉嘉夫（後見）。

八月二十二日　第五回

「巴」梅若六郎・福王茂十郎・茂山あきら・藤田六郎兵衛・福井啓次郎・佃良勝・大槻文蔵（地頭）赤瀬雅則（後見）。

九月二十六日　第六回

「清経・恋之音取」大槻文蔵・上田拓司・宝生閑・藤田六郎兵衛・柳原富司忠・白坂信行・泉嘉夫（地頭）泉泰孝（後見）。

十月二十四日　第七回

「忠度」観世栄夫・殿田謙吉・大日方寛・伊藤鉄男・井上祐一・藤田六郎兵衛・清水皓祐・河村総一郎・浅見眞州（地頭）久田勘鷗（後見）。

十一月二十一日　第八回

「屋島・大事・奈須与市語」野村四郎・鵜澤郁雄・中村弥三郎・森本幸治・永留浩史・野村萬斎・藤田六郎兵衛・曽和博朗・河村大・大槻文蔵（地頭）浅見眞州（後見）。

十二月十九日　第九回

「船弁慶・重前後之替」観世暁夫・観世安寿子（源義経）宝生欣哉・井藤鉄男・梅村昌功・茂山千五郎・藤田六郎兵衛・大倉源次郎・亀井広忠・観世元伯・観世銕之丞（地頭）梅田邦久（後見）。

平成十一年一月十六日　第十回

「二人静・立出之一声」観世清和・武田志房・福王茂十郎・藤田六郎兵衛・大倉源次郎・山本孝・大槻文蔵（地頭）大江将董（後見）。

二月二十日　第十一回

「安宅・勧進帳・延年之舞・貝立」片山九郎右衛門・大槻一文（源義経）片山清司・片山伸吾・山本博通・武富康之・分林道治・斉藤信隆・味方玄・赤松禎英・青木道喜（郎等）宝生閑・茂山七五三（強力）茂山千之丞（従者）藤田六郎兵衛・大倉源次郎・河村眞之介・片山慶次郎（地頭）大槻文蔵（後見）。

三月二十日　第十二回（終回）

「大原御幸」観世銕之亟・片山清司（大納言局）西村高夫（阿波ノ内侍）片山九郎右衛門（後白河法皇）福王茂十郎（寓里小路中納言）福王和幸（大臣）広谷和夫・山本順三（輿舁）野村小三郎（供人）藤田六郎兵衛・福井啓次郎・山本孝・野村四郎（地頭）観世暁夫（後見）。

後見には二乃至三名が就くが全て主（重）後見のみを記す。

［花伝の会特別公演］

平成十年八月十五日(土)二時始

第十三回「花傳の会」特別公演「大鼓五流秘曲の会」。番組の始めに催主・藤田六郎兵衛の次の案内がある。

昨年より「笛三流」「小鼓四流」と続けてまいりました能の楽器の魅力を探るシリーズ。今年は「大鼓」にスポットをあてます。

能楽界の大鼓には「五流」の流儀があります。普段その流儀の違いは舞台を見ていても中々わからないものです。今回、各流儀の方々にご出演いただき、各流儀独自の曲、そして各流儀の道具の扱いの違い、また同じ曲での演奏の違い等をご披露いただきます。

「このような五流の打ち比べ、聞き比べの企画は能楽界では滅多にない企画公演です。また、「大鼓」を打楽器という楽器としてお聞きいただけるよう構成いたしました。普段から、「能なんて難しいものは〜」と敬遠なさっている方々にも、音楽のコンサートとしてお楽しみいただけることと思います。

おおくの皆様のご参加をお待ちいたしております。

神楽式「三番叟・揉之段」井上祐一・井上靖浩（舞）福井啓次郎（頭取）柳原富司忠（胴脇）後藤嘉津幸（手先）山本哲也（大倉流）、一調四番「女郎花」亀井広忠（葛野流）山本博通、「玉之段」河村　大（石井流）観世暁夫「勧進帳」白坂信行（高安流）観世栄夫、「笠之段」山本哲也（大倉流）梅田邦久、素囃子「獅子・乱序」杉　市和・大倉源次郎・五流ノ大鼓・助川　治（大鼓のパートは五流の競演、各流儀そろって打って頂き、違いをご説明いたします、の注記有）、一調「鵺」守家由訓・味方　團、一調一管「天鼓」河村総一郎（石井流）杉　市和・観世栄夫（当地初演という）、一調「景清」山本　孝（大倉流）山本順之、素囃子「早舞・舞返（融より）」藤田六郎兵衛・大倉源次郎・亀井広忠・助川治。謡は全て観世流諸師。催会時、能を中心とした日本音楽の歴史、就中、囃子の技法を研究する高桑いづみ女史の「大鼓の世界―その歴史と音楽」と題する解説文が配られる。

平成十年八月十六日(日)二時始。第十四回「花傳の会」不易流行・現代の狂言を見る。

番組始めに催主の次の言葉がある。

「花傳の會」では本年四月から狂言台本を一般公募いたしました。その結果、十九編もの応募があり、審査の結果、入選作は名古屋市にお住まいの松本英五氏作の「縄柿」に決定いたしました。ほかにも、名古屋東照宮の山車をテーマにした北島微也氏の作品に「花傳の會」顧問の本多静雄より特別賞が贈られました。

今回のこの会の話題はなによりも入選作品「縄柿」の本邦初公開、世界初演です。そして他には、「花傳の會」顧問の本多静雄、狂言共同社の佐藤友彦氏、私の友人の水原治郎氏の新作狂言と呼ばれる最近作られたものばかりでプログラムを構成いたしました。ご期待ください。

本多静雄作・井上祐一監修「狐山伏」井上祐一（山伏）佐藤友彦（茶屋ノ女）大野弘之（亭主）初演・平成七年四月、佐藤友彦作「二文酒」井上靖浩（男）佐藤融（女）初演平成九年八月、水原治郎作「釜の火」茂山千三郎（普賢菩薩）茂山正邦（文殊菩薩）茂山千之丞（有徳人）茂山　茂（太郎冠者）藤田六郎兵衛・大倉源次郎・河村　大・助川龍夫、松本英五作「縄柿」井上靖浩（主人）佐藤　融（太郎冠者）野村小三郎（村人）狂言台本公募入選作品今回初演。

平成十一年七月二十一日(水)六時半始。第十五回「花傳の會」特別公演　パートⅠ　藤田流尾張徳川家お抱え三七〇年・藤田六郎兵衛初舞台から四〇年記念。

番組に先立ち観世銕之丞と藤田六郎兵衛による対談「新作能　鷹姫　誕生秘話」があり、「鷹姫」原作W・E・イエーツ、作詩横道萬里雄・節付観世寿夫・演出大槻文蔵・謡曲指導観世銕之丞

観世暁夫（老人）福王和幸（空賦鱗）山本博通（鷹姫）羽多野晋・茂山七五三・斉藤信隆・上田拓司・片山清司・浦田保浩・茂山千三郎・寺澤幸祐・浦田保親・武富康之（以上コロス・岩）藤田六郎兵衛・大倉源次郎・山本哲也・上田　悟・大槻文蔵（主後見）、能舞「獅子」大槻文蔵（白獅子）赤松禎英（赤獅子）藤田六郎兵衛・柳原富司忠・河村眞之介・上田悟。

――以下次号

◆仲秋の舞台から（その二）◆

「金剛定期能」「茂山狂言会　秋」と「第三回　久田観正能」「黒川能」

竹尾邦太郎

「鱗形」

喜多と金剛の両流現行曲だが稀曲。大小前、一畳台上に鉄色引廻シの宮を据え舞台が整うと次第ノ囃子で北条時政（ワキ小林　努）、従者（ワキツレ有松遼一・岡　充）を伴い、旗印の紋が無いのを気に懸け、江の島弁財天に神授を祈請に出向くと、面増・襟白赤・白摺箔着付・赤萌黄段唐織の姿の見知らぬ女性（シテ三千春・後シテに弁財天）に名指しで呼掛けられ、不審すれば既にワキ時政が篤信の人と知るシテ、望み叶えるために現われた、と。ワキが素性を問えば、〈今は何をか包むべき、とワキへアシラヒ、〈我この島に跡を垂れ、と直って詰めるところに犯し難い品位をみせ芸劫。〈沖の鷗に心添へ、と右ウケて袖アシラヒゆったりと、小廻りから〈掻き集めたる藻汐草、とワキへ指シて行き再度〈望みを叶へ申さんと、の自負を。地（道一・泰能・見嗣ら）一杯聞いて来序ノ囃子（洋一・達志・芳昭・光長）のうちに宮の後ろから中入すると、江の島の弁財天に仕える末社ノ神（アヒ松本　薫）が出で、常座で弁財天の霊験灼なこと、弁財天が時政との約束を果して奇特を現わすことなどを立シャベリ、触レて退くと後場に。

出端ノ囃子で引廻シが下ろされると、中に弁財天（後シテ）が黒垂・鳥居（様のものを立てた珍しい）天冠・白地金鱗箔着付・緋大口・白地舞衣壷折の姿で左手に赤地金三ツ鱗を織り込んだ旗を掲げ凝然と床几に居る。〈（晴れたる空に旗差しの晴れたる空に旗差し

の）名も久方の、と左、右、と台を下りるシテ、〽時政に旗を賜び給ひ、とワキに念願の紋の付いた旗を授けると、約束を果したシテはノリ良く軽やかに神楽を舞い、ワキは神佑を得て畏まる。「苦しい時の神頼み」を地でゆく展開が無事叶う微笑ましい舞台にシテの円熟味が光る。あの珍しい天冠は何と言い、ほかどの曲に用途があるのだろう。（56分）

「太刀奪」　北野天神の御手洗祭に出掛ける主（アド千五郎）が通行人（次アドやすし）の持つ太刀を羨むをみて太郎冠者（シテ正邦）、奉公人の習い性で主の意を酌み奪ってみよう、と。巧くゆく訳も無く、却って護身にもと主から借用の小刀を取られてしまう軽率は、「取ったか」と問う主に、「こちらの物をあちへ取りました」などと恬として恥ない呑気ぶり。彼奴が来た道を戻ると分り、小刀が惜しい主と待ち構えたシテ、捕らえたはよいが「泥棒を見て縄を綯う」の例えを地で行く頓馬。綯い上げれば輪を作り、これへ足を入れよ」とか、主が彼奴を羽交綯めにしているを後ろから縄を掛けよと命じられ、主に掛けてしまうなど、理屈抜きに素朴な、素そのものの幼児次元の行動が活き〳〵と可笑しかった。（20分）

「松風」　名宣笛で出る旅僧（ワキ敬三）、須磨ノ浦の由ありげな松を浦人（アヒ正美）に問い、松風・村雨の旧跡と分って弔うと、折好く来合わせる海女二人、塩屋の住人と知れ宿を借りれば、二人はありし昔、遠流の在原行平の寵を受けた松風（シテ永謹）村雨（ツレ龍謹）の幽霊と明かし、一夜、ワキの夢中に語り明かされるは行平を渇仰するシテ松風の述懐。

前半、ワキと出遇うまで、互いにいたわり合い憂きなりわいを喞つシテ・ツレ同吟の、しんみり、しおらしい趣、親子共演の息の合ったところ。汐汲みの場は、〽更け行く月こそ、と左上方に月を眺め、〽汲むは影なれや、と水桶へ目を落とす姿にシテの胸中しのばれる。〽焼く塩煙心せよ、と汐汲車に寄り下居、水桶を覗き、〽憂き秋のみを過すらん、と開いた扇で海水を汲み入れる型の手綺麗。〽松島や、と引綱とり、立つと退って〽影を汲むこそ心あれ、と沁々見入る。引綱を引き笛前、〽汐路かなや、と踏む拍子一ツ、後見は汐汲車を退き、シテが大小前の床几に掛けるとワキは立ち、「塩屋の主の帰りて候」とツレと問答に。塩屋の場は、ワキが須磨ノ浦の歌枕を詠み込んだ行平の一首と、磯辺の旧跡の松に触れると、シテ・ツレ両人、涙に袖を濡らす有様からシテとツレ、昔語りの行平のこと。クセに後見から行平形見の烏帽子・長絹を左手に持たされてシテは募る思慕の情、〽（御立烏帽子狩衣を）置き給へども、と形見を見詰め、〽形見こそ今は徒なれ、と捧げ持ち〽これなくは忘るゝ暇もありなんと、古人が詠むも理、とシヨル。上ゲ端あと、床几を立つて形見に見入り、〽捨てゝも置かれず、と左手に下げて出ると〽取れば面影に立ち増り、形見を掻き抱くのも切ない。〽あとより恋の、と形見を抱えたまゝ放心した様に茫っと左上方を眺め〽貴め来れば、と大小前、膝をつくと物着に。この辺りの風情、心の奥底から滲み出る様々な想念がふくらむ。

紫ノ長絹・小立烏帽子をつけると、弥増す恋慕は狂乱に。松に行平の幻像を見て駆け寄るシテを諫めるツレも、今や仮構の世界に在るシテを説得するを能わず、行平に惑溺、陶酔のシテは甘美な中之舞を。〽立ち別れ、とシヨリながら橋懸へ抜けて行くところは正に込み上げる思い。舞上げて一入の慕情は松に寄りゝ磯馴松の懐かしや、と両袖返シ葬と松を抱きしめる濃厚なラヴシーン。破之舞に、松の後ろ狭い框を左袖被キ狂おしく、胸の鼓動が小刻みな足に伝わるかに廻るところ見事だった。

キリは〽我が跡弔ひて、と正中下居ワキに合掌、〽暇申して、礼をしつ立つと、波の音を踏む六ツ拍子にみせ、〽夢も跡なく、と抱へ扇、〽松風ばかりや残るらん、と右へシテ柱みて拍子踏まず留メた。長尺を緊張感のある好舞台。（1時間51分・9月22日・金剛定期能）

「不聞座頭」　目は見えても啞の太郎冠者（シテ童司）に独りで留守居させるを案じて主（アド千五郎）、目は見えずとも耳敏い座頭の菊市（次アド宗彦）を相留守に頼めば、目が見えぬに何の役が、と軽侮の念のシテだが「よう留守をせい」の主命。唖と盲、盗人闖入の際は、互いに足らぬを補い合うよう伝達の合図を決めれば、先づ座頭が退屈紛れに盗人だ、と騒ぎ立て、シテは右往左往するも盗人は居らず、座頭の悪戯と分ってシテは意趣返しを。小舞を見せたいが、と座頭に水を向ければ、雰囲気を楽しむとあって舞うことに。舞い終えたら顔を撫でるのを合図に賞めてくれと。舞は小舞謡の「土車」〽一天四海波をうち治め給へば……、舞上げて座頭の顔を有ろうことか足で撫でると、やんやと賞める座頭を面白がるシテに、怪しいと察して座頭も亦返礼とばかりシテに平家を聞かせたい、と。耳が聞こえなければ、語り終えて手を挙げる時に賞めて、とシテが唖をよいことに悪口雑言を語り連らね、面白がる。

身障者を虚仮にするどころか、そこを突き抜けた人間味がもろにあからさまにされ、一種痛快なおおらかな笑いの狂言の世界。（30分）

「鞍馬参り」　鞍馬の初寅に参籠の主（アドあきら）に不寝番をさせられる太郎冠者（シテ千三郎）は面白くない。再三口実を設けて主を起こすので、主も寝るのを許すと、霊夢に福の実を賜わった、と。それを羨む主、自分も霊夢を得たが、福の実は太郎冠者に預け置くから受け取れ、との由、急いで寄こせ、と。夢の中の福の遣り取りも阿呆くさいが、そこは狂言、すんなり渡すのは詰らないとばかりに太郎冠者、主と掛合に謡い舞い、〽賜ばったりや賜ばった、〽参らせたりや参らせた、と。練達のシテとアド、洒脱な持ち味を軽やかに発揮。

「狐塚・小唄入」　太郎冠者（シテ宗彦）次郎冠者（次アド逸平）、主（アドやすし）から狐塚の田に降りる群鳥を鳴子で追うよう仰せつけられて道すがら、鳴子を独り持つのを不満の太郎冠者、両人への仰せゆえ次郎冠者にも、と一寸諍いになるのが「文荷」のようで可笑しい。互いに「ホーイ、ホーイ」と群鳥を追ううち暮色濃くなり、景気付けもあろうか、小唄を謡って追おう、と太郎冠者、賛同する次郎冠者と賑やかに謡う「引き物尽し」から「奥州の歌枕尽し」が兄弟ユニゾの調子の良さ、上々。両冠者が一服して居るところへ暗闇を酒を持ち見舞に来る主、闇の中、狐と極めてかゝる両冠者は化かされまいぞと慎重。酌をされては、主が気を外らす隙に捨ててしまえば、「はや飲うだか」「飲むのを見せんなあ」「汝らは宿元ではよう飲むではないか」と主。挙句、主は正体を現わせと松葉で燻されることに。（34分）

「老武者」　能がかりの大勢物で囃子（保美・達志・大）地謡（茂・童司・竜也・守之）が入る大曲。

鎌倉見物をせがむ稚児（竜正）を連れて三位（正邦）、旅籠ノ主（アド七五三）にお忍びと伝えるも近くの若い衆（宗彦・逸平・隆司・良暢・洋海）が聞きつけ、お盃を戴こうとやって来る。それが許されるとお定まりの酒宴に。稚児が「やい〳〵三位〳〵、身どもは饅頭が食いたい」と頑是無いことを言っては笑いを誘い、宴は〽面白の花の都や、と「放下僧の一節と一同連吟するなどで座が盛り上がる。稚児も肴に〽柳の下のお稚児さんは、と「柳の下」を舞うところへ、噂を聞きつけて宿老（シテ千五郎）が杖をつきやって来る。主と問答の末、若い衆の立頭も加わり稚児との盃を断わられると、激怒の宿老は老人仲間（千三郎・やすし・実・正美・あきら）を集め、手に〳〵長道具（長刀・包丁・鎌・槍・鋸・鉞）を持たせ押し寄せる。迎へ撃つ若い衆は一同長裃の片袖を脱ぎ、棒を持ち待ち構えると、双方互いに謡掛りでやり合う。戯画化された老人達の奪戦ぶりが傑作で、よく統制のとれた賑やかな舞台だった。（50分・9月29日・金剛能楽堂・茂山狂言会　秋）

「俊寛」　赦免使（ワキ和幸）、士烏帽子はつけず宝輪文厚板着付・素袍上下・小刀の姿、堂々とした名宣が先づ惹きつける。次第（次郎・舜一郎・哲也）で成経（ツレ祐樹）康頼（ツレ音弥）と出る。両人、無地熨斗目着付・縷水衣・腰蓑はつけない。〽神に歩みを運ぶなり、と正面から地前へ進む。俊寛（シテ勘鷗）は角帽子・髭無シ憔悴シタ俊寛ノ面・襟浅黄・小格子着付・黒水衣・紺腰蓑をつけ杉水桶を持つ。目敏くシテを見つけ、「何の為にお出で」とツレ二人、問答に。「早くも御覧じ咎めたり、道迎へのその為に」と勧請した三熊野を詣でる二人をいさゝか皮肉めいてシテ、「酒を持ちて参りて候」と。する〳〵と桶の直前まで近付き覗き込む康頼、「これは水なり」と亦する〳〵戻るところは酒に執着のなさ。シテはツレ二人と掛合に、酒についての蘊蓄を。初同（貫弘・稔・義高・拓司ら）で己が身の上に四季を重ねて思う懐旧。〽（あはれ）都に在りし時は、と二人に促すようにアシラフ俊寛、〽落つる木の葉の盃、はツツと正面へ出て扇で受け、膝をつくと〽涙川、と右へ見るところ、ふっと泣く姿を隠す趣で哀れ深い。

船頭（アヒ又三郎）が一ノ松へ船を出し下居、棹を持ち構えると赦免使（後ワキ和幸）が前と同装で赦免状を懐中に船に乗る。「いかに此の島に流され人の御座候か」とワキ、状を右手に捧げスミから正中のシテへ進み手渡すと、シテは康頼を呼び、状を渡すと読み上げる康頼。「御名はあらばこそ」と康頼は立ってシテに状を戻すと、「さては筆者の誤りか」とワキの背に言いかけるシテ、クドキからクセへ、悲哀ただならず、〽書ける文字は更になし、と居立ち、右手で強く膝を打つと立つて荒々しく正面へ出て文を捨てさり、退って下居にシヨルところ痛々しい。

船に乗ろうとする「康頼の袂に」シテが右袖に左手右手と「取りつけば」、ワキは〽艪櫂を（振り上げ）、康頼はシテの手を抜け出し船へ行く呼吸、タイミングがよく〽又立ち帰りと、纜に縋るもワキに切られて倒れるシテ、〽力及ばず俊寛は、と安座、天を仰ぎ双シヨリの痛憤もただならない。〽御心強く待ち給へ、のツレ二人の同吟にやっとシヨリを解くシテ、〽呼ばはる声も幽かなる、と左手耳に当て、聞き、〽頼むぞよ、と合掌、立つと〽待てよ〳〵と言ふ声も、遠ざかり、船影を追う情緒すばらしかった。（1時間10分・10月6日・第三回・久田観正会）

黒川能・狂言「こんかい」　金剛能楽堂

「黒川能」　伊勢神宮式年遷宮奉納のあとの遠来の黒川能が金剛能楽堂開館十周年特別公演として四十年ぶりに行われた。昭和四十八年十一月十五日の先回は昼公演で「式三番」「鐘巻」「膏薬ねり」半能「淡路」だったが今回は蝋燭能で先回同様舞台浄めの後、「こんかい（釣狐）」と「道成寺」の二番。蝋燭台は階を挟み左右二基づつ、脇正に二、橋懸に三の計九基。舞台浄めは一人の老人が三宝に載せた瓶子に扇を立てたのを持ち正中に正座、瓶子から扇を抜き、左、右、中へ水をかけるようにし、二拍一礼、扇畳み拝、扇腰に差すと三宝を捧げ退場。

「こんかい」　白蔵主（シテ五十嵐信市）、猟師（アド佐藤俊広）に狐を釣るのを止めるよう玉藻ノ前の怖い話などして諭し、罠を捨てゝ参れ、と命じて「さらんば、さらんば」と中入すると、シテの様子を不審のアド、捨てると約束した罠を「どこもとがよかろう」と正中に仕掛け、燭めつ眇つ確め、「一段で御座りまする」とアト座で膝枕に横臥、白蔵主が化けた狐を待ち構える。

まんまとかゝる狐は、体は白づくめで頭や背には狐色の皮をつける異様なら罠も大掛りな異色。「かがつたぞ、かがつたぞ」とアドに追い立てられる。素朴な、土の匂いのある楽しい舞台だった。（32分）

「黒川能」ガイド

「道成寺」　地謡、囃子方が出る。全員長裃、地頭は前列向つて右隅、大小鼓の持ち方は突き出した右手に握り持ち、床几は事前に出してあり、笛は幕に向つて座る。住僧（ワキ齋藤英介）従僧（ワキツレ觀持一行・渡部純也）を従え、鐘供養を告げ、能力（アヒ佐藤俊広・遠藤直樹・五十嵐重一）に鐘を吊る様命ずる。網は事前に掛けてあり、一人が龍頭に手をかけて担うように背に負い、あとの二人が鐘の縁に手を掛けて「えいさあ、えいさあ」運ぶ。幕内で柏手が二ツあって笛の序奏、次第の囃子で白拍子（シテ齋藤一太夫）が出、女人禁制をアヒの心得で舞を舞えることに。シテは金色烏帽子をつけ、大鼓一調で舞台に入ると、〽花のほかには松ばかり暮れ初めて鐘や響くらん、を地謡が謡い乱拍子に。舞台を一巡、〽山寺のや、と大小アシラヒ、位が進み〽春の夕暮、となり、〽入相の鐘に、辺りからワキ・ワキツレ・アヒ、横になって寝入ってしまうのが可笑しい。シテは一ノ松で烏帽子はね、走って鐘の下、縁に両手をかけ二ツ拍子で鮮やかに飛び入る。後シテは黒頭に鱗箔の裳着胴姿、ワキとの闘争はなくシテの独り舞台、きび〳〵と元気よく面白かった。（10月19日・黒川能・金剛能楽堂）

◇……◇

◇……◇